
夕日

レンタン

タテ書き小説ネット Byヒナプロジェクト

<http://pdfnovels.net/>

注意事項

このPDFファイルは「小説家になろう」で掲載中の小説を「タテ書き小説ネット」のシステムが自動的にPDF化させたものです。この小説の著作権は小説の作者にあります。そのため、作者または「小説家になろう」および「タテ書き小説ネット」を運営するヒナプロジェクトに無断でこのPDFファイル及び小説を、引用の範囲を超える形で転載、改変、再配布、販売することを一切禁止致します。小説の紹介や個人用途での印刷および保存はご自由にどうぞ。

【小説タイトル】

夕日

【Nコード】

N4331I

【作者名】

レンタン

【あらすじ】

夕日が好きなユウタとミカの物語。

都会の真ん中に沈む夕日の前で出会った二人が、恋人になりつき合い始める。夕日が二人をさらに深い愛へいざなっていく。

番外編の「夏」も合わせてよろしくお願いします。

こちらを読んでいなくてもわかる作品にしています。話数が12話と短く、読みやすいと思います。

<http://ncode.syosetu.com/n6960>

j

1、告白

1、告白

ビルの谷間に夕日が沈んでいく。ここは市内の中心部。僕は今、ベンチに座ってこの景色を眺めている。秋分が過ぎ、日没が急速に早まっていくこの時期、ここからの景色は一年で最も美しいものとなる。ちょうど2つの高層ビルに挟まる形で日が沈んでいくのだ。

「きれいだね。ユウタ君」

一人の女性が僕に声をかける。

「ああ」

この女性はミカと違って、半年ほど前から一緒に帰るようになった同じ会社に勤めている社員だ。

僕と彼女は部署こそ違うが、帰り道がほぼ同じで、半年前このベンチで出会い、それから時々一緒に帰るようになった。

「今日は特にきれいだよね」

「ああ」

「何か言つてよ」

「あつ、いやごめん。つい見とれちゃって」

「ほんと、好きだね。ユウタ君はこの夕日が」

「うん。ビルの谷間に沈んでいくオレンジ色の夕日。そして一面赤く染まる空。この景色は最高だよ」

「それなんか、前にも聞いた気がするな。確か初めて一緒に帰った時も同じこと言ってたよね」

「よく覚えてるね」

「私も好きだから、ここからの夕日。なんか印象に残ったんだよね、そのセリフ」

「そんな、僕と初めて会ったときに知つたくせに」

「そうだった」

「まあ、いいか。君もこの夕日を好きになってくれたなら、うれし

いよ」

「そろそろ行くつよ」

「そうだな」

そう言っつて僕は立ち上がった。二人は駅へ向かう。駅までは約500m、歩いて6、7分程度だ。さきほどから彼女は僕のことをユウタ君と呼んでいる。実は僕たちはつきあっているわけではない。それは単に僕が名字で呼ばれるのが嫌で、初めて会って話したときに、名前で呼んでほしいと言ったからだ。しばらく歩くと、彼女が話しかけてきた。

「どうしたの？　なんか静かだね、今日は。いつもならいろんな話してくれるのに」

「そう、そうかな？」

「うん。それとも何か考えてるの？」

「うん、いや、別に。何も」

「うそ。私にはわかるんだから。ずっと私のこと考えていたんでしょ」

「え、そんな。いや、別に」

「ほら、動揺してるし。好きなんですよ。私のことが。悩んでいたんでしょ。告白しようかどうか？」

「うん、まあ……」

「やっぱり。私も好きだよ。ユウタ君のこと」

「それはうれしいけど……。言うなよ、先に。今日ちゃんとした形で告白しようと思ったのに」

「そうか、だから今日はちゃんとどこにいるかメールしてくれたんだ」

「そうだけど。なんか先に言われて、僕かっこ悪いような気が……」

「そう？　じゃあ、ちゃんと言っつて。今、ここで」

「わかった。僕もミカが好きだ」

「ありがとう。うれしい」

二人はふと顔を見つめ合っつて、微笑んだ。こうして二人は今日、恋

人同士になった。これはユウタ24歳と、その彼女ミカ23歳が、夕日を背に赤く燃え上がる恋を描いた物語。それでは引き続き二人の帰り道を追いかけていくとしよう。

2、約束

2、約束

二人は駅に着いた。駅の看板には中宮駅と書かれている。僕らはいつもこの駅から一緒に電車に乗り、8つ目の東三橋駅まで行く。所要時間は約15分。二人は切符を買って改札口を、くぐり抜けた。電光掲示板には次の電車の時間が18:08と表示されている。僕は腕時計を見て時間を確認すると、すでに18時7分になっていた。「急いで。あと1分だ」

彼女に声をかける。二人はエスカレーターを駆け上がり、すぐに来た電車に飛び込んだ。つり革につかまり、向き合って一息ついた。

「ふうー。何とか間に合ったね」

「うん。よかった。間に合って」

二人を乗せた電車は「ガタンゴトン、ガタンゴトン」と音を鳴らしながら僕らを運んでいく。

「今日はどう、うまくいった。仕事？」

彼女が話しかけてきた。

「ああ、おととい話した契約は成立させたよ」

「そう。よかった」

「うん。一時はどうなることかと思ったけど」

僕は会社で営業部に所属している。彼女は商品開発部に所属しているため、たまに彼女が考案した製品を売り込みにいくこともあった。今回は彼女が中心になって開発した製品の契約を、みごと成立させることができた。

「うん。私も前にユウタ君に、うまくいかないかもしれないと聞いたときは、ドキつとしたよ」

「ミカが中心になって開発したんだっけ？」

「そうそう。これで契約が失敗したら、私自身なくしちゃうところだったよ」

「僕も。失敗したら嫌われるんじゃないかって心配なつたよ」
「そうなんだ。まあ、失敗したらちよつと怒つてたかもね。」

「やっぱり。でもほんとよかつたよ。うまくいって」

「うん。そうだね」

しばらくこんな仕事の話をしていた二人。アナウンスが聞こえてくる。

「次は東三橋、東三橋。降り口は右側です」

「あつ、次だね」

「うん」

話をしていると15分なんてあつという間だ。電車は減速し駅に到着した。二人電車を降り、エスカレーターで下の改札口に向かう。駅から家までは僕が徒歩で8分、彼女は6分の道のり。マンションやアパート、一軒家が立ち並ぶ住宅街。二人のアパートはそれぞれ同じ道沿いにある。並んで話しながら、家に向かつて歩いていく。

「明日の土曜日、ユウタ君は何か用事あるの？」

「いや、別に何もないけど」

「じゃあ二人でどっか行かない？」

「えっそれって、もしかしてデートってこと」

「うん」

「いいね。じゃあどこか行こうか。どこがいいかな？」

「うん、そうだね。ユウタ君は何かないの？」

「そうだな。映画見たり、食事したり、買い物したり、してみたいことはいろいろあるけど」

「そういえば最近人気の映画があるって、知ってる？」

「えっ、いや知らないけど。何かあるの？」

「うん。そうだ見に行こうよ。一緒に明日」

「よくわからないけど、人気だつていうなら気になるな、その映画。どういうやつなの？」

「恋愛映画なんだけど。内容は予告編を見てるから、ちよつと知っているんだけど……」

「じゃあ、教えてよ」

「うん、それは秘密。明日見てからお楽しみってことで」

「いじわるだな。まあっ、いっか。楽しみだな、明日が」

「ふふ。そうだね。初めてのデート」

「どんな服着てくるの？」

「それも明日のお楽しみだよ」

「やっぱりそうか」

「バッチリ、オシャレしてきちやうから、楽しみにしててね」

「うん」

歩き始めて6分、彼女のアパートに到着した。

「じゃあね〜。ユウタ君」

「ちょっと待って。明日どうするの？待ち合わせは？」

「そっか、ごめん忘れてた。うん、じゃあ明日の朝9時に、私の家の前ってことでどう？」

「うん、わかった。じゃあ。また明日」

彼女はうなずき、僕に向かって手を振った。僕も手を振って、それに応える。彼女と別れたあと、僕も足早に自分の家に向かって歩いて行った。

3、初デート1

3、初デート1

次の朝、僕は7時30分に合わせた目覚まし時計で起きた。今日は彼女との初デートで気持ちが高イになっているせいか、スッキリ目覚めることができた。昨日の夜は11時30には布団に入ったため、睡眠時間も十分である。まず洗面台に向かい鏡を前に、寝癖を直し、髭を剃る。次にパジャマを脱いで、昨日予め用意しておいた服に着替えた。そしてテレビを見ながら朝食を済ませた。このとき時計の針はまだ、8時30さえも回っていないかった。待ち合わせ時間まで、まだ30分以上はある。やはり7時30分に起きたのは早過ぎただろうか。この30分間は、とてつもなく長い時間に思えてならない。そんなことを考えていると、インターホンの音が鳴った。「ピンポン」

誰だろうこんな朝早くに。玄関のところに行くと、そこからは聞きなれた声が聞こえたきた。

「ミカです。ユウタ君、おはよう」

「あれ？ どうしたの？ まだ、待ち合わせの時間じゃないけど」

「うん。待ちきれなくて、来ちゃった」

「そう。僕も用意ができてから、今開ける」

そう言っ僕はかばんを持ち、玄関のドアを開ける。外には満面の笑みを浮かべた彼女が立っていた。

「おはよう」

「おっつ」

「ごめん。迷惑だったかな」

「全然。僕もちょうど用意が全部終わったところだったし。むしろ早く会えてうれしくらいだよ」

「そう。よかった」

「じゃあ、行こうか」

「うん」

二人は駅へ向かって歩き出した。

「そういえば昨日テレビでCMを見て気づいたんだけど、今日見る映画って」

「えっ、もしかしてわかったの？」

「うん。『遠く離れゆく恋』って映画のことかな？」

「うん、それだよ。それ」

「やっぱりか。なんか内容は遠距離恋愛の話みたいだね」

「そうだよ。実はその映画、同じ題名の小説が原作になってるんだ」

「へえ〜。じゃあもしかしてミカは原作を読んだことがあるの？」

「うん。それがすごい話でね、感動したんだ。だからぜひ映画を見たいなと思って」

「なんかそれは期待できそうだな。楽しみだね」

「うん」

初デート、少し緊張していたが、彼女のサプライズのおかげで、とてもいい雰囲気が始まった。駅についた二人は切符を買う。今日は東三橋から5つ目の駅、高倉に向かう。映画館はその駅から歩いて5分のところにある。

「切符買ってくるね」

「うん」

僕は彼女にそう声をかけ、切符を買いに行く。

「はい、切符」

「ありがとう」

二人は改札口をくぐり抜け、階段を上り、すぐに来た電車に乗り込んだ。目的地までは9分。

「ミカは今日、朝何時に起きたの？」

「う〜んと、確か6時30分ぐらいだったかな」

「うあ〜。ずいぶん早く起きたんだね」

「うん。女の子の朝の準備にはとても時間がかかるんだよね。だから早く起きないと」

「そうか。あつ、そういえば今日着てる服、とても似合ってるよ」
彼女は、上は白いＴシャツに薄い黄色のカーディガン、下斜めに少し薄いオレンジ色のストライプの入った膝上までのスカートを着ていた。

「そう、よかつたあゝ。迷ったんだよね。どんな服装にしようか」
「あと髪型がいつもと違うね。ツインテールにしてあつて」

「ふふつ。かわいいでしょ。前に確かユウタ君、この髪型が好きだつて言ってたから」

「あつ、覚えててくれたんだ。なんかうれしいなあゝ。かわいいね。よく似合ってるよ」

「ありがとう」

そんな話をしていると電車は高倉駅に到着した。二人は電車を降りて、映画館へと向かう。高倉は市内でも有数の繁華街で、土曜日の今日はたくさんの人で溢れている。中には僕らと同じカップルもかなりいるようだ。そのなかには手をつないで歩いている人や、腕につかまって寄り添って歩くカップルもいる。不意に彼女が僕の腕をつかんできた。僕は驚いて彼女の方を向く。

「私たちも恋人らしく寄り添って歩こうよ」

「そう、そうだね」

「あつ、もしかしてユウタ君、ちょっと緊張してる？」

「いや、まあ、別にそういうわけじゃないけど」

「じゃあ、テレてるのかな？」

僕は立ち止まり、恥ずかしくて無言で彼女の顔を見つめる。

「ふふつ。そうみたいだね。なんかほっぺたが赤くなってるし」

「そんな……」

「ほら立ち止まってないで、早く映画館に行こう」

「う、うん」

彼女は笑顔で僕の腕をつかんでいる。僕は恥ずかしがりつつも、映画館に向かって再び歩き始めた。

4、初デート2

4、初デート2

映画館に着いた二人は、チケット売り場に向かう。

「『遠く離れゆく恋』の次の上映時間はと…」

「えーと。9時30分からみたいだよ」

「今9時15分だから、すぐに見れそうだね」

「うん」

僕はカウンターの人に声をかける。

「すみません。『遠く離れゆく恋』のチケットください」

「かしこまりました。何名様ですか」

「大人二人です」

「はい。2000円になります」

財布から1000円札を二枚取り出し、カウンターに置く。

「はい。ちょうどですね。次の上映は9時30分からになります
よろしいですか？」

「はい」

「席のほうはどこか希望がありますか？」

「どこがいい？」

「うーんとね。真ん中の列のちょっと後ろのほうがいいな」

「空いてますか？」

「はい空いてますよ。では、H8とI8の席でよろしいですか」

「どう？」

「いいよ、そこで」

「じゃあ、お願いします」

「こちらチケットになります。入場口の係りの人に渡してください。
中に入った後は半券をなくさないようにお願いします」

「はい」

「それではもう入場できますので、9時30分までにお入りくださ

い。どうぞごゆっくり」

チケットを彼女に1枚渡して話しかける。

「すぐ入ってもいいけど、なんかトイレとか、売店とか、行っておきたいところある？」

「そうだな。けっこう上演時間長いし、トイレに行っておこうかな」そばに貼ってあるポスターを見ると、上演時間は121分となっている。確かに少し長めのようだ。

「そうだね。じゃあ僕も済ませとこうかな」

二人入口付近にあるトイレに行ったあと、一緒に中に入った。薄暗い中席につき、画面に流れる予告編や注意を促す映像を眺める。

「楽しみだね」

彼女が話しかけてきた。

「うん」

「けっこう他にも人がいるね」

「うん」

彼女に言われ全体見渡してみると、席の3分の2程度が埋まっているようだ。客はカップルや女性客が多いようだ。この映画は恋愛物ではあるが、年齢制限はなく、中学生ぐらいに見えるカップルもちらほらいるようだ。

「一度でいいから男の人と一緒に、映画を見てみたかったんだよね」

「へえ〜。見たことなかったんだ」

「うん。前につき合ってた人がいたんだけど。その映画とか好きじゃなくて、来たことがなかったんだよね」

「そうか。僕は女の人とつき合っの自体が初めてだよ」

「えっ、そうなの」

「うん。なんていうか学生時代に好きな人がいたことはあるんだけど、告白する気になれなくてさ」

「そうか、だからさつきあんなに恥ずかしがってたんだ」

「うん。でもこうやってミカと一緒に映画を見ることができて、とてもうれしいよ」

二人は薄暗い中見つめ合って、笑いかける。そうこうしているうちに、照明が完全に落ち、いよいよ映画が始まった。

5、初デート3

5、初デート3

映画を見終わった二人は、映画館を後にする。さっそく彼女が感想を尋ねてきた。

「どうだった」

「うん、とてもよかったよ。最後がすごい感動的で」

「だね。原作がすごくよかったから、ちよつと不安だったけど。期待通りでよかった」

彼女はともうれしそうな顔をしている。映画の内容は題名のとおり、遠距離恋愛がテーマになっているものだった。幼稚園に入る前からの幼馴染だった二人、ユカとユウキは互いに小学生になる直前に、ユウキが引越すことになり、離れ離れになってしまう。初めは電車で会いにいけるほどの距離しか離れずすんだ二人が、互いに引越しを繰り返す度に、遠く離れてゆき、小学5年生になるとまったく会うことができなくなる。その後も文通や年賀状を通じて連絡を取り合っていた二人だが、度重なる引越しで互いの住所も曖昧になり、高校を卒業する頃には全く連絡をとれなくなってしまった。しかしそんな二人が互いに就職して1年後、仕事帰りに街で偶然出会い、夕日を背に今度は離れ離れにならないことを誓い、キスを交わす。

「そういえば僕も小さい頃、幼馴染がいて、映画の男の子と同じような思いをしたことがあったな」

「へえ、そうなんだ。なんか悔しいな」

「あつ、もしかしてやきもち妬いてるの？」

「うん。ちよつと……」

「大丈夫。今はミカが大好きだから」

「そう。それならいいや」

「そうだ。もう12時過ぎたしそろそろご飯食べにいこうよ」

「そうだね」

「何かミカは近くで、いい店知ってる？」

「うん、そうだなあー。近くに600円でおいしいランチが食べられる喫茶店があるんだけど、そこでいいかな？」

「うん」

二人は映画館から歩いて3分ぐらいのところにある喫茶店「Affet」に入った。

「お二人ですか？」

「はい」

「ご案内いたします」

二人は歩道に面した窓際の席に案内された。向かい合って席につく。

「御注文はお決まりですか？」

「えっと。ランチでいいよね？」

「うん」

「この日替わりランチを2つお願いします」

「かしこまりました。コーヒーはいつお持ちいたしましょうか？」

「食後でいいよね」

「うん」

「食後をお願いします」

「かしこまりました。どうぞごゆっくり」

僕は彼女が頼んだランチの内容を確認する。かにクリームコロッケに、パンとスープ、コーヒーが1杯ついて税込み600円。確かにかなりお得なセットだ。

「安いね。確かにこのセット」

「でしょー。ここの料理、すごくおいしいんだよ」

「へえ」

「特に土曜日に出る、かにクリームコロッケは最高なんだから」

「それは楽しみだなあ」

しばらく二人で話をしていると、頼んでから10分後、料理が運ばれてきた。

「日替わりランチを二つ、お持ちいたしました。どうぞごゆっくりかにクリームコロッケとパンが運ばれてきた。さっそくフォークでコロッケを口に運んでみる。」

「おいしい。アツアツで、このホワイトクリームの味が最高だよ」「ねっ、でしょ」

僕はおいしさに感動して、夢中で料理を食べる。彼女は笑顔でそれを見つめている。

「あれ、食べないの?」

「うんうん。ユウタ君、すごいしあわせそうな顔して食べるから、なんかうれしくて」

「そうかな」

「うん。喜んでくれたみたいでよかった」

彼女もフォークを手に持ち、料理を食べ始める。二人は20分ぐらいで料理を全て、食べ終わった。

「すみませーん」

「はい。なんでしょうか、お客様」

「食後のコーヒーを、お願いします」

「かしこまりました。ミルクと砂糖はどういたしましょうか?」

「どうする?」

「あつたほうがいいな」

「じゃあ、2つともつけてください」

「かしこまりました。少々お待ちください」

「このコーヒー、おいしいの?」

「うん。ちよっと濃いんだけど、苦すぎなくてけっこうおいしいよ」

「ふーん。そうか」

2分後、コーヒーが運ばれてくる。

「コーヒーをお持ちいたしました。どうぞごゆっくり」

僕はまずコーヒーを、ブラックのまま少し口に運んでみる。やや苦い味が口の中全体に広がる。

「おいしいけど、確かにこれはちよっと苦いね」

「うん」

次に砂糖とミルクを入れ、もう一度味わってみる。今度はミルクと砂糖のまるやかな甘みと、後味に少し苦みを感じる。コーヒーはさつきよりもかなりおいしく感じられた。

「ミルクと砂糖を入れると、ちょうどいい感じだね」

「うん」

「これからどうしようか？」

「うん、そうだな。私買い物したいお店があるんだけど、行っていいかな？」

「うん、いいよ」

二人は10分ほど話しながらコーヒーを飲み干すと、喫茶店を後にした。

6、初デート4

6、初デート4

彼女が行きたいと言った店は、ここから15分ぐらいかかる
そうだ。

「どんなお店なの？」

「雑貨屋さんっていうのかな？ 小さな小物から、ちょっと大きめの家具まで、いろいろあるよ」

「そうか。なかなかおもしろそうだな」

「あつ、でも女性向けのものが多いから、ユウタ君には退屈かもしれないなあ」

「いいよ、別に。ミカと一緒にいれば何でも楽しめそうだから」

「そうかな？ そう思ってくれるならうれしいな」

二人で話しながらその店に向かう。15分後、僕たちは『インテリ
アシヨップ (Mizuki)』と書かれた看板の店に着いた。

「ここ？」

「うん」

中に入ると、店員らしい女性があいさつをしってくる。

「いらつしゃいません」

「こんにちは。ミズキさん」

「あつ、ミカさん。また来てくれたんですね」

どうやら彼女は店長さんで、ミカのことを知っているようだ。

「はい。今日は恋人と一緒に来ました」

「そちらの方が？」

「はい。ユウタといます」

「ユウタさんですか。もしかして、この人が前におっしゃっていた、
ミカさんの告白したかった人ですか？」

「はい。そうです。昨日、告白して彼と付き合い始めたんです」

「じゃあもしかして、今日が初デート？」

「そうです」

「記念すべき初デートで、私のお店に来てくれるなんて、とてもうれしいです、私」

「ミカはこの人と知り合いなの？」

「うん。ここには私、何度も来ていて、店長さんとても仲良しなんだ。だからサービスしてくれたりもするんだよ」

「へえー」

「今日は私、ミカさん達のために、最高のサービスをさせていただきます」

そう言つと彼女は、店の奥にある小さな棚の引き出しから何かを取り出し、僕たちの前に差し出した。

「これをどうぞ」

彼女の手のひらには、シルバーのお揃いの指輪が乗っかっている。

「これは？」

「お揃いの指輪です。初デートで私のお店に来ていただいた記念にどうぞ」

「なんか悪いなあー」

「ミカさんが話していた男の人をつれて来たときに差し上げようと思つて用意していたんです。だから……」

二人は手のひらに乗っかっている指輪を手にとってみる。小さな透明の宝石のようなものが3つあしらわれているシルバーの指輪のようだ。

「きれい」

彼女はそう言つて、指輪を薬指にはめる。僕も同じように薬指にはめてみる。

「よく似合ってますよ。二人とも」

彼女はそういつて、僕らに微笑みかける。

「ありがとうございます」

僕らはそう言つて、彼女に頭を下げる。

「いいえ、どういたしまして」

と彼女はさらに微笑みかける。僕は彼女のサービスに感謝しつつ、その後、話をしながら2時間程度買い物を楽しんだ。彼女は小さな熊のぬいぐるみとかごを、そして一人でウサギの柄で色違いの青とオレンジのマグカップを購入した。

7、初デート5

7、初デート5

店を出た後、僕は腕時計で時間を確認する。時計の針はまだ3時を過ぎたぐらいだ。晩御飯まではかなり時間がある。

「これからどうしようか？」

「うん」

「そうだ。ゲーセンでも行かない？ 確かこの近くにあったと思うんだけど」

「あつ、いいね。行こうか」

僕は彼女をよく仕事帰りに寄っていたゲーセンに案内した。

「ここだよ」

僕らはお店の前に着いた。看板には大きく『ZEGA』と書かれている。

「ここ仕事帰りによく来るんだ。一人で」

「えっ、でもここ会社からちよつと遠くない？」

「まあね。でも20分ぐらいかな。それに来るのは残業して遅くなるときだけだし」

「なんかそれって変じゃない？ 残業で疲れているときに来ると」

「いや、なんていうかうちの部署さ、残業で夜10時以降まで残ったりすると、次の日昼からでいいことになっているから、遅くまでここでゲームしても大丈夫なんだよ」

「へえ。そうなんだ」

「うん。じゃあ入ろうか」

「うん」

二人は正面の自動扉から中に入る。

「何かしたいゲームある？」

「ユウタ君はいつも何してるの？」

「うんいろいろかな。UFOキャッチャーしたり、お菓子をとった

り、後コインゲームの競馬や麻雀もやつたりするなあ」

「ふうん。じゃあUFOキャッチャー結構上手いの」

「うん。まあ、そこそこかな。上手いほうだとは思うけど」

「あつ、さつそくで悪いんだけど、私とってほしい物があるんだけど」

「いいよ。どれ？」

「あの、あそこにあるウサギの大きなクッションなんだけど」

「えっ、ああ、あれか。ミカは本当にウサギ好きだね」

「うん」

「よし！ わかった。とつてやるよ」

「本当！？ うれしいな」

僕はウサギのクッションが入っているUFOキャッチャーの前まで行ってみる。見たところ彼女がとつてほしいと言ったクッションは、ちょうど上に別のタヌキのクッションが重なっていて埋もれている。

「うーん、これはなかなか難しいなあ」

「大丈夫？ 埋まっているけど、とれるの？」

「一回では無理だけど、2、3回やったらいけそうだな。よし！ やってみるよ」

僕は200円を機械に投入する。彼女のほしがっているクッション自体は、埋もれているだけですぐ近くにある。まず僕は初めの200円で上に乗っかっているクッションを、転がすように下に落とす。受取口にタヌキのクッションが落ちてきた。

「すごい。上手いね。ユウタ君」

喜んでいる彼女には目もくれず、僕はさらに200円を投入する。邪魔なものが無くなったウサギのクッションに位置を合わせ、キャッチャーを移動させる。下に下ろすとそれは見事にクッションをつかみ、受取口まで運んでいく。彼女のご希望通り、ウサギのクッションをゲットすることができた。

「わあー。すごい。ユウタ君、ほんと上手いね。すごいなあ」

彼女はクッションを両手に満面の笑みを浮かべる。知らないうちに周りに他の客も5、6人ほど集まっていたのだろうか。その人たちも歓声を上げた。僕はちよつと恥ずかしくなる。

その後も二人は、僕が彼女に頼まれたものをとったり、自分がほしいものをとったりした。最終的にはクッションが2個と、ぬいぐるみを4個、お菓子も袋がいっぱいになるほどとることができた。使ったお金は全部で2000円程度。かなり得した気分である。

「最後にプリクラでも撮っていかない」

「おっ、いいね。撮ろうか」

二人でプリクラのコーナーに向かう。

「どれにしようかな。あつ、これにしようか」

彼女はピンクの大きなハートマークが書かれた機械を指差している。

「うん」

二人は一緒に中に入り、画面の前に立つと、彼女が300円を機械に入れる。数あるフレームの中から彼女が、ピンクのハートマークのものを選ぶ。二人はほつぺたをくつつけて写真を撮った。12枚のシールが受取口から出てくる。彼女はそれを半分に切ると、僕に渡してくれた。

「おお。よく撮れてるね」

「うん」

二人は笑顔で写真を確認すると、ゲーセンを後にした。

8、初デート6

8、初デート6

外に出ると空はすでに赤く染まり始めている。時間は6時前。夕日がこの時期、最もきれに見える時間帯だ。僕ら太陽の沈む方向に目をやる。

「わあー。きれい」

「ああ。すごくいい景色だ」

夕焼けは二人を別世界へといざなう。ここは都会の中心部。だが夕日は僕らを赤く照らし、二人の空間を切り取り、周りから独立させる。これは夕日を眺めている僕らだけが感じている世界。世界は僕らの気持ちを昂らせていく。二人は見つめあった。

「ミカ」

「ユウタ君」

僕は彼女の肩を抱き、ゆっくりと唇を近づけていく。彼女は目を閉じ、少し体を震えさせている。

「ミカ」

僕はもう一度声をかける。唇を密着させる。彼女は目を開き、目には涙を浮かべる。僕は20秒ほど経った後、ゆっくりと彼女から唇を離れた。

「ユウタ君」

彼女はなお目を潤ませ、僕を見つめている。そんな彼女を僕はそっと抱きしめる。

「うれしい。ありがとう」

「ああ」

しばらく抱きしめた後、彼女をそっと解放する。

「さあ、そろそろ晩御飯を食べに行こうか」

「うん」

「どこにする？ 特に希望がなければこの近くに、おいしいハンバ

「グのお店があるんだけど」

「いいよ、そこで」

「じゃあ、行こうか」

これから僕が行こうとしている店は、ここから5分ぐらい歩いたところにある。務めている会社から15分ぐらい。半年ぐらい前、仕事帰りにここらをほっつき歩いていたとき、お腹が空いてたまたま入ったその店に入ったところ、とてもおいしく、それ以来、月に2、3度は行くようになってしまった。

5分後僕らは『ハンバーグステーキ・よしだ』と書かれているお店に入った。ここはその名の通り、吉田さんという夫婦が二人で営んでいる小さなお店だ。

「いらっしやいませ」

奥さんのほうが僕らを迎えてくれた。

「こんにちは」

「ああ。ユウタさん。またいらしてくれましたね。いつもありがとうございます。ありがとうございます。そちらの方は？」

「恋人のミカです。よろしくおねがいます。」

彼女は笑顔であいさつする。

「まあ、うれしい。恋人の方と一緒に来てくれるなんて。今日は二人のために特別なサービスを提供させていただきます。あなた！

あなた！」

奥さんは奥の厨房に居る夫を呼び寄せる。すると奥から白い服に身をまとった、ご主人が駆けつけてきた。

「おおっ、いらっしやい」

「あなた。今日はユウタさん、恋人を連れてきてくれたのよ」

「そうか。もしかして今日は初デートかい」

「えっ。そうなの？」

「はい」

「よし、今日はまだ他に客はいないし、8時まで貸切だ。二人で2500円でいいぞ」

「そうね。私たちで二人に最高のムードを提供するわ」

「えっ。いいんですか。ありがとうございます」

「メニューはこっちに任せてくれるかい」

「いいよね」

「うん」

「よし、今日は腕がうなるぜ」

そういうとご主人は店の奥へ戻る。奥さんは入口を開け、外にある札を『本日貸切』に掛け替えた。

「ご案内いたします」

お店の中央にある4人掛けの席に案内された。

「ここでいいですか」

「はい」

二人は向かい合って席につく。

「今、水とおしぼりをお持ちいたしますね」

そういうと奥さんは氷の入った水と、白い布のおしぼりを運んできた。

「ありがとうございます」

彼女が話しかけてきた。

「いい人だね」

「僕はよくここに来るからね。でもこんな特別なサービスをしてくれるとは思わなかったよ」

「よかったね」

「うん」

「今日は私、とても楽しかったよ」

「うん、僕も今日は最高の1日だったよ」

外は先ほどより少し暗くなり始めている。ついさっきまで明るい赤の色をしていた空は、その色を暗い赤へと変化させている。その光は二人の初めてのデートが、クライマックスへと近づいていることを暗示しているようだ。

9、初デート7

9、初デート7

席について30分後、料理が運ばれてきた。この店は注文を受けてから、そのつどタネからハンバーグを作るため、非常に時間がかかる。いつもは待ち遠しいこの時間だが、今日は彼女と一緒にいるせいか、それも気にならなかった。

「たいへんお待たせいたしました。鉄板、熱くなってますから気をつけてくださいね」

「はい」

「いただきます」

「あつ、ちよつと待って。今奥から主人が……」

奥さんがそう言うと、店の奥からご主人がワインとワイングラスを片手に出てきた。

「今日のハンバーグにぴったりな赤ワインがあるんだ。一緒にどうだ」

「飲むよね」

「うん」

「じゃあ、いただきます」

ご主人はグラスをテーブルの上に置き、ワインのボトルのキャップシールを剥がし、コルク栓を抜くと、彼女のグラスから注いでいく。「さあ、食べてくれ。今日は腕によりをかけて作ったから、最高においしいと思うぞ」

「じゃあ、改めて、いただきます」

二人は目の前にあるハンバーグをナイフとフォークで切り、同時に一切れ口に運んでいく。

「おいしーい」

「うん、うまいー！」

「口いっぱいにジューシーな肉汁の旨味が広がるね」

「うん。これは今まで食べた中で一番おいしいハンバーグだな」

次に二人はワインを口に運んでみる。その味は肉の旨味を邪魔しないほどのほのかな甘味で、口の中にブドウの深いコクが広がってゆく。しかしながら後味はすっきりしていて、次に食べる肉の一口の邪魔にはならない。さすがご主人が選んだワイン。最高の一品だ。

「どうだ、うまいだろ」

「はい。ハンバーグもおいしいですけど、このワインも最高です」

「だろ。やっぱり俺のセレクトは間違ってたな」

「ふふっ」

二人は笑って応える。

ご主人と奥さんが見守っている前で、二人は夢中で料理とワインを口に運んでいく。15分後、あっという間に二人の前にある皿とグラスは、空になってしまった。

「ごちそうさまでした」

「ふふっ、ありがとね。どうするの？ まだここにいる？」

見るとまだ時間はまだ7時前である。

「うーん、どうしようか？ もう帰る？ それとももう少しここにいる？」

「そうだなあー。あまり長居しても悪いし、外も暗くなったから帰ろうか」

「うん。じゃあ、僕ら帰りますね」

「なんだ。もう帰っちゃうのか。まあ、でも、あまり遅くなったらいけないしな。今日はありがとよ」

「はい」

二人は席を立ち、レジでお金を支払う。

「2000円でいいよ。本当はもう少ししてもよかったから」

「えっ、いいんですか」

「ああ」

僕はサイフから1000円札を2枚取り出す。

「はい、ちょうどだね。今日はありがとね」

「はい、ごちそうさまでした」
僕は店のドアを開け外に出る。後ろを振り向くと、二人が店の前で手を振ってくれている。
「ありがとうございますー」
二人も手を振り返した。
外はもう完全に暗くなり、空では星が輝いている。僕は駅に向かって歩き始めた。

10、初デート8

10、初デート8

駅まではここから5分。二人は話しながら駅へ向かっていく。

「どうだった？今日は？」

「すごく楽しかった」

「そう。よかった」

「見たかった映画も見れたし、ほしい物も買えたし、クッションやぬいぐるみもとれたし、プリクラも撮ったし、おいしいご飯も食べたし、いろいろもりだくさんだったね」

「そうだね。あとなんか、お店の人もサービスしてくれたりしたしね」

「うん。みんなやさしいいい人ばかりだったよね」

「うん」

「でも一番よかったのは、あれかな？」

「ん。あれって？」

「あれだよ。ユウタ君の突然のキス」

「ああ、それが。なんていうか、雰囲気にもまれて、つい」

「すごくうれしかったよ。夕日の前で私に」

「なんか恥ずかしいなあー」

「まあ。人目を気にせずしちゃったからね。あのとき周り見えてなかったから」

「確かに……」

「けど、二人だけの世界に入っていたから、あれでよかったと思うよ」

「そうだね」

そうこう話をしながら歩いているうちに、二人は西中宮駅についた。ここは名前の通り、会社がある中宮駅の一つ隣の駅だ。切符を買い、電車に乗り込む。

電車は僕らを初デートに終わりへと導いていく。いつもは東三橋駅に着くまでが非常に待ち遠しい。しかし今日は彼女とあともう少いで別れなければならぬと思うと、とてもせつない気持ちになってくる。電車に少しでも遅れてほしい、そう思ってしまう。しかしながら定刻通りに駅に到着する。

「次は東三橋。東三橋。降り口は右側です」

僕らは電車から降り、駅を出て、家に向かって歩き出す。二人はこれから別れなければならぬこと気にしているのか、お互い何も話さない。しばらくして彼女の家に着いた。

「じゃあねー。今日は本当に楽しかったよ。ありがとう」

「うん。僕も。じゃあねー」

「なんか悲しそうだね」

「ん。いや、別に」

「まあ、私も悲しいよ。本当はもっと一緒にいたかったけど」

「うん……」

「そつだ！ 最後に忘れてた。別れる前のキス」

「えっ」

彼女はそう言うと突然、僕の唇を奪った。20秒のキスの後、彼女はさらに話しかけてくる。

「そついえば、明日は空いてないの？ ユウタ君」

「うん。僕、明日休日出勤だから」

「そつか。大変だね」

「まあね。そんな遅くまではいなくていいと思うんだけど」

「ふーん。何時ぐらいまでなの？」

「えっと。6時には家に帰ってると思うけど」

「じゃあ。そのあと家来ない？」

「えっ、いいの？」

「晩御飯ごちそうしてあげる」

「本当！ありがとう」

「じゃあ。また明日ね」

「うん。じゃあねー」

二人は手を振って別れる。僕は彼女と別れた後、明日また会えるうれしさを胸に家に帰っていった。

11、休日出勤1

11、休日出勤1

めんどろな一日が始まる。今日は一ヶ月ぶりの休日出勤だ。僕の会社ではなぜか一ヶ月に一回ほど、休日出勤がある。課長の思いつきで取引先との会食につき合わされるのだ。しかもこれが単なる飲み会のようなものではなく、契約の更新もかねた大事なもので、雰囲気は非常に重い。僕が最も嫌いな仕事の一つである。

7時30分に起きた僕は、8時20分に家を出て会社に向かう。駅までの道を歩いていると、突然女性の声が聞こえてきた。

「おはよう」

見ると彼女が自分の家のベランダから手を振っている。どうやら洗濯物を干している途中のようだ。僕も立ち止まり振り向いて、手を振って応える。

「おはよう」

「お仕事がんばってね」

「おう」

「今日6時に待ってるから」

「うん。じゃあいつてくるよ」

「いつてらっしやい」

彼女は手を振って僕を見送ってくれている。今日はいつもよりがんばれそうだ。僕はうれしい気持ちで胸に中宮駅に向かう電車に乗り込む。いつもはこの時間帯、通勤ラッシュで非常に電車は混んでいるのだが、休日の今日はとても空いている。客も僕のようにスーツを着たサラリーマンはほとんどおらず、恋人らしき男女や家族連ればかりである。

15分後、電車は中宮駅に到着した。会社までは駅から8分、歩いて向かう。8時55分に僕は会社に着いた。

「おはようございます」

「おう、おはよう」

オフィスの一人しかない課長が僕の挨拶に応える。

「早いですね」

「うん。今日はこれから取引先との会食。楽しみだからね」

「そうですね」

なんでそんなうれしそうな表情でいられるのかと疑問に思いながらも、僕は機嫌を損ねないよう笑顔で応える。うちの会社は原則9時までに出勤しなければならぬため、たとえ会食が12時からの日出勤でも、9時にはオフィスにいなければならぬ。僕は時間まで来週する予定だった仕事に手をつける。

10時を少し過ぎた時、課長が仕事中の僕に突然声を掛けてきた。

「おい、なんか12時まで暇だし、麻雀でも行かないか？」

全くもって迷惑な話である。こっちは仕事をしているというのに。でも麻雀は嫌いではない。仕方ないので僕は課長の暇つぶしにつき合うことにした。

「いいですよ。行きましようか」

「よし、じゃあ行くか」

こういうことを断れない人間だから、いつも休日出勤につき合わされるのだろうか。全く自分自身が嫌になってしまう。

僕らは会社を出て、課長行きつけの雀荘へと向かう。その雀荘は会社から3分ぐらいのところにある『龍』という店だ。店の前に着いて課長が。

「よし！今日もやるか。勝負だぜ。」

この人はおそらく昨日も行ったのだろうか。気合をいれてさびれたビルの2階に乗り込む。僕らは店員に案内され、ちょうど二人分欠けている卓に座る。

「1半荘だけお願いします」

課長が同卓に座っている客に声をかけた。

「よし、レートが1・0で、ウマがワン・スリーで、赤が各1枚の、アリアリでどうだ」

「はい」

僕らが応えようと、今日もう一つの大勝負が始まった。

12、休日出勤2

12、休日出勤2

大勝負という大げさに聞こえるかもしれないが、レートが10000点と10000点を10000点として計算するという意味で、さらにウマガワン・スリーということは1位には30000点のボーナスがつき、2位には10000点のボーナスがつくということだ。これは1半荘しかないとはいえかなりひどい。負け方によっては一気に50000円以上飛ぶ可能性がある。

僕は決して麻雀に自信がないわけではない。課長ほどではないが、友人の麻雀につき合いに乗ることや、ときどきに雀荘にもいったりする。ある程度こういう勝負には慣れていけるといえる。しかし今回のレートはいつもの2倍以上の高レート。これはたいへんな勝負になりそうだ。

そんなことを考えていると、課長が威勢よく声を上げた。

「ツモ。タンピンサンシヨクツモで満貫だ。4000オールといきなり大物手が決まったようだ。しかも親番で。最悪のスタートになった。」

(僕もなんとかして上がらないと。)

そうは思っていたものの、今日はテンパイすらできない。まったくどうしようもない状況だ。結局、オーラスまで自分は全く勝負に参加することができなかった。他の人は必死に点を取り合っていたというのに。

オーラスに入る前に点数確認をする。

「じゃあこれからオーラスなんで点数確認を……。俺は27900点です」

僕の上家の人が声をかけた。

「えっと俺はと、37000点な」

課長が答えた。

「うーんと、僕は23000点です」

僕の下家の人も答えた。

「僕は12100点です」

僕も答える。点数から見て僕は圧倒的に負けているようだ。まさに散々な状況である。

こうしてオーラスは始まった。しかし予想を裏切って僕はいきなり4順目でテンパイする。

(うそ！ マジかよ！ 絶対テンパイできないと思っていたのに。どうする？ リーチかけるか。)

僕は突然のテンパイに思いもよらず悩んでしまう。手自体はタンピンイーペーコー・ドラ1、4ハン、けっして悪い手ではない。リーチをすれば裏ドラが乗ってハネ満までいく可能性がある。うまくいけば2位も狙える。

(よし！ ここはリーチだ。)

と思ったが、なんとなく嫌な予感がして僕は結局、リーチはかけなかった。そしてその予感が的中する。

「カン！ カンドラはと……。よっしゃ！ ドラ4。いけ！ リーチと」

なんと3位の下家がカンをしたのだ。しかもドラが4つ乗ってリーチ。ひどい展開である。しかしこれが僕にとって思わぬ幸運を呼び込むことになった。リーチを警戒した僕の上家が僕の和了牌を捨ててくれたのだ。それはちょうどリーチした人に対しては安牌。思わず切ってしまったのだろう。

「ロン。タンピンイーペーコー・ドラ1、4ハン。30符で7700点と」

僕は声を上げた。リーチ棒を加えてなんとか僕は4位を逃れることができた。勝負が終わってお金を支払った僕らは店を後にした。

その足で取引先との会食をする店へ向かう。そこへはここから歩いて8分。

到着するとすでに取引先の人が二人、席に座っていた。

「こんにちは。今日はよろしくおねがいします」
僕らは声をかけて席に着く。

「おう、よろしく」
取引先の二人もそれに応じる。

「じゃあ、まずは何か頼みますか」

「はい。そうですね」

課長を中心にみんなで料理を注文する。

「いやー、悪いね。今日は来てもらって」

取引先の部長さんらしき人が僕に声をかける。

「いやいや、別にそんなことないですよ」

「そう？ 課長に付き合わされて大変でしょ。ほら、これ名刺」

「ありがとうございます。では僕もこれを。よろしくおねがいします」

名刺交換をする。どうやら予想した通り、相手は部長のようだ。課長には渡さなかったのは、以前会ったことがあるからだろう。

「ほう、井上勇太というのか。よろしくな」

「はい」

こうして僕の最も嫌な仕事は始まった。

13、休日出勤3

13、休日出勤3

月に一回は課長の会食につき合わされるのだが、これは本当に長い。契約の更新の話が決まるまでに平均で3時間ぐらいはかかる。今回もいつも通り12時から始まった会食は、3時ごろに最終段階に入った。

「じゃあ、来期も今期と同じ内容で契約させてもらおうよ」

「ありがとうございます」

取引先の部長が内ポケットから判子とボールペンを取り出し、こちらが出した種類にサインと押印をした。

「それじゃあ、今日はこれでお開きですな」

「はい」

「えっと、支払いは……」

「ああ。もちろんうちが。」

4人は立ち上がってレジへ向かう。そこに金額が表示される。53400円。

(高い!!)

課長が財布から60000円を出し、支払いを済ませる。

「井上君」

「はい」

「後でこの料金は会社の経費から落とすといってくれ」

「はい。かしこまりました」

僕は課長から領収書を受け取った。外にでた4人はお互いにもう一度あいさつをして別れる。

「ありがとうございます」

「おう。またな」

僕らは会社へと歩き始める。課長が僕に話しかけてくる。

「今日はありがとな」

「はい」

「毎月つき合わせて悪いね」

「いや、別にそんなことは」

「結構頼りにしてるんだから。お前のことは」

「ありがとうございます」

「あつ、そうだ。いつも通り報告書を書いといてな」

「はい」

会社に戻った僕はさっそく課長から頼まれた報告書の作成に取りかかる。1時間半ほどで書き終えた僕は課長に報告書を提出する。

「出来ました。課長」

「おう、早いね。いつも通り。えっと内容はと……」

課長は僕が作成したA4 3枚の報告書をチェックし始める。5分ほどかけて全部に目を通し終わると。

「よし！ OKだ。今日はもう帰っていいぞ」

「はい。ありがとうございます」

僕は一礼をして席に戻ると、机の上を片付け、パソコンの電源を切り、かばんを持ってオフィスから退出する。

「ありがとうございます。お先に失礼します」

「おうつ、じゃあな」

こうして僕の休日出勤は終わった。電車に乗って家へ向かう。東三橋駅についたころにはもう5時を少し回っていた。家までの帰り道を歩いていると彼女の声が聞こえてくる。

「おい。ユウタくん。もうお仕事終わったの」

どうやら洗濯物を取り込んでいる途中のようだ。

「おう」

僕も手を振ってそれに応える。

「もう来ていいよ。待ってるから」

「わかった。帰ったら着替えてすぐに行くよ」

「じゃあねー。待ってるよー」

「うん」

僕は走って家に向かう。家に着いた僕は15分ほどで着替えを済ませると、急いで彼女の家に向かった。

14、彼女の家で1

14、彼女の家で1

彼女のアパートについた僕は玄関でインターホンを鳴らす。

「ピンポン」

中から声が聞こえてくる。

「はい。今あけるね」

エプロンを着けた彼女が笑顔で、僕を出迎えてくれた。

「どうぞ。入って、入って」

「おじまします」

部屋に入るとリビングのテーブルに案内される。

「ここで座って待ってて」

「わかった」

僕は席に着いて料理ができるのを待つ。時計の針は5時半を少し回っている。外は少し赤く染まり始めている。

「けっこう広いね、この部屋」

「うん。1LDKあるからね」

「じゃあ、家賃高いんじゃない？」

「そうでもないよ。6万ぐらいだから」

「そんなもんか。まあ、一人暮らしだもんね。家賃以外あんまりかからないし」

「そうだねー。私、外食とかしないし。ユウタ君のところはどうなの？」

「僕のところは1DKで5万5千円ぐらいかな。ここに比べるとちよつと高いけど」

「ふーん。料理とかは作ったりするの？」

「けっこう作ったりするよ。嫌いじゃないし。たいていのものはできるかな」

「へえ、そうなんだ。今度ユウタ君の作った料理とか食べてみた

いなあ」

「そう？ まあ、今度ね。ところで今日は何？」

「えっと、肉じゃがと秋刀魚の塩焼きだよ」

「おおっ、いいねー。僕どっちも好きだなあ」

「よかったあー。何にしようか迷ったんだよねー」

彼女とキッチン越しにたわいのない話を続ける。

僕は5時50分になり、席を立ちベランダから夕焼けに目をやる。

彼女が話しかけてきた。

「きれいだね。今日も夕焼けが」

「そうだね」

「ちよつと、外出てみる？」

「うん」

ベランダを開けて外に出てみる。西の空に沈んでいく夕日が見える。

二人は並んでそれを眺める。僕は彼女の肩を抱き、そっと引き寄せた。夕日は今日も僕らを赤く照らしている。その光は二人のハートを熱く燃え上がらせる。彼女が僕の目を見つめて口を開いた。

「キスして」

僕は何も言わず彼女の唇に、唇を重ねる。夕日は二人をそのまま別世界へいざなっていくた。

「ミカ……」

しばらくして僕は唇を離すと、彼女にそっと問いかけた。彼女は少し涙を浮かべている。

「ユウタ……」

僕は彼女をめいっぱい抱きしめた。

二人は10分ほどベランダで夕日と眺めると、部屋に戻った。

「もう少しでできるから、座って待っててね」

「うん」

僕は再び席に着いた。

15、彼女の家で2

15、彼女の家で2

テーブルの上においしそうな料理が並べられていく。全ての料理が並べられると、彼女もエプロンをはずして向かいの席に着いた。

「じゃあ、食べようか」

「うん」

「いただきまーす」

「うわあー。どれもおいしそうだなあー」

「でしょ。今日のメニューは肉じゃが、秋刀魚の塩焼き、ポテトサラダ、わかめと豆腐の味噌汁、ごはんだよ」

「さーて、どれから食べようかな」

「ふふっ」

彼女は少し笑って僕を見つめている。

「じゃあ、まずは肉じゃがから」

僕は箸を手にすると、肉じゃがを一口ほおばってみる。

「どう？ おいしい？」

「うん、おいしい！」

「よかったー」

「ねえ、これ牛肉？」

「うん。そうだけど」

「そうかー。うちじゃあ作っても豚肉しか使わないからなあ」

「私も一人のときは豚肉なんだけどね。今日はユウタ君が食べてくれるから、贅沢に牛肉にしちゃった」

「それはうれしいなあ。やっぱり牛肉だとコクと旨味が違うよね」

「そうだね。よかった。牛肉にして」

次に僕は秋刀魚の塩焼きを箸でほぐし、口に運んでみる。

「どう？ そっちは？」

「うん。おいしいよ。ちょうどいい焼き加減と塩加減だし」

「そう。よかった。どのくらいの塩加減にすればいいかわからなかったから、不安だったんだよね」

僕は彼女の前で笑顔で、口に料理を運んでいく。

「そういえば、大根おろしとかあったほうがいい？」

「えっ、あるの？」

「うん。ちよつととってくるね」

そう言うと彼女は席を立ち、冷蔵庫からラップのかかった大根おろしの入った皿と醤油をとってきた。

「やっぱりこれだよな。秋刀魚の塩焼きには大根おろしと醤油。あれ？ でもどうして最初からおいてなかったの？」

「それはちゃんと塩加減が大丈夫か、そのまま食べてみてほしかったからかな」

「なるほど。そういうことか」

ここまで話すと彼女も箸を手にとり、料理を口に運んでいく。二人は話をしながら食事を続ける。

「ねえ、前に思ったんだけどユウタ君って、けっこう味とかには厳しいほう？」

「そうだなあー。自分ではよくわかんないけど、親にはけっこう厳しいって言われるなあ」

「やっぱりそうなんだ」

「あれ？ でもなんでそんなこと聞くの？」

「いや、前に会社の社員食堂に一緒に食べたときとかさ、けっこうあそこの料理に厳しい評価をしてたからさ。それに昨日連れて行ってくれたお店もおいしかったし」

「ああ、なるほど。やっぱり嫌かな、厳しいのは」

「うんうん、全然。おかげで私、今日おいしって言われて、ちょっと私料理に自信ついたから」

「そう。それならよかった」

しばらくして二人の皿は20分ほどで全て空になった。

「肉じゃがとごはん、おかわりあるけど食べる？」

「えっ、いいの?」

「うん」

「じゃあ、おかわり!」

僕はそう言っただけで彼女にうつわをわたすと、すぐに料理が盛られてきた。

「いっぱい食べてね」

「うん」

それも全て食べ終わると、食器を流しに移動させる。

「じゃあ、片付けるね」

「ああ、手伝うよ。僕も」

「いいよ、座って待ってて」

「そう?」

「うん、代わりにもう少しいてね。もっと話したいから」

「うん、わかった」

僕は席に戻り、彼女が洗い物を終わるのを待つ。二人の夜はもう少し続きそうだ。

16、彼女の家で3

16、彼女の家で3

彼女は洗い物を終えると、また僕の向かい側の席に座る。

「どうする？ このまま話す？ それともテレビでも見る？」

「そうだね。何か一緒に見ようか」

「うん」

僕は彼女の寝室に案内される。そこにはシングルベッドが置いてあり、二人はそこに腰掛けると、彼女がリモコンでテレビをつける。

「何か見たい番組ある？」

「特にないけど。ミカの見たいのでいいよ」

「じゃあ……」

彼女はチャンネルを回して7時からすでに始まっているバラエティ番組に合わせた。

「これにしよう」と

「あーこれ、僕もたまに見るなあー」

「そうなんだ。おもしろいよね企画が」

「うん、確かに」

二人が笑いながらしばらくテレビに夢中になっていたが、8時近くになって番組が終わると、彼女が話しかけた。

「そういえば、今日はどんな仕事だったの？」

「取引先の契約更新をかねた会食だよ。課長のお供でさ」

「へえ、そんなことするんだ」

「うん。これがけっこう大変なんだよ。会食が毎回やたら長くて、今日も3時間もつき合わされちゃった」

「3時間も長いねー」

「うん。しかもずっと取引先の人のお機嫌をとってないといけないからね」

「それはやだな。けっこう営業部の仕事も大変なんだね」

「まあね」

彼女はリモコンでテレビのチャンネルを回しつつさらに話を続ける。

「何食べたの？ 会食で」

「いろいろ食べたよ。和食の店だったから、刺身とか茶碗蒸しとか天ぷらとか。うん」

「いいなあー。私のそういう和食のおいしい店とか行ってみたいなあ」
「今度連れて行ってあげるよ」

「えっ、いいの」

「うん、まあ今日行った店は高すぎて無理だけど、安くておいしい店ならいくつか知ってるから」

「じゃあお願いね」

「うん。ねえ、ところで次は何を見るの？」

「恋愛ドラマだよ。これがすごい感動的な話でさ、私毎週楽しみにしてるんだよね」

「ふ〜ん。それってもしかして『星空の恋』っていうドラマ？」

「あれ？ 知ってるの？」

「うん、僕も毎週見てるからね」

「そうなんだ。なんかいい話だよねー」

「あっ、そろそろ始まるよ」

「うん」

テレビからドラマのオープニングテーマが聞こえてきた。

17、彼女の家で4

17、彼女の家で4

二人は一時間、テレビの画面に釘付けになる。

『星空の恋』、これは今かなり人気のある連続ドラマだ。主人公のヒロキには5年前からつき合っている彼女、エミコがいた。ヒロキはずっと彼女にプロポーズをしたいと思っていたが、前につき合っていた彼女、リカのこと忘れられず、できないでいた。リカとは6年前、結婚するはずだった。しかし結婚式の前日に彼女が交通事故に遭ってしまい、命を落としてしまう。ここでもしエミコにプロポーズをすれば、リカを裏切ることになるのではないか思い、どうしてもする気になれなかった。そんなある日、ヒロキはリカの母親に呼ばれ6年ぶりに会うことになった。そこでヒロキは一通の手紙を受け取る。そこには彼女の字でこう書かれていた。

『私もしこのまま死ぬことになっても、けっして悲しまないでください。私は星になっていつもあなたのことを見守っているから。』

ヒロキへ』。

どうやら彼女が亡くなる前に病院で書いた手紙のようだ。リカの母親は手紙を読んでいる僕に告げた。

「リカはあなたが病院にかけつけてくる前に、一度目を覚ましたんです。そのとき一通の手紙を残してくれました。しかしこの手紙を渡すと、あなたがさらにずっと苦しい思いをするのではないかと思いい、渡すことができないでいました」

「なぜ今になって僕に？」

「彼女の思いがずっとあなたに伝わらないままにはなるのは、彼女にとつてとてもかわいそうな気がして……。受け取ってくれますよね」

「はい」

「ありがとうございます」

手紙を家に持ち帰ったヒロキはさっそく星空を眺める。そして眠りにつくと、リカが夢の中に出てきて、僕にこう告げた。

「会いに来てくれてありがとう」

「リカ……。ごめん僕は……」

「心配しないで。私はいつもあなたのことを見守っているから。エミコさんと結婚して幸せになってね。」

「リカ……。でも…僕は今でも君のことが……。」

「何言ってるの。あなたが幸せになることが私にとって一番うれしいことなんだから。ねえ、だから幸せなって」

「うん……。ありがとう、リカ」

その後目を覚ましたヒロキは次のデートでエミコにプロポーズをした。リカはいつでも僕らのことを見守ってくれている、あの星空の上で。

ドラマが終わると僕は彼女に話しかける。

「そろそろ帰るね」

「えっ、もう帰っちゃうの?」

「うん、あまり遅くなるといけないからね。明日もまた仕事があるし」

「そうだね」

二人は立ち上がって玄関に向かう。

「じゃあ、また明日」

「うん」

ドアを開け外に出ようとした僕を彼女が呼び止める。

「あっ、待って」

「ん」

「ねえ、明日から朝、一緒に会社に行かない?」

「おっ、いいね、そうしようか」

「じゃあ、明日朝、8時20分に私の家の前で」

「わかった。じゃあねー」

「うん」

こうして僕は彼女の家を後にし、家に帰っていった。

18、平日1

18、平日1

今日は10月10日の月曜日。朝、いつも通りに起きて準備を済ませた僕は8時15分に家を出た。これから会社に向かうところだ。しかも今日は彼女と一緒に出勤する約束をした。

家の前につくと、すでに彼女が外に出て待っていてくれた。

「おはよう」

「おはよう」

「ごめん。もしかして待たせたかな？」

「うんうん。私もついさっき外に出たばかりだよ」

「そう、ならよかった」

「じゃあ、行こうか」

「うん」

二人は歩いて一緒に駅まで向かう。

「ねえ、こうして朝一緒に仕事行くななんて初めてだね」

「うん。でもこうして平日に朝からミカに会えるなんてうれしいよ」

「うん。私もうれしいな、ユウタ君の顔、見られて」

「それになんか今日はいつもより仕事をかんばれそうだな」

「うんうん。私も」

彼女はともうれしそうな笑顔をしている。

「ユウタ君は今日、どんな仕事するの？」

「えっと、いつも通り、営業で外回りかな」

「大変だね。ねえ、それ一日中なの」

「うん、だね。今日は7件も回る予定になってるから」

「うわー。きつそうだな」

「でも大丈夫だよ。もう慣れてるから」

「がんばってね、お仕事」

「ミカもだよ」

「うん」

しばらく話しながら歩き、駅に到着した二人は切符を買い、電車に乗り込んだ。朝の通勤ラッシュの時間帯、いつも通り電車はとても混雑している。

15分後電車は中宮駅に到着した。電車を降りた二人は会社に向かう。

僕らが会社に着き、中に入るとさっそく受付の人の挨拶が聞こえてくる。

「おはようございます」

二人は一緒になってそれに答える。

「おはようございます」

そうすると受付の一人の女性が僕らに話しかけてきた。

「あれ？もしかしてお二人で一緒に来たってことは……」

「ん？」

「付き合い始めたんですか？ミカさん」

「うん、そうだよ」

「えっ、何？」

「あつ、ごめん。この受付の人、私の同期でお友達なんだ」

「へえー、そうなんだ」

「前に相談したことがあってね。あなたのことで。私彼女にアドバイスされて告白したんだ」

「そうだったんだ」

「うん」

「大事にしてくださいね、ミカさんのこと」

「はい」

短い話を終えると二人はそれぞれのオフィスへと向かう。彼女のオフィスは4階で、僕は5階だ。エレベーターに乗り込んだ二人は、彼女が4階で降りるところで別れる。

「じゃあ、行ってくるね」

「うん」

4階でエレベーターから出て行く彼女を見送った僕は5階で降り、自分のオフィスへと入っていった。

19、平日2

19、平日2

もうすぐお昼の時間だ。9時から西原君と営業を回っていた僕は、12時過ぎにラーメン屋さんに入った。彼は商品開発部の人で僕の同期だ。彼には今日、製品の詳しい説明をもらうためについてきてもらった。もちろん彼はミカのこともよく知っていて、彼女について相談に乗ってもらうこともあった。ラーメンをすすりながら二人で今日もその話をする。

「そういえば今日の朝聞いたぜ、ユウタ、おまえ遂にミカとつき合い始めたんだってな」

「えっ、聞いたのか？彼女に？」

「いや、ミカが女友達に話してたのをちよつと聞いたんだよ」

「なるほど、そういうことか」

「よかつたな。おまえ好きな人とつき合うことができて」

「うん」

「なんだ、それでどっちが告つたんだ？」

「いやー、それがさ、自分から告白しようと思つたんだけど、ミカに先越されちゃつたよ」

「そつか。それじゃあ、両思いだつたてことじゃねえか」

「うん、そうだつたみたい」

「いやー、まあそうだよな。考えてみりゃ心配しなくても、ミカもおまえのことが好きだつたこと始めからわかつたかもな」

「えっ、なんで」

「いや、だつてさ、よく一緒に帰ってたじゃねえか、おまえら。でもミカがもしおまえのこと好きじゃなかったら、そんなことしねえよ」

「あつ、確かに」

「でも、羨ましいなー」

「何が？」

「聞くなよー。おまえさんに彼女ができたことに決まってるんだろ」

「えっ、でもおまえにも彼女いなかったけ？」

「あゝ、經理にいるユウコか？」

「それだよ、それ。もしかして別れたのか？」

「いやー、それがさ、別れたわけじゃねえんだけど、最近連絡してくんねえんだよ」

「それならおまえから連絡してみたら？」

「いや、それなら何度もしてるよ」

「そうかー。で、いつから連絡とれねえんだ」

「2週間ぐらい前からかな」

「結構長いな」

「うん」

「そういえば、行ってみたのか彼女の家は？」

「いや、なんか用もなく押しかけるのも悪い気がしてさ」

「でも、行ってみるしかないんじゃないか。他に方法もないなら」

「んゝ、そうだな。今度の休日に行ってみるか」

「そうしろよ」

「うん。なんかいつもは俺がおまえの相談に乗るのに、今日は逆になっちまったな」

「いいじゃん。困ってるときはお互い様だよ」

「そうだな。じゃあ、そろそろ行くか」

「よし！ 行くか」

ラーメンを食べ終わった二人は、レジでお金を支払い、店を出た。

20、平日3

20、平日3

腕時計の針を確認すると、それはすでにもう9時を少し回っている。今日はすっかり遅くなってしまった。結局あの後、外回りの営業から会社に戻ってきたのは7時、そして書類を書き終えた頃には9時近くになっていた。彼女も6時過ぎごろに来たメールによると、仕事は終わりもう帰っているようだ。

〈回想〉

7時ごろ会社に戻ってきた僕は、トイレに行くついでに彼女からのメールを確認した。

「わたし、今、仕事が終わったよー。今日は一緒に帰れそう?」
このメールを見て返信をする。

(おそらく彼女はいつもの夕日が見えるベンチで待っているのだろうか。それならもう1時間近く待たせていることになる。ずいぶん悪いことをしてしまった)

「まだ後2時間ぐらいはかかりそうなので無理です。もし待つてくれているならごめんなさい」

メールを送信しトイレを済ませ、手を洗い終わると彼女から返信が返ってきた。

「じゃあ、先に帰ってまーす。お仕事がんばってね」
すぐに返信をする。

「ありがとう。がんばるよ」

僕は彼女の言葉に元気づけられ、仕事に戻った。

会社から出て街の繁華街に来た僕は、遅くなったときによく行く定食屋さんに入る。この店は10時半までやっていて、しかも値段も安くおいしい。扉を開けて中に入る。

「いらつしやいませ。何名様ですか」

「一人です」

「カウンター席へどうぞ」

僕はカウンターの真ん中の席に座る。店員の人はずぐにお水を持ってくる。

「注文はお決まりですか」

「えっと、豚のしょうが焼き定食をお願いします」

「かしこまりました」

座って料理が来るのを待つ。もう時間が遅いせいか、客は僕以外に4人しかいない。その格好からして皆サラリーマンのようだ。しばらくして定食が運ばれてくる。

「豚のしょうが焼き定食をお持ちいたしました」

「はい」

「ごゆっくりどうぞ」

僕が食べ始めると、カウンターの前にいる店長が話しかけてくる。

「今日も遅いね。また残業かい」

この人は僕がこの店の常連であるせいか、いつもよく話しかけてくる。

「はい」

「いやー、大変だねー」

「ええ。まあ……」

「あれ？ 何か元気ないね？」

「そんなことないですけど……」

「そうは見えないけどなあー。もしかして仕事が上手くないかなかったとか？」

「上手くはいきましたよ。単に遅くなってしまったから、疲れているだけです」

「なるほど。まあ、そりゃ疲れるわなあー。9時までかかれば」

「はい」

「まあ、今日もいつものようにご飯、サービスで大盛りにしといた

から、いっぱい食べてくれよ」「

「はい。ありがとうございます」

この時間に店に行くといつも店長がご飯を大盛りにしてくる。とても有り難いサービスだ。

僕は15分ほどで定食を食べ終わると、店を出て、駅から電車に乗り、家に帰っていった。

21、平日4

21、平日4

今日は金曜日。今週はずっと仕事が忙しく、帰りが遅かったため彼女と一緒に帰ることができなかった。しかし今日は久しぶりに早く仕事が終わわり、彼女が待っている夕日の見えるベンチに向かう。そこに着くとベンチに座っている彼女に声をかける。

「ごめん、遅くなって。待った？」

時刻はもう6時半を過ぎていて、僕は彼女からきた6時のメールを心配してこう言った。

「ちよつと待ったかな」

「悪いね。待たせちゃって」

「いいよ、気にしないで。30分ぐらいだから」

「そう……」

「じゃあ、行こう」

「うん」

彼女もベンチから立ち上がり、僕と一緒に中宮駅まで歩き始める。6時半を過ぎていているせいか、すでに日は沈み、当たりは薄暗くなり始めていた。歩きながら彼女が話しかけてくる。

「今週はあんまり一緒にいられなかったね」

「うん。僕が忙しかったし、そのせいで朝の出勤時間も合わなかったからね」

「わたし、なかなか会えなくてすごくさみしかったよ」

「僕も同じ気持ちだったよ」

「だから、わたし、今日一緒に帰れてうれしい」

「そうだね」

「ねえ、そういえば一週間前の今日、私たち恋人同士になったんだよね」

「そうだね」

「今言つと、わたし、あるとき、すごくドキドキしてたんだよ」

「えっ、そうだったの？」

「うん。フラれるんじゃないかって心配してたんだから」

「そうだったのか」

「うん。わたし、最初に会ったときからずっとユウタ君のことが好きだった。だから……」

「えっ、最初から」

「うん。あのベンチで初めて会って、話をして、それとき私はユウタ君のことが好きになったの」

「へえー。でもなんで僕に話しかけようと思ったの？」

「会社であなたのことは何度か見かけたことはあったから、会う前から全く知らないわけじゃなかった。そして半年前、あなたがあのベンチで夕日を眺めているのを見て、なんとなくその姿に引かれてあなたに話しかけたの」

「ねえ、じゃあ、僕のどんところが好きになったの」

「それはやっぱり落ち着いていて、やさしいところかな。あといざというときには私をちゃんと引っぱってくれるところもかな」

「ふん」

「どうしたの？」

「いや、なんか聞いてはみたものの、いざ面と向かって言われると恥ずかしいなと思って」

「そう。じゃあ、今度は逆にユウタ君はわたしのどこを好きになったの？」

「そうだなー。僕もやさしいところかな。あと明るくて元気なところ。それにきれいでかわいいところも」

「ふん。なんか恥ずかしいけどうれしいな。わたし」

「僕はもつと恥ずかしくなっちゃったよ」

「ふふっ」

二人は話しながら互いに笑いかける。

歩き始めて8分後、駅に到着した二人は切符を買い、電車に乗り込

んだ。

22、平日5

22、平日5

電車を降りた二人は駅から出て、家までの道を歩いていく。彼女が休日のごとで話しかけてきた。

「ねえ、明日どうする？」

「ん？」

「また、どっか行く？」

「そうだね」

「んー、どこがいいかな？」

「そうだなー」

「ねえ、ユウタ君って、車もってる？」

「あんまり乗らないけど、一応もってるよ」

「じゃあ、それでどっか行こうよ」

「いいねー。そうしようか。で場所は？」

「んー、遊園地はどうか」

「おもしろそうだね。じゃあ、どこの遊園地にする？」

「そうだなー。車で1時間のところにある『ミラクルスペースラン

ド』がいいかな」

「あつ、そこなら僕も知ってるよ。あの美郷市にあるやつだろ」

「そうそう、それ。あそこ大きな観覧車やすごいジェットコースタ

ーがあつて、すごいおもしろいんだよね」

「そうだね。僕も大学時代に友達と何度か一緒に行つたし、1年ぐ

らい前にも会社の同僚と一緒に رفتたよ」

「私も女友達と رفتたなあー。半年ぐらい前に」

「じゃあ、決まりだね」

「うん」

「何時に出る？」

「そうだねー。なるべくたくさん遊びたいし、8時ぐらいがいいか

な。そしたら開園時間の9時には向こうに着くし、閉園時間の10時までたっぷり遊べるよ」

「よし！ じゃあ、明日はめいいっぱい遊ぶか」

「うん」

彼女はとてうれしそうな顔をしている。

「そうだ！ この前テレビのCMで見たんだけど、その遊園地、今イベントやってるらしいんだよね」

「何の？」

「確か花火だったかな。夜に打ち上げるって言ってたよ」

「それはますます楽しみだなあー」

「うん。明日が待ち遠しいね」

二人は明日の話に花を咲かせつつ、彼女の家に着く。

「じゃあ、明日は8時に僕の家に来て」

「うん、わかった」

「じゃあねー」

「うん。じゃあ、また明日」

彼女はそう言うのと軽く僕のほっぺたにキスをした。二人は笑顔で別れた。

僕は家に帰ってご飯を食べ、風呂に入って、テレビを見ていると彼女からメールがきた。

「明日楽しみだね。言い忘れたけど、私、明日弁当作っていくね。」

「えっ、いいの？」

「うん。いっぱい作ってきてあげる。楽しみにしててね。」

「うん。この前の夕食もおいしかったし、楽しみだよ。」

「じゃあ、わたし、明日早く起きるからもう寝るね。」

「おやすみー。」

「おやすみなさい。」

僕も明日の朝、出る前に洗車すること決め、今日は10時には布団に入った。

23、デート 遊園地1

23、デート 遊園地1

朝6時半に起床した僕は朝ごはんを食べ、身支度をして、バケツに水を汲み、外に出て車の洗車を始める。僕は普段仕事で会社の車を運転する機会はあるのだが、自分の車を運転することはあまりない。今日の運転も2週間ぶりぐらいだ。しばらく見ないうちに車は雨に濡れたせいか、かなり砂の汚れがついてしまっている。バケツに汲んできた水をスポンジに含ませ、車全体を濡らしていく。その後かたくしぼったやわらかい布のタオルで、水滴をふき取っていく。最後にワックスをかけたら洗車完了だ。全ての作業があともう少しで終わろうとしているときに、彼女からメールがきた。

「待ちきれなくてもう来ちゃった。今どこにいるの？」
まだ時計は7時半を少し回ったところだが、どうやら彼女が来たようだ。

「今、洗車中だったんだ。すぐにそっち行くよ」

僕は返信をして彼女がいる玄関に向かう。

「おはよう。早いね」

「うん。待ちきれなくてもう来ちゃった」

「今、洗車してたんだ。一緒に来て」

そう言っただけで彼女の手をつかみ、車のところに連れて行く。

「もう少しで終わるからちよつと待ってて」

「うん」

ワックスがけを再開すると彼女が話しかけてくる。

「けっこういい車持ってるんだね」

僕の車は軽ではない。5人乗れる大きさを流線型の形をしたエメラルドブルーの車だ。

「うん」

「どうやって買ったの？」

「去年の夏と冬のボーナスを合わせて買ったよ」

「えっ、でもこれ高いんじゃない？　もしかして中古？」

「うんうん。新車だよ。150万ぐらいかな」

「高いね。ってことは分割ってこと？」

「いや。こっに見えてもけっこっ給料もらってるからね。一括で買ったよ」

「うわー、すごい！！」

僕は彼女の方に振り向いて、少し得意気な表情を浮かべる。ここまでしゃべると彼女は車の周りを歩いて観察し始める。

5分ほどで洗車を終えた僕は彼女に声をかける。

「よし！　終わったよ。さあ、行こうか」

「うん」

「どこに乗る？」

「やっぱり近くでいろいろ話したいし、助手席かな」

「はい、じゃあどうぞ」

僕は助手席のドアを開け、彼女に乗り込んでもらう。

「うん」

「あっ、荷物は貸して。後ろに置いとくから」

「わかった」

彼女は手に持っている二つの荷物のうち、四角いものの方を僕に渡してくれた。そして彼女が助手席に乗り込むと、僕は後ろのドアを開けその荷物を後ろの席に置く。その後僕も運転席に乗り込んだ。

「シートベルト締めて」

「分かった」

エンジンをかけて車を発進させる。

「よし！　じゃあ、出発だ」

「うん！」

二人を乗せた車は遊園地へ向かって走り出す。最初に引っかかった信号機で彼女に話しかける。

「何か音楽かける？」

「うん」

「何がいい？」

「何でもいいよ。ユウタ君が好きなもので」

僕は運転席の横にあるボックスを開け、5枚ほどあるCDの中から1つ取り出し、カーステレオにセットする。すると『サウスオールスターズ』の軽快な曲が流れ始める。

「あつ、私もこのバンド知ってる。有名だよね」

「うん」

「リズムのいい曲が多くて、すごいテンションが上がるよね」

「うん！ そうだね」

車を止めていた信号も青になり、僕らの気持ちもさらに昂ってくる。軽快なリズムの音楽は僕らを軽やかに遊園地まで運んで行った。

24、デート 遊園地2

24、デート 遊園地2

1時間後車は遊園地に到着した。時間はまだ8時40分。開園まではまだ少しあったが、駐車場に車を止め、とりあえず外に出る。背伸びをして柵にもたれかかり、二人で話し始める。

「まだ後20分ぐらいあるね」

「うん」

「暇だね。早く入りたいな」

「そうだね」

「ねえねえ、今日の服、どうかな？」

「よく似合ってると思うよ」

彼女は胸の開いた白いワンピースに赤い服を羽織っていた。

「ちよつと寒いんじゃない？」

「そうかな、けっこう日が差してるから大丈夫だよ。わたしこっ見えなくても寒さには強いし」

「へえー、そうなんだ」

「わたし出身が東北で寒いところだったからね」

「あ〜、そういうえばそんなこと言ってたな」

「ユウタ君は苦手？ 寒いのか？」

「うん、そうだね。僕は九州にいた時期がけっこう長かったからね」「ふーん。ねえ、こっち向いて」

そう言われて僕は彼女の方を向く。

「あっ、やっぱり気になるんでしょ」

「えっ、何が？」

「ごまかしてもわかるんだから。つい胸に視線がいつてるの」「それは……」

「ほら、赤くなった。やっぱりそうなんだ。この、えっち」

「い、ごめん」

「いいよ。ユウタ君に見てもらおうと思ってこの格好してきたんだから、気にしないで」

「そうなの」

「うん。だから話すときは気にせず、こっち見て話してね」

「わかった」

話をしていると駐車場に止まっている車の数が急激に増えてくる。

僕らが来たときにはスムーズに入ることができた入口には、すでに10台以上の車が並んでいた。その様子を確認しに遊園地の係員らしき人がやってきた。メガホンで開園時間の前倒しを伝えている。

「本日は8時50分に開園いたします。入場される方は入場券を購入し、正面ゲートからご入場ください」

「あつ、開園だって。行こう！」

「うん」

僕らは走って入場券売り場に直行する。

「入場券ください」

「何名さまですか？」

「大人2人です」

「2000円になります」

僕は財布から1000円札を2枚出して渡した。

「こちらですね。アトラクションをご利用される場合は中の販売所で、パスポートか回数券の購入をよろしくお願いします。それではどうぞごゆっくりお楽しみください」

「はい」

入場券を手に入れた僕らは正面ゲートから中に入り、係員の人からパンフレットを2つ受け取った。

25、デート 遊園地3

25、デート 遊園地3

「ねえ、どうする?」

「まずはパスポートか回数券を買おうか」

「そうだね」

「どっちにする?」

「たくさん乗りたいし、やっぱりパスポートかな」

「そうだね。じゃあ、買って来るからここでまってて」

「うん、わかった」

僕は走ってすぐ近くにある販売所でパスポートを二人分購入する。

「はい、買ってきたよ。どうぞ」

「うん、ありがとう」

「さあーて、何から乗ろうか?」

「じゃあ、あれ!」

そう言っただけで彼女はこの遊園地の一番の目玉、超大型ジェットコースターを指差した。

「えっ、いきなりあれに乗るの?」

「うん。あれ3ヶ月前にできた新しいジェットコースターで、今大気なんだって」

「う、うん」

そのジェットコースターは最も高いところで70〜80 mはあるだろう。そこから落ちていく乗り物のスピードはここから見てもますますすごい迫力である。しかもそれに加えて一回転が3回もある。

「ねえ、今なら空いてるし、早く行こう」

僕は彼女に腕をつかまれ並んでいる列まで連れて行かれる。見ると係員の人が前で待ち時間20分の札を上げている。

「うわあー、早く乗りたいなあー」

「ねえ、ミカはもしかして絶叫マシン好きなの？」

「うん、大好き。あのスリルと迫力、そして叫び声を上げるときの爽快感がたまらないんだよね」

「ふーん……」

「あれ？もしかしてユウタ君は嫌いななの？」

「いや、別に嫌いじゃないけど……」

「怖いなの？」

「怖くはないけどね。でも特別、好きってわけでもないなあー」

「そう……。じゃあ、やめよっか。私別に他の乗り物でもいいよ」

「いいよ、気にしないで。僕何でも一緒に乗るから」

「それならいいけど……」

「そうだ！じゃあ、次は僕の行きたいところでいいかな？」

「うん、いいよ」

二人で話をしているうちに、ついに僕らの出番がやってきた。係員に案内され席に乗り込みバーを下ろす。席はもちろん彼女と隣同士だ。全員が座り終わるとコースターが動き始め、僕らをゆっくり上空へ運んでいく。

「ドキドキするね」

「そうだね」

上上がったていけばいくほど心臓の鼓動は高まっていき、互いの音が聞こえそうな気になる。コースターは1分ほどで二人を最高点までつれていくと、勢いよく下り始めた。全員が大きな叫び声を上げる。

「きゃー！ー！」

「うわー！ー！」

「いやあー！ー！」

…

その声は幾重にも重なりさらに乗客たちの興奮を昂らせていく。その興奮はおよそ5分ほど続き、僕らは止まったコースターから降りた。

「いやー、すごかったね」

「うん。最高に気持ちよかったよ」

「乗る前からすごいとは思っていたけど、まさかこれほどは……」

「もしかして、ちょっと怖かった？」

「ちよっとね」

「やっぱりそうなんだ。もう苦手なら苦手って素直に言えばいいのに」

「いいよ、別に。今日はミカが乗りたいてっていったものにはとことんつき合っから」

「そう、ありがと」

「でも、その代わり……」

「その代わり……」

「次はこれにしよう！」

そう言って僕はパンフレットのある建物を指差した。

26、デート 遊園地4

26、デート 遊園地4

「えー。ちよっと待って。『ホーラハウス 死神の館』って、もしかしてお化け屋敷行くの?」

「うん、そうだけど……」

「えっ、ちよっとそれは……」

「もしかして怖い?」

「う、うん」

彼女はあからさまに震えてかなり嫌そうな顔をしている。

「そうか、苦手なのか。一度ミカと一緒に入ってみたかったんだけど、今日はやめようか?」

「うん」

「残念なあー。でもいいのかな? それで」

「えっ!?!」

「いや前に会社の同僚と一緒に来たときに、女友達に頼まれて一緒に入ったことがあるんだけど。ねえ、なんか悔しくない?」

「そ、それは……」

「まあ、嫌なら別にいいんだよ。無理には言わないから」

「ん〜。じゃあ、やっぱり入る!」

どうやら彼女は僕の言葉に少し怒って向きになっているようだ。その姿がまたかわいい。

「よし! じゃあ、行こうか」

僕らは5分ほど歩いて不気味な城の前まで行く。

「さあー、入ろうか」

「う、うん」

さっきまで少し強気だった彼女も入口を前に、うつむいて泣きそうな顔をしている。

「大丈夫だから。僕につかまって」

「う、うん」

二人は中に入って一歩一歩、足を進めていく。彼女はぎゅっと僕の腕をつかんでいる。目の前に次々と現れる仕掛けやお化けに最初は声を上げていたが、5分ほど経つとあまりの怖さに声さえも聞こえてこない。そして出口にたどり着いた頃には少し泣き声を漏らしていた。外に出て彼女が涙を拭きながら話しかけてくる。

「うえーん、ヒック、ヒック。怖かったよー」

「だいじょうぶ?」

「うえーん、ヒック」

「そんなに苦手ならいやだってはつきり言ってくればよかったのに」

彼女はお化け屋敷が相当苦手だったようだ。まるで小さな女の子のように泣きじゃくっている。

「だって、だって……。ユウタ君が……」

「はいはい、悪かった、悪かった。じゃあ、次行こうか」

「ヒック、う、うん」

「何がいい?」

「ちよつと座ってもいいかな?」

「うん、いいよ」

僕らは近くにあるベンチに腰を下ろす。そのまま10分ほど座っていると、だいぶ彼女も落ち着いてきたようだ。

「落ち着いた?」

「うん」

「いやー、あんなに怖がりだとは思わなかったよ。なんか悪いことしちゃったね。ごめん」

「いいよ。ユウタ君が男らしくて少しかっこよく見えたから」

「そう? それはうれしいな。それで次は何にする?」

「えっと、じゃあ、お返しにこれかな」

そう言っただけで彼女はまたも絶叫マシンのアトラクションを指差した。

27、デート 遊園地5

27、デート 遊園地5

「えっ！ あ、あれ！？」

「そう、あ・れ」

「あれって、あの高いところまで上がって一気に下に落ちるやつだよね」

「そう。すごいんだよ、ここの。高さ90 mまで上がるんだよ」

（ふざけんな。おい！ 90 mっていったら30階建てのビルの高さだぞ）

「ほら。驚いてボーっとしてないで行く、行く」

僕は彼女に腕をつかまれ半ば強引に、そのアトラクションの列まで連れて行かれる。どうやら係員の人が上げている札を見ると1時間ようだ。

「うわぁー。目の前で見るとすごい高さだね。見ているだけでワクワクしちゃう」

「ねえ、それより待つの？ 1時間」

「うん。これも最近できたアトラクションだから、わたし乗ってみたかったんだー」

「そう」

「あつ、あれ！？ なんか元気ないね。もしかしてさっきのジェットコースターよりも怖いのか？」

「う、うん」

「大丈夫だよ。別に死ぬわけじゃないんだからさ。それにさっきは私が怖い思いしたんだから、今度はこっちにつき合ってもらわないとね」

「そう、そうだな。がんばるよ」

「うん」

二人は話をしながら自分たちの順番が来るのを待っている。

…
しばらくしてのどが渴いてきた。

「そういえば、なんかのど渴いたね」

「うん」

「なんかジュースでも買って来ようか」

「うん」

「何がいい？」

「そうだなー。わたし、コーラがいいな」

「よし！ わかったコーラか。ここで待ってて、買って来るから」

「うん」

僕は列を離れて近くの自動販売機でコーラと自分用にファンタオレンジを買う。そしてすぐに彼女のところに戻った。

「はい、どうぞ」

「ありがとー」

彼女はすぐに缶を開けておいしそうにコーラを飲んでいる。

「好きなの？ コーラ」

「うん。わたしコーラ大好き」

「へえー。知らなかったなあー」

「まあね。好きだけど太るからあんまり飲まないんだよね」

「ふーん」

「あつ、あともう少しだよ」

「うん」

彼女がそう言ってから5分後、ついに自分たちの番が来た。係員の人に案内されて僕は席に着く。降りてきたバーによって身体が固定された後、ゆっくり席が上がっていく。

(すごい景色だ。ここからだと言園地全体が見渡せる。しかしこれからこの高さを落ちると思うと、体中に寒気がする。)
隣にいた彼女が急に話しかけてきた。

「ほら、もうすぐだよ」

「えっ!?!」

僕は思わず彼女のほうを振り向いた。その瞬間、突然上昇が止まり、

一気に落下が始まる。

「きゃー！！！」

「うわー！！！」

「いやぁー！！！」

…

一番下まで落ちたときには僕は少し放心状態に陥っていた。

「ねえ」

「……」

「ねえ、終わったよ。早く降りないと」

「あっ、ああ」

僕は慌てて席から降り、彼女とその場所を後にした。

28、デート 遊園地6

28、デート 遊園地6

「ねえ、大丈夫？」

「う、うん」

「さっきジェットコースターは大丈夫だったのに、これはダメなんだね」

「うん、まあね。なんていうか垂直に落ちるのがちょっと……。あんなに速いとは……」

「ふふっ、なんかだいぶまいってるみたいだね」

「まーあ、いいや。でもこれでおあいこだな」

「そうだね。お化け屋敷のときと逆になっちゃったね」

「あつ。でも、やっぱり、ちよつとかつこわるかったかな」

「そんなことないよ。誰にでも苦手なものってあるし。それに……」
「それに……」

「なんか怖がつてるユウタ君、少しかわいかった」

「おい、かわいかったって……」

「うん」

「なんか気になるなあー。その言い方。ねえ、からかってない？
僕のこと」

「もう。気にしない、気にしない。それよりもう12時過ぎてるから、そろそろお昼にしよう」

彼女に言われて時計を見ると、すでに12時10分になっている。

「そうだね。確か弁当は車の中だったよね」

「うん」

「じゃあ、ここで待ってて。すぐにとっってくるから」

「うん。いつてらっしやい」

僕はその場を離れて、急いで車がある駐車場に向かう。車に戻ると後部座席に積んであるかばんを持って、走って彼女のところに行く。

「よし！ 持ってきたよ」

「うん、ありがとう。じゃあ、そのベンチで食べよう」
「うん」

二人は近くにあるベンチに並んで腰掛ける。彼女は大きめのかばんの中から布に包まれた四角い箱の2段の弁当を取り出した。すぐに開けて中身を見せてくれる。

「うわぁー、うまそうー！」

「下の段におにぎりが、上の段にはおかずが入ってるから、いっぱい食べてね」

「うん」

さっそく僕は9個あるおにぎりの1つを手に取り、口に運ぶ。

「どう？」

「うん、おいしい。これ梅干だね。ぼく、梅干大好きなんだ」

「へえー。よかった」

「ねえ、他は何が入ってるの？」

「えっと、あとはおかが3つとシヤケが3つかな。そっだ、こっちのおかずも食べてみてよ」

そう言うと彼女は僕に割り箸を渡す。

「ありがと。じゃあ、このから揚げをと……」

今度は上の段のから揚げを箸でつまんで食べる。

「どう？」

「うん、これもおいしいよ」

「よかった。さあ、わたしも食べよ」

二人は並んでお弁当を食べていく。

「はい、あーん」

途中で彼女がたまご焼きを箸でつかんで、僕の口に持ってきた。

「じゃあ、いただきます」

僕はそれを口にする。

「うん、おいしい」

「ぶぶっ」

「あはっ、はっは、はははははっ」

自然と二人の顔が笑顔になる。

30分ほどでお弁当は空になった。

「じゃあ、ごちそうさま」

「ごちそうさまでした」

「さあー。次は何に乗ろうか」

「んー。じゃあ、ちょっと休んだら、コーヒーカップに乗ろうよ」

「お、いいね」

二人は20分ほどベンチで会話を交わして、コーヒーカップに向かった。

29、デート 遊園地7

29、デート 遊園地7

その向かう途中で僕はお弁当のかばんを戻しに行かなければならぬことに気づく。

「ねえ、ちよつとかばん貸して。車に戻してくるよ」

「ありがとう。じゃあわたし、ここで待ってるね」

「うん」

僕は走って急いで車に戻り、かばんを後部座席において彼女のところに戻る。

その後、コーヒーカップまでやってきた二人は係りの人に案内され、向かい合って席に着く。周りには僕らと同じようにカップルで乗る人や親子、兄弟姉妹もいるようだ。全員が乗り込んでカップルが回り始める。

向かい合った二人は互いに笑いあう。

「ふふふ。ねえ、回すの？」

「もちろん。いくよー。それっ！」

僕は目の前にある銀色のハンドルをおもいつきり回す。すると僕らに乗っているカップルも“ぐるん、ぐるん”回りだす。

「きゃー、怖いー」

彼女は声を上げて怖がっている。しかしそれは笑顔を見れば演技でおもしろがつてやっているがわかる。そんな彼女に今度は自分で回してみるように勧める。

「ねえ、今度はミカが回してよ」

「えー、仕方ないなあー。じゃあ、いくよ！ それっ！」

彼女は僕の反対側に座っている。そのため彼女がハンドルを回し始めるとカップルはさつきと逆方向に回り始める。

「あっ！ さつきと逆になったよ」

「ははっ、そうだね。ほら、もっと回してよ」

「どんどんいくよー！」

「うんうん」

どうやら彼女はかなり向きになっていようだ。僕がさっき回したときよりもカップはいきおいがつき、さらに速く回っていく。

“リンリンリンリン”

「終了まであと1分です」

アナウンスが聞こえてくる。それを聞いて僕も彼女が依然回し続けているハンドルを握り、手伝ってさらに回していく。最後にカップの回転はとてつもない速さになり、その後30秒ほどの時間をかけてゆっくり停止した。

二人はカップから降りて少しおぼつかない足取りで歩き始める。

「ちよっと、回しすぎたかな。かなり頭がクラクラするよ」

「わたしもー。あー……」

「でも楽しかったよね」

「うん。最後はすごく速くなって、少し怖かったけど……」

「そう？ その前のミカが回しているときから十分速かったけどなあー」

「あつ！ そうかも。わたし、自分であんなに速く回せるとは思わなかったよ」

「僕がやったときのほうが遅かったよね」

「うん。あと、あのわたしが回して回転が逆になったときはびっくりしたなあー」

「そうそう。僕はそれに一番ビビったよ。まさか回転が変わるとは……」

「でも、とにかく楽しかったよね」

「うん」

二人はその後、少しベンチに座って休んだあとも、次々とアトラクションをこなしていく。夢中になって遊園地の中を回っているうちに、時間は午後5時を過ぎ、日がかなり傾いてきた。彼女が話しかけてくる。

「ねえ、もうすぐ夕日が見える時間だね」

「そうだね」

「ねえ、どこから見るの？」

「うーん、そうだなあー。まだ乗ってない観覧車の中からっていうのはどう？」

「あつ！ それいいかも」

「じゃあ、そうしよつか」

「うん」

僕は観覧車がある場所に向かって歩き始める。

「あつ！ 待って！」

「ん、なに？」

「ちよつと寒くなってきたからくつついてもいい？」

「いいよ」

すると彼女は僕の左腕をつかみ、身体を密着させてくる。

「あつたかい……」

「ふふつ、そうだね」

彼女の身体から腕をつたって僕にやわらかな温もりが届いてくる。

そのまま二人は観覧車まで歩いていった。

30、デート 遊園地8

30、デート 遊園地8

二人は観覧車の前で並んで立っている。

「じゃあ、乗ろうか」

僕は彼女に声をかけた。

「あっ！ ちょっと待ってて」

「なに？」

「とっておきのものを買ってくるから」

「とっておき？」

「うん」

すると彼女は走って近くの自動販売機でコーヒーを2本買い、戻ってきた。

「はい、どうぞ」

「ア、アチツ！」

どうやら彼女が買ってきたのはホットコーヒーのようだ。

「あっ、大丈夫？ 熱かったかな？」

「うん。でも大丈夫だよ」

「中で飲もうね」

「うん」

僕らはいよいよ係りの人に案内されて観覧車に乗り込む。二人は向かい合って席に着いた。観覧車は僕らを赤く染まりつつある空へゆつくり、ゆつくり運んでいく。

「コーヒーあけていい？」

「うん。カンパイしょー」

“プッシュー”

2つの缶がほぼ同時に開く。

「じゃあ、カンパイ！！」

「カンパイ」

“カチーン”

二人は一緒にコーヒーを口に運ぶ。

「はあっ、あつたかい……」

「うん」

「どう？ 観覧車の中で飲むホットコーヒーの味は」

「サイコーだよ。身体が温まって」

「ふふっ、でしょー」

「ねえ、外見て。ほら、空が少しずつ赤く染まってきたよ」

「うん。これなら上にきたときにきれいに沈む夕日がみられそうだね」

「うん」

二人は高く上がっていくにつれて、赤く染まり行く空と、下に見える遊園地全体の景色に目を奪われていく。

「ねえ、知ってる、この観覧車は何メートルまで上がるか？」

「知ってるよ。確か100メートルだろ」

「うん、ホント、大きいよねー」

「あー。1周回り切るまでに30分だっけなあー。長いよなあー」

「うん、でも今日はユウタ君と一緒にだから退屈しなさそう」

「うん、僕も。ミカと一緒に短く感じそうだよ」

「ねえ、見て！ 海の方こうに夕日が見えてきたよ」

「おお！ ホントだ」

「きれいいー」

「うん」

観覧車が半分の高さまで上がったところで、遊園地の他の大きな建物の高さを越えて、その先の海が見え、僕らの目にはその水平線上に近づいていく夕日が映っている。二人はそれぞれコーヒーを飲みながら無言で落ちていく夕日を見つめている。そして観覧車が一番上に高さに達するところで、夕日の下が水平線にかかり始める。

「ねえ、ユウタ君……」

彼女が話しかけてくる。

「ん」

「ねえ……」

彼女が何を求めているか感じとった僕は、少し立ち上がってその唇に自分の唇を近づけキスをした。そのキスは互いに互いを求め合い、舌を絡ませ、2分以上も続く非常に長いものになった。彼女は僕が唇を話す直前、少し涙を流す。僕はそつと彼女から離れたあと、声をかける。

「どうしたの？ いやだった？」

「うんうん。ちょっとうれして……。涙が出ただけ」

「そう……」

「ねえ、わたしたち、もうわかるんだね」

「ん、なにが？」

「気持ち……、言葉に出さなくても、お互いのことが」

「うん、そうだね」

ここで少し二人の間に沈黙が流れる。

「ねえ」

「ん」

「わたし、ユウタ君のこと、大好き……」

「うん、僕も大好きだよ、ミカが」

そう言っ僕は彼女にもう一度キスをする。そんな二人を沈み行く夕日は静かに見守ってくれていた。

31、デート 遊園地9

31、デート 遊園地9

“ヒュ〜……、バーン。ヒュ〜……、バーン。”

僕らは今遊園地内の橋から、打ち上げられている花火を見ている。

これは昨日彼女が言っていた遊園地の特別イベントだ。花火は8時から打ち上げが始まり、パンフレットによると9時まで続くようだ。
「きれいだね」

「ああ」

「今日はわたし、とっても楽しかったよ」

「僕もかなり楽しめたよ」

「ねえ、何が一番楽しかった？」

「そうだなー。僕はお化け屋敷かな。怖がっているミカが可愛かったし」

「あー、ひどい。わたし、本当に怖かったのに」

「冗談だよ。ちよつとからかってみただけ」

「もうー。で本当はどれが一番だったの？」

「全部楽しかったけど、一番はやっぱり観覧車かな」

「わたしも。あそこから見た夕日、ホントきれいだったよね」

「うん。海に沈んでいく夕日を見るのは好きだけど、今日はそれをあんな高いところから見れて……。あの光景にはとても感動したよ」

「うん、わたしも。今日見た夕日は今までで一番きれいだったなあ」

「」

「うん、そうだね」

「それから……」

「それから……」

「恥ずかしかつたけど……。あのときのキス……。わたし、すごく夢中になっちゃった」

彼女は僕の方を向いて、顔をさっきの夕焼けのように赤らめて話す。

「ははは。僕も夢中だったな」
「あんなに長い時間、人とキスしたの、わたし、初めてだった……」
「うん、僕も……」
「何かいろんなことを感じ取れたような気がする……」
「いろんなことって？」
「わからない……。わからないけど……。なんだかすごくうれしくして……」
「うれしくて……」
「涙が出て、なぜか切なかった……。なんでだろう？」
「せつないか……。実は僕も同じような気持ちだったんだ」
「えっ!？」
「たぶんそれはもう少しで今日が終わるってわかったからじゃないかな」
「今日が終わる……?」
「名残惜しいんだよ。家に帰るのが……。たった1日か2日だけど、今日が終わればしばらく会えなくなってしまっから」
「そうなのかな」
「ああ、たぶんね」
「ふーん」
ここで僕は彼女の方を向いて言った。
「僕たちお互いのことを愛せるようになってきているんじゃないかな?」
「えっ!？」
「僕、思うんだ。好きと愛することの違いは何かかって」
「好きと愛することの違い……?」
「そう。それは“切ない”って思うかどうかだと思うんだ」
「切ない……」
「お互いにずっと一緒にいたいと思う気持ち。“切ない”ってそういうことだと思うんだ」
「ふーん」

僕はここまで言っただけで花火の方に再度目をやる。二人の間に少し沈黙が流れる。

「ごめんね。なんか変なこと言ったかな？」

「うんうん、ぜんぜん。わたし、ユウタ君が言ったこと、なんとなくわかるような気がする」

「それならいいけど……」

「愛してるよ、ユウタ」

「えっ!？」

「そういうことですよ。ねえ、わたしにも言っただけ」

「うん、うん。愛してるよ、ミカ」

「ありがとう」

“ヒュ〜……、バーン。ヒュ〜……、バーン。”

打ち上げられていく無数の花火は、僕らの関係がまた一步前進したこと歓迎してくれているようだ。二人は向き合っ互いに見つめあう。

「ねえ……」

「わかってるよ」

僕はそうやって彼女の肩を抱き、唇を重ねた。さっきとは違う唇がただ触れ合うだけのキス。でもそれは長く、互いの気持ちを感じあうには十分だった。

「ありがとう……」

彼女がそう言ったあと、花火も最後の一発が打ち上がった。

「さあ、そろそろ行こうか」

「うん」

二人は手をつないで遊園地を出て、車に戻った。

32、デート 遊園地10

32、デート 遊園地10

車は夜の高速道路を颯爽と走り抜けていく。時間は9時半を少し過ぎている。

「そつえばまだ晩御飯食べてなかったね。どうする？ どっか寄つていく」

「そうだね。お腹空いたしどこかで食べようか」

「じゃあ、この先のサービスエリアでいいかな？」

「うん」

僕はしばらく走ると左にハンドルを切り、サービスエリアに入る。

「さあ、着いたよ。行こうか」

「うん」

二人は車を降りてサービスエリアのフードコーナーへ向かう。僕は食券の自動販売機で彼女に食べたいものを尋ねる。

「何にする？」

「うん、何にしようかな……」

「おすすめはね、味噌ラーメンだよ」

「えっ！ ここ来たことあるの？ ユウタ君」

「うん。仕事でこっちに行くときによく寄るんだ、このサービスエリア。まあ、今日とは違って昼間が多いけど」

「へえー」

「それでこの味噌ラーメンが結構旨くてさ、よく食べるんだよ」

「じゃあ、私もそれにする」

「わかった。普通の大きさでいいよね」

「うん」

「僕は大盛りでと……」

僕は財布から1000円札を2枚取り出し、機械に挿入する。そして僕がボタンを押そうとしたそのとき。

「あつ！ 待って」

「ん」

「私もやっぱり大盛りにして」

「わかった。大盛りが2枚だね」

食券を購入した二人はカウンターにそれを出し、席に座って番号が呼ばれるのを待つ。

10分後、番号が呼ばれて僕がラーメンを取りに行き、二人の前に湯気の立ち上るどんぶりが並ぶ。

「うわー、おいしそう」

「いただきます」

二人は割り箸を割って仲良くラーメンをすすり始める。ここの味噌ラーメンは少し濃ゆ目のこってした味だ。麺は太目のちぢれ麺できれいな卵色しており、それにスープがほどよく絡み、口に入れると味噌のほどよいしょっぱさと香ばしさが広がる。

「おいしいー」

彼女がおいしそうに笑顔で麺をすすっている。

「どうだ。旨いだろ」

「うん、麺とスープ、どっちもおいしくてサイコーだね。わたし、サーブスエリアでこんなにおいしい味噌ラーメンを食べれるなんて思わなかったよ」

「サーブスエリアは隠れたグルメスポットだからね。探してみると結構おいしいメニューがいろいろあるんだよね」

「ふーん」

7分後、二人のどんぶりはあつという間に空になった。

「さあーと。食器を返して車に戻ろうか」

「うん」

二人は一緒に食器を返しに行く。

「ちよっとトイレ行くから、先に車に戻って待ってて」

「うん、わかった」

僕は自動販売機で眠気覚ましにコーヒーを買い、先に車に戻る。

5分後、コーヒーを持って彼女も戻って来た。

「おまたせー」

「おう！」

「あつ、ユウタ君もコーヒー買ったんだ」

「うん。眠気覚ましにね」

「残りの運転がんばってね」

「うん」

僕はエンジンを掛けて車を発進させた。

二人を乗せた車は30分後、10時15分に彼女の家に着した。

「ここでいいかな？」

「うん。今日はありがとう。ホント、楽しかったよ」

「うん、僕も」

「じゃあ、また月曜日の朝に。一緒に行けそう？」

「うん。じゃあ、おやすみなさい」

「おやすみー」

そう言って彼女は僕のほっぺたにキスをすると、車から降りていった。

33、平日6

33、平日6

10月17日の月曜日。朝起きて身支度を済ませた僕は家を出て、待ち合わせをしていた彼女と一緒に会社に向かう。彼女と一緒に行くのは先週の月曜日以来だ。話をしながら駅まで歩いていく。

「おはよう」

「おはよう」

「一緒に行くのは先週の月曜日以来だね」

「うん」

「朝、君の顔を見るといつもより元気が出るよ」

「そう言ってもらえるのはうれしいなあ。でもなかなか一緒に行けないよね」

「うん、そうだね」

「ねえ、どうして月曜日以外は出勤時間がバラバラなの？」

「月曜日に残業することが多いからかな。そのせいで他の曜日の出勤時間がずれちゃうんだよね」

「へえー、そうなんだ。なんか会えないのが残念だね」

「うん、まあね」

「あ！じゃあさ、他の時間はどうなの？」

「他の時間って？」

「例えば昼休みとか？」

「あ、難しいなあー。その時間はほとんど営業で外回りに行ってるからね」

「そうなんだ……。じゃあ、今日も当然無理だよ」

「いや、そうでもないよ」

「えっ！？ ホント！ 会えるの？」

「うん。今日は珍しく昼休みになる前に一度、会社に戻ることになってるからね」

「じゃあ、お昼ごはん、一緒に食べようよ」

「うん、いいよ」

「わぁー、なんだかうれしいなぁー」

「で、どこにするの？」

「うん、どこでもいいけど……。特になら私が考えておこうか？」

「うん。あっ！ でも12時35分には会社を出ないといけないから近くにしようよ」

「あれ？ 12時35分ってまだ昼休み中じゃない？」

「うん、そうなんだけどね。次に行く取引先との約束が1時だからね」

「そうなんだ。なんか大変そうだね」

「うん。まあ、仕事だからしょうがないよ」

「そうだね。じゃあ、どこかいい店、考えとくね」

「うん」

ここまで話して駅に着いた二人は、切符を買って電車に乗り込む。

会社に着いた二人は、彼女の友人である受付の人と挨拶を交わす。

「おはようございます」

「おはようございます」

「あっ！ ミカ、今日は彼氏と一緒になんだね」

「うん」

「あっ！ そういえばまだ名前聞いてなかったよね。何ていうの？」

「あれ？ 言ってなかったけ」

「うん」

「私、田中ひとみって言います」

「ひとみさんか……。うん、覚えておくよ」

「ねえ、ユウタ君、そろそろ行こう！」

「うん」

「じゃあ、二人とも、お仕事がんばってくださいね」

「ありがとう」

話を終えた二人はエレベーターに乗る。彼女が話しかけてきた。

「昼休みはどこで待ち合わせする？」

「そうだなー。1階の入口の前でいいんじゃないかな？」

「わかった。時間は12時5分ぐらいでいいよね」

「うん」

ここで彼女が降りる4階に着いた。

「じゃあ、行ってくるね」

「うん」

彼女が降りたあと僕も昼休みに会えることを楽しみに5階でエレベーターを降り、オフィスに向かった。

34、平日7

34、平日7

午前の営業の外回りが終わった僕は、12時過ぎに会社の入口に戻ってきた。そこですでに待っていた彼女と出会う。

「あっ！ ユウタ君」

「あっ！ ミカ。もう待っていたんだ」

「うん」

「ごめん、ちょっと待たせたかな？」

「うんうん。私も今、出てきたところだから」

「そう」

「じゃあ、行こうか」

「うん」

僕は彼女について並んで歩き始める。

「で、どこに行くの？」

「えっと。近くにあるスパゲティ屋さんかな」

「おっ！ スパゲティか。いいね。僕あんまり一人だと行かないから、楽しみだな」

「ふーん。やっぱりそうなんだ」

「やっぱりって？」

「いやさー。あんまり男の人ってスパゲティとか食べに行かないよね」

「あー、そういえばそうだね」

「何で？」

「何でって……。なんか恥ずかしいからかな」

「恥ずかしいの？」

「うん。なんかさ、女性客が多いじゃん。そういう店って」

「んー……。確かにそうだね。だから入りづらいんだね」

「うん、そうそう」

「あつ！　ここだよ」

「えっ！？　もう着いたの？」

まだ歩き始めてから2分ほどしか立っていない。しかし彼女が指差した方を見ると、そこには「おいしいスパゲティのお店」と書かれた店がある。なんともひねりのないストレートなネーミングセンスのお店のようだ。

「入ろう」

「うん」

ドアを開けて二人は中に入ると、さつそくウェイトレスの女性の声をかけられる。

「お二人ですか？」

「はい」

「ご案内いたします。どうぞこちらへ」

二人は店の奥の道路とは反対側の席に案内される。

「こちらになります。今、水とおしぼりをお持ちいたしますので、しばらくお待ちください」

「はい」

席に着いた二人はメニューを開いて話し始める。

「何にする？」

「うーん、何でもいいけど……。結構たくさん種類があるね」

「でしょー。ここ、メニューが豊富でどれもすごくおいしいんだよね」

「ふーん。ねえ、何かランチとかってないの？」

「あるよ。ほら、ここに」

そう言うと彼女は僕が見ているメニューの、最後のページを開いて指差した。

「じゃあ、これにしようかな。お得みたいだし。で、ミカは？」

「じゃあ、私もそれにしよ」

ここでさっきのウェイトレスの女性が水とおしぼりを持ってきた。

「水とおしぼりをお持ちしました。ご注文はお決まりでしょうか？」

「はい。この日替わりランチを2つお願いします」

「はい、かしこまりました。ランチの飲み物は何にいたしましたしょう」

「僕はホットコーヒーで」

「私もそれをお願いします」

「はい、かしこまりました。コーヒーはいつお持ちいたしましたしょうか？」

「食後でいいよね」

「うん」

「じゃあ、食後をお願いします」

「かしこまりました。それではごゆっくりどうぞ」

料理が来るのを二人は話しながら待つ。

「ミカはよくこの店に来たりするの？」

「そうだねー、時々かな」

「ふーん。そのときは友達と一緒になの？」

「うん。同じ部署の人と行くときが多いかな。たまに一人で行ったりもするけど」

「そうなんだ」

そんな話をしていると10分後、ミートソーススパゲティとサラダが運ばれてきた。

「ランチのミートソーススパゲティとサラダをお持ちしまし。」

「はい」

ウェイトレスの女性はテーブルの上の二人の前にそれを置く。

「ではごゆっくりどうぞ」

僕はさっそくフォークを持ち、スパゲティを一口、口に運ぶ。口の中に麺に絡まったミートソースの濃厚で甘酸っぱいトマトの風味と、挽き肉の旨味が広がる。

「う、うまいね！」

「でしょー。ここのスパゲティー」

「うん。このミートソースが特別に美味しいよ」

「トマトの味がすごく生きてるよね」

「うん」

二人は夢中でスパゲティとサラダをたいらげていく。

10分後、料理を全て食べ終わった二人は、食後に運ばれてきたコーヒを飲み干し、レジで支払いを済ませ店を出た。時計の針はすでに12時30分を回っている。

「じゃあ、僕は次の予定があるからもう行くね」

「あれ？ もう行っちゃうの？」

「うん、ごめん。悪いね。あんまり長く一緒にいられなくて」

「うんうん。じゃあ、お仕事がんばってね」

「うん。ミカもがんばってね」

「うん」

「じゃあ」

「じゃあねー」

ここで僕は彼女と別れ、そのまま次の取引先の会社に向かった。

35、平日8

35、平日8

水曜日の今日、僕は商品開発部の西原君と一緒に営業の外回りをしている。9時から回り始め、3件目が終わったときにはすでに1時半を過ぎていた。

「そろそろお昼にしようか？」

「そうだな」

「で、どこにする？」

「いつものラーメン屋にしようぜ、こっから近いし」

「そうだな」

二人は2分ほど歩いて先週も立ち寄った、ラーメン屋さんに入る。カウンター席に座った二人は注文したラーメンをすすりながら話し始める。

「そついやー、おまえあれどうなったんだ？」

「あれって？」

「あれだよ。先週言っていた彼女のことだよ」

「あゝ、そのことか。いやー、ありがとな。おまえさんのアドバイスのおかげで俺、結婚することになったよ」

「け、結婚!?!」

「うん」

「そりゃ、また、えらい突然だな。何があつたんだよ」

「うん。それがさ、先週の土曜日、俺彼女の家を訪ねてみたんだ」

「それで……、入れてくれたのか？」

「入れてくれたままでは良かったんだけど……。いきなり彼女に泣きつかれてさ」

「泣きつかれた!?!」

「うん。子供ができちゃったんだって」

「こ、子供って!?! おまえのか？」

「ああ。それでさ、彼女、そのことを親に相談したらしいんだ。そしてたらえらい怒られたみたいでさ」

「まあ、そりゃそうだよ」

「そのときに俺に連絡するのを禁止されたらしくて。それで連絡できなかつたって言ってたよ」

「でもさ、どうしてそれがいきなり結婚に発展するんだ？」

「会いにいったんだよ、彼女の父親に。結婚の許しを得るためにさ」

「おまえ、それメチャクチャ怒られたんじゃないか」

「まあな、思いつきりぐーで一発殴られたよ」

「だろうな。じゃあ、結婚の許しはどうやってもらったんだよ」

「普通にだよ」

「ふ、普通につて！？ そんなはずないだろ」

「いや、それがさ、殴った後に彼女の父親が言ったんだよ」

「言ったつて。何て？」

「「おまえはわざわざ殴られると分かっていてここに来たのか」つて」

「なんて答えたんだ」

「「いいえ。娘さんと結婚させてもらうために来ました」つて言ったよ」

「そしたら？」

「「なかなかいい度胸してるじゃねーか。……。よし！ 気に入った。娘はおまえにやろう」つて言ってくれたよ」

「へえー、すごいなあー。おまえ、良かったじゃん」

「ああ。だからありがとよ。おまえさんのおかげで俺は幸せになれたよ」

「それはうれしいなあー。役に立ったみたいだし」

「次はおまえの番だな」

「ぼ、僕！？」

「そつだよ。おまえも考えとけよ、彼女ができたんだから、大事だぜ結婚のことは」

「うーん……。そうだな大事なことだし、よく考えておくよ」
「忘れるなよ」

「ああ……。あつ！　そういえば結婚式はするの？」

「あゝ、まだ決まってないなあー。それに金がそんなにあるわけじゃないし、もしかしたら挙げないかもな」

「どっちせよ。決まったら教えてくれよ。僕、なるべく行けるようにするから」

「分かった」

「それじゃあ、そろそろ行くか」

「そうだな」

立ち上がった店を出た二人は、午後の営業へ向かった。

36、平日9 (彼女視点)

36、平日9 (彼女視点)

私の名前は藤井美香。今、私には井上勇太という彼氏がいる。今日はこれから家に帰るところだ。オフィスを出た私は、エレベーターを降りて入口に向かう。外に出ようと思ったとき、受付のヒトミが声をかけてきた。

「ミカ、お疲れさま」

「おつかれー」

「あれ？もしかして、一人？」

「うん」

「彼はどうしたの？」

「残業だつてさ。結構大変みたい。遅くなるから先に帰っていてってメールがあつたの」

「そうなんだ」

「うん」

「じゃあ、私もこれから帰るところだから、一緒に帰ろう」

「いいよ」

「ちよつと待ってて。今、荷物とって来るから」

「分かった」

私は入口でヒトミが来るのを待つ。

2分後、荷物を持ってヒトミが出てきた。

「ありがとう。じゃあ、行こう」

「うん」

外に出た二人は駅までの道を歩き始める。

「どこに行ったの？先週のデートは？」

「遊園地。すごく楽しかったよ」

「ホント！？いいなあー、遊園地。私も今度彼氏と一緒に行くのかな」

「あれ？ でもヒトミって彼氏いたっけ？」
「何言ってるの、ミカ。できたらの話だよ」
「そうだよね」
「うん。それで今週はどこに行くの？」
「うくん、まだ決めてないなあー」
「じゃあさ、プールとかどう？」
「プール？ この時期に」
「そう、プール」
「その発想はちょっとなかったなあー。でも今、水着とかないし」
「そう。じゃあ、買いに行ったら？」
「それもそうだけど……。うくん。でもどうしてヒトミはプールが
いいって思うの？」
「それは男を引きつけられるからに決まってるじゃない！」
「ひ、引きつけるって……。もしかしかして水着で？」
「そう、水着で」
「いいけど。なんか恥ずかしいなあー」
「何言ってるの、ミカ。男を引きつけるには水着、これ常識だよ」
「常識って……」
「とにかく行って損はないと思うよ」
「そうだけど……。どうしようかなあー。うくん」
「まだ悩んでるの？」
「うん。それにどっか近くに面白い屋内プールの施設なんてあった
け？」
「あれ？ ミカ、知らないの？」
「うん」
「じゃあ、いいところ教えてあげる」
「えっ！？ どこどこ？」
「隣の葉山市にある『ウォーターアイランド2010』だよ。去年
できたばかりですごく大きくて、プールだけじゃなくて、お風呂や
おいしいレストランもあるらしいよ」

「すごいね、そこ」
「うん。人気もあって、休日にはたくさん人が来るらしいよ」
「ヒトミは行ったことあるの？」
「うん。前に会社の友達と一緒にね。すごく楽しかったよ」
「じゃあ、今週のデートはプールにしよう。話し聞いたらすごく行ってみたいになったし」
「あつ、でも場所分らないよね？」
「うん」
「たぶん、彼に言ったら調べてくれるんじゃないかな。気の利きそうな人だったし」
「うん、言ってみる」
「じゃあ、決まりだね」
「うん」
「あつ、分かってるよね」
「何？」
「水着はもちろん……」
「ビキニでしょ、セクシーな」
「そう」
「ちよつと恥ずかしいけど。明日の昼休みにでも買いに行くよ」
ここまで話して二人は中宮駅に到着した。ヒトミは私と逆方向の電車に乗るため、ここでお別れだ。切符を買って改札口を出た二人は別々の階段を上げる。
「じゃあねー、ミカー」
「うん。じゃあねー、ヒトミ」
二人は互いに手を振って別れた。

37、平日10（彼女視点）

37、平日10（彼女視点）

今日は金曜日。私は今、彼と一緒に東三橋駅から帰り道を歩いている。これから休日のデートの話を持ちかけるところだ。もちろんの昼休みに水着も買って準備は万端だ。

「ねえ、今週の休日も空いてる？」

「うん、両方とも大丈夫だよ」

「じゃあ、明日また二人でどこか行かない？」

「いいけど。どこにする？」

「私、行きたいところがあるんだけどいいかな？」

「うん、いいよ」

「『ウォーターアイランド2010』っていうところなんだけど、ユウタ君知ってる？」

「ああ、そこなら知ってるよ」

「ホント!？」

「うん。確か隣の葉山市にある大きな温水プールだよ」

「そうそう、そこ。昨日ヒトミがいいよって言ってたんだ」

「僕もできてすぐのときに会社の同僚に誘われていったけど、なかなか面白かったよ。ミカは行ったことないの？」

「うん。実は私、昨日ヒトミから聞くまで名前さえ聞いたことがなかったんだよ」

「そうなんだ」

「で、どうするの？そこにする？」

「うん。僕もぜひまた行ってみたいと思っていたし、そうしようか」

「うん」

「いいよ」

「出発は朝の8時でいいかな」

「いいけど、結構早いね」

「うん。あそこ始まるのは9時からなんだけど、人気があるから8時半までに行かないと駐車場の前で並ぶハメになるんだよね」

「それなら仕方ないね。8時に行くね」

「うん」

「ねえ、ユウタ君。水着とかはちゃんと用意できてる？」

「ああ、大丈夫だよ。去年行ったときに買ったやつがあるから。三力は？」

「私も大丈夫。実は今日の昼休みに買ってきたんだ」

「へえー……。変なこと聞くけどどんなの買ったの？」

「それは明日のお楽しみだよ」

「やっぱり教えてはくれないか」

「だめ。あっ！ そういえば浮き輪とかどうする？」

「僕は一応大きなやつなら2つ持つてるけど、どうする？ 持って行くのうか？」

「うん。じゃあ、おねがい」

「わかった。ミカは何か持ってないの？」

「ビーチボールならあるけど…、どうしよう。硬いプールサイドの上じゃあ危ないかな？」

「たぶん大丈夫だよ。確かあそこ砂浜を再現した場所があって、そこならできると思うから」

「ホント！？ わかった。じゃあ、持っていくね」

「うん」

「あと、それから弁当はどうする？ また作っていいのうか？」

「うーんと、どうしようかな。ミカの弁当は好きだけど、あそこの売店のファーストフードが結構美味かった覚えがあるんだよね」

「へえー、そうなんだ。私も食べてみたいなあー」

「なら、作らなくていいよ」

「うん、そうだね。で、何がおいしかったの？」

「ホットドッグかな。かなり美味かった記憶があるよ」

「ホットドッグか。いいねえー。明日は昼ごはんも楽しみだな」
「ふふっ、そうだね」

ここで二人は私の家の前に着いた。彼にキスをして別れのあいさつをする。

「じゃあねー。明日は8時に行くね」

「うん、待ってるよ。じゃあねー」

私は手を振って別れると、階段を上がって自分の部屋に入った。

38、デート プール1

38、デート プール1

10月22日の土曜日。今日は彼女とデートで『ウォーターアイランド2010』に行く日だ。7時に起きて身支度と朝ごはんを済ませ、荷物を用意した僕は彼女が家に来るのを待つ。

彼女は昨日約束したとおり8時きっかりに来た。

“ピンポン”

玄関からインターホンの音が聞こえてくる。

「はい。今開けるね」

僕は立ち上がって玄関に向かいドアを開ける。

「おはよう」

「おはよう。あれ？今日は車のところじゃないんだね」

「うん。今日は起きたのが遅くて、洗車する余裕がなかったからね」

「そうなんだ。ところで準備できてる？」

「うん、大丈夫だよ。今荷物持ってくるね」

僕は急いで中に戻り、用意した荷物を持ってくる。

「あつ！浮き輪、もう膨らましておいたんだね」

「うん。向こうに行ってからだと面倒だからね」

「でも、車に乗せるときに邪魔にならない？」

「大丈夫だよ。後ろに乗せればいいから。だから今日も助手席に座って」

「そうか。わかった」

「じゃあ、車のところに行こうか」

「うん。あつ！浮き輪1個持つね」

「ありがとう。頼んだよ」

二人は歩いて車のところに向かう。

助手席に彼女を乗せ、僕は運転席に座るとエンジンをかけて車を発進させる。

「ねえ、どのくらいで着くの？」

「えーと、確か30分くらいだったかな」

「結構近いんだね」

「うん。先週行った遊園地もそうだけど、近くにいいデートスポットがあるのはうれしいなあー」

「うん、そうだね。今度他のところも行ってみたいなあー」

「ふふっ、そうだね」

僕はしばらくこのまま車を走らせていたが、途中で思いついたことがあって彼女に話しかける。

「あつ！ そういえばジュースとか用意してる？」

「あつ！ 弁当作る必要がなかったから忘れちゃった」

「そうか。じゃあ、コンビニでも寄っていこうか」

「うん」

僕は近くにあったコンビニの駐車場に車を止め、二人で中に入る。

二人は真っ先にジュースのペットボトルがある冷蔵庫に向かう。

「何にしようかなあー」

「えっと、じゃあ、私はコーラかな。」

「好きだね。コーラ」

「うん」

「じゃあ、俺はサイダーにしよう」

二人は選んだジュースをとってカゴに入れる。

「ねえ、お菓子とか買ってもいい」

「うん、いいよ」

二人はお菓子のコーナーに向かうと、彼女がその中から飴とチョコレートをとってカゴに入れた。

「じゃあ、レジに持って行くよ」

「うん」

「あつ！ 先に車に戻っていていいよ」

「わかった。先に戻っとくね」

彼女は先に車に戻り、僕もレジで支払いを済ませて車に戻る。

「じゃあ、改めて、出発だね」

「うん」

二人は乗せた車は目的地へ向かって、再び走り出した。

39、デート プール2

39、デート プール2

二人を乗せた車は8時半に『ウォーターアイランド2010』に到着した。

「さあ、着いたよ」

「うん」

「降りて中に入ろうか」

「あれ？ でもまだ空いてないじゃない？」

「それなら、大丈夫だよ。入場券だけは8時半から買えるから」

「へえー。そうなんだ」

僕は車を降りて駐車場から入口まで歩いていく。

「ねえ、なんでそんな始まる30分前から空いてるのかな？」

「うーん、たぶん、それは混むからだろうね」

「そんなに人気あるの？」

「うん」

「あれ？ でもまだそんなに車は止まってないけど」

「これから増えてくるんだよ」

「そうなの？」

「うん。まあ、といつても9時前からだけだね」

「じゃあ、こんなに早く来る必要はなかったんじゃない？」

ここで二人は入口の自動扉から中に入る。

「それはね……。あれだよ」

「ん、なに？」

僕はそう言ってチケット売り場を指差した。

「どついうこと？」

「わからないかな？ まだ一人も並んでないだろ」

「そうだね。でも、それが……」

「まあ、要するに並びたくなかったってことだよ」

「なーんだ、そういうことか」

「そう、そういうこと」

僕は売り場の人に声をかける。

「すみませーん。入場券ください」

「何名さまですか？」

「大人二人です」

「3000円になります」

僕はここで財布から1000円札を3枚取り出す。

「あつ！ 待って。今日は私も出すよ」

それを彼女が引き止めた。

「いいよ。いつもどおり僕が出すから」

「そう？」

「うん」

「なんか悪い気がする……」

「気にしなくていいよ」

「そう……、わかった」

僕は3000円を売り場の人に差し出す。

「どうぞ、こちらが入場券になります」

「ありがとうございます」

「入場は午前9時からとなっておりますので、それまでお待ちいただきますようよろしくお願いします」

「はい、わかりました」

「では、ごゆっくり」

入場券を購入した二人は脇にあるベンチに腰掛ける。

「楽しみだね」

「うん」

「あつ！ そうだ。わたし、パンフレットとってくるね」

「そういえば忘れてたな。僕が行こうか？」

「いいよ。ここで待ってて」

「わかった」

彼女はベンチから立ち上がって、チケット売り場の横にあるパンフレットを2つとってきた。

「はい」

「ありがとう」

彼女はとってきたパンフレットを楽しそうに見つめている。

「わあー。ここ、すごく広いんだね」

「そうだね」

「それに見て、たくさん種類のプールがあるよ」

「うん」

「ねえ、どれがオススメなの？」

「それはやっぱり波の出るプールと、流れるプールかな。特に波の出るプールはすごく本格的だったよ」

「へえー。それは楽しみだなあー」

「そうだね」

「じゃあ、あと、このウォーターライダーはどうだった？」

「ああ、それはすごいよ。中々スリリングだね。結構おもしろかったよ」

「わあー、楽しみだな」

「ミカ、好きだもんね、ここいろいろ」

「うん」

楽しみな話はずきない。

そうやって二人は9時までベンチに座って話しながら過ごした。

40、デート プール3

40、デート プール3

9時になって館内放送が流れてくる。

「本日は『ウォーターアイランド2010』にお越しいただきまことありがとうございます。午前9時に

なり更衣室及び屋内プールへの入場が可能になりました。入場券をお持ちの方はどうぞ更衣室前の係員にお渡しの上、ご入場ください」

「あっ！ 始まったね」

「うん、行こうか」

「うん。」

二人はベンチを立ち上がり、更衣室に向かう。

「じゃあねー」

「おう」

僕は男女それぞれの更衣室前の係員に入場券を渡し中に入ってしまった。

持ってきた水着に5分ほどで着替え終わった僕は浮き輪を2つ持つて、シャワーを浴び、その前で彼女が来るのを待つ。5分後、水着を着た彼女がビーチボールを持ってシャワーの中を通ってきた。

「お待たせ」

「おっ！ よく似合ってるね、その水着」

「ホント!？」

「うん」

「よかったー。これ実は昨日買ったやつなんだけど、結構迷ったよね」

「そうなんだ」

「どう？ 中々セクシーでしょ？」

「そうだね」

彼女は少し濃い目の水色のビキニを身に着けている。胸は大きいとまではいかないものはつきりと谷間ができ、ウエストと足も細く、全体的にバランス良くまとまっている。少し言い過ぎかもしれないが、週刊誌に載っているグラビアアイドルにも負けないほどきれいだ。

「すごくきれいだよ」

「そう、ありがと」

「じゃあ、行こうか」

「うん」

二人は一緒に手をつないで、歩き始める。

「ねえ、最初はどうする？」

「そうだなあー。とりあえず浮き輪もあるし、流れるプールにでも行こうか？」

「うん、それでいいよ」

「よし！じゃあ、こっちなだね」

僕らはシャワーから出て右側にある流れるプールに向かう。

この施設の屋内プールは大きく分けると2つのゾーンに分かれていて、真ん中にある入口から向かって右側は流れるプールを中心に、子供用のプールや25メートルプールが置かれている。逆に左側は波の出るプールとウォータースライダーが設置されている。そして入口の両側には売店やレンタル店が並んでいる。

3分ほど歩いた僕らは流れるプールの前に到着した。

「入ろうか」

「うん」

「あれ？　そういえばその手に持っているビーチボールはどうするの？」

「あつ！　どうしよう？　なんか邪魔だね」

「うん。僕が持っておこうか？」

「うん、いいよ。私のだし、自分で持つよ」

「そう、わかった。はい、じゃあ、これ」

僕はそう言って彼女に手に持っている浮き輪を渡した。

「ありがとう」

二人はそれをそれぞれ水の上に浮かべると、プールの中に入り、掴まっつて流れに身を任せる。

「気持ちいいね」

「うん」

二人は互いに笑顔で互いに見つめ合っつて、ゆっくり流されていく。

「ねえ、そっつていえばこっつちは意外と少ないね」

「ああ、そっつだね」

「どうしてだろ？ 人気ないのかな？」

「どうだろっつ？ まだ始まっつたばかりだからかじゃないかな？」

「どうっついうこと？」

「うっつんとね。家族連れで来てる人がまだ少ないからだよ」

「へえー、なるほど」

「こっつちの方は家族連れに人気のコーナーだからね。多分、10時過ぎたぐらっつから人が増えてくると思っつよ」

「なるほど。じゃあ、それまではこっつこでゆっくりできるね」

「うん」

二人はそのまま10時までのんびり話しながら、流れるプールを満喫した。

41、デート プール4

41、デート プール4

10時を過ぎて流れるプールから上がった僕らはプールサイドで座って一休みする。

「ねえ、次どうする?」

「そうだなあー、しばらくここで休まない?」

「疲れたの? ユウタ君?」

「ちよつとね。ミカは?」

「まだまだ元気だよ」

「そうか。なんか悪いなあー、僕だけ少し疲れちゃったみたいで」

「いいよ、気にしないで。もう少し休もう」

「ありがとう。じゃあ、もう少しゆっくりさせてもらおうよ」

「でも意外だね」

「どうして?」

「先週の遊園地では1日中元気だったのに」

「ああ、そういうことか。それなら先週は疲れが溜まってなかったからじゃないかな」

「えっ! じゃあ、今日は疲れてるの?」

「少しね」

「どうして? やっぱり仕事が大変だったから」

「そうだな。特に今週は月曜日から4日連続で残業だった上に、2日も早朝出勤があったからね」

「えー、それホント!??」

「うん」

「そんなにきつかったなら別に今日じゃなくてもよかったのに」

「うんうん、気にしないで。大丈夫だから」

「そう? 無理してない?」

「うーん、そう言われるとちよつとしてるかな」

「やっぱり。はあつ、明日にすればよかった」

「そんなこと言つなよ。せつかく来たんだからさ」

「でもさつき、無理してるって」

「大丈夫だよ。そんなこと言ったら仕事のときのほうがよっぽど無理してるからね。それに今日はせつかくのデートだから楽しみたいし」

「そうなの？」

「うん」

「わかった。じゃあ、ちゃんと楽しもうね」

「うん」

「で、休んだら次どこ行くの？」

「そうだなあー、ミカはどっか行きたいところある？」

「うーん、やっぱり波の出るプールかな」

「いいね、そうしようか」

「うん。あと何分ぐらいしたら行く？」

「10分ぐらいかな」

「わかった。じゃあ、もう少しゆっくり話そう」

「そうだね」

10分ほどその場で座って話した二人は、その後立ち上がって波の出るプールへ向かった。

42、デート プール5

42、デート プール5

波の出るプールで10時半から2時間ほど楽しんだ二人は、プールから上がり売店前に並んでいる白いテーブルにある椅子に腰掛ける。

「そろそろお昼ご飯にしようか？」

「うん」

二人は立ち上がって売店に向かう。

「何にする？」

「確かユウタ君、ここのホットドックがおいしいうって昨日言っていたよね」

「うん」

「じゃあ、わたし、それにする」

「わかった。あと他に何か頼む？」

「そうだなあー、うーんと……、ポテトはどう？」

「いいね。そうしようか」

「うん」

「あっ！ そういえば飲み物は？」

「えっと、確か……、私が車を降りるときに一緒にカバンに入れておいたと思うんだけど……」

「そうか」

「じゃあ、わたし、更衣室に行って取ってくるね」

「わかった。僕はホットドックとポテトを買ってさっきのテーブルで待ってるよ」

「うん。じゃあ、行ってくる」

「うん」

僕は一人で売店にホットドックとポテトを買いに向かう。

「すみませーん」

「はい。何になさいますか？」

「ホットドック2つとポテトのLを2つください」

「かしこまりました。全部で900円になります」

僕は財布から1000円札を1枚取り出し、カウンターに置く。

「1000円からお預かりいたします」

「はい」

「100円のお釣りになります」

「はい」

「こちらになります、どうぞ」

そう言われると僕はカウンターのお盆の上に置かれているホットドックとポテトを持ってさっきのテーブルに戻る。5分後ジュースを持った彼女が戻ってきた。

「お待たせ」

「ありがとうございます」

「じゃあ、座って食べようか」

「うん。おいしそう」

「いただきます」

二人はそろって椅子に座り大きな口を開けてホットドックをほおばる。

「どう？」

「うん、おいしい」

「だろー」

「うん。特にこのソースがウイナーとしっかりマッチしてるね」

「そうだね」

このホットドックは大きさや見た目は普通だが、ウイナーのパリッとした絶妙な歯ごたえと、それにマッチしたソースの味でかなりおいしい。僕も始めて食べたときには度肝を抜かれた。

10分後二人は昼ごはんを食べ終わると次に行くところについて話始める。

「ねえ、次、わたし、ウォーターライダーに行っていない？」

「いいけど、食べたすぐ後だと気持ち悪くならない？」

「それもそうだけど……。うん、じゃあ、もう少し休んでからにしようかな」

「うん」

二人は昼ごはんを食べ終わって30分ほど話をしながら休んだ後、ウォータースライダーのある入口から向かって左の奥のほうのゾーンへ向かった。

4 3、デート プール6

4 3、デート プール6

二人は話をしながらウォータースライダーに続く階段を上っている。

「あー、楽しみだなあー」

「好きだね、ミカは、こういうの」

「うん。ユウタ君はどうなの？ やっぱり苦手？」

「そうでもないかな」

「えー、ホント!？」

「うん」

「でも先週、遊園地に行ったときは結構怖がつてたじゃん」

「確かにね。まあ、でもこれくらいなら大丈夫だよ」

「へえー、そうなんだ。なんか意外だなあー」

「どうして？」

「てっきりまたわたし、ユウタ君があのときみたいになるのかと思っっていたから」

「あのときって?」

「ほら、あのときだよ、あのとき」

「そんなこと言われてもなあー」

「もう」

彼女は僕の反応が悪かったのが気に入らなかったのか少しソツポを向いてしまった。

(実のところ僕は聞かれてすぐにあれが何のことかはわかったしまった。おそらく遊園地で例の90メートルまで上がって一気に落ちる乗り物に乗った後の、放心状態のことを指しているのだろう。なんとなく彼女が期待した通りの反応をすると、からかわれそうな気がして気づいていないフリをしておいた)

階段を上り始めて5分後、二人は係員の人がいるウォータースライ

ダーの入口に到着した。珍しく5人しか並んでおらず、すぐに僕らの出番がやってきた。

「お二人ですか？」

「はい」

「どちらが先に滑りますか？」

「じゃあ、わたしが先に行くね」

「わかった」

「わたしが先に滑ります」

「はい、では、こちらにどうぞ」

そう言つと係員の人は彼女にスタート地点で頭の上の手すりにつかまって待つように指示する。

「わたしが笛を吹いてから行ってください」

「はい」

20秒後、大きな笛の音が鳴り響く。

“ピー！！”

「じゃあ、行ってくるね」

「いつてらっしゃいー」

彼女は手すりから手を離して勢いよく滑り降りていった。

その後、僕も彼女と同様にスタート地点に座り、合図の笛が鳴るのを待つ。

“ピー！！”

手を離して勢いよく滑り降りていく。

3分後、下まで降りてきた僕は勢いよく水の中にダイブする。

“バツシャーン！！”

プールから上がった僕に彼女が話しかけてくる。

「どうだった？」

「いやー、やっぱりすごいね、ここのウォーターライダーは。かなりのスピードだったよ」

「だねー。わたし、すごい楽しかった」

「で、どうするの？ ミカはもう1回行ってくるの？」

「うん。ユウタ君ももう1回行こう」

「いいよ」

二人は再び階段を上っていく。

その後、3回目までは僕も一緒につき合ったものの、4回目になってさすがに疲れてきたのでそれ以降は彼女に一人で行ってもらった。そして彼女が滑り降りて水にダイブする姿を何度も見ていると知らぬ間に時計の針は3時を回っていた。

プールから上がってきた彼女に声をかける。

「ねえ、もうそろそろやめにしない？」

「うーん、そうだね、もういいかな。十分満足したし」

「じゃあ、売店でお菓子でも買って一休みしようか」

「うん」

二人はウォーターライダーがあるゾーンを離れて、先ほど昼ごはんを食べたテーブルに戻ってきた。

44、デート プール7

44、デート プール7

二人は売店の前に並んで会話をする。

「何にする?」

「そうだなあー。いろいろあって結構迷っちゃう。ねえ、ユウタ君はどうするの?」

「うーんと、どうしよう……。僕も今迷っているんだよね」

「えっと、じゃあ、わたしは……」

「よし! 決めた! ソフトクリームにしよう」と

「もう驚かさないでよ」

「あっ! ごめん、ごめん」

「じゃあ、わたしもそれにしようかな」

「じゃあ、買いに行こうか」

「うん」

二人は入口のすぐ左側にあるアイスクリーム屋さんに向かう。

「僕が買うね」

「うん」

「すみません、ソフトクリーム2つください」

「バニラでよろしいですか?」

「いいよね?」

「うん」

「バニラで」

「2つで500円になります」

僕は財布から500円玉を取り出しカウンターに置く。

「500円ちょうどお預かりいたします。少々お待ちください」

「はい」

二人が見ている後ろでコーンの上にソフトクリームの渦巻きが上っていく。

「はい、どうぞ」

「ありがとうございます」

僕はソフトクリームを2つ受け取るとミカに渡してあげた。

「ありがとうございます」

「じゃあ、席に戻ろうか」

「うん」

二人はソフトクリームを舐めながら席に戻る。

「おいしーね、このソフトクリーム」

「うん。でさ、このあとどうする？」

「うーんと、どうしよう。もう結構遊んだし……、後1・2時間ぐらいたったら帰ってもいいかな」

「そう、よかった。実は僕もかなり疲れてきたからね。悪いけどこのあとは一人で楽しんでくれないかな」

「えー、まだこのビーチボールも使ってないのに。……でもしょうがないか。ユウタ君、疲れてるって言ってたもんね」

「うん、ごめんね」

「いいよ、別に。わたし、一人で遊びに行ってくる」

10分後、ソフトクリームを食べ終わると、ミカは僕に声をかける。
「じゃあ、行ってくるね」

「うん」

「だいたい何時ぐらいに戻ってきたらいいかな？」

「そうだなあー、5時ぐらいかな」

「わかった。じゃあねー」

「うん」

僕はミカが遊びに行くのを見送ると、テーブルの上でうつ伏せになって眠りについてしまった。

45、デート プール8

45、デート プール8

「ねえ、ユウタ君、起きて！」

「……」

「起きて！」

僕は彼女の2回目の声で目を覚ました。

「ん」

「大丈夫？」

「あっ！ ごめん、ごめん。あのあとうつ伏せになったらすっかり眠っちゃったよ」

「もう」

「えっと……、ところで今、何時？」

「5時半だよ」

「あー、もうそんな時間か」

「そろそろ帰る？」

「ミカはもう満足した？」

「うん」

「じゃあ、帰ろうか」

「うん」

二人は歩いてそれぞれ更衣室に向かう。

僕は10分ほどで着替えを済ませると入口前のベンチに座って彼女が出てくるのを待つ。5分後、彼女が更衣室から出てきた。

「お待たせ」

「じゃあ、行こうか」

「うん」

二人は話をしながら車のところへ歩いていく。

「なんか、今日はごめんね」

「えっ！ どうして謝るの？」

「いや、だってさ、僕が疲れていたせいであんまり楽しくなかったかなって思ってた」

「うんうん、全然」

「そう？ でも最後は寝ちゃったしなあー。やっぱり悪かったよ」

「いいよ、気にしないで。それまではすごく楽しかったから」

「そう？」

「うん」

「なんかそう言ってもらえると助かるよ」

「でも、次、デートするときは元気なほうがいいな」

「そうだな。次から気をつけるよ」

「お願いね」

「わかった」

ここで二人は車の前にたどり着くと、ドアを開け中に乗り込む。

「さてと……、帰りの運転、気を引き締めてがんばるか。」

「大丈夫？ 疲れてるのに」

「大丈夫だよ。さつき2時間も寝たから」

「あっ、そうか」

「じゃあ、出発」

僕はエンジンを掛けて車を走らせる。

二人を乗せた車は駐車場を出ると、家へ向かって国道を走り出した。

46、デート プール9

46、デート プール9

二人を乗せた車は国道をかけ抜けて行く。途中で彼女がその風景を見て声を上げた。

「きれいー」

「ん」

「ねえ、ユウタ君、すごく夕日がきれいだよ」

「そうか」

「こっち見てよ。」

「無理だよ。今、運転中なんだから」

「あっ！ そうだったね。ごめん、ごめん」

「わざとか……」

「えっ!?!」

「ん、まあ、いいや。そうだ！どっかで晩御飯食べていく」

「うん」

「ファミレスでいいよね」

「いいよ」

僕は車を近くにあるファミレスの駐車場に止める。

「おっ！ 確かにきれいだな、夕日が」

「でしょ」

「さあ、中に入るうか」

「うん」

二人は入口のドアを開けて中に入る。

「いらっしやいませ。何名様ですか」

「二人です」

「こちらへどうぞ」

二人は国道側の窓際の席に案内される。

「こちらになります」

僕らは向かい合って席に座る。

「今、水とおしぼりをお持ち致します」

「はい」

「さあーで、何にしようかな」

「うーん」

二人はそれぞれメニューを見ながら考え込む。

「水とおしぼりをお持ち致しました」

「ありがとうございます」

「御注文が決まりましたら御呼びください」

「はい」

「では、ごゆっくり」

二人はその後、数あるメニューの中から僕はハンバーグとライスを、彼女はグラタンとパンを注文した。

10分後、料理が運ばれてきた。

20分後、二人はそれを食べ終わると店を出て、車に乗り込んだ。僕はエンジンを掛けて車を走らせる。二人を乗せた車は再び国道を駆け抜けて行く。

20分後、彼女に家に到着した。

「着いたよ」

「うん、ありがとう。じゃあねー」

彼女は僕のほつぺたに優しくキスしてくれた。

「なんか、今日はごめんね」

「いって、もう気にしないで。私は十分楽しかったから」

「そう?」

「うん」

「ミカは優しいんだね」

「そうかな?」

「うん。僕は助かるよ。ミカが優しいおかげで」

「ふーん、ありがとう。じゃあ、また、月曜日にね」

「うん」

彼女は車を降りると手を振りつつ、走り去る僕的車を見送ってくれた。

47、平日11

47、平日11

10月24日の月曜日。朝起きて身支度を済ませた僕は、いつものように彼女が待っているアパートの前に向かう。外に出て待っている彼女に声をかける。

「おはよう」

「おはよう」

「待った？」

「うんうん、私もついさっき出たばかりだから」

「そう、よかった」

「じゃあ、行こうか」

「うん」

二人は駅に向かって歩いていく。

「ユウタ君、疲れはとれた？」

「うん、大丈夫だよ」

「そう、よかった。私、少し心配だったんだあー」

「そうか。確かに土曜日は疲れていたからね。でも昨日、しっかり寝て休んだから今日はバッチリだよ」

「元気そうだね」

「うん」

僕は彼女の方を向いて笑顔を見せる。

「あっ！ そういえば、今日、お昼空いてる？」

「うん」

「じゃあさ、一緒にご飯食べに行かない？」

「いいよ。やったー！」

「うれしそうだね」

「うん。で、どこにするの？」

「それはねー……、えっと……」

「なに？」

「ちよつと僕、行きたい店があるんだけど……、いいかな？」

「うん、いいよ。それでどんなお店なの？」

「和食がおいしいところだよ」

「あつ！ それってもしかして、前に言っていたところ？」

「うん。よく覚えてたね」

「うん。だって私、楽しみにしていたから」

「そうだったのか」

「うん。期待していい？」

「大丈夫だよ。すごくおいしいお店だから」

「あー、そう言われると昼休みが待ち遠しいなあー」

「そうだね」

「あつ！ 待ち合わせはどうする？」

「そうだなあー……、えつと、12時10分に会社の入口の前でいいかな？」

「わかった」

「よし！ じゃあ決まりだね」

ここで駅に到着した二人は切符を買って電車に乗り込む。

15分後、中宮駅に到着した二人は電車を降り、8時50分にはそれぞれのオフィスの自分の席についた。

48、平日12

48、平日12

時計の針はすでに12時を回っている。午前中の仕事を終えた僕は、彼女と一緒に昼ごはんを食べるために会社に戻る。入口で僕を待っていた彼女が駆け寄ってきた。

「あっ！ ユウタ君」

「ごめん、待った？」

「うんうん、私も今、降りてきたところだから」

「そうか。じゃあ、行こうか」

「うん」

僕は彼女を決めていた店に案内する。その店は10分ほど歩いたところにある。

10分後、二人は「わかもと」というお店の前に着いた。

「ここだよ。さあ、入ろうか」

「うん」

僕らが中に入ると店員の人はずぐに対応してくれた。

「いらっしやいませ。何名様ですか？」

「二人です」

「こちらへどうぞ」

二人は窓際の4人掛けのテーブル席に案内される。

「こちらになります」

僕らはいつも通り向かい合って席に座る。

「今、水とおしぼりをお持ち致します」

「はい」

「さあーて、何にしようかな」

「うーん」

二人はそれぞれメニューを見ながら考え込む。

「水とおしぼりをお持ち致しました」

「はい」

「御注文が決まりましたら御呼びください」

「はい」

「では、ごゆっくり」

メニユーを見ている彼女が僕に話しかけてきた。

「ねえ、何かオススメはないの？」

「えっと、そうだなあー。この焼き魚定食はどう？」

「焼き魚かあー、いいね。じゃあ、私、それにする」

「よし！　じゃあ、僕もそうしようかな」

僕は近くにいる店員を呼び寄せる。

「すみませーん」

すると店員の人がすぐに駆け寄ってきて対応してくれた。

「注文ですか？」

「はい。えっと、焼き魚定食を2つ」

「焼き魚定食を2つですね」

「はい」

「かしこまりました」

注文を済ませたあと料理が運ばれてくるまで彼女と話しながら待つ。

「ねえ、メニユーに旬の焼き魚って書いてあったけど、何かな？」

「えっと、やっぱりこの時期といえば秋刀魚じゃないかな」

「秋刀魚かあー。私、楽しみだな」

「ミカは秋刀魚、好きなの？」

「うん。ユウタ君は？」

「僕も好きだよ」

「そうだよね。前に私の家で一緒に晩御飯を食べたときもおいしそうに食べていたもんね」

「ああ、そういえばそうだったね」

「ここで僕はふと気になったことを彼女に質問してみる。

「そういえばミカは東北の出身だって言っていたよね」

「うん。あれ？　でもどうしてそんなこと聞くの？」

「うん。あれ？　でもどうしてそんなこと聞くの？」

「いや秋刀魚が好きだつて言ったから、三陸海岸がある宮城県の出
身かなつと思つてさ」

「あつ！ よく分かつたね。そうだよ」

「やっぱりそうか。あとさミカは他に好きな魚とかないの？」

「えつとマグロとかアジとかブリとか、結構お寿司のネタで有名な
ものが好きかな」

「そうかあー。じゃあ、今度お寿司屋さんにも連れて行ってあげる
ね」

「ホントー。あつ！ でもそれって回転寿司？」

「いや、ちゃんとカウンターのお店だよ」

「それは楽しみだなあー。ねえ、忘れないでよ」

「ああ、もちろん。あー、それより食べ物のお話をしていると余計に
お腹が空いてきたな」

「ふふつ、そうだね」

二人はお腹を空かせながら料理が運ばれてくるのを待った。

49、平日13

49、平日13

注文をしてから10分後、料理が運ばれてきた。

「焼き魚定食を2つお持ちいたしました。」

「はい。」

二人の前にそれぞれ料理が置かれる。

「では、ごゆっくりどうぞ。」

「じゃあ、いただきます。」

「いただきますと。」

僕は箸を持ってさっそく秋刀魚の身をほぐし口に運ぶ。その秋刀魚はよく油が乗っていて、塩加減もちょうどよくとてもおいしい。僕は同じく秋刀魚を口に運んだ彼女に問いかけてみる。

「どう?」

「うん、おいしい!」

「よかった。」

「これは私が焼いたものよりずっとおいしいなあ。」

「そう?」

「うん。ユウタ君もそう思うでしょ?」

「うーん、いや、ミカのも同じくらいおいしかったよ。」

「うそっ!?お世辞で言わなくてもいいのに。」

「そんな、お世辞なわけないだろ。」

「ホント?」

「うん。」

「それなら私、うれしいなあ。」

彼女はそう言っ僕に笑顔を見せる。素直に喜んでくれているようだ。

「あっ!このご飯と味噌汁もおいしいね。」

彼女は定食を食べながら話しかけてくる。

「だろ！やっぱ大事だよな。」

「大事って…、どういうこと？」

「ほら、ご飯と味噌汁だよ。」

「ご飯と…、味噌汁？」

彼女は僕が何を言いたいのかいまいちよく分かっていないようだ。

「いくらおかずの秋刀魚がおいしくてもさ、基本のご飯と味噌汁がまずかったら最悪だろ。」

「あー、なるほどね。分かるよ、私。ご飯と味噌汁がよりいっそうおかずの秋刀魚の味を引き立てるってことだよな。」

「そう、そういうこと。」

「全てがちゃんとしていて初めて成り立つんだよね。」

「うん。だからこの店は僕のオススメなのさ。」

「ふふっ、なんかユウタ君、かつこいいね。」

「そうかな？」

「うん。私、ユウタ君が得意気になっているところ、結構好きだな。」

「そうなんだ。でもあんまり調子に乗るのは良くないからなあ！。抑えないと。」

「いいんじゃない？別に。」

「そんなことだろー。そしたらタダの自己中だよ。」

「自己中…。まあ、確かにそう言えなくもないけど…。」

「だろ。だから普段は気をつけるようにしてるんだ。」

「そうなんだ。」

「うん。」

「あつ！でも私と一緒にいるときは気にしなくてもいいよ。」

「そう？」

「うん。いつも落ち着いている感じだし。ちょっと得意気なときがあっても全然気にならないから。」

「そうか。なんかそう言ってもらえると気が少し楽になった気がするよ。」

「そう、ならよかった。できるだけありのままできてね。」

「うん。」

二人は楽しく会話を交わしながら、料理を口に運んでいく。

15分後、料理を食べ終わった二人は席を立ってレジに向かう。

「焼き魚定食二つで1600円になります。」

僕は財布から1000円札1枚と100円玉6枚を取り出す。

「ちょうどですね。」

「はい。」

そしてレシート受け取ると、二人は店の外に出る。時計の針は12時50分を少し回っていた。

「じゃあ、僕は直接、午後の営業に行くから。」

「そう。じゃあ、ここでお別れだね。」

「うん。」

「お仕事がんばってね。」

「うん。ミカも。」

「じゃあねー。」

「うん。」

僕は彼女に手を振りつつ、次の営業先に向かった。

50、平日14

50、平日14

今週の水曜日も僕は先週と同様に商品開発部の西原君と営業を回っている。9時から回り始めてすでに4件、時計の針はもう1時を過ぎている。

「もう1時を過ぎたかー。おい！」

「ん」

「そろそろ昼飯にしようぜ！」

「ああ、そうだな」

「で、どこにする？」

「えっと……」

僕は辺りを見回して近くにあるラーメン屋さんを指差す。

「あそこでいいかな？」

「えー、またラーメンか。さすがに飽きたな」

「そうか？」

「おう、だって先週も確かラーメンだったぜ」

「あつ、そうか。じゃあ、どうする？」

「そうだなあー。あつちにしよう」

そう言っただけで彼は横断歩道を渡った先にあるうどん屋を指差した。

「うどんかあー。いいね」

「よし！ 決まりだな」

「うん」

二人は歩いて横断歩道を渡るとうどん屋に入っていく。カウンター席に座り僕は天ぷらうどんの大盛りを、彼はきつねうどんの大盛りを注文した。

注文して3分ほどで目の前にうどんがやってきた。やはり麺類は待たなくていいのがうれしい。

二人は話をしながらうどんを食べ始める。

「どう最近。結婚して何か変わった？」
「あー、変わった、変わった」
「ふーん、そうか。彼女はまだ仕事をしてるのか？」
「いや、産休だな」
「まあ、そうだな。聞いていなかったけど妊娠何ヶ月なんだ？」
「4ヶ月だ。結構つわりとかできつそうだけど、家事は頑張ってるよ」
「へえー、大変だな」
「あー。でも男には分からねえよな、妊娠のつらさは」
「そうだな」
「でもさ、あいつすげーよ。毎日朝7時半に起きて朝食作ってくれて、8時過ぎに家を出る時は笑顔で見送ってくれる」
「それは……、すごいな、確かに」
「それだけじゃない。帰ったらいつも必ずおいしい晩御飯が用意してあるんだ」
「なんかいたれりつくせりって感じだな」
「ああ、本当だよ。だから今、俺、仕事が終わったらなるべく早く家に帰るようにしてるんだ」
「へえー、変わったな、おまえ」
「うん。なんか俺、彼女のおかげですごく真面目になれたような気がするんだ」
「なるほど」
「感謝、感謝だよ、ホント、彼女には」
「そうだな」
「だからさ、おまえも早く結婚したほうがいいぜ」
「だからって……、どうしていきなりそんな話になるんだよ」
「それはおまえに味わってほしからだよ、この結婚生活の良さを」
「なるほど。まあ、まだ早いけど。話を聞いて羨ましいと思ったのは確かだな」
「なあ、そうだろ」

「ああっ、て、そういえば先週も似たようなことを言われたような気がするな」

「ははっ、そうだった」

「うん」

ここで二人は会話を切り、器に残っているうどんを全て食べ終わらせる。

「よし！ 行くか」

「おう」

二人は席を立ち上がるとうどん屋を後にして、次の営業先に向かった。

51、平日15

51、平日15

金曜日の今日、電車を降りて改札口を出た二人は東三橋駅から家までの帰り道を歩いていく。

「ねえ、ユウタ君、最近仕事は上手くいつてるの?」

「どうだろう。えっと、まあまあかな」

「まあまあって……。そうだとよく分からないよ」

「ははっ、そうだね。えっとじゃあ、どう言ったらいいかな?」

「それは…。例えば営業に行って何件契約をもらえたとか」

「そういうことか。それなら今週は全部で30件ぐらい回って……。えっと……」

「数えてるの?」

「うん、ちよつと……。えっと……。12件だったかな」

「へえー、意外と少ないね」

「そうかな?」

「うん……。だって半分もいつてないんですよ」

「ああ、確かにそうだね」

「それって少ないんじゃない?」

「そうでもないよ。これでも今のところ、今月の営業成績は2番だから」

「そうなんだ。すごいね」

「まあね。それに数だけの問題じゃないしね」

「どういうこと?」

「大きな契約もあるし、小さな契約もあるしね。つまり会社の利益に大きく貢献しないと評価はされないってことかな」

「結構シビアなんだね」

「そうだね。でもその分やりがいはあるよ」

「ユウタ君、すごく生き生きしてる」。上手くいつているのがよく

分かったよ」

「ちょっと自慢になっちゃたかな」

「うんうん。私、いつも違うユウタ君が見れて嬉しかったよ」

「そうか。そう言ってもらえると嬉しいよ。ところでミカのほうはどうなの？」

「えっ！ 私」

「うん。」

「えっと……、上手くいつてるよ。今週も私のアイデアが2つ採用されたし」

「それはよかったね」

「うん」

「じゃあ、ミカの開発した製品を売り込むのをがんばらないとな」

「頼りにしていい？」

「うん」

「頼もしいなあー。期待してるよ」

「うん、任せといて」

ここで彼女は満面の笑みを見せる。

「はあっ、なんか私、初めて自信満々のユウタ君を見た気がするー」

「そうかな？」

「うん、だっていつも落ち着いているよね」

「そうだね。ちょっと調子に乗り過ぎたかな」

「いいよ。私もそのほうが楽しいから」

「そうか。そう言ってもらえると助かるよ。なんか僕、ミカとつき合い始めてから変わったかな？」

「うん。前より明るくなったと思うよ」

「そうか。思うけど人って変わるんだよね」

「そうだね」

「僕はミカとつき合い始めたおかげで前より明るい性格になれた。なんだかすごく嬉しいよ」

「私、今のユウタ君、好きだな」

「ありがとう」

「どういたしまして」

ここで二人は彼女のアパートの前に到着する。

「ここでお別れだね」

「うん、じゃあね」

「あつ！ 明日はどうする？」

「明日かあー。えっと悪いけどちょっと仕事が入っちゃったんだよね」

「そうなんだ。残念だな」

「あつ！ でも明後日なら大丈夫だよ」

「ホントー。じゃあ、どうする？」

「どこか行きたいところとかある？」

「えっと、今は……、特にないなあー。ユウタ君は？」

「僕も考えてなかったよ」

「そう。じゃあ、どっちかの家ってのはどう？」

「いいね、そうしようか。どっちにする？」

「えっと、じゃあ、わたし、ユウタ君の家がいいな」

「そうか、分かった。それなら日曜日の昼前に来てくれるかな」

「いいよ。でも昼前って……、11時でいいかな？」

「うん」

「じゃあ、11時に行くね」

「うん」

「じゃあねー」

そう言っただけで彼女は僕のほっぺたにキスをする。

「じゃあね」

僕は彼女と手を振って別れ、歩いて家に帰っていった。

52、僕の家で1

52、僕の家で1

日曜日の今日、僕の家には彼女がやってくる。朝9時に起きた僕の中を軽く整理して、彼女を迎える準備をする。とはいえでも普段からある程度きれいにはしているため、掃除機をかけて床に置きっぱなしにしていた雑誌を棚に戻すぐらいだ。10時半を過ぎた頃には部屋はすっかりきれいになった。

11時になつて玄関からインターホンの音が聞こえてくる。

“ピンポーン”

「はい。」

そう言つて僕は玄関のドアを開ける。そこには彼女が立っていた。

「こんにちは」

「こんにちは」

「入ってもいい？」

「いいよ」

僕は彼女を机がある和室に案内する。

「結構片付いているね。ここに座ってもいい？」

「うん。えっと何か飲む？」

「うん。何かあるの？」

「お茶とアップルジュースとオレンジジュースがあるけどどれにする？」

「じゃあ、オレンジジュース」

「わかった。今、持ってくるね」

「うん」

僕はキッチンにある冷蔵庫からオレンジジュースを取り出し、ガラスの2つのコップに注ぐ。両手に持って彼女が待っている和室の机に戻る。

「はい、どうぞ」

「ありがとう」

「お菓子とかあったほうがいい？」

「うーんと、今はいいや。もうすぐ昼ご飯だし」

「そうだね」

ここで僕は彼女と向かい合うように座る。

「何して遊ぶの？」

「えっとね……、ユウタ君、ゲームとか持ってないの？」

「ゲームか。DSとWiiならあるけど、遊ぶ？」

「うん。実は私、今日、DS持ってきたんだ」

「そうなんだ。ソフトは何？」

「これだよ、これ。好きでしょ、ユウタ君」

「ポケモンかぁー。よく僕が好きって分かったね」

「分かるよ。だってそのタンスの上にぬいぐるみが二つ置いてあるじゃん」

そう言って彼女は洋服ダンスの上に置かれているピチューとピカチユウのぬいぐるみを指差す。

「あー、それ、実は僕が初めて買ったポケモンのぬいぐるみなんだ」

「へえー、そうなんだ」

「ちなみに他のところに置いてあったものは社会人になってから買った、UFOキャッチャーで取ったりしたものだけだ」

「ふーん、要するに大好きってことだよな」

「うん、まあ、そうだね」

「じゃあ、一緒にやろう」

「分かった。今、持ってくるよ」

僕は立ち上がって隣の部屋に行き、引き出しからゲームとソフトを取り出してくる。

「お待たせ」

「じゃあ、始めよう」

「うん」

こうして二人はDSのポケモンで遊び始めた。

53、僕の家で2

53、僕の家で2

二人は1時間半ほどゲームに夢中になった。僕が時計を見て12時半を回ったところで彼女に声をかける。

「あっ！ もう12時半だね」

「わあっ！ もうそんな時間！？」

「そろそろお昼にしようか」

「うん」

二人はゲーム機の電源を切る。

「どうする？ 昼ご飯」

「どうしよう？ 私が何か作ろうか？」

「いいよ。僕が作るから」

「えっ！ いいの？」

「うん。で、何にする？」

「何ができるの？」

「何でも……。あっ！ でもお昼だから簡単なものでいいよね」

「うん」

「ちよつと冷蔵庫を見て来るね」

「うん」

僕は立ち上がってキッチンに行き、冷蔵庫の中身を確認する。開けてすぐに焼きそばの麺が目に入った。下の野菜室を確認すると具となるキャベツ、人参、ピーマン、玉ねぎ、豚肉もそろっている。

(そうだ！ 焼きそばにしよう。)

僕は冷蔵庫を閉めてキッチンから彼女のいる部屋に戻ってくる。

「焼きそばでいいかな？」

「焼きそばかぁー、いいね」

「じゃあ、今、作ってくるね」

「うん」

僕は焼きそばを作りにも再びキッチンへと足を運ぶ。

15分後、出来上がった焼きそばとお箸を持って部屋に戻る。

「出た来たよー。はい、どうぞ」

「わあー、おいしそう」

彼女はお皿の上の焼きそばを見て嬉しそうな顔をしている。

「あつ！ そういえばコップが空だね。何か飲む？」

「うん」

「オレンジジュースでいいよね？」

「えっと、私、今度はお茶がいいなあー」

「分かった」

「あと、紅シヨウガはないの？」

「おっと、いけない、忘れてた。一緒に持ってくるよ」

僕はコップを2つ持ってキッチンに向かい、冷蔵庫から紅シヨウガを、お茶はそれぞれのコップに注いで部屋に戻る。

「はい、お待たせ」

「ありがとう」

僕は座って焼きそばを前に彼女を向き合う。

「じゃあ、いただきます」

「いただきます」

二人は箸を持って、焼きそばをほおぼる。

「どう？」

僕は彼女に感想を尋ねる。

「うん、おいしい」

「よかったー」

「ユウタ君、結構料理上手なんだね」

「そうかな。焼きそばって簡単だから誰でもできると思っけど」

「んー、確かに簡単だけどソースの加減とか、麺の食感とか、失敗するとおいしくないよね」

「それもそうか」

「これ、ソースの濃さもちょうどいいし、そしてこの麺もおいしいね」

「そうか。そう言ってもらえるとうれしいよ」

「ふふっ」

彼女は焼きそばを食べながら笑顔で僕を見つめる。

「あっ！ でも、麺は元がいいからかな」

「どういうこと？」

「うん。いつも買っているメーカーがあって、そこ安くておいしいだよ」

「じゃあ、今日もそれなの？」

「うん」

「どこのメーカーなの？」

「丸本食品だよ」

「丸本食品……。よし！ 私も今度買ってみよう。」

二人は話しながら麺を口に運んでいく。10分ほど2つの皿はあっという間に空になった。

54、僕の家で3

54、僕の家で3

昼ごはんを食べ終わった二人。僕は空になった皿を持ってキッチンの流しに向かう。

「じゃあ、ちよつと洗い物を済ませてくるね」

「うん、分かった」

10分後、僕は洗い物を済ませるとお菓子とジュースを持って彼女のところへ戻る。

「お待たせー」

「おかえりなさい」

「お菓子持ってきたけど、食べる？」

「うん」

僕は彼女がうなずいたのを確認して机の上にクッキーが乗った皿と、オレンジジュースが入ったコップを置いた。

「いただきまーす」

「どうぞ」

彼女は数あるクッキーの中から1枚を手にとる。しかしそのまま口には運ばず、手の動きを止めて僕に尋ねてきた。

「あれ？ このクッキー……」

「ん、どうしたの？」

「いや、なんか見たことないなあーっと思って……。ねえ、どこのメーカー？」

「そうだなー、井上製菓とでも言ったらいいのかな」

「ふーん、井上製菓って……、えっ！もしかしてこれ、ユウタ君が焼いたの？」

「うん、そうだよ」

「すごいねー、えっと味は……」

彼女は手に持ったクッキーを口に運ぶ

「うん。おいしい！」

「よかった」

「ユウタ君って、お菓子作り、好きなの？」

「うん。結構好きだよ」

「そうなんだ」

「意外だった？」

「うんうん、前に私の家に来たときに料理は結構するって言っていたし」

「そういえば、言ったね、そんなこと」

「あつ！ でも、お菓子作りも好きだとは思わなかったけど」

「そうか。えつと、ミカはしないの？」

「するよ。クッキーなら私もよく焼くなあー」

「じゃあ、ケーキは？」

「ケーキ！？」

「うん」

「それはないなあー」

「そうか」

「えつ！ もしかして、ユウタ君は作れるの？」

「うん。食べてみたい？」

「うん」

「それじゃあ、次に来的时候に合わせて、今度作っておくね」

「ホントー！？」

「うん」

「楽しみだなー」

おいしいクッキーをほおばる二人の間では会話がはずむ。その後、二人は2時過ぎぐらいまで楽しくクッキーを食べながら話をした。

55、僕の家で4

55、僕の家で4

2時を過ぎてクッキーが積まれていた皿も空になり、話も一段落する。僕はこれからどうするか彼女に尋ねた。

「ねえ、これからどうする?」

「うーん、えつとね……、外に出るのはどう?」

「外か。いいね」

「じゃあ、決まりだね」

「うん」

二人は立ち上がって玄関に向かった。

靴を履いて外に出た二人は並んで話をする。

「どこに行こうか?」

「そうだなあー、近くの公園はどう?」

「公園? あったけ、近くに」

「えつ! 知らないの? ユウタ君」

「うん」

「そうなんだ。意外だなあー。こっちに行ったらあるよ」

そう言っただけで彼女は駅と反対側のほうを指差した。

「あー、そっちな」

「うん。もしかしてユウタ君、こっちにはあまり行ったことないの?」

「うん、そうだなあー。ほとんど行ったことがないね」

「で、公園でいい?」

「うん」

そして二人は公園に向かって歩き始めた。

「どのくらい行ったところにあるの?」

「えつと、5分くらいかな」

「じゃあ、すぐだね」

「うん」

今日は10月30日。曇り空のせい或少し肌寒いのを僕は感じていた。湿った息を手に吹きかけて暖める。そんな僕を見て彼女が声をかけてきた。

「寒いのか？」

「ちよつとね。はあー、手が冷えるなあー」

「そういえば、ユウタ君、寒いのが苦手って言ってたよね」

「うん」

「手、つなごうか」

「うん」

彼女の暖かい気遣いに感謝して、僕は手を握り締めた。

「冷たい、大丈夫？」

彼女が僕の手の冷たさに驚いて声を上げた。

「うん。温かいね、ミカの手は」

「でしょ。温まってるね」

「うん、ありがとう。ミカはホント、寒いのが大丈夫なんだね」

「うん。言ったよね、確か出身が東北だった」

「あー、そういえば聞いたな、前に」

「だから寒いのは大丈夫。でもその代わり暑いのは苦手だな」

「そうなんだ」

「うん。それで夏はクーラー無しでは過ごせないんだよね」

「じゃあ、僕は逆だな。夏は扇風機だけだけど、冬はコタツとストーブが必須だからね」

「ふふっ、なんか正反対だね」

「そうだな」

「でもいいよね、なんかこういうのって。全部同じだと面白くないもんね」

「うん。違うところがあって、お互いに理解し合えて分かり合えるだよな」

「そうだね」

二人はそんな話をしながらゆっくり道を歩いていく。

家を出て5分後、二人は公園に到着した。

「着いたよ」

その公園は滑り台やブランコ、砂場があって、広さはそこまでではない。

「誰もいないね」

「うん」

休日にもかかわらず公園には誰もいなかった。聞こえるのは少し冷たい風の音だけである。

「どうする？」

「えっと、ベンチはないから……、ブランコにでも座ろうか？」

「うん」

二人は公園に入って奥に二つ並んでいるブランコにそれぞれ腰掛けた。

56、僕の家で5

56、僕の家で5

二人はブランコを軽く揺らしながら話を始める。

「そういえばユウタ君で子供るときはよく外で遊ぶほうだったの？」
「そうだなあー、小学5、6年生のときはよく公園で遊んだりしたかな」

「何をしていたの？」

「野球とかサッカーをよくしたね」

「へえー、じゃあ、中学の部活は野球部？」

「うんうん、水泳部だったよ」

「そうなんだ。ちよつと意外だなあー」

「そう？」

「うん。だって先週プールに行つたときはそんな感じしなかつたし」

「そうか。まあ、あのときは疲れてたからね」

「そういえばそうだったね。それで、泳ぐのは速かつたの？」

「そうでもないかな。同じ部活で後輩のほうが速かつたりしたし」

「それは……、ちよつと悔しかつたんじゃない？」

「そんなことはなかつたよ。代わりに部長をやつたり、長い距離を泳ぐ種目に出たりして、結構充実していたから」

「部長かあー、すごいね」

「そうかな」

「すごいよ。だって後輩をまとめたりするのとか大変でしょ？」

「そうでもなかつたよ。みんなが嫌がるような種目を選んだりして、なるべく尊敬してもらえるように心がけていたからね」

「へえー、工夫してたんだね」

「まあ、そういうことかな」

「えっと、もう一つ聞いていい？」

「うん。なに？」

「みんなが嫌がる種目ってどんなの？」

「さつき言ったように長い距離を泳ぐ種目のことだよ」

「長い距離って、どのくらい泳ぐの？」

「1500メートルだよ」

「1500メートル!? すごいね。どのくらいかかるの？」

「僕はそんなに速くなかったから、確か26分ぐらいだったかな。とにかく大変だったよ」

「26分って……、なんか気が遠くなりそうだね」

「ははっ、そうだね」

ここで一度会話が途切れ、今度は僕が気になっていたことを彼女に質問する。

「ミカはどんな部活に入っていたの？」

「私」

「うん」

「私は中学、高校でテニスをやってたよ」

「テニスかぁー、いいね。楽しかった？」

「うん。テニスはすごく好きだったし、友達もみんな一緒だったから毎日、とても楽しかったよ」

「へえー、いいね、ホント。それで、大会とかには出なかったの？」

「大会は……、私、そこまで上手くなかったから中学3年のときに県大会で3回戦まで進んだのが最高だったかな」

「県大会か、十分すごいじゃん。僕なんか最高でも市大会止まりだったし」

「そうかな？ でも友達の中には全国まで進んだ人もいたから、それと比べたらたいしたことないよ」

「なるほど。でも成績って大事だけど、一番大切なのは楽しめたかどうかだよね」

「そうだね。ユウタ君、いいこと言うなあー」

「そうっ？」

「うん。あれ？ そういえばユウタ君、高校のときは部活、入って

なかつたの？」

「高校か。気になる？」

「うん」

「実は入ってなかつたんだよね」

「そうなんだ。水泳部はなかつたの？」

「うん」

「珍しいね、定番なのに」

「そうだな。それでその代わりに水球部ってのがあって、1回入ったんだけど、きつくて1週間でやめちゃったんだよね」

「そうなんだ。でもきつくて楽しめなかつたのならしょうがないよね」

「うん」

この後も二人はブランコを揺らしながら、5時過ぎまで話を続けていた。

57、僕の家で6

57、僕の家で6

話が一段落して僕は時計を確認した。

「ねえ、今、何時？」

その姿を見て彼女も僕に時間を聞いてきた。時計の針はすでに5時を回っている。

「えっと、5時過ぎだね」

「どうする？」

「そろそろ帰ろうか」

「うん」

二人はブランコから立ち上がって公園を出ると、家までゆっくり歩いていく。空は赤く染まり始め、二人の後ろに沈み行く夕日がある。公園に着いたところは曇っていた空も、話に夢中になっているうちに晴れていたようだ。

その光景を見たくなり足を止めて後ろを振り向いた僕に彼女が話しかけてくる。

「どうしたの？」

「ほら、見て。」

そう言っ僕は目の前の夕日を指差した。

「夕日かあー。」

「うん。」

「きれいだよね。」

ここで二人は向き合っ互いに見つめ合う。

「ん。」

僕は彼女の肩をそっとな抱いた。互いに顔をゆっくりと近づけていく。そして唇が触れ合った。より一層に赤く染まっっていく空が、二人のキスをより激しくさせる。互いに強く求め合い、舌を絡ませていた。2分ほど経っ息が苦しくなっきた僕はそっとな唇を離す。彼女は

名残惜しそうな顔で僕を見つめている。

「ねえ。」

「ん。」

「ありがとう。」

「うん。」

再び前を向いて二人は道を歩き始めた。

「帰ったらどうしようか？」

「どうするって、晩御飯は」

「家で食べてく？」

「うん」

「分かった。じゃあ、何にしようか？」

「ユウタ君、ちょっと寒そうにしてたし、だからあったかいものがないんじゃない？」

「あったかいものが、いいね。それじゃあ、シチューはどう？」

「シチューかあー。うん、いいよ」

「よし！ じゃあ、決まりだね」

「うん」

「それで僕が作るのでいいんだよね。」

「うん。あつ！ でも私も手伝っていい？」

「もちろん。いい機会だし一緒に料理しようか」

「うん」

二人はそんな晩御飯の話をしながら家へと帰っていった。

5分後、家に帰りついた二人はキッチンに立つ。

「エプロン、着ける？」

「うん」

僕はキッチンの上の棚から2つエプロンを取り出した。

「えっと赤いほうでいいよね」

「うん。あれ？ でもなんで2つ置いてるの？」

「洗い替え用かな。お菓子とか作ったりすると結構汚れるからね」

「なるほどね」

二人はそれぞれエプロンを身に着けた。

「じゃあ、始めようか」

「うん」

こうして僕と彼女はエプロンを着けると料理を開始した。

58、僕の家で7

58、僕の家で7

エプロン姿でキッチンに立つ二人は話しながら料理を進めて行く。

「私、何したらいいかな？」

「えっと、どうしようか？同じことするのもなんだし、役割分担する？」

「うん、いいよ」

「じゃあ、ミカはそっちで材料を切ってくれるかな？」

「いいよ。ユウタ君はどうするの？」

「僕は鍋での調理をするよ」

「分かった。で、材料はどこにあるの？」

「えっとね、人参と玉ねぎと鶏肉は冷蔵庫の野菜室にあるよ。あとジャガイモは寝室にあるからちよっと今、取ってくるね」

「うん。あっ！じゃあ、もう出して切り始めていいんだよね」

「うん。でも包丁がどこにあるか分かる？」

「えっと、多分ね……、ここでしょ」

そう言つて彼女はキッチンの流し台の下の戸を開けた。

「あつたー、やつぱり」

「じゃあ、大丈夫だね。僕は取ってくるよ」

「うん」

僕はキッチンに彼女を残して寝室にある段ボール箱からジャガイモを3個取ってきた。

「お待たせー」

キッチンに戻ってきた僕は鍋を取り出してガスコンロの上に置いた。冷蔵庫からバターを取り出して炒める準備をする。

しばらくして彼女が始めに炒める玉ねぎを切り終わるときに合わせて、鍋を火にかけてバターを一欠片落とす。それはさーっと溶けて全体に広がった。

切られた材料を順番に入れて炒めていく。

そして彼女が全ての材料を切り終えたときにあることに気づいて声を上げた。

「あっ！ そういえばご飯は？」

「いけない！ 忘れたな。どうしよう？」

「ユウタ君、今、手離せないよね」

「うん」

「じゃあ、私がやるよ。お米は……、この後ろにあるのでいいんだよね」

「うん、ありがとう。じゃあ、頼むよ」

「えっと、何合炊くの？」

「2合ぐらいでいいじゃないかな？」

「分かった」

僕はご飯を炊く作業を彼女に任せて、鍋で材料を炒めていく。

5分ほど経ってお米を洗い終わった彼女が炊飯器の操作方法を尋ねてきた。

「ねえ、これどうするの？」

「ああ、それは僕がやるよ。だから代わりにちょっとこっち見といて」

「いいよ」

僕は鍋の方を彼女に任せて炊飯器のセットをした。

「セットしたから替わるよ」

「いいよ。ここは私にやらせて」

「そう？ じゃあ、僕はルーを」

そう言っって冷蔵庫からホーム食品のホワイトシチューのルーを取り出した。

「ルー、これでいいよね」

「うん。あっ！ 私が使ってるのも同じやつだよ」

「そうか。やっぱりこれが一番おいしいよね」

「だねー」

その後、10分ほどで材料が炒め終わり、水を入れて煮込んでいく。

「これで20分ぐらい待たないとね」

「そうだな。待ってる間、どうしようか？」

「じゃあ、ゲームでもして待ってようか」

「そうだな。それじゃあ、タイマーをセットしてと。さあ、居間に
行こうか」

「うん」

こうして二人は煮込みが終わるまでの20分間、ゲームをしながら
過ごした。

59、僕の家で8

59、僕の家で8

20分後、二人は鍋の中の様子を確認しにキッチンに戻る。僕がふたを開けて、二人は中を覗きこんだ。

「いい感じだけど、ちよつとアクが浮き上がってきてるね」

「そうだな。じゃあ、とるね」

僕は引き出しからアクとりをとって、アクを取り除いた。

「よしっ！ これで大丈夫だな。さあー、ルーを入れようか」

「うん」

僕は予めそばに置いておいたルーの箱を手に取り、火を止めて半箱分を割って中に投入した。おたまでゆっくりとかき混ぜながらルーを溶かしていく。

「ちよつと頼んでいいかな？」

「なに？」

「そこにある台ふきんで机の上を拭いてくれる？」

「いいよ」

彼女は言われたとおり流しに置いてあった台ふきんを手に取ると、水で濡らして絞り、机を拭いてくれた。

「ありがとう」

「うん。わあー、シチューおいしそう」

「だな」

「ねえねえ、味見してもいい？」

「えっ！？ まだちよつと早いんじゃない？」

「そうかな」

“ピピー、ピピー、ピピー”

「あっ！ ご飯が炊けたみたいだね。」

「じゃあ、私混ぜておくね」

「ありがとう」

彼女は炊飯器を開けて中を覗きこむ。

「はぁー、いい匂い」

「ミカは炊きたてのご飯は好き？」

「うん、大好き。この匂いがいいんだよねー」

「そうか」

彼女は話しながらしゃもじを手にしてご飯をかき混ぜている。

「ユウタクーん、これってさもしかしてシチューとご飯だけなの？」

「そうだけど…、いや？」

「嫌じゃないけど…、なんかさびしくない？」

「そういえばそうか。うーん、じゃあ、あとでデザートにリンゴでも切ろう。」

「リンゴかぁー、いいね」

「それじゃあ、切るね」

「うん」

彼女はご飯をかき混ぜ終わると、鍋を見ている僕の横に戻ってきた。二人はシチューのいい匂いを感じながら、しばらく無言で中を見続ける。

5分後、僕が口を開いた。

「もうそろそろかな。味見してみる？」

「うん」

僕は引き出しからスプーンを取って、シチューをすくうと彼女に口の前に持ってくる。

「どうぞ」

「いただきまーす」

彼女は湯気が立っているスプーンをフーフーして、舌を出して一舐めした。

「おいしー」

「そうか。じゃあ、完成だな。ご飯をよそって食べようか」

「うん」

僕は鍋の火を中が冷めない程度に弱める。そして二人は鍋の前から

離れると、炊飯器を開けてそれぞれの茶碗にご飯をよそって、机に置いた。次にシチューもよそうとその隣に置く。

「何か飲む？」

「うん」

僕は冷蔵庫の中の飲み物を確認する。

「お茶がいいかな。あつ！ それとも赤ワインがあるんだけど、どう？」

「赤ワインかぁー、いいね」

「じゃあ、よしっ！ 飲むか」

「うん。」

僕は赤ワインのボトルとグラスを二つ持って、席に着いた。二人は手を合わせる。

「いただきます」

「いただきます」

こうして二人の楽しい夕食の時間が始まった。

60、僕の家で9

60、僕の家で9

二人はスプーンを手に取り、シチューを口に運ぶ。

「アツ、アチツ！」

「ん、大丈夫？」

「うん。ちょっと熱かっただけ」

「そうか。で、味はどう？」

「おいしいよ。それに体も温まっていいね」

「そうだな。今日はちょっと肌寒かったし、シチューにしてよかったね」

「うん」

ここで僕は一旦手を止めて、冷蔵庫から持ってきた赤ワインのボトルを手にする。

「ワイン飲む？」

「うん」

「じゃあ、入れるね」

僕は手にしたボトルを傾け、2つのグラスに注いだ。

「どうぞ」

「ありがとう。いただきまーす」

彼女はワインを少し口にした。

「どう？」

「おいしー。これ甘口で飲みやすいね」

「よかったー」

「私、赤ワインってクセがあるものかなって思ってたんだよね」

「そうなんだ。でもさー、前にハンバーグを二人で食べたときに店のご主人が出してくれたワインも少し甘くなかった？」

「そういえばそうだったけ？ あれはもうちょっと本格的な感じだったけど」

「まあ、そうだな。それに所詮、これは安物だし。こんなもんだよ」
「そうなの？ 十分おいしいけど」

「おいしいか。ならいいや。ワインって安物は甘くて飲みやすいか、本格的な感じに誤魔化してるかのどっちかだからね。だから変ね本格的なものを買うより、甘口の飲みやすいものを買ったほうが失敗しないんだよね」

「そうなんだ。じゃあ、今度私も買うときに試してみよ」

二人の会話は一度中断して、それぞれご飯とシチューを口にしていく。

5分後、あっという間にシチューの器が空になった。

「さてと、おかわりしよう」と

「どうしよう？ 私もおかわりしようかな」

「したら、まだたくさん残ってるし」

「そうだね。じゃあ、私もおかわりしよう」

「ご飯は？」

「ご飯は……、いいや。ちょっと食べ過ぎになるし。それにあとでデザートもあるんだよね」

「うん。リンゴね。じゃあ、とりあえずよそいに行こうか」

「うん」

二人は空の器を持ってキッチン向かい2杯目をよそって席に戻り、それも5分ほどで平らげた。

「ごちそうさまでした」

「ごちそうさまでした」

「じゃあ、リンゴ切るね」

「うん」

僕はキッチンに行って冷蔵庫を開け、リンゴを取って包丁で皮を剥き、8等分に切り分けて大きめの皿に並べて爪楊枝を2本刺す。そして皿を持って来てテーブルに置いた。

「お待たせー、どうぞ」

「いただきまーす」
“ガブツ、シャリ、シャリ…”
「おいしー、甘いー」
「そうか、よかった」
「ねえ、これってふじだよ。蜜がたくさん入っていて甘くておいしいね」
「うん。やっぱりリンゴはふじだよな」
“ガブツ、シャリ、シャリ…”
“ガブツ、シャリ、シャリ…”
「あっ！ そういえばさ、甘くておいしいリンゴの選び方とか知ってる？」
「あるの？ 教えてー」
「リンゴはね、上の部分が少しひびが入っているのでよく熟していておいしいんだよ」
「そうなんだ。じゃあ、今度参考にしよう。でもそれどこ知ったの？」
「大学生のときかな。僕の大学、果樹園があって時々手伝いね行ってさ、そこで収穫作業をしているときに聞いたんだよ」
「へえー、果樹園か、いいね。じゃあ、果物とかたくさんもらったの？」
「うん。りんごとか梨とかブドウとか、結構たくさんもらったよ」
「いいなあー」
「まあ、手伝いをしに行ってるからこそなんだど、それが意外と楽しくて話も聞けて、あれはいい勉強になったよ」
「そうなんだ」
その後、二人は引き続き話をしながら10分ほどでリンゴを食べ終えた。
「じゃあ、私、そろそろ帰るね」
「うん」

二人は立ち上がって玄関に向かう。そして彼女はそっと僕のほっぺ

たにキスをする。

「じゃあねー。また、月曜日だね」

「うん、じゃあねー」

僕は靴を履いてドアを開ける彼女を手を振って見送った

61、平日16

61、平日16

“ザザー、ザザー…”

月曜日の朝、僕は激しく降る雨の音で目を覚ました。布団から起き上がりカーテンを開けてベランダから外を見る。

「雨か。」

僕はどしゃぶりの外を見て呟いた。

30分後、身支度を済ませた僕は傘を持って家を出ると、彼女が待っているアパートに向かう。傘を差して待っている彼女に声をかけた。

「おはよう」

「おはよう」

「ごめん、待った？」

「うんうん。私もついさっき1分ほど前に出たところだから」

「そうか」

「じゃあ、行こう」

「うん」

二人は並んで駅まで歩いていく。

“ザザー、ザザー…”

「それにしても今日はすごい雨だね」

「そうだな。僕、朝、目覚ましじゃなくて雨の音で起きちゃったよ」

「そうそう、私も」

「久しぶりだよなー、こんなに降ってるの」

「だね。ここ1ヶ月ぐらいずっと晴れだったし」

「うん。あっ！ そういえばさ、ミカは何か雨の日の思い出とかある？」

「雨の日の思い出かぁー、それならやっぱり高校生のときに付き合

つっていた彼と相合傘をしたことかな」

「へえー、相合傘かぁー。いいね」

「うん。実はね、その人と仲良くなったきっかけが雨の日に傘を忘れて困っている彼に私が声をかけて、一緒に相合傘で帰ったことなんだよねー」

「そうなんだ」

「相合傘って結構濡れちゃうんだけど、互いにすごく密着するからちょっと恥ずかしい気持ちになって、ドキドキするんだよね」

「ふーん、なるほどね」

「それでね。その彼の話や雰囲気がいいなと思って、あとで私のほうから告白して付き合い始めたんだ」

「いつまで付き合っていたの？」

「確か高校3年生の9月までだったかな。最後に彼に『別れよう。』って言われて、別れることになっちゃただけど」

「……、なんか聞かないほうがよかったかな」

「えっ！ どうして？」

「いや、嫌なこと思い出させちゃったかなって」

「うんうん、気にしないで」

「そうか？」

「うん」

彼女は僕のほうを向いて、笑顔でうなづいてくれた。

「ユウタ君はさ、何か雨の日の思い出ってないの？」

「そうだなぁー、やっぱり高校時代に自転車通学で雨の中をずぶ濡れになって走ったことかな」

「ずぶ濡れって、レインコートとかなかったの？」

「いや、もちろんあるんだけどね。邪魔になるからさ、天気予報で大丈夫だっけって判断した日以外は持っていないんだよね」

「そうなんだ。どのくらいの距離だったの、学校まで？」

「12キロちょっとかな」

「そんな長い距離を！？ すごいねー。それじゃあ、相当大変だっ

たんじやない？」

「うん、まあね。でもおかげで体力はついたよ」

「大事だよね、体力。頭がいいとかどうとかより、まず体力がないとどうしようもないもんね」

「そうだな」

ここで二人は駅に到着し、切符を購入すると電車に乗り込んだ。

62、平日17

62、平日17

火曜日の昼休み、珍しく社内には僕は昼食をとるために社員食堂に向かう。エレベーターに乗ると4階でミカが乗ってきた。

「あっ！ ユウタ君」

「ミカ」

「今日の昼食はもしかして食堂？」

「うん」

「珍しいね。じゃあ、一緒に食べよう」

「いいよ」

二人はエレベーターで1階まで降り、食堂の入口にある券売機の前に立つ。

「さてと、何にしよっかな」と……

「えっと私は……、日替わりランチにしようかな」

「日替わりランチか。今日は何だ？」

そう言っただけはそばにある見本を見る。どうやら今日はエビフライランチのようだ。この食堂の日替わりランチはメインとサラダとスープが曜日毎に変わり、それにご飯がついている。普通のファミレスにもある極一般的なものだ。

「ユウタ君はどうするの？」

「日替わりランチはエビフライ……、でもそんな気分でもないし、

僕は親子丼セットにしようかな」

「じゃあ、お金を入れてと……」

すると彼女は財布から1000円札を2枚取り出し券売機に投入し、親子丼セットと日替わりランチのボタンを押した。

「えっ！ いいよ。僕は……」

「遠慮しないで。いつもユウタ君に出してもらってるから、今日はそのお返し」

「いいのか？」

「うん」

彼女は笑顔でうなずき、出てきた食券を僕に渡してくれた。

「はい」

「ありがとう」

僕は食券を受け取り二人で食堂の中に入っていく。カウンターに食券を置き、番号札をもらうと二人は座る席を探す。

「ここでいいかな」

僕は彼女を連れて窓際に席に案内した。

「うん」

二人は向かい合って席に着いた。

“ザザー、ザザー…”

窓の外では昨日と同様にどしゃぶりの雨の音が鳴り響いている。

「今日もすごい雨だね」

「うん。なんか天気予報で言ってたけど、今週はずっと雨らしいよ」

「そうなんだ。じゃあ、洗濯物とか外に干せないし大変だなあー」

「そうだね」

「あつ！ そういえばユウタ君、午前中営業で外回りだったんじゃない？」

「うん。いやー、雨がホントすごくて大変だったよ」

「分かるよ。髪の毛とかスーツとか濡れてるもんね。大丈夫？ 寒くない？」

「大丈夫だよ。室内は結構暖かいから」

「そう。でも午後も外回りあるんだよね」

「うん」

「風邪引かないように気をつけてね」

「そうだな。気をつけるよ」

ここで二人の会話は一度途切れ、今度は僕が彼女に話しかける。

「ミカは午前中、何してたの？」

「デスクワークだよ。朝からずっとパソコンの画面とにらめっこ状

態で目が疲れるんだよね」

「そうなのか。商品開発部も結構大変だなあー」

「そうかな。ユウタ君のほうが外回りとかで大変そうだけど」

「うーん、まあね。体力はいるかな。でも僕はアイディアとか考えるのは苦手だから商品開発部は絶対無理だな」

「えっとつまり、お互い自分に合った部署があって、得意だからこそ頑張れるってことだよな」

「そういうことだね」

この後も二人は楽しく話しながら番号が呼ばれるのを待つ。

5分後番号が呼ばれ、二人は席を立ち上がるとカウンターに向かった。

63、平日18

63、平日18

カウンターでそれぞれ頼んだものをとると二人は席に戻る。

「おいしそう」

席に着いた彼女は笑顔でランチを見つめている。

「じゃあ、いただきまーす」

「いただきまーす」

彼女は真っ先におかずのエビフライを口に運ぶ。

“サクッ”

揚げ物独特のおいしそうなの音が鳴り響く。

「おいしーい！」

「ミカはエビフライ、好きなの？」

「うん、大好き」

「そうなんだ」

笑顔を見せる彼女を前に僕は親子丼を食べる。

「どう？ そっちは」

「おいしいよ」

「あれ？ 珍しいね、ユウタ君が食堂の料理をおいしいって言うなんて」

「そうかな？」

「うん。だつて前に一緒に食べたときに厳しい評価してたよね」

「そういえばそうだったな。でもこの親子丼は結構好きなんだよ」

「へえー、じゃあ、ちょっと私にも一口ちょうだい」

「いいよ」

そう言つて僕は箸で一口分をつかみ、彼女のランチの皿の端に置くとする。

「あっ！ ちょっと待って」

「えっ!?!」

そこで突然、彼女が僕の行為を止めた。

「食べさせて」

「えっ!?!」

僕は思わぬ彼女の対応に驚き、動揺する。

「ねえ」

彼女の催促に応じて僕は箸でつかんだ一口を彼女の口の前に差し出した。

「どう?」

彼女は口に入れたもの少し時間をかけて味合う。

「おいしーい!」

「だろー。この食堂の親子丼、汁がとてもおいしいんだ」

「そうだね。これならユウタ君がおいしーいって言うのも頷けるよ」

「ははっ、そうか」

「じゃあ、今度はこっちのエビフライを食べてみてよ」

「いいの?」

「うん」

すると彼女はエビフライを箸でつかみ、僕のほうに持ってくる。

「はい、あーんして」

「あーんって……」

「いいじゃん。さっきもそうしたんだしさ」

「ははっ、そうだな。じゃあ、あーん」

“サクッ”

また衣独特のおいしそうな音が鳴り響く。

「どう?」

「うん、美味しいな。衣がサクサクでエビの下味もちょうどいいね」

「でしょ」

こうして二人は話しながら笑顔でご飯を食べていく。

15分後、二人のお盆の上の皿は全て空になった。

「それじゃあ、ごちそうさまでした。」

「ごちそうさまでした。」

そして二人は席を立ち上がり食器を返すと食堂を出てエレベーターに乗り込む。

「さっき言っただけで午後の外回りあるんですよ。」

「うん。」

「雨で大変だと思うけど気をつけてがんばってね。」

「うん、がんばるよ。ミカは午後、これからどうするの?」

「えっと、会議だったかな。」

「じゃあ、ミカもがんばってね。」

「うん。」

ここでエレベーターが降りる4階に到着する。

「じゃあねー。」

「じゃあね。」

手を振って彼女と別れると、エレベーターはさらに5階まで僕を運んでいった。

64、平日19

64、平日19

金曜日の朝、珍しく僕は彼女とアパートの前で待ち合わせができた。基本的に僕は最近月曜日に残業することが多く、その関係で他の曜日の出勤時間が遅くなるため、月曜日以外で朝一緒にいけることはほとんどなかった。アパートの下で待っている彼女を発見すると、僕は声をかける。

「おはよう」

「おはよう」

「ごめん、待った？」

「うんうん、ついさっき降りて来たところだよ」

「そうか、よかった」

「じゃあ、行こうか」

「うん」

二人は駅までの道を話しながら歩き始める。

「珍しいね、金曜日に一緒に行けるなんて」

「そうだな」

「どうして？ やっぱ昨日帰るのが早かったとか？」

「まあ、そうだね。今週月曜日はいつものように残業だったんだけど、昨日は仕事が早く終わってね、それで今日は早く行くことになったんだ」

「そうなんだ。そういえば前から思っていたんだけど、ユウタ君がいる部署ってかなり特殊だよな」

「それもそうだね」

「どうして？」

「部長が変わった人だからかな。残業するかしらないかは自由だし、でもその代わり1回ずれると全部ずらすはめになるんだよね」

「そうなんだ。結構大変だね」

「まあね。あと、前にも言ったように1ヶ月に1回休日出勤があるから」

「あっ！ それってもしかして今週？」

「そうだね。土曜日にあるよ」

「じゃあ、デートは無理だね」

「そう？ 日曜日なら大丈夫だけど」

「でも疲れてるときにきつくない？」

「そんな。ミカとのデートなら疲れ果てていても行きたいぐらいだよ」

「そうなの？」

「うん。それに今月の休日出勤はそんなに大変じゃなさそうだし」

「そうなんだ。じゃあ、またどこか行こうね」

「うん、考えておくよ。あっ！ あのさ今日、一緒に昼ごはん食べに行かない？」

「えっ！？ 行けるの？」

「うん」

「嬉しい。で、どこに連れて行ってくれるの？」

「前に言っていたお寿司屋さんだよ」

「寿司！？ やったー！」

「ずいぶん嬉しそうだね」

「うん。だって前にお寿司屋さん連れて行ってってくれるって言うてくれたときから私、すごく楽しみにしてたもん」

「そうなんだ」

「じゃあ、待ち合わせどうしようか？」

「えっと、昼の12時5分に会社の入口前でどうかな？」

「うん、分かった」

ここで二人は駅に到着し、切符を買って電車に乗り込んだ。

65、平日20

65、平日20

金曜日の12時、僕は会社の入口でこれから一緒に昼ご飯を食べに行く彼女を待っていた。

5分後、彼女が来て僕は声をかける。

「おうっ！」

「お待たせー。待った？」

「いや、5分前に来たところだよ」

「そう、よかった」

「じゃあ、行こうか」

「うん」

二人は会社の前を離れ歩き始める。

5分後、二人はお寿司屋さんの前に到着した。

「ここだよ」

「あれ？ 結構近いんだね」

「そうだな。入ろうか」

「うん」

二人は入口の引き戸を開けて中に入る。

「へいつ！ らっしやい！」

カウンターの奥からご主人の威勢のいい声が聞こえてきた。

「おっ！ 久しぶりだね。今日は彼女と一緒にか。まあ、座ってよ」

ご主人からそう声をかけられる。そして二人は店の主人と向かい合う形で並んで席に着く。

「さあ、何にします？」

「何にしようか？」

「じゃあ、まずマグロ」

「マグロか、いいね、定番だね。それじゃあ、マグロを2つ」

「はい！ かしこまりました」
「ねえ、ユウタ君ってこの常連なの？」
「常連……、ちよっと違うかな」
「どういうこと？」
「うん。この寿司屋にはね、うちのお得意様と話をするときによく来るんだよ。それで僕のことを覚えてもらったってわけ」
「そうなんだ。じゃあ、一人で行くことはないの？」
「あまりないね。確か2、3度行ったぐらいかな。寿司は好きなんだけど、やっぱこういいうところはちよっと高いんだよね」
「ここで店の主人が一度、話を止める。」
「そんな失礼な。うちはちよっと高いけどいい品ばかりでっせ」
「あつ！ すみません」
「まあ、とりあえず高いかどうかは食べてもらってからだな。はいっ！ マグロいっちょー！」
そう言っつて僕らの前に2貫のマグロが置かれる。
「じゃあ、いただきまーす」
「いただきまーす」
二人は箸で寿司をつかみ醤油を少しつけると、ほぼ同時に口の中にほおり込んだ。
「おいしいー！」
「うーん、やっぱうまいね」
寿司を食べた二人は最高の笑顔を見せる。
「さあーて、お客さん、次は何にします」
「どうする？」
「えっと、悩むなあー」
「じゃあ、何かオススメの品でも聞いてみようか？」
「オススメか、いいね」
「よしっ！ ご主人、何か今日のオススメはないの？」
「オススメか。それなら今日はいい寒ブリが入ってるよ」
「寒ブリ！ じゃあ、それにしよ」

「そうだな。それじゃあ、寒ブリを2つ」

「はい！ かしこまりました」

「あっ！ そういえばさ話変わるけど、今週の日曜日はどうする？」

「日曜日、どうしょつか？ まだ考えてついてないんだよね」

「そう」

「ミカはどこか行きたいところないの？」

「うーん、えつとね……」

「おっ！ もしかしてデートの話かい？」

そんな話をしていると店の主人が割り込んでくる。

「ええ、まあ」

「それならこの時期だし、紅葉を見に行くつてのはどうだ」

「紅葉か。どこかいいところがあるんですか？」

「ああ。西松原高原つて知ってるか？」

「西松原高原つて……、あのここから車で1時間ぐらい北の山の方に行つたところにあるのですか？」

「そうそう、そこだ。この前そこに行つたて言うお客さんがいてね。ちようど今が最高の見ごろらしいよ」

「そうなんですか。じゃあ、ミカ、そこにしようか？」

「うん」

彼女は笑顔でOKしてくれた。

「おっ！ 決まりみたいだね。はいっ！ 寒ブリいっちょー！」

今度は二人の前に2貫の寒ブリが置かれる。さっそくそれを二人は口にした。

「おいしいー！」

「うん、脂がのつてて最高だな」

こうして二人は12時45分に店を出るまでにそれぞれ11貫ほどの寿司を食べた。

店を出た二人は少し話をして別れる。

「今日はごちそうさま。」

「うん。どうだった？」

「とてもおいしかったよ。」

「そうか。喜んでもらえたみたいで僕も嬉しいよ。」

「ユウタ君はこのあとどうするの？」

「えっと、次の営業先がここから近いし、だからここでお別れかな。」

「そう。じゃあねー、仕事、頑張ってね。」

「おう、ミカもな。」

「うん。」

そして二人は手を振って別れ、それぞれ店の前をあとにした。

66、紅葉を見に1

66、紅葉を見に1

日曜日の朝、7時に目を覚ました僕は身支度を済ませると、8時に家を出て彼女のアパートの前に車で向かった。金曜日にお寿司屋さんに行ったときに、店の主人から西松原高原に紅葉を見に行くことを勧められた二人は今日、8時10分に彼女のアパートの前で待ち合わせをして行くことにしていた。

待ち合わせ時間の8時10分になって彼女が降りてくる。僕は車から降りて彼女とあいさつを交わした。

「おはよう」

「おはよう。ごめん、ちょっと待たせちゃったかな？」

「大丈夫だよ。10分近く前に来たところだし、ちゃんと待ち合わせの時間通りだから」

「そう、よかった」

「じゃあ、乗ってよ」

「うん」

そう言っ僕は助手席のドアを開けて彼女を中に招き入れた。続いて僕は彼女が席に着いたのを確認してドアを閉めると、運転席側に回り乗り込んだ。互いにシートベルトを締め、僕はエンジンを掛けて車を発進させた。

二人を乗せた車は街を離れ目的地の高原へ向かって走っていく。走り始めて20分ほどが経過し、少し山道に入ってきたところで彼女が話しかけてきた。

「だいぶ山の中に入ってきたね」

「そうだな」

「ねえ、あとどのくらいで着くの？」

「えっとまだ出発して20分ぐらいだから、あと1時間ぐらいかな」

「あれ？ 結構遠いんだね」

「うん。実は西松原高原は今登っている山を越えたその先にあるんだよね」

「そうなんだ。でもこの周りの紅葉も十分きれいだよ」
彼女にそう言われ、僕は信号で車が止まったところで周りを見渡した。確かに山の木が赤や黄色に染まっている。

「確かにそうだな。でも昨日ネットでしらべたところによると、これから行く高原の紅葉はもっときれいらしいよ」

「ホントー!?　じゃあ、楽しみだなー」

ここで僕はふとあることに気がついた。

「あっ！」

「どうしたの?　突然」

「そういえば昼ごはんのこと考えてなかったなって……」

「それなら大丈夫だよ」

「大丈夫って……、もしかして……」

「うん。私、ちゃんとお弁当作ってきたから」

「そうか、ありがとう」

「どういたしまして。だから紅葉の下で二人で一緒に食べようね」

「うん」

こうして現地に着くのを楽しみに、二人を乗せた車は走っていく。

時刻は9時30分、二人を乗せた車は西松原高原第一駐車場に到着した。

「さあ、着いたよ」

「うあー、きれいー」

外にはすでに赤や黄色で綺麗に染まった山肌が見えている。

「そうだな。じゃあ、降りようか」

「うん」

そして二人は荷物を持って車を降りた。

67、紅葉を見に2

67、紅葉を見に2

車を降りた二人は少し歩き、近くの遊歩道の案内板を見る。そこには高原にある3つの遊歩道が書かれていた。そのうち2つは周りをぐるりと一周するルートで、2つの違いは東西どちらから行くかだけのようだ。さらに残りの一つのルートは山を登るルートで、降りた先は1周するルートにつながっていることが示されている。

「どうしようか？」

「せっかくだし登って見ない？」

「この真ん中のルートか、ちよっときつそうだけど頂上の景色は良さそうだね」

「きれいな景色見たいしだからこのルートが……、あつ！でも待つて……」

「どうしたの？」

「ユウタ君きついんじゃない？昨日仕事で疲れていて」

「大丈夫だよ。昨日はそんなに大変じゃなかったから」

「そうなの。じゃあ、このルートにしよう」

「うん。えっと頂上まで2時間、結構かかるなあー」

「でも着いたら1時半、昼ごはんにはちょうどいい時間だよ」

「そうだな。いい景色を見ながらおいしい昼ごはんを食べられそうだね」

「うん」

「それじゃあ、出発ー！」

「出発ー！」

こうして二人は山道を歩き始めた。

「ユウタ君でこういう景色のきれいなところは好きなの？」

「好きだよ。そういえば大学時代はよく一人で山登りとか行ったなあー」

「そうなんだ」

「特に最初の1回目はちょっとした失敗があつてね、よく覚えているんだよね」

「失敗？ 何があつたの？」

「うん。そのとききれいな景色を撮りたいと思って使い捨てカメラを持っていったんだけど、持ち方がまずかったせいかほとんどの写真に指が写ってしまったってね、もう大失敗だったよ」

「それは残念だったね。それでそのとき撮った写真は結局どうしたの？」

「確か捨てちゃったかな」

「えー、もつたいない。思い出なら残しておけばよかったのに」

「それもそうなんだけど……、なんたるあまりにひどくて、せっかく撮ったきれいな景色も台無しだったから、見るのもいやになって全部捨てちゃったんだよね」

「それなら仕方ないか。じゃあ代わりに今日はきれいな写真を残そうね」

「えっ!？」

「これ見て」

見ると彼女はかばんの中からデジカメを取り出した。

「カメラ、持ってきたんだ」

「うん。せっかくこういう景色がきれいなところに来たんだし、写真は撮らないとね。ユウタ君は？」

「僕は持って来てないや」

「どうして？」

「ちょっとトラウマになっっているんだよね、さっき話したことが」

「そうなんだ。じゃあ今日は私が撮るね」

「ありがとう」

「さっそく撮ろうよ。ちょっとそこに立ってみて」

そう言つて彼女は近くの少し開けていて、周りの赤く染まった山肌が見える地点を指差した。

「ここか」

僕は少し歩いていってそこに立つ。

「はいっ、チーズ！」

“カシャッ”

こうして彼女の手によって二人の思い出の1ページが切り取られた。

68、紅葉を見るに3

68、紅葉を見るに3

11時半を少し過ぎて二人は山の頂上に到着した。目の前には看板が立てられており、そこには西松原高原最高地点1230メートルと記されている。

「さあ着いたよ、山頂に」

「うん。でも変わってるね、この看板」

「そう?」

「だって普通、こういう山頂に立てられている看板で、山、山頂、メートルって感じじゃない?」

「そういえばそうだな。でも多分それはここが山じゃなくて、高原全体の一部として見られているからじゃないかな。だからここは高原の最高地点だよっていう看板になっているんだと思うよ」

「あー、なるほど、そういうことか」

「さてとじゃあ、疑問も解決したところでそろそろお昼ご飯にしようか」

「待ってー、そのまえに看板の前で写真とろう」

「それもそうだな」

「それじゃあ看板の横に立ってみて」

「えっと……、こんな感じかな」

「そう言っただけは看板の横に立つ」

「はいっ、チーズ!」

“カシャッ”

写真を取り終わってすぐ彼女が声をかけてくる。

「それじゃあ、昼ご飯に……」

「ちよつと待って、せっかくだし二人で写った写真もとろうよ」

「そうだね。あっ! でも私、今日三脚忘れちゃったなあー」

「そうか、じゃあ誰かに頼もうか」

そんなことを話していたとき、そばにいた別のカップルの男性の方が僕らに話しかけてきた。

「あのー、すみません」

僕が対応する。

「はい」

「写真を撮ってもらえませんか？」

「はい、いいですよ」

僕は笑顔でそう答える。

「ありがとうございます」

するとそう言っただけで彼は僕にカメラを渡してくれた。そしてその二人のカップルは看板の右側に並んで立つ。

「はいっ、チーズ！」

“カシャッ”

「すみません、ありがとうございます」

「ありがとうございます」

「いえいえ、どういたしまして」

そう言っただけで僕はカメラを彼に返す。

「あのー、もしよろしければお撮りしましょうか？」

「えっ!？」

僕は思わぬ言葉に少し驚く。

「お礼に撮りますよ、写真」

「ありがとうございます。じゃあ、お願いします」

「ありがとうございます」

二人はお礼を言って、僕はカメラを彼に渡す。そして二人は看板の右側に並んで立つ。

「はいっ、チーズ！」

“カシャッ”

「すみません、ありがとうございます」

「ありがとうございます」

「いえいえ、こちらこそ。さっきのお返しなので」

写真を撮ってもらった僕は渡したカメラを返してもらった。

「えっと、これからどちらへ」

「僕らこれから下山するところなんです、さっき昼ご飯を食べ終わっただけ」

「そうなんですか。それじゃあ、お気をつけて」

「気をつけて行ってください」

「はい、ありがとうございます」

「ありがとうございます」

こうして僕は二人を手を振って見送った。

しばらくして見えなくなると彼女が僕に話しかけてくる。

「なんか私たちに似てるね」

「そうだな。仲の良さそうなカップルだったね」

「うん。じゃあ、お昼ご飯にしよう」

「うん」

そして二人は持ってきたレジャーシートを広げ、昼ご飯の準備を始めた。

69、紅葉を見に4

69、紅葉を見に4

レジャーシートを広げた二人はその上に座る。彼女が自分の荷物から弁当を取り出し、フタを開ける。

「おいしそう」

「たくさん食べてね」

「うん。それじゃあ、いただきますーす」

「いただきますーす」

僕はさっそくおにぎりを二つ手に取り、口にはお張る。

「どうかな？」

「うん、おいしいよ」

「よかったー」

「あとでこっちのおかずも食べてね」

「うん」

二人は周りの景色を眺めつつ話しながら弁当を口に運んでいく。

「それにしてもホント、ここ、いい景色だよね」

「そうだね」

山の山頂は木が少なくやや開けた状態になっていて、そこから見える周りの山の山肌は赤や黄色のきれいな紅葉で染められている。

「ユウタ君ってさっき言っていたけど、きれいな景色、好きなんだよね」

「そうだけど」

「何か思い出っていないの？」

「えっ、さっき話さなかったけ？」

「うん。だからそれ以外にないのかなって？」

「なるほど、そういうことが」

「うん。で、どうなの？」

「あるよ」

「じゃあ、聞かせて」

「分かった。いろいろあるけど一番の思い出は夕日かな」

「ユウタ君、夕日好きだもんね」

「うん。僕、高校時代に自転車通学してたんだけど、行き帰りが海岸沿いの道でね、そこから見える夕日がとてもきれいだったんだ」

「へえー、いいね」

「そういえば写真があるんだけど、見る？」

「ホント!? 見る見る」

すると僕はポケットの中から携帯を取り出し、一枚の写真を見せる。古い写真で画素が少しぼやけ気味ではあったが、そこには海岸沿いの道から見える海に沈み行く夕日が写っている。

「わあー、ホント、きれいだね」

「だろー。僕は高校のときは学校まで12キロ以上もあつただけど、それを自転車で通っていたんだよね」

「12キロ!? すごいね。ずいぶんかかったんじゃない？」

「そうだね。だいたい1時間弱ぐらいかな。ホント、毎日大変だったよ」

「ねえ、それって電車通学とかはできなかったの？」

「できたよ」

「じゃあ、どうして自転車通学したの? やっぱりお金の関係？」

「うーん、それもあるけど…、一番は運動のためかな。あと帰りに寄り道できたり、さつきも言ったようにきれいな夕日も見れたりしたしね。大変だったけど、結構楽しかったよ」

「そうなんだ。それじゃあ、意外と楽しんでたんだね」

「まあ、そうだね」

こうして二人は楽しい話をしながら、きれいな景色を眺めつつ、昼食を食べていった。

70、紅葉を見に5

70、紅葉を見に5

12時を少し過ぎた頃、昼ご飯を食べ終わった二人はレジャーシートをたたみ、下山の準備をする。荷物を持った僕は彼女に声をかける。

「どうする？ もう降りる？」

「そうだね。遅くなって途中で暗くなってきてもいけないし、もう行こうか」

「うん。それじゃあ、出発」

「出発」

下りは行きと違い、やや急な斜面が多く二人は足をとられながら、戸惑いつつもゆっくり確実に下りていった。

しばらく下っていくと目の前に見覚えのある二人が座っていた。

「こんにちは」

「こんにちは」

僕らはそろって声をかける。すると男性のほづが挨拶を返してくれた。

「あつ、こんにちは。先ほどはどうも」

「いえいえ」

どうやら山頂で僕らの写真を撮ってくれた二人のようだ。よく見ると男性のほづは元気なようだが、女性のほづは座ってうずくまっている。

「どうかされましたか？」

ミカが気づかって女性に声をかける。

「……」

彼女は険しい表情を浮かべ、何も答えない。それで今度は僕が男性のほづに尋ねてみた。

「どうしたんですか？」

「はい、どうも彼女、その段で足を滑らせてしまったみたいで、立てなくなってしまったみたいなんです」

そう言っただけは後ろにあるやや高さのある段差を指差した。見るとそこは80センチほどの段差があり、滑りやすくかなり危険な感じである。先ほどから思っていたことなのだが、この山の下山路は登山路に比べて整備が行き届いておらず、危険な斜面が多い。どうやら彼女はその一つに足をすくわれてしまったようだ。

「救急車は呼びました？」

「いや、まだ。どうも、ここ、圏外みたいで」

言われて僕は携帯を取り出し、アンテナを確認する。そこにははっきりと圏外と表示されていた。

「圏外か、まいったなあー、どうしようか？」

「立てないんですね？」

「は、はい。い、痛っ！」

「あー、無理に立たなくていいですよ」

「これは骨折してる可能性もありそうだな」

「確かここ、駐車場も圏外だったよね」

「そうだっけ？ それじゃあなんとかして駐車場にあつた管理センターまで戻るしかないなあー。よしっ！ 分かりました。一緒に降りましょう」

「一緒に!？」

「一人じゃあ、荷物もあつてとても無理ですよ。僕らが手伝いますよ。ねえ、ミカ」

「うん」

「そんな、すみません。ありがとうございます。助かります」

「えっと、じゃあ、彼女は……」

「とりあえず僕がおんぶして降りて行きます」

「そうですね。では荷物、持ちますよ」

「お願いします」

そして彼は座り込んでいた彼女をおんぶし、僕ら二人は荷物を持っ

て、4人は急な斜面に気をつけつつゆっくりと確実に下りていった。

71、紅葉を見るに6

71、紅葉を見るに6

4人は急な斜面に気をつけながら身長に山道を下っていく。

一緒に下り始めてから1時間、山頂から7割ほど下りたところで彼におんぶされていた彼女が突然声を上げた。

「ちよつと待って!」

「えっ!？」

その声に反応して彼女の彼が後ろ振り向く。

「どうしたの?」

「止まって!」

そう言われて僕らは立ち止まった。

「見て! この景色」

彼女はそう言つて少し開けたところから見える山肌を指差した。

3人はその方向に顔を向ける。僕は思わず息を呑んだ。

「す、すげー……」

「す、すごい……」

「こ、これは……」

3人はそれぞれ景色に見とれ、感嘆の声を上げていた。ここは山頂から見える山肌のちょうど反対側に当たる。つまり山頂から全く見えない景色だ。しかしこここそがこの西松原高原、最大の名所、虹色の山肌であった。まさにその名のとおり、深い赤、赤、黄色の順で山肌が縞模様になるように染まっており、まさに圧巻と言った感じの景色である。

「ねえ、写真とろう」

「そうだな」

「それじゃあ撮りますよ」

「そうですね? すみません、お願いします」

僕は彼からカメラを受け取るうとする。しかしそれをおんぶされて

いた彼女が呼び止めた。

「待って、せつかくだし4人一緒に撮ろう」

「4人一緒にか、でも僕ら三脚持ってないよ」

「僕らも持って来てないなあー」

「そうか、じゃあどうしよう……？」

そしてしばらくの間4人は黙って考え込む。

2分後、ミカが何かを思いついたのか話を始めた。

「ねえ、ユウタ君」

そう言っただけで彼女は僕の肩を叩く。

「ん、何？」

「あそこの岩の上にカメラを置いてセルフタイマーを使ったらどうかな？」

そう言っただけで彼女は目の前の上が平らになっている岩を指差した。

「いいね、それ。どうですか？」

「いいですね。そうしましょう」

「それじゃあ、まずは僕らのカメラを」

「セットするね」

「うん」

ミカは1分ほどでカメラのセットを済ませる。

「それじゃあできたので並んでください」

「よしっ！」

「はい」

僕と彼女をおんぶしている彼は山肌を背景にカメラの前に立つ。

「ミカ、大丈夫？」

「ちょっと待って、今確認するから」

彼女は1分ほどデジカメの画面を確認して声を上げた。

「これで大丈夫かな。それじゃあ、私も……」

こうして4人は山肌を背景に並んで笑顔を見せる。

“カシャッ”

そしてカメラのシャッター音が鳴り響き、4人の思い出の1ページ

が切り取られた。

「上手く撮れてるかな」

「見せて」

4人はデジカメの記録に目を通す。

「おっ、上手く撮れてるね」

「そうですね。それじゃあ、僕らのカメラの方もお願いします」

「はい」

「じゃあ、貸して下さい」

「えっ!？」

「おんぶしたままじゃ無理ですよ。私がやりますよ」

「じゃあ、お願いします」

「ありがとうございます」

今度は彼らのカメラで先ほどと同じような写真が撮られた。

その後ついでに10分ほど休憩を取った4人は再び協力して山道を下りていった。

72、紅葉を見に7

72、紅葉を見に7

山を下り始めてからおおよそ4時間、4人はやっと思いで駐車場まで到着した。

「はあっ、やっと着いたな」

「うん、ホント、大変だったね」

「ありがとうございます。二人が協力してくれたのおかげでなんとか無事に下りてくることができました。ホント、何とお礼を申し上げます。たらよいか」

「いえ、そんな、困っているときはお互い様ですから。当然のことをしたまでですよ。ねえ、ミカ」

「うん。だから気にしないでください」

「ホント、ありがとうございます。ほら、ミキ」

そう言っただけは後ろにおんぶしている彼女を確認する。

「……」

しかしなぜか返事が返ってこない。

「ん」

どうやら彼女は彼の背中の上で眠りについてしまっているようだ。

「あっ、疲れて眠っちゃったみたいですね」

「あちゃー、ホント、すみません」

「いいですよ。それにむしろ痛みを苦しんでいる様子もなくて、かえって安心しました」

「ねえ、ユウタ君」

「何？」

「私、管理センターに行っただけで事情を説明してくるね」

「ああ、頼んだよ」

「そんな、それくらい僕が自分で……」

「いいですよ。ここで待っていてください。せっかく彼女も気持ち

良さそうに背中であぐらをかいて眠ってるんですから」

そう言っただけでミカは管理センターに向かって走っていく。

「ああ……」

「それじゃあ、僕ら3人はあそこのベンチに座って待ってましょ
うか」

そして3人は駐車場内にあるベンチの前に行き、彼はおんぶしてい
た彼女を降ろして座らせ、その横に二人で並んで座った。

「そういえば、僕らの名前、言っただけじゃなかったよな」

「あつ、それなら僕らも……」

「あははっ、お互いに忘れてましたね。それじゃあ、僕から、井上
勇太といます。それから彼女は藤井美香。よろしくお願ひします」

「こちらこそよろしくお願ひします。僕は上田新といます。彼女
は隅田美紀です」

互いに名前の紹介を終えた二人はそれぞれの関係について話し始め
た。

「つかぬことをお聞きしますが、彼女とはつき合ってたどのくらいに
なるんですか？」

「そうですね。確か今年で4年目くらい」

「へえー、長いですね」

「ええ、まあ。そちらは何年くらい？」

「何年なんて、そんな、まだつき合ってた1カ月ちょっとって感じ
ですかね」

「1ヶ月ですか。でもずいぶん仲がいいんですね」

「うーん、そうかな？」

「はい、とても良さそうに見えましたよ」

「ははっ、なんだかそう言われるとちょっと恥ずかしいなあー」

「はははっ」

二人は笑い声を少し上げていると、ここでミカが管理センターから
戻ってきた。

「お待たせー。救急車、呼ぶって」

「そうか。ありがとう、ミカ」

「ありがとうございます」

「どういたしまして。それで二人で何、笑ってたの？」

「ん、えっ!?!」

「えっ!?!」

少し驚いて二人は顔を見合わせる。

「ちよつとね、でも大したことじゃないよ」

「そうなの？ ならいいけど……」

「それじゃあ、救急車も来るみたいだし、僕らは帰ろうか」

「うん」

そして眠っている彼女を横に3人は互いに向かい合ってあいさつを交わす。

「今日は本当にありがとうございました」

「いえいえ、4人一緒でとても楽しかったですよ。こちらこそありがとうございました」

「ありがとうございます」

こうして僕らは二人と別れると車のところに戻っていった。

73、紅葉を見に8

73、紅葉を見に8

二人を乗せた車は夕暮れの道を駆け抜けていく。道は夕日で赤く染まり、幻想的な雰囲気だった。僕は運転しながら隣にいる彼女に声をかける。

「ミカ」

「……」

返事が返ってこない。もう一度呼んでみる。

「ミカ」

「……」

チラツと横を向いて確認してみる。

「スー……、スー……」

すると静かな寝息が聞こえてきた。どうやら疲れて眠ってしまったようだ。起こすと悪いと思った僕はそのままにしておく。

しばらくして車は行きでも通った山道にさしかかった。車はゆっくりとその道を登っていく。

登り始めて10分後、車は山頂付近へとたどり着いた。そこで僕は目の前の夕日に目を奪われ、思わず車をわきに止めた。相変わらず寝ている彼女を起こす。

「起きて、ミカ」

「……」

よほどぐっすり眠っているのかすぐには起きない。そこで僕は少し声を大きくして呼びかけた。

「起きて！ ミカ！」

「……、はあーあ、うーん……、なに？」

「見てごらん、目の前を」

「ん、なに？ ……、わあっ！」

「気づいた？」

「きれいー。こじ、どじ？」

「行きで通った山道の山頂だよ。さあ、降りてみようか」

「うん」

二人は車を降りて外に出ると、道路をまたいだ先に並んで立つ。上空の空は厚い雲で曇っていたが、目の前の西側に空は雲がなくきれいに晴れている。夕日の色はそこだけ晴れていたせいか、いつも眺めていたものより一層深い赤に染まって見えた。僕は彼女にそつと声をかける。

「ミカ」

「なに？」

「好きだよ」

「私も、好き……」

二人は赤く染まりゆく夕日の前で互いに向き合った。そしてゆっくりと唇を近づけていく。

長いキスだった。しかししばらくして彼女があるものに気がついた。

“ポツツ”

「あつ！」

彼女は少し声を上げて唇を離す。

「どうしたの？」

「雨……」

「えっ!？」

二人は上を見上げる。

“ポツポツ……、ザー、ザー……、ザザー……”

「わあー、降ってきた」

「急いで戻ろう」

二人は手をつないで車に走り戻った。

「いきなりだったね」

「うん。でもあまり濡れなくてよかった」

「そうだな。じゃあ、出発するか」

「うん」

こうして二人を乗せた車は降りしきる雨の中を、再び走り始めた。

74、平日21

74、平日21

月曜日の朝、電車を降りた僕は珍しく一人だった。会社に向かう道を歩き始めると後ろから声をかけられる。

「おーい、ユウタ」

「ん」

僕は後ろを振り向いて声の主を確認した。それは友人の西原君だった。

「おはよう」

「おはようっす」

二人は挨拶を交わし、一緒に話しながら歩いていく。

「珍しいな、お前一人だなんて。どうしたんだ彼女は？ 一緒じゃないのか」

「うん、急に早朝出勤が入っちゃってね、それで今日は彼女にメールしていつもより早く出てきたんだ」

「なんだ、お前もか」

「えっ!？」

「実はさ、今日は俺も早朝出勤なんだよ」

「偶然だな……、えっ、いや、待てよ……」

「どうしたんだ？」

「あー、なんだ、そういうことか」

「なんだよ、なんだって」

「早朝出勤の理由だよ。電話で言ったんだ部長が、朝一で営業に行ってもらうことになったからって」

「朝一で営業……、あっ、そういう俺も同じようなこと言われたな」

「つまりこれから会社に行ったら、一緒に営業に行くってことだな」
「なるほど、そういうことか」

「お前さ、朝、大変だったんじゃないか？」

「えっ、どうして？」

「だって彼女、妊娠中だろ、朝、どうだったんだ？」

「ちゃんと起こしてくれたけど。てか、会社からの携帯をとってくれたのも彼女だったなあー」

「マジか。すごいなあー、なんか至れり尽くせりって感じだな」

「まあな。ホントすげーよ。確か前にも言ったけすごく頑張ってるって」

「うん、聞いた、聞いた」

「毎日、感謝、感謝だよ」

「あっ、そういえば1つ気になっていたことがあったんだけど聞いてもいい？」

「何？」

「お前さ、彼女と子供なんていつできたんだ」

「えっ!？」

彼は思わぬ質問にかなり驚いている。

「いやだってさ、それで結婚したんだろ。普通したあとだろ、子供ができるなんて」

「そりゃそうだけど……、うーん、これは少し恥ずかしいけど……、話してやるか、お前も関係してるし」

「えっ、そうだったのか？」

「うん。覚えてるか、8月の中頃にしたデートの話」

「8月の中頃……、あっ、あの海に行くって話か」

「そう、それだよ。実はそのとき、帰りに二人でホテルに行ったんだよ」

「なるほど、で、その後は……？」

「分かるだろ、言わなくても」

「はははっ、ごめん、ごめん」

「まあ結婚する気はあったけど、まさか本当にできるとは思わなかったな」

「ふーん、でもそういうもんだろ、ある種勢いでって感じ？」

「さすがにそれはないだろ、酷い言いかただなあー」

「ははっ、冗談だよ」

「でもお前も注意したほうがいいぜ、子供は」

「えっ!？」

「いやさ、俺の場合はよかったけど、必ずしもそううまくことが進むってものじゃないからな。だから結婚してからの方がいいぞ、子供は」

「まあ、そうだな。何も無いと思うけど、一応注意しておくよ」

「幸せになれよ、応援してるからさ」

「そうか、ありがとう」

ここで二人は会社の入口の自動扉をくぐる。そして二人はそれぞれ自分たちのオフィスへ向かっていった。

75、平日22

75、平日22

月曜日の朝8時、僕は会社の入り口を出たところで一緒に営業に行く西原君を待っていた。しばらくして西原君が降りてきた。

「おっすー」

「お待たせー、悪いなちよつと待たせてしまつて」

「いいよ、俺もついさつききたところだから」

「そうか。で、今日はどこだっけ？」

「えつと、新古川工業だよ」

「えつ、待てよ。確かそこ先週、行かなかつたか？」

「うん、実はそうなんだけど、今日になって工場の生産ラインが稼働する朝9時より前に、その契約内容の確認をしたいんだつてさ」

「へえー、またえらい急にだな」

「うん、多分何か不備があつたんじゃないかな、まあ、聞いてみないと分からないけど」

「だな。それは行つてからつてことか」

「うん」

二人は始め、目的地向かうまではこんなことを話していた。ここで僕が話の話題を変える。

「あー、そういえばさ朝、彼女とのデートの話してたじゃん」

「うん」

「それでさ、もう少し彼女に関して、聞かせてくれよ」

「えー、恥ずかしいな」

「いいじゃん、別に悪いこと聞いてるわけじゃないんだからさ」

「そりゃそうだけど……、まあ、いいか、じゃあ、話してやるよ。

何について聞きたい？」

「そうだなー、じゃあお前、いつから付き合い始めたんだ」

「去年の今ごろぐらいからだつたかな」

「へえー、じゃあ、ちょうど付き合って1年ぐらいで結婚したのか」
「うん、まあな」
「で、お前はどっちなんだ？」
「どっちって？」
「告白したのがどっちだったってことだよ」
「あーね、確か去年の俺の誕生日だったかな、彼女に告白されたよ」
「誕生日にか、いいね。お前の誕生日いつだったけ？」
「11月7日だよ」
「えっ、待てよ、それ今日じゃねえか」
「はは、そうだな」
「何て言われたんだ、そのとき」
「うん、昼休みに呼び出されて」「好きです、付き合ってください」
「って言われたよ」
「で、感想は？」
「感想!？」
「うん」
「うれしかったかな……」
「……、ん、もしかして両想いだったのか？」
「うん。まあ、お互いに全く気付いてなかったからあとでビックリしたんだけど」
「なるほど、それじゃ俺と同じだな」
「それもそうか……、いやでも、ちょっと違うな」
「えっ、どっして?」
「だってお前らの場合は両想いだったお互いに気づいてたじゃねえか」
「それはそうだけど……」
「だからあまりドキドキはしてなかったはずだぜ、彼女も」
「ドキドキ……、あー、そっいえばそうだったよ」
「だろ」
「うん。なんか雰囲気だって感じだったかな」

「やっぱりか」

「あっ、そういえばお前、今日誕生日なら、帰ったら何かあるかもしれないぜ」

「えっ!?!」

「何とぼけてんだよ、誕生日パーティーに決まってるだろ」

「そうかな？ 朝何もなかったけど……」

「じゃあ、内緒にしてるんだな」

「ははっ、そうかもな」

ここで二人は足を止める。

「おっ、着いたな」

「うん」

「じゃあ、行くか」

「おう」

こうして二人は入り口をくぐり、受付を済ませ、エレベーターに乗り込んだ。

76、平日23(前書き)

改名しました。サトシ”レンタン”です。
これからも引き続きよろしくお願いします。

76、平日23

76、平日23

午前9時前、一旦営業を終えた二人は会社に戻ってきた。僕は入口の前で出勤してきたミカを発見する。

「おい、ミカ」

僕は手を挙げて声をかけた。ミカは僕に気がついて走って駆け寄ってくる。

「おはようー」

元気に声を返してくれた。

「おはよう」

「じゃあ、俺は先に行ってるな」

西原君は気を遣ってくれたのか先に入り口をくぐって行った。

「うん」

「あつ、ごめん、大丈夫だった？」

「大丈夫だよ。今、朝一の営業から戻ってきたところだから」

「そうなんだ。上手くいった？」

「うーんどうなんだろう……、別に大したことじゃなかったからなあー」

「そうなの？」

「うん。単に向こうの工場の生産ラインの関係で納品できる量が減ったから、契約内容を調整し直したいっていう話だったからね」

「なるほど……、あれ？ユウタ君で営業だけど、そんなこともやってるの？」

「そんなことって？」

「いや、だってさ、営業の仕事って普通製品を売り込むことじゃないの？」

「あーね、うんまあ、そうなんだけど。うちは単にそれだけじゃなくてこちらから契約をするときに、なるべく有利な条件に持ってい

くための交渉もやっているんだ」

「へえー、知らなかった」

「うん、だから今日はその関係でってことだね」

「あつ、やばい。もう9時だ！ 行かないと」

「ごめん、変に引き止めて話し込んだね、急ごう」

「うん」

二人は急いで入り口をくぐり、エレベーターに乗り込む。

「ユウタ君はまたすぐに営業に行くの？」

「いや、今日はあともう昼からかな。ミカは？」

「私はこれから新しく企画した商品に関する会議の資料を作らないといけないんだ」

「そうなんだ。ってことは午後から会議？」

「うん」

「そうか。じゃあ、がんばってね」

「うん、頑張るよ。ユウタ君もお仕事、頑張ってね」

「うん、ありがとう」

ここでエレベーターは4階に到着する。

「じゃあねー」

「うん、じゃあ」

ミカは手を振ってエレベーターを降りて行く。そしてエレベーターはさらに僕を5階まで運んでいった。

77、平日24

77、平日24

水曜日の夕方、珍しく仕事を早く終えた僕は電車に乗り、東三橋駅で降りて帰り道歩いているところだった。後ろから聞き慣れた声が聞こえてくる。

「ユウタくん」

（ミカだ）

「ミカ」

僕は手を挙げて後ろを向き、名前を呼んだ。ミカは僕のもとに走ってきた。

「帰り？」

「うん」

二人は手をつなぎ並んで歩き始める。

「珍しいね、金曜日でもないのにこんなに早いなんて」

「うん、まあね。今週はそこまで忙しくなくてさ、それで今日は早く仕事が終わったんだ」

「そうなんだ。なら、メールしてくればよかったのに」

「あー、そうすればよかったね、すっかり忘れてたよ、ごめんごめん」

「いいよ、気にしないで。こうやってたまたま一緒に帰れただけでもうれしいから」

「そうか。そう言ってもらえるところいいよ」

「あっ、でもってことは同じ電車に乗ってたことだね」

「そうだな」

「どうして気づかなかったんだろう……」

「それもそうだね。でもそれは多分、駅のホームに来た時間が違ったからじゃないかな。何時来たの、ミカは？」

「えっと、確か5時38分だったかな。ユウタ君は？」

「僕は5時42分だったよ」

「つてことは、乗った電車は5時45分のだね」

「うん」

「何号車に乗ったの？」

「それはさすがに覚えてないなあー、でも前のほうだった気はするけど……」

「私は後ろの方だったな」

「なるほど、どつりで会えないわけだね」

「うん。でもここで会えてよかったね」

「うん」

ここで二人は立ち止まり笑顔を浮かべ、互いに向き合う。

「ミカ」

僕はそつと名前を呼んだ。

「ユウタ君……」

互いに呼びかけ合った二人はゆっくりと唇を近づけていった。

キスは長かった…。夕日で赤く染まる中、二人は強く求め合う。夕

焼けの深い赤はそんな二人をやさしく包み込んでくれた。

しばらくして名残惜しむように二人は唇を離す。そしてミカはそつと僕にこう呟いた。

「ありがとう……」

思いがさらに深まった瞬間だった。

その後、二人は再び手をつなぎ、温もりを感じ取りながらゆっくりと歩いて行く。

それから彼女の家に帰りつくまで二人はあえて何も話さなかった。声に出さなくても感じられる思い、そんなものを二人は握りしめていた。

彼女のアパートの着き、彼女が口を開く。

「じゃあね」

「うん、じゃあ、また明日」

つないでいた手を離し、手を振って二人は別れた。

78、平日25

78、平日25

金曜日の駅から帰り道、僕は彼女と一緒に家までの道を歩いていた。時間は7時過ぎ、日はすでに沈み、辺りは薄暗くなり始めている。

「暗くなってきたね」

「うん」

「ねえ、ちよつと肌寒くない？」

「そうだね。そういえばミカ、コートは？」

「うんうん。着てこなかったんだよね、朝は日が差していて結構暖かったから」

「そうか。なら、コート貸そうか？」

「えっ、いいよ。そしたらユウタ君が寒くなっちゃうでしょ」

「そうだけど……、貸すよ」

「いいの？」

「うん」

僕はそう言っつてコートを脱ぎ、彼女に着せてあげた。

「暖かいー、ありがとう」

「どういたしまして。でも珍しいね、ミカが寒いって言うなんて」

「ははは、私、寒いのは大丈夫って前に言っつたもんね」

「うん。どうしたの？ もしかして風邪ひいたの？」

「うんうん。実は今日、少し薄着だっただけ」

「薄着？」

「うん。これシャツの下に1枚しか着てなくて、それで寒かったんだ」

「1枚か、それは寒いね、確か今日は夜にかけて気温が10度を切るって言っつたから」

「10度！？ だめだな私、ちゃんと天気予報見ないと。今度から

気をつけよ」

「うん、風邪引いたら大変だもんね」

「そうだね。あっ、そういえば今週の土、日はどうする?」

「そうだなー、日曜日なら空いているけどまた、どこに行く?」

「日曜日か…、えっとね、じゃあ、初デートのときみたいに久々に街に出るってのはどう?」

「街か、いいね。久しぶりにいろいろ行こうか」

「うん。私、ちゃんと考えておくから楽しみにしててね」

「うん、期待してるよ。それで時間は何時がいいかな?」

「うーん、あんまり早く行ってもどこも開いてないだろうし、9時半ぐらいでどう?」

「9時半か、ちょうどいいや。僕、土曜日は昼からの休日出勤で遅くなるからちょうどいいや」

「えっ、また休日出勤なの?」

「うん。なんか急に今日頼まれてね。もう大変だよ」

「そうなんだ。でもそれってユウタ君、頼りにされてるってことだよね」

「うーん、そうなのかな」

「そうだよ。いいことじゃん」

「じゃあ、そう思うことにしておくよ」

「うん」

ここで彼女は頷き、笑顔で笑いかけてくれた。

「そうだな。考え方って大切だもんね」

「そうそう、大切だよ。それだけで嫌な仕事にもやりがいを感じられるようになるもんね」

「なるほど、いいこと言うね、ミカ」

「そうでしょ」

「うん」

ここで二人はミカのアパートの前に着いた。

「じゃあね。日曜日の朝は9時半にここで待ってるからね」

「分かった。じゃあねー」
こうして二人は手を振って別れた。

79、街中デート1

79、街中デート1

“ リリリッ、リリリッ ”

日曜日の朝、僕はいつもと違う音で目を覚ました。

「ん、うーん、ふあーあ、なんだ？ 携帯か」

布団の横に置いてある携帯を手に取り、中を確認する。

「メールか」

彼女からメールが来ていた。中身を読んでみる。

（もう10時だよ。どうしたの？）

「えっ、10時!？」

僕は思わずその声を上げ、目覚まし時計を見る。それは確かに午前10時を指していた。

「いつけねー、寝過したか」

とりあえず身体を起こした僕は彼女にメールを送る。

（ごめん、寝過しちゃった。今すぐに用意して行くから待ってて。）

という内容のメールを送り起き上がって、急いで身支度を済ませる。その途中で彼女から返信がきた。

（よかつたー、何かあったわけじゃなくて。じゃあ、急がなくていいよ、ちゃんと待ってるから。）

彼女は優しい。メールの文面から推測するに全く怒っていないらしく、むしろ僕のことを心配してくれていたようだ。

しかしながらやはり待たせると悪いので、急いで身支度を済ませた僕は10時15分には家を出た。

家から走ってきた僕はアパートの前で立っていた彼女に声をかけた。

「おはようー、ごめん、遅くなって」

「あつ、ユウタ君、おはようー、遅かったね」

「うん。ホント、ごめんね」

僕は彼女に頭を下げ謝る。

「いいよ、まだ1時間も待ってないから」

「1時間も待つてないって……、でも50分は待たせちゃったよね。あー、大遅刻だな、はあっ」

「そうだけど……、いいよ、ちゃんと来てくれたから。それよりこんな話してないで早く行こう」

「うん」

二人は並んで手をつなぎ、駅まで歩き始める。

「でも珍しいね、ユウタ君が寝坊するなんて、何かあったの？」

「そうだなあー、やっぱり昨日、寝るのが遅かったからかな」

「何時に寝たの？」

「えっと、確か3時は過ぎてたような……」

「3時!？」

「うん」

「どうしてそんなに遅くなったの？」

「いやー、実はさ、昨日仕事が終わった後、課長に飲み屋に誘われて、そこで2時ぐらいまでつきあっちゃったんだよね。そしたら家に着いたころにはもう2時半を過ぎていて、それから風呂入ってすぐに寝ただけで、うっかり目覚ましをセットし忘れてたんだ」

「そうだったんだ。それは大変だったね」

「うん。まさか2時までつき合わされるとは思わなかったよ」

「ねえ、じゃあ、今日は二日酔いで疲れてるんじゃない？」

「二日酔いか。うーん、そうでもないな」

「えっ、飲まなかったの？」

「いや、飲んだけど、今日のこと考えて控えめにしてたからね」

「そうなんだ。ちゃんとデートのこと、考えてくれてるんだね」

「うん。まあ、二日酔い状態じゃデート楽しめないし、当然だよ」

「ふふふっ、じゃあ、今度は寝坊しないように気をつけてね」

「そうだな。次からはちゃんと気をつけるよ」

「うん」

二人はこんな会話をしながら駅まで歩いて行った。

しばらくして二人は駅に到着する。

「今日はどこまで行くの？」

「私が決めていい？」

「うん」

「そうね、とりあえず……、春町まで行こうかな」

「春町！？　じゃあまず、隣の三橋駅まで行って乗り換えるの？」

「うん」

「春町か、あまり行ったことないなあー、どこに行くの？」

「それは行ってからの楽しみだよ」

「そうか。じゃあ、楽しみにしておくよ」

そして二人は春町までの切符を購入し、電車に乗り込んだ。

80、街中デート2

80、街中デート2

約25分後、二人は春町に到着した。駅を出て街中を並んで歩き始める。

「へえー、ここはまた中宮や高倉とは違う感じだね」

「そうね。あつちはオフィス街が中心で、こっちはショッピング街って感じかな」

「なるほど。ってことは今日はミカ、服でも買いに行くの？」

「うん。ユウタ君、退屈するかもしれないけど行ってもいい？」

「いいよ。ミカがいろんな服を見てる姿、見てみたいから」

「じゃあ、まずは『SUGO』に行こうかな」

「何分ぐらい歩くの？」

「えっと、ここから5分くらいだよ」

「5分か、じゃあ、すぐだね」

「うん」

ここで僕が話題を変える。

「そういえば、ミカってさ、休日は普段、何してるの？」

「休日ってユウタ君と一緒にいないときのことだよな」

「うん」

「そうだなあー、最近はゲームが多いかな」

「ゲームか、どんなソフトやってるの？」

「ポケモンだよ。孵化や育成ばかりだけど……」

「ポケモンか、そういえばこの前一緒にやったよね」

「うん。私、ユウタ君が変わったポケモンばかり使っていてとてもビックリしたよ」

「変わったポケモン……、まあ、僕はマイナー使いだからね。いわゆる厨ポケはほとんど持ってないんだよね」

「そうなんだ。でもそれって、勝てなくて辛くない？」

「辛いけど…、それでも頑張って勝てるように努力するのは楽しいよ」

「それはそれで面白そうだね」

「うん。ミカは結構メジャーでかわいいポケモンばかり使ってたよね」

「うん。だって負けてばかりだと楽しくないし」

「まあ、普通はそうだよな。やっぱ僕って変わりものなのかな？」

「そんなことないと思うよ。私の女友達に一人、ポケモンをやっている人がいるけど、マイナーばかり使ってるよ」

「へえー、それは一度対戦してみたいな」

「じゃあ、今度やってみる？」

「えっ、できるの？」

「うん、だってユウタ君がよく知ってる人だもん」

「えっ、誰？」

「受付の人だよ」

「ああ、田中さんか。彼女やってたんだ」

「うん。今度頼んでおくね」

「よし、じゃあ新しいパーティーでも作ろうかな」

「私も二人に合わせてマイナーなポケモン育ててみるね」

「ホント!？」

「うん」

「それは楽しみだな」

「負けないよ」

「受けて立つよ」

そして二人は『SUGO』に到着した。

「ねえ、着いたよ」

「ここか」

「入ろうか」

「うん」

こうして二人は中に入って行った。

8 1、街中デート3

8 1、街中デート3

デパートに入った二人はエスカレーターに乗って上の階に上がっていく。

「ねえ、何階に行くの？」

「えっと、私のほしい服が6階にあるから、6階かな」

「6階か。そういえばミカはここ、よく行くの？」

「うーん、たまに友達と一緒に行くぐらいかな」

「へえー、意外と少ないんだね」

「うん。ここいい服売ってるんだけど、ちょっと遠くてあまり行かないんだ」

「そうなんだ。確かに電車も乗り換えないといけないし結構遠いもんね」

「そうそう」

「じゃあ、今日はたくさん買わないとね」

「うん。だからユウタ君も似合うか一緒に見てね」

「分かったよ」

二人は服を選ぶの楽しみにしながらエスカレータを上っていく。

5分後、二人は6階に到着した。

「今日は何を買うの？」

「そうね、やっぱりスカートかな、まずは」

「スカートか。でもこれからの時期だと寒くない？ スカート」

「そうだけど……、着たんだよね、女の子らしくてかわいいから」

「それは確かにそうだね」

「さっそくだけど、一緒に見てね」

「うん」

そして二人はスカートが売られている店に向かう。

「どれにしようかな」

「どんなのが好きなの？」

「やっぱりかわいいのかな」

「かわいいのか。長さは？」

「えつとね……、普段は膝上くらいまでの長さのしか買わないんだけど、今日は思い切ってミニにしてみようかな」

「ミニか。色は？」

「色はね……、パステルカラーがいいかな、薄いピンクとか、薄い水色とか、私、落ち着いた色が好きなんだよね」

「なるほど、落ち着いた色……」

二人は話をしながらかけられている服を見ていく。

10分後、僕は1枚のスカートを取って彼女に見せる。

「ねえねえ、これなんてどうかな？」

「えっ！？ もしかしてユウタ君、選んでくれてたの？」

「うん。あれ、気づかなかった？」

「うん。ちよっと夢中になってたから」

「そうか。で、どうかなこれ？」

そう言っ僕は薄い水色で下にハート形の空洞が空いているミニスカートを見せた。

「いいね。うーん……、でも、ちよっと短過ぎて恥ずかしいなあー」

「そう？」

「うん。ユウタ君のエッチ」

「あつ、それ前にも言われたよね」

「あー、言った、言った。確か遊園地に行った時だよ」

「そうそう、あれはとても刺激的な格好だったな」

「……、どうしよう、せっかくだし試着してみようかな」

「えっ、着てくれるの？」

「うん」

そして彼女は服を持って試着室へと向かった。

“サー”

3分後、スカートをはいた彼女がカーテンを開けた。

「どうかな？」

「いいんじゃないかな、セクシーで」

「そうね」

彼女は後ろを向いて鏡を確認しつつ、悩むしぐさをしている。

「よし！ 決めた、買おうっと」

「えっ！？ 買うの？」

「うん。さっきはちょっと嫌かなって思ったけど、結構いいかもね、たまにはこういうもの」

「そうか。気に入ってくれたなら嬉しいよ」

「じゃあ、また着替えるから待ってて」

「うん、分かった」

こうして二人はいろいろ話をしながら、1時過ぎまでに5着ほどの服を購入した。

82、街中デート4

82、街中デート4

1時を少し過ぎて二人は飲食店が立ち並んでいる8階のフロアにやってきた。ここには和食、洋食、中華、ファーストフード、喫茶店など、ざっと見ただけでも10以上の店がある。

「どこにするの?」

「そうね……、まあ、どこでもいいんだけど……」

二人は案内板を見て悩んでいる。

「こういうところっていろいろあるけど、当たり外れが激しいんだよね」

「うん、そうそう。だから友達と来ても結構悩むんだけど……」

「うーん……、あつ、でも無難にこのマックに行くってのは安全でいいんじゃないかな?」

「マックか。悪くないけど、せっかくだし他のところにしなない?」

「そうなんだけど……、こういう看板だけじゃ何も分からないしなあー。ねえ、ミカは前に来たときはどこで食べたの?」

「えつと、どこだったけなあー。1ヶ月以上前だったからよく覚えて……」

「そうか。じゃあ……」

「あつ、待って!」

「えつ!?!」

ここで彼女が何か思い出したようだ。

「思い出した!」

「ホント?」

「うん」

彼女は僕のほうを向いてはっきりとうなずく。

「どこ?」

そして1つの看板を指差した。

「ここだよ、ここ」

「なになに、『うどん屋』たぬき亭」。うどんか。なんかよく分からない名前のお店だなあー」

「まあ、そうだね。でも結構おいしかったよ、このうどん」

「そうなんだ。じゃあ、大分お腹も空いてきたし、行こうか」
「うん」

二人は歩いて入口から中に入る。

「いらっしやいませ。何名様ですか？」

「二人です」

「ではテーブル席にご案内致します」

店員さんによつて二人は窓際のテーブル席に案内された。

「こちらにどうぞ」

僕らはいつも通り向かい合つて席に座る。

「ただいま水とおしぼりをお持ち致します」

「はい」

「さあーで、何にしようかな」

「うーん」

二人はそれぞれメニューを見ながら考え込む。

「水とおしぼりをお持ち致しました」

「はい」

「御注文が決まりましたら御呼びください」

「はい」

「では、ごゆっくり」

メニューを見ている彼女が僕に話しかけてきた。

「何にするの？」

「えっとね……、もしかしてミカはもう決まってるの？」

「うん。このきつねうどんだよ」

「早いなあー、待たせて悪いけど僕はもう少し考えていい？」

「いいよ、待つてるから」

僕はメニューを見て2〜3分ほど考え込む。

「よし！」

「決まったー？」

「うん。僕はかき揚げうどんにするよ」

「かき揚げうどんか。あつ、それこの前に来たときに友達が食べてたな」

「そうなんだ」

「うん。結構おいしそうに食べてたよ」

「そうか。なら大丈夫そうだな。じゃあ、頼もうか」

「うん」

僕は手を挙げて近くにいた店員を呼び寄せる。

「すみませーん」

すぐに店員の方が駆け寄ってくる。

「御注文はお決まりですか？」

「はい。きつねうどんが1つ」

「きつねうどんが1つ」

「かき揚げうどんが1つ」

「かき揚げうどんが1つ」

「以上で」

「はい。ではご注文を繰り返します。きつねうどんが1つ、かき揚げうどんが1つ、以上でよろしいですか」

「はい」

「では、しばらくお待ちください」

そう言って店員は二人の席をあとにした。

83、街中デート5

83、街中デート5

注文して5分後、二人の席にうどんが運ばれてきた。

「お待たせ致しました。きつねうどんのお客様」

「はい」

「こちらになります。かき揚げうどんのお客様」

「はい」

「こちらになります。では、ごゆっくりどうぞ」

店員の人が席を離れたところで、二人は手を合わせる。

「いただきます」

「いただきます」

二人はそれぞれ割り箸を割って、麺を口にした。

“ツルツルツ”

麺をすする時の軽快な音が鳴り響く。

「おいしー」

彼女はそう言って笑顔を見せる。

「おっ、これはおいしいね」

「でしょー、かき揚げも食べてみて」

「うん」

僕はそう言われてかき揚げをつかみ上げ、一口食べる。

“サクツ、サクサク”

「これもおいしいな、衣の食感とほどよく汁が絡まった感じが最高だよ」

「そうなんだ。ねえ、私に一口ちょうだい」

「あれ？ 食べたことないの？」

「言ったでしょ、友達が食べてたって、だから食べたことないんだ」

「そうだったのか。いいよ、あげるよ」

「やったー！ あーん」

彼女は口を大きく開けて僕のかき揚げを心待ちにしている。

「はははっ、あーんか」

「いいでしょ、別に」

「うん」

僕は口を開けて待っている彼女に、かき揚げを箸でつかみ上げ近づけた。

「いただきまーす」

“サクツ、サクサク”

「どう？」

「おいしー」

「そうか、よかった」

「この衣、汁が少し絡まってもサクサクだからいいね」

「そうだね」

ここで彼女が話題を変える。

「あっ、話し変わるけど、そういえばユウタ君、西原君が結婚したって知ってる？」

「ああ、知ってるよ、彼から直接聞いたし」

「なんだ、知ってるんだ」

「まあ、よく一緒に営業にも行く友達だからね」

「そうなんだ、私、知らなかったよ、そんなこと」

「そういえば話してなかったね、彼は話がすごく上手くていつも営業で頼りにしてるよ」

「あれ？ でも商品開発部の人と一緒に行って何するの？」

「商品の説明かな、僕よりも詳しいからね」

「へえー、そんなこともやってたんだ、うちの部署って。私、関わったことなかったから知らなかった」

「ふーん、同じ部署なのに知られてないことってあるんだね」

「うん。うちの部署、たくさん人がいるからね。誰が何やってるなんて把握してないんだ、同じようなことしてない限りね」

「そういうもんなのか。やってることがみんな一緒なうちの部署と

は大違いだな」

「だねー」

「あつ、そういえば西原君が結婚した理由は知ってるの？」

「知ってるよ、彼女に子供ができちゃったんだって」

「そうそう。実は僕その前のときに彼に最近彼女から連絡が来ないつて相談されてさ、それで家に行ってみたらつてアドバイスしたら、彼がその週の休日に行つたみたいで、行つたら「子供ができちゃつたの」つて泣きつかれたらしいんだよ」

「そうだったんだ。で、そのあとどうして結婚することになったの？」

「それはね、言いに行つたんだつてさ彼女の父親に、「僕に娘さんをください」つて、そしたら許してもらえたんだつて、結婚を」

「へえー、西原君つて勇氣あるんだなあー、ちよつと見直しちゃつた」

「ふふふつ、そうか」

このあと二人はこんな話をしながら昼ご飯を食べていった。

84、街中デート6

84、街中デート6

昼ご飯を食べ終わり、しばらく街をブラブラして時計が3時を回った頃、二人はある建物の中にいた。

「わぁー、高いー」

「うん。すごいね、ここ」

そこは市内にある最も高い建物、『春町タワー』の展望台だった。そこから二人は街を見下ろしている。

「あつ、見て見て」

彼女が何かを発見したようだ。

「ん、何？」

「あれ、うちの会社じゃないかな」

「えっ、どこどこ」

「ほら、あれ」

彼女は指差して方向を示す。僕はその指の先に目を向けた。

「分かる？」

「えっと、もしかしてあれのこと、両側に10階建ての濃い灰色のビルがあつて、その間の7階建てくらいの薄い灰色の建物の」

そう言つて僕は彼女と同じように見つけたビルを指差した。

「そうそう、それだよ、それ。どうかな？」

「うーん、遠くてよく分からないけどたぶんそうだと思うよ」

「だよ。じゃあ、手振ってみよ」

「えっ」

彼女は笑顔でその方向に向かって手を振っている。

(はははっ、冗談でやっているんだけど楽しそうだな)

しばらくそんなことを思いながら僕は彼女の様子を窺っていた。

(うーん、なんだか楽しそうだし僕も手を振ってみるか)

そう思った僕は彼女と同じ方向に手を振ってみた。

「ふふふっ、誰か気づいてくれてるかな」

彼女は少し笑いながら呟く。

「ははっ、だといいいね、遠くてよく分からないけど」

「じゃあ、月曜日に聞いてみよっか、誰かに」

「えっ！」

僕は思いもよらぬ彼女の冗談発言に少し驚きの表情を浮かべてしまった。

「えっ！」

ここで二人は顔を見合わせる。

「はははっ」

「はははっ」

そして笑いあった。

「冗談だよ、冗談」

「そうだよね、はははっ」

そんな感じで二人は少しの間笑っていたが、互いに納まったところで彼女が言う。

「ねえ、ちよっと座ろう」

「うん、そうだな」

すると二人は振り返って歩き始め、フロアの真ん中付近にあるベンチに座る。

「はあっ、なんかのど渴いたね」

「そういえばそうだね。僕、何か買ってこようか」

「えっ、いいの？」

「うん」

「じゃあね、コーラがいいな」

「コーラか、分かった」

僕はベンチから立ち上がり、同じフロアの南側にある自動販売機に向かった。

2分後、ジュースを買ってきた僕は彼女のところに戻ってきた。

「はい」

僕は右手のコーラを渡して再びベンチに座った。

「ありがとう」

すると彼女は笑顔でそう言ってくれた。

「どういたしまして」

そして僕はそう言う彼女に笑顔を返した。

85、街中デート7

85、街中デート7

展望台の上、開けた空間で二人は開放的な雰囲気を感じていた。コーラを飲みつつ彼女が話しかけてくる。

「ねえ、ユウタ君」

「何？」

「結婚ってどう思う？」

「えっ！」

僕は彼女の思わぬ言葉に少し動揺してしまふ。

「ねえ」

そう言っただけ返答を求める彼女に僕は心を落ち着かせて答える。

「えっと、どうしてそんなこと聞くの？」

「うーん、だってさ結婚したいじゃん、西原君もしたみたいだし、私憧れてるんだよね」

「そうなの？」

「うん。結婚っていいよね、ユウタ君もそう思うでしょ」

「う、うん、まあ」

「ふふふっ、なんかはつきりしないね、もしかして私のこと好きじゃないの？」

「それは……、好きだよ」

「じゃあ、言っただけ？」

彼女は何故か思いのほか積極的だった。

「えっ、何を？」

しかし僕は分かっていながらもあえて彼女をじらすかのようにそう答えた。

「もうっ、とほけないでよ、分かってるんですよ」

「う、うん」

「ねえ、お願い、言っただけ？」

そして彼女は僕にねだるように潤った目で見つめてきた。

「結婚しよ……。あー、だめだ、まだ」

僕は思わず言ってしまうそうになった言葉を直前で踏み止まった。

「えー、どうして？」

「……、まだ、早いんじゃないかな？」

素直に思っていたことを口にした。つき合い始めてまだ1ヶ月ちょっと、「まだ、早い」正直に僕はそう考えていた。

「そう……」

彼女は落ち込んでしまったのかそう言っ、頭を下げてしまった。

「ごめんね」

「……」

彼女は黙っている。

(あー、やっぱりまずかったかな……)

ところがそれは僕の思い過ぎだった。ちょっとして彼女はこう返してくれた。

「うんうん、気にしないで。ちょっと言ってみただけだから」

「そうなの？」

「うん。なんとなくそう返される、心の中では分かっていたけどちよっと期待しちゃった」

「そうだったのか。少しほっとしたよ」

「あっ、でもいつかちゃんとしてね」

「ん、何を？」

ここでも僕は分かっているながら、また分からない振りをする。

「あー、また。もうっ、分かっているでしょ」

「あはははっ、ごめん、ごめん、分かっているよ。いつかするよ、必ずプロポーズ」

「ふふっ、ありがとう、待ってるからね。“チュッ”」

そう言った彼女は僕のほっぺたにキスしてくれた。

「じゃあ、お返し。“チュッ”」

僕もキスを返す。

「ねえ、そろそろ行こう」

「そうだな」

二人はベンチを立ち上がると互いの手をしっかりと握り締め、エレベーターで下へ降りていった。

86、街中デート8

86、街中デート8

6時半を過ぎて二人は東三橋駅から帰り道を歩いていた。電車に乗る前外は多少まだ明るかったが、降りた頃には日も沈み、辺りはすっかり暗くなっている。

「ねえ、晩御飯どうしようか？」

「晩御飯……、あつ、そういえばまだ食べてなかったね」

「うん」

「そうだなあー」

僕は何かい案がないか考えてみる。

「ん、考えてるの？」

「うん。まあ、ここで別れるのもなんだからね」

「うーん、だけどさ、ここって住宅街でしょ、食べるとこなんてあるの？」

「えっと……、あつ、あるよ、思い出した」

「ホント!？」

「うん。おでんなんてどうかな？」

「おでん？」

「そう。実はね、この近くにこの時期になると開く屋台のおでん屋さんがあつてさ、1年前はよく通つてたんだ。今年ももうやってると思うから行ってみようか」

「うん、いいよ。そこにしよ」

「よし、決まりだね」

駅から二人のアパートまではまっすぐ行くだけなのだが、僕は3分ほど歩いたところにある角を右に曲がって彼女を案内した。

「ここだよ」

目の前には赤い暖簾がかかったおでん屋の屋台がある。

「へえー、こんな近くにあつたんだ。知らなかった」

「まあ、ここは笛を鳴らしてるわけでもないし目立たないからね。入ろうか」

「うん」

二人は暖簾をくぐって長椅子に座る。

「へい！ らっしやい！」

すると中から威勢の良い声が聞こえてきた。

「こんばんは」

「こんばんは」

「おっ、久しぶりだね。隣にいるのはもしかして彼女かな？」

「あっ、はい」

「おー、美人さんだね。井上さんにも春が訪れたってわけか」

「ええ、まあ。そういうことになるのかな……」

「もう、ユウタ君てば、恥ずかしいなあー」

「あはははっ、仲が良さそうで何よりだな。今日はサービスするからさ、ゆっくりしていつてくれよ」

「ありがとうございます」

「じゃあ、まずは何からにする？」

「そうだなあー、ミカは何か食べたいのある？」

「えっとね……」

彼女は目の前に並んでいる温かくておいしそうなおでんを見ながら悩んでいる。

「私、大根がいいな」

「大根か、いいね。おじさん！」

「はい」

「大根2つと……。あっ、ちょっと寒いし熱燗もらう？」

「うん」

「じゃあ、熱燗を2つ」

「はい。大根と熱燗ね」

二人は取り皿に大根が取られ、熱燗が用意されるのを心待ちにしている。

87、街中デート9

87、街中デート9

11月の中旬、季節はまだ秋だが夜ともなると辺りはすっかり冷え込んでいた。

しかし二人がいたおでん屋の屋台の中だけは暖かった。目の前の鍋からは白い湯気が立ち込めている。

「へい、お待ち！ 大根ね」

そう言っておじさんが大根の2切れ乗った皿を二人の前にそれぞれ置いてくれた。

「わあー、おいしそう」

「そうだね。あれ？ でも2つ……」

「どうしたの？」

「いや、いつも1切れだからさ」

「ああ、サービスだよ、サービス。好きだろ、大根？」

「はい。私、大根大好き」

「ははっ、そうか。やっぱおでんで大根好きじゃない人はいねえな」

「ありがとうございます」

「いいってことよ。えっと、これ熱燗ね」

二人はお銚子2本とお猪口2つをそれぞれ一つずつ受け取った。

「注ぐね」

「うん」

僕は彼女のお猪口に熱燗を注ぐ。

「あっ、あっつ」

少し熱めだったのか彼女はお猪口を落としそうになった。

「ご、ごめん。大丈夫？」

「うん。こぼさなかったから」

「そうか。よかった」

「じゃあ、私も注いであげるね」

「うん」

こうして二人のお猪口に熱燗が注がれた。

「乾杯しよ」

「うん」

「カンパイイ！」

「カンパイー！」

“チーンツ”

乾杯をすると二人は少し熱燗を口に含む。

「はあー、温かいー」

「うん、いいね、温かくて。それじゃあ、大根も食べようか」

「うん。いただきまーす」

「いただきまーす」

二人はそれぞれ箸で大根を一口大に切り口に入れる。

「あつ、あくつ」

「ダメだよ、熱いから、フーフーして冷まさないと」

“フー、フー”

「はあつ、はつ……。あつ、でもおいしい」

「ははつ、だろ」

「どうだ、美味いだろ。うちのはよく味をしみ込ませているからね」

この後も三人は話しながら、楽しくおでんを食べていった。

1時間半後、二人はたくさんのおでんと4本の熱燗でほろ酔いでお腹がいっぱいになっていた。

「さてと、お腹もいっぱいになったし、そろそろ行くこうか」

「うん」

「いくらですか？」

「お帰りが。ちよつと待つてね、計算すつから」

そう言っておじさんはメモを見ながら電卓を叩く。

「えっと、合わせて1890円か。よしっ、じゃあ今日は1500

円でいいよ」

「えっ、いいんですか？」

「おうっ、恋人と一緒に来てくれたからね。これからもよろしく頼むよ」

「あっ、はい」

二人は声を合わせて笑顔でそう答えた。

お金を払い屋台をあとにした二人は5分後、彼女のアパート前にいた。

「じゃあね。楽しかったよ」

そう言っただけで彼女は僕の唇にキスをしてくれた。

「僕も楽しかったよ、じゃあね」

「うん。また月曜日にね」

「うん」

こうして僕は彼女と別れ、歩いて家まで帰っていった。

88、平日26

88、平日26

“ザー、ザー”

外では酷いドシャ降りの雨音が鳴り響いている。

「はあーあ、ねむっ」

“ザー、ザー”

どうやらこの雨音が僕をたたき起こしたようだ。時計を確認するとまだ6時半も回っていない。

「ふあーあ」

（なんだまだ6時半か。もう少し寝ようかな……）
そう考えて布団に再び潜り込む。

しかし10分後、

“ザー、ザー”

外からは依然としてドシャ降りの雨音が聞こえている。

「うーん……、はあーあ」

（うるさいなあ。もうっ、眠れないよ……。仕方ない、起きるか）
僕は仕方なく布団から体を起こし、朝ご飯を食べて身支度を済ませることにした。

7時半を過ぎて身支度が終わり、8時15分ごろに家を出ようと思っていた僕はテレビを見つつ、DSをしながらのんびりしていた。そんなときに携帯の着信音が鳴る。

（ん、誰だろう？ こんな朝早くに）

僕は携帯を開き、画面を確認する。するとそこにはミカと表示されていた。

（おはよう。ねえ、もう起きてる？）

どうやら彼女も僕を同じ状況だったようだ。

（おはよう。起きてるよー）

そう僕は返信した。

（じゃあ、もう朝ご飯とかは食べた？）

（食べたよ。てか、もう今すぐに出て行ける状態かな）

（ホント？ 私もそうだから今日は一緒に早めに出勤しない？）

（いいね、そうしようか。じゃあ、すぐ出るから待ってて）

（うん。待ってるよー）

メールのやり取りを済ませると、傘を持って外に出る。

“ドアアアア、ザザー、ザザー…、ダアアアア、ザザー…”

雨の勢いは尋常ではなかった。下を見ると道路はすでに水浸しの状態である。

（わぁー、酷いな。これは長靴だな）

最初は革靴で外に出た僕だったが、すぐに長靴に履き替えついでにかばんには濡れないようにビニール袋を被せておいた。下に降りて道を歩き始める。

“バシャ、バシャ”

歩を進めるたびに小川を歩くような足音が鳴り響く。しかしながら雨は横殴りではなく傘も大きかったためスーツが濡れる心配はなさそうだ。

2分ほど歩くと目の前で黄色のレインコートと赤色の傘を差し、水色の長靴を履いている彼女を発見した。僕に気がついていのか笑顔で手を振っている。

「おはよう」

「おはよう」

「すごいね、完全防備って感じだね」

「うん。どうかな？ この格好？」

「かわいいけど……、なんか信号機みたいだね、色合いが」

「はははっ、信号機か。確かに赤、黄色、青だもんね。ちょっと恥ずかしいけどユウタ君に言われたならいいや」

「はは、そうなの?」

「うん。ふざけた感じだけどこういう格好、私結構好きなんだよね、意外とかわいいって言ってもらえるから」

「そうなんだ。僕も嫌いじゃないよ、そういうの」

「ホント?」

「うん。じゃあ、行こうか」

「うん、行こう」

こうして二人は降りしきるドシャ降りの雨の中、並んで手をつなぎ道を歩き始めた。

89、平日27

89、平日27

8時近くになるころ二人は電車を中宮駅から会社へ歩いていくところだった。

“ドアアアア、ザザー、ザザー…、ダアアアア、ザザー…”
外では相変わらず酷いドシャ降りの雨音が響き続けている。
“バタンッ”

二人はほぼ同時に傘を開くと並んで手をつなぎ、道を歩き始めた。

「ホント、すごい雨だね」

「うん。今日は1日中ずっとこんな感じらしいよ」

「そうなのか。じゃあ、営業の外回りほとんどでもないことになりそうだな」

「大丈夫なの？」

「たぶん…、まあ、大丈夫かな。タクシーで移動することになると思うから」

「あつ、それはそうだよな。じゃないとスーツ濡れちゃうもんね」

「うん。てかもう濡れちゃったかな…」

「そうなの？」

「触ってみてよ」

「うん」

彼女はつないでいた手を離しそつと僕の腕に触れる。

「あつ、ホントだ。濡れてるね」

「だろ。さっき電車で周りがみんな濡れてたからな。これじゃこんな大きな傘差している意味が全くないよ。はあつ、僕もミカみたい
にレインコート着てくればよかった」

「じゃあ、着てみる？ これ」

「これって…、この黄色の？」

「うん」

「さすがにそれは……」

「恥ずかしい？」

「うん。てかその黄色のレインコートって子供用じゃないの？ 普通」

「まあ、普通はね。でもこれはちゃんと大人用だよ」

「そうなの？ どこに売ってたんだよ、そんなの」

「雑貨屋さんかな」

「雑貨屋さん……、ああ、デートで行ったところか」

「そうそこ。おととい一人で行ってみたらたまたま店に1着だけ置いてあつて、いいなつて思ったから買ったんだ」

「へえー、じゃあ、それまだ新しいのか」

「うん、新品だよ」

彼女はドシャ降りの雨の中を歩いているはずなのに思いのほか楽しそうだった。どうやらよつぽどその格好が気に入っているようだ。ただ道行く人はみんなミカを見ていく。

「なんかみんな私見てるね」

「そりゃ見るよ、そんな格好してるんだから」

「そんなに变かな？ この格好」

「变ではないけど……、目立つ格好つて感じかな」

「注目されて楽しいなーっ」と

彼女はそう言ってくるつと1回回って歩く。

「おいおい……」

このあと僕は楽しむ彼女に振り回されつつ会社まで歩いていく。

8時10分前に二人は入り口の自動扉を通る。

「おはようございます」

受付から明るいひとみさんの声が聞こえてくる。

「おはようございます」

二人は声をそろえてその挨拶に答えた。

「ミカ、かわいいー」

「いいでしょー、このレインコートと傘と長靴の組み合わせ」

「いいなー、私もそんなのほしいなあー」

「えへへ、じゃあ、今度貸してあげるね」

「ホント!? ありがとう」

どうやら仲のいい二人は趣味も似ているようだ。

「それはそうとこんな朝早くからいるんですね、ひとみさんて」

「ええ、まあ、早朝に来るお客様もいらっしやるので」

「なるほど」

「二人はどうしてこんな早くに?」

「いやー、目が覚めちゃってね、二人とも雨音で」

「ああ、すごいですよね、外。ユウタさんスーツ濡れてるみたいで
すけど大丈夫ですか?」

「うん、まあ。少し時間があるから脱いで乾かしておくぐらいはで
きるかな……」

「そうですね。じゃあ、1日頑張ってください」

「ありがとう。じゃあ、僕らはこれで」

「じゃあねー、ひとみ」

「ミカも頑張ってるねー」

「うん」

こうして受付の前をあとにすると二人はエレベーターに乗り込み、
オフィスへと向かっていった。

90、平日28

90、平日28

水曜日の3時半過ぎ、僕は西原君と営業の外回りをしているところだった。

「えっと、次はどこで何時からだっけ？」

「ちよつと待って、確認するから」

僕は歩きながらかばんを開き、クリアファイルを取り出す。1番上に見えている紙には、今日回る会社と時間が記されていた。

「六葉工業で4時からだね」

「六葉工業って確かここから5分ぐらいのところだよな」

「うん」

「じゃあ、ちよつと一休みしないか？ あそこのベンチで」

そう言って彼は少し行った先にある公園のベンチを指差した。

「そうだな。そうするか」

二人は歩いていって公園に入り、ベンチにかばんを置く。

「飲み物買って来ようか？」

「おう、頼むよ」

「何がいい？」

「微糖の缶コーヒーのホット」

「オツケー、行ってくるよ」

「おうっ」

僕は彼にかばんを任せて近くの自動販売機に向かう。

2分後、僕はコーラとホットコーヒーを手に戻ってきた。

「お待たせー。はい」

「ありがとう」

僕もベンチに座り二人は缶を開ける。

“プシュッ”

コーラの缶から軽快な炭酸の音が鳴り響いた。

“ゴクン”

二人はそれぞれ飲みながら話し始める。

「お前、またコーラか」

「うん、まあ」

「最近はそればっかだな。前はコーヒー飲んでなかったか？」

「ああ、そういえばそうだったな」

「どうしたんだ？ コーヒー、嫌いになったのか？」

「いや、別にそんな訳じゃ……。なんだろ、彼女がコーラ好きでさ、それで飲むようになったんだよね」

「なるほど、そういうことか。あるよな、そんなことって。俺もさ、結婚するまでは朝ごはんなんてパンしか食べてなかったんだけど、コウコがお米を食べてるからさ、それで米食べるようになったよ」

「へえー、お前もあるんだ、そういうこと」

「うん。なんか合わせるように……。てか、似てくるんだよね、お互いに」

「似てくる……。確かに、そんな感じだな」

「うん」

「あつ、そういえばさお前、誕生日、祝ってもらったのか？ 先週」

「ああ、してもらったよ、誕生日パーティー」

「どんなのだったんだ？」

「いやー、すごかったよ。帰ったらいきなりドアを開けたところクラッカーを鳴らされてさ、「お誕生日、おめでとう」って、びっくりしたなあー」

「はははっ、それはすごいな。ケーキとかプレゼントとかは？」

「ケーキは丸い手作りデコレーションケーキで、めちゃうくちゃ美味かったな。プレゼントは手作りのマフラーをもらったよ」

「へえー、よかったな、それは」

「うん。今までで最高の誕生日だったよ」

「最高の誕生日か……。ん、もしかしてそれ……」

僕はふと思ひ彼が首に巻いている青いマフラーを指差した。

「これだよ、これ。これがユウコにもらったマフラーなんだ」

「やっぱりか。暖かそうだな」

「まあな。ユウコの愛が詰ってるし」

「愛って……」

「だってそうだろ、俺のために編んでくれたんだし」

「それは……、そうか。いいなー」

「まあ、お前もそのうちもらえるよ、これから寒くなってくるしな」

「そうかな……」

僕はそんな彼の言葉に半信半疑だった。

(本当は必ずもらえるんだけど……、ミカがこの前昼休みに編んでたからな。でも内緒って言われたから言えないけど……)

ここで時計の針は3時50分近くになる。彼は缶コーヒー全て飲み干して立ち上がる。

「よし、行こうぜ、そろそろ」

「待って、全部飲んじゃうから」

“ゴクン、ゴクン、ゴクン、ゴクン”

僕は残っているコーラを一気飲み干す。

「飲みきったか？」

「うん」

「じゃあ、行くか」

「おう」

そして二人は立ち上がり、公園を出て六葉工業に向かっていった。

9 1、平日 2 9

9 1、平日 2 9

木曜日の夕方5時半過ぎ、仕事が一段落した僕は会社の屋上で一休みしているところだった。目の前の西の空には大きな赤い夕日が迫り、ところどころ雲がある空は赤く染まっている。

“ピピピピピッ、ピピピピピッ……”
携帯のメールの着信音になる。

(誰だろう?)

ほとんどの外回りの営業が済んでいる今日連絡が来ることはもうない。一緒に帰ることもある彼女もメールが来るのはいつも6時過ぎ以降である。

後ろのポケットから携帯を取り出し、画面を確認する。相手はミカ、彼女だった。

(ねえ、今どこにいるの?)

どうやら彼女も仕事が一段落ついたところらしく、僕に会いたくないってメールをくれたようだ。

(屋上だよ。来る?)

(うん。すぐ行くから、待ってて)

5分後、缶コーヒー2本を持った彼女が屋上のドアから出てきた。

「お待たせー」

「おう」

「はい、これ」

彼女は持ってきたコーヒーのうち1本を僕に渡してくれた。

「ありがとう。はっ、あつっ」

「ご、ごめん。大丈夫?」

「あははは、大丈夫だよ。ちょっと熱かったただけだから」

「そう。あっ、きれいだね夕日」

「うん。一緒に見ようか」

「うん」

二人は夕日を目の前に屋上の柵に並んで立つ。缶コーヒーを開けて飲みながら話し始める。

「ユウタ君、仕事は？」

「一段落したところかな、まだ残ってるけど。ミカは？」

「あともう少しかな。でもユウタ君に会いたくなってメールしちゃった」

「そうなんだ。僕も会えてうれしいよ」

「ねえ、今日は一緒に帰れそう？」

「うーん、たぶん無理かな」

「残念……、まだそんなに残ってるの？」

「いや、そうでもないかな。でも代わりに別の用事があったね」

「別の用事？」

「うん。このあと6時前に出てうちの取引先の1つに話をしていくことになってるんだ」

「えっ、こんな時間に」

「まあね、今からしか時間が取れないんだってさ。はあっ」

そう言っただけはため息を吐いた。

「へえー、大変だね。じゃあ、頑張つてね、このあとも」

「うん。ミカに言ってもらえるとしても力になるよ、ありがとう」

「そう。そう言われるとうれしいな」

彼女は少しきつそうな表情を浮かべているであろう僕に対して、笑顔だった。

ずっと夕日を眺めていた二人だったが、ここでふと目が合う。そして彼女が呟く。

「ねえ、して」

「うん」

僕は頷いて唇をゆっくりと近づけていた。触れ合うと二人は舌を出して絡ませ合い、夢中で互いを求め合った。

「はあっ……ふっっ、あああ……くちゅ、ふっっ……ちゅぱ……」

…はあっ」

彼女の口からいやらしい声が漏れている。

しばらくして二人はゆっくりと唇を離れた。

「すごかったよ、声」

「そんな……、は、恥ずかしい」

彼女は我に返ったのか顔を少し赤くしている。

「ははは、ほっぺた真っ赤だよ」

「もうっ」

「さてと5時45分、そろそろ行くかな、準備もあるし」

「じゃあ、戻ろうか」

「うん」

二人は残っているコーヒーを飲みつつ、屋上をあとにした。

92、平日30

92、平日30

“ザザー、ザザー”

金曜日の6時半過ぎ、僕は東三橋駅から外眺めていた。

(雨が。おかしいな、電車に乗るまでは降ってなかったのに)
朝は晴れていたため傘は持っていない。目の前はドシャ降りでも出て行ける状況ではなかった。

(仕方ない。濡れるのも嫌だしまだ6時半、もうしばらく待つか)
僕は駅構内のベンチに座って外の様子をうかがうことにした。6時半、本来この時間に帰るような日は彼女と一緒にはずだが、取引先から会社に戻らず帰ってきたため1人である。

“ドアアアア、ザザー、ザザー…、ダアアアア、ザザー…”
30分後、雨は全く弱まる気配がない。それよりかさつきよりかえって強くなったようだ。

(わあっ、これは酷いな。こうなるって分かってたならさつき走って帰ったのに……。もう、散々だな)

僕はそう半ば諦めの気持ちを感じつつ、立ち上がって外を見る。

(うーん……。待ってもしょうがないし行くか)

そう思っで一歩踏み出そうとしたときだった。

「待ってー、ユウタ君」

誰かに呼び止められる。

「えっ」

後ろを振り向くといいたのは彼女だった。

「ミカ」

「おつかれさま」

「おつかれー」

「ねえ、どうしてメール返してくれなかったの？」

「えっ、メール？」

「あれ？もしかして気づかなかったの？」

「たぶん、ちよつと待って、確認するから」

僕はポケットから携帯を取り出し、開いてみる。そこには確かに彼女からの着信が入っている。時間は6時半過ぎ、どうやら外の雨の音にかき消されて着信音に気づけなかったようだ。

「ごめん、雨の音で聞き逃してたよ」

「そっかー、ならしょうがないね。でも今度から気をつけてよ」

「うん、気をつけるよ」

「さてと、じゃあ行こう」

“ボタンッ”

「はい、入っていいよ」

彼女はそう言っただけで傘を開き、僕に差し出してくれた。

「ありがとう」

二人は相合傘をしながら帰り道を歩いていく。

「すごい雨だね」

「うん」

「ユウタ君どのくらい待ってたの？」

「えっと、30分くらいかな」

「30分も。ってことは6時半からもう駅にいたんだ」

「そうだね」

「どうしてそんなに早くから？」

「取引先から会社に戻らずそのまま帰ってきたからだよ」

「そうなんだ。ならメールしてくれればよかったのに」

「ごめん。でも電車に乗ったのが山内駅だったからなあー、うまく待ち合わせできないかなと思ったんだよね」

山内駅というのは会社がある中宮駅から東三橋駅の方向に4つ離れた駅である。山内駅から東三橋駅までは6分しかかからず、疲れていた僕は早く帰りたいと思っていて彼女に連絡するのをすっかり忘れていた。つまり言ったことは完全に言い訳でしかない。

「ねえ、それってもしかして言い訳？ そんなの駅で待ち合わせればいいんじゃない」

見事に見抜かれてしまった。

「うん、ごめん」

こう言われるとさすがに僕も謝るしかない。いつもは彼女の前で少し得意げな僕もなぜか今日は弱気だった。

「いいよ。私もちょっと言い過ぎたかな、ごめんね」

「ミカ……」

僕が自分勝手な行動をとってしまったにも関わらず、彼女は全く怒っていない。そんなミカの優しさにはいつも心を救われていた。

ここでミカが話題を変える。

「ねえ、話変わるけど、休日どうしようか？」

「そうだなー、天気予報は2日とも雨みただけ……。うーん」

「雨が。じゃあ、外は無理だね」

「あつ、そうだ。ドライブとかどう？」

「ドライブか、いいね。行こう、行こう」

「よし！ 決まりだね」

「うん。どっちにするの？」

「日曜日かな。土曜日は疲れをとるためにも休みたいし」

「分かった。朝何時に下に降りていたらいいかな？」

「えっと、あまり早くから行くのもなんだし、9時半くらいでどうかな？」

「9時半ね、いいよ。で、どこに行くの？」

「それは……、明日考えておくよ」

「そう。じゃあ、楽しみにしてるね」

ここで二人は彼女のアパートの前に着いた。

「ここでお別れだね」

「うん」

「はい、傘」

彼女はそう言って僕に持っていた傘を渡してくれた。

「えっ、いいの?」

「うん。だって濡れちゃうでしょ、日曜日に戻してくれたらいいから、持って行って」

「ありがとう。助かるよ」

「じゃあね」

“チュッ”

彼女とはいつもどおりキスをしてお別れである。

「じゃあねー」

こうして僕は彼女の傘を差しつつ、家まで歩いて帰っていった。

93、ドライブデート1

93、ドライブデート1

“リリリン、リリリン”

日曜日の朝8時過ぎ、僕は目覚ましの音で目を覚ました。布団から起き上がりカーテンを開けて外の様子を確認する。

“ポツポツ、ポツポツ”

さほど大きな音ではないが外から雨の音が聞こえてきた。

（またか。でも今日はそんなには強くないな。あとで止むといいけど……）

これで今週は5日である。結局木曜日は晴れたものの、それ以外は雨という酷い天気の1週間だ。それでも僕は外の少し弱い雨に希望を抱きつつ、パソコンの電源をつけインターネットで天気予報を確認する。

（えっと、今日の天気は……雨後晴れと。は、晴れか。ホントかよ。じゃあ時間ごとの天気は、9時から12時まで雨、12時から3時まで雨、3時から6時まで雨時々曇りってなんだよこれ、晴れないじゃん）

とここまで見て僕は天気予報の嘘にツツコミたくなつたが、そこである一文に気がついた。

（ん、なになに。雨は午後4時には止み、5時以降には晴れ間が除くこともあるでしょうか。おっ、なら今日はきれいな夕日が見れるかもしれないな）

この一文は僕に希望の光を与えてくれた。それに合わせてネットの地図で今日のドライブコースを考える。

（うーん、山沿いはこの前紅葉を見に行ったときに行ったし、やっぱり海かな。とすると……まず森崎市に向かって東に海沿いの道を通っていくのがいいかな。どこまで行くか……、あっ、そういえばちよっと時間かかるけど3時間半ぐらい行ったところにおいていい店が

……、つてでも待てよ、ミカ、もしかしたら弁当作ってくるかもな。どうしよう……？ まあ、あとで会ってから決めるか、昼ごはんはじゃあとりあえず今日は行けるとこまで東に走ってみるか。あつ、でも夕日はせつかくだからどっかの海岸から見たいな。とすると西向きになっている海岸は……やつぱり東森崎海水浴場か。ここつてオフシーズンはどうなってるだろう？)

ここで僕は地図サイトを開いた状態で別に海水浴場のホームページを検索して開く。

(えつと……、海の家は7月下旬から9月上旬までの営業です。それ以外の時期は自由に入場することができます。へえー、じゃあ砂浜に入れるのか。よし、午後5時半前までにここに戻ってこないといけないんだな。とすると行けるのは……)

僕は朝ご飯を食べないといけないのも忘れ、夢中になってルートを考えていた。

9時近くになってふとパソコンの右下の時計に気がつく。

(あつ、やつべー、もう9時前か。朝ご飯忘れてたなー。仕方ない大体のルートは決まったし、着替えて菓子パンでも食べながら軽く洗車してワックスでもかけるか)

“ピンポーン、ピンポーン”

僕がそう思ったところに玄関からインターホンの音が聞こえてくる。

「はい」

ドアを開けるとそこには彼女が立っていた。

「おはよう。待ちきれなくて来ちゃった」

「おはよう。ちょうどこれから着替えて洗車に行くところなんだ、一緒に降りる？」

「うん」

「じゃあ、待ってて。今着替えてくるから」

5分後、着替えを済ませた僕は荷物と水を汲んだバケツと荷物を持

って菓子パンを片手に玄関に戻ってくる。

「お待たせー」

「あれ？ その右手に持ってるのは」

「あー、朝ご飯だよ、メロンパン。さっきまでネットでドライブのルートを考えていてね、そしたら食べるのすっかり忘れてたんだ」

「そうなんだ。なんか悪かったね、こんなに早く来て」

「いいよ。僕も早くミカに会いたかったから、こんなに早く来てくれてうれしいよ」

「ホント？」

「うん。じゃあ、行こう」

「うん」

こうして二人は一緒に車のところまで降りて行った。

94、ドライブデート2

94、ドライブデート2

僕が洗車し終わるのを彼女は横で立って待っている。今日の洗車はそう言ってもそんなにたいそうなものではなく、バケツで軽く全体に水をかけ、柔らかいタオルで拭き取ったあとにワックスを塗るという簡単なものだった。

洗車を始めてから15分ほどが経ち、ワックス掛けも最終段階にさしかかってきたところで彼女は僕に話しかけてくる。

「ねえ、まだ？」

「もう少し終わるから、待ってて」

「うん、分かった」

そう言ったあと彼女は車を見つめながらこう話しかけてきた。

「いいなあー、この車」

「ん？」

「私もこんな車、ほしいなあー」

「そういえばミカは車の免許、持ってるの？」

「持ってるよ。でも車はないんだよね」

「じゃあ、買ったら？」

「買ったらって……、もう、そんなに簡単に買えるものじゃないでしょ」

「あははっ、それもそうだな。でも結構貯金はあるんじゃないの？」

「あるけど……いいや、そのうちいくらでもこの車に乗せてもらえるようになるし」

「えっ、何のこと？」

ここで僕は彼女のセリフの意味を理解していながらも、わざと分かっているような反応をする。

「もう、またー、そんなにからかわないでよ」

「ごめんごめん。ミカの反応がかわいいから、つい」

そう言っ僕はミカをごまかした。

「ねえ、もしかしてかわいいって言えば何でも許してもらえと思ってる？」

「うん、思ってるよ」

「もう、私はそんな単純な女じゃないのに……」

彼女はここで肩を落とすし、落ち込んでいるように見える。

「ははっ、どうしたの？」

洗車がちょうど終わった僕は肩を落としている彼女に声をかける。

「……」

ところが何も返事が返ってこない。だが実は彼女は本当に落ち込んでいるわけではない。それが分かっていた僕はあえて謝らず、さらにいじわるを試してみた。

「じゃあ、おいて行くね」

そう言っ僕は彼女から離れ、先に車に乗り込む。

「あー、もう待ってよ」

すると彼女はさっきまで何事もなかったかのように車に近づいてくると、助手席のドアを開けて車に乗り込んできた。

「あれ、行くの？」

「もう、いい加減にしてよ」

「あはははっ、ごめんごめん。ちょっとやり過ぎたな」

「あっ、謝ったね」

「えっ」

二人の目が合った。

「えへっ」

彼女は僕に笑ってみせる。

「あー、そういうことか。これは僕の負けだな」

「うん、だね。あはははは」

「あははははっ」

出発前、お互いの冗談交じりの会話の決着がつき二人は笑い合った。

しばらくして笑い声が止んだところで僕が声をかける

「さあ、行くか」

「うん」

僕がエンジンを掛けて駐車場から道路に出ると、車は雨の中を走り始めた。

95、ドライブデート3

95、ドライブデート3

二人を乗せた車は雨降る街中を駆け抜けていく。

「あーそついえばささつきまで言うの忘れてたけど、金曜日に借りた傘、後ろの席に置いてあるから」

「後ろって……」

彼女は後ろを振り向いて後部座席を確認する。

「うん、分かった。あつ、かわいいー」

「ん？」

「ピチユーのぬいぐるみかわいいね。どうしたの？ あれ」

「ああ、そのことか。この前買ってきたんだよ、大阪に日帰りで仕事に行ったときに」

「へえー、えつ、もしかしてスーツで買いに行ったの？ ポケセンに」

「うん、ちょっと恥ずかしかったけどね。でもなかなか行けないし、せつかくだからさ、寄ってきたんだ。まあ、代わりに一緒に仕事に行った先輩には置いてきぼりにされたけどね」

「あははは、いいの？ そんなことしてて」

「さあね。でも仕事が終わればあとは自由だから、新幹線でちゃんと帰ってきて次の日ちゃんと出勤すれば大丈夫だとは思っただけど

……」

「ふーん、そうなんだ。でももし見られてたら大変だね」

「あははは、もしそうだったらシャレにならないな」

「解雇、されるかもね」

「えつ、それはさすがにないだろー。第一これでも結構僕は営業成績いいほうなんだぞ」

「はは、分かってるよ、分かってるって。冗談だよ、冗談」

「またか。なんか今日はいつもに増して明るいね」

「うん、だつて楽しみにしてたんだもん」

「ここで彼女が話題を変える。」

「ねえ、今日はどこを通つて行くの？」

「まだ街中だけど、抜けたらずつと海沿いかな」

「海沿いかー、景色は良さそうだけど雨なのが残念だね」

「うん、まあね。でも夕方には晴れて来るらしいよ」

「そうなんだ。じゃあきれいな夕焼けが見られるの？」

「うん、ちゃんと考えてあるよ。楽しみにしててね」

「うん、分かったー」

車が赤信号で止まったところで僕は少し彼女のほうを向く。すると膝に抱えている大きな四角いカバンが気になった。

「それなに？」

「あつ、気がついてくれた、ちょっと待ってね」

「えっ」

そう言つて彼女はカバンの中からサンドイッチを取り出した。

「はい、あげる」

「いいの？ それ昼ご飯じゃ……」

「大丈夫、たくさん作ってきたら。それにお腹空くでしょ、あんなメロンパンだけじゃ」

「なんか悪いね。じゃあもらつよ」

僕は彼女からサンドイッチを受け取り、一口食べる。

「あつ、玉子サンドだね」

「うん。どう？ おいしい」

「おいしいよー、ありがとう」

「どういたしまして。あつ、信号機青になったよ」

「よし。さあ、もうすぐ海だぞ」

二人を乗せた車は再び走り出し、1分後海沿いに差し掛かる。

「わあー、海だ」

「どうだ、なかなかいい眺めだろ」

「うん。はあつ、でも晴れてたらもっとよかつたのに」

「そうだな」

「でも夕方には晴れて来るんだよね」

「うん、楽しみだな」

「うん、楽しみー」

“ポツポツ、ポツポツ…”

こんな感じで二人の楽しい会話を乗せた車は、窓を叩く雨の中を走り抜けていった。

96、ドライブデート4

96、ドライブデート4

“ポツポツ、ポツポツ”

家を出てから1時間、相変わらず雨は車を叩いている。そのせいか渋滞が多いこの海沿いの道も流れがよかった。

しばらく信号機に止められることなく走っていたが、交差点を右に曲がり国道を外れるところで久しぶりに赤信号に捕まる。

“ポツポツ、ポツ、パタパタパタ、パタパタ……”

「あれ？ 雨強くなってきた」

彼女が話しかけてきた。

「うん、なんかそうみたいだね」

“ピカッ！”

そのとき突然空に黄色く鋭い光が走った。

「えっ」

「わあっ、光った」

“ドカーン！ゴロゴロ”

「あちゃー、雷か」

「もう、天気予報ではそんなこと言ってなかったのに」

「うん。それに珍しいなこの時期に雷なんて」

「だねー、普通雷って真夏の夕立の時とかだもんね」

「そうそう」

“パタパタパタ、パタザザーザザー、ザザーザザー”

さらに雨足が強まってくる。

「あー、さらに強くなってきたね」

「うん」

「ねえ、今日本当に夕方から晴れてくるの？」

「さあ、どうなんだろう？ まあ、でも天気予報を信じるしかないんじゃないかな」

「えー、この雨なのに」

「うん。でも意外とあるじゃん、こういう強い雨になって1時間ほど経つと止むことって」

「そうだけど……」

彼女は外の様子に不満を抱いているようだった。ここで信号機が赤から青に変わり、僕はハンドルを右に切ってここから海沿いを外れる国道を離れて県道に入る。

さっきから彼女はDSをいじっていた。

「何してるの？ さっきから」

「ポケモンだよ、ポケモン」

「ポケモンかー、えっ、もしかして孵化作業中？」

「うん」

彼女は夢中になって十字キーを上下させている。

「何を孵化してるの？」

「マリル」

「マリルって、マリルリかー。僕も持つてるけどあの子は特性の力持ちで攻撃力がやばいからな」

「そうそう。それにかわいいんだよね、ウサギみたいで」

「そっかー。ミカ、ウサギ好きだもんね」

「うん」

二人は来週会社で受付のヒトミと昼休みに対戦をする予定だった。どうやら今彼女はその時に出すポケモンを孵化、育成しているようだ。

「やったー！」

彼女は突然喜びの声を上げる。

「えっ、どうしたの？」

「生まれたんだよ、力持ちでHABDVのマリルが」

「すごいな、おめでとう」

「うん、ありがとう」

彼女はともうれしそうな顔でこちらを振り向いてくれた。

(マリルリかー、やばいな。うちには相棒の威嚇レントラーのれん
タン₃がいるけど、持ち物によっては受け切れないからなあー。う
ーん)

僕は車を運転しながら彼女のポケモンの話を聞いて、そんなことを
思っていた。

97、ドライブデート5

97、ドライブデート5

車の時計はすでに午後1時を回っている。彼女がDSでポケモンに夢中になっているのをいいことに、僕はできるだけ遠くまで車を走らせていた。

（あー、さすがに腹が減ってきたなー。そろそろどこかで車を止めて昼ご飯にしたいな）

家から3時間ほど行ったところにある大江市海岸公園の駐車場に僕は車を止める。

“ポツポツ、ポツポツ”

さっきまで雷が鳴っていて強かった雨も、少し弱まりつつある。しかしながら休日とはいえ雨が降っているせいも、駐車場には他に車は止まっていなかった。ただ見ると公園の中には入れるようだ。

シートベルトを外して横の席を確認すると、相変わらず彼女はポケモンをしていた。どうやら車が止まったことにも気がついていないようだ。

（うーんどうしよう、声かけた方がいいかな……）

僕はしばらく車を降りず、彼女の様子をうかがっている。

そのまま10分ほど時間が経過する。

（おいおい、いい加減気づけよ）
全く気付く様子がない。

（仕方ないなあー、そろそろ声をかけて気づかせて……。いや待てよ、せっかくだからちよつとイジワルしてやるか）

朝と同様にまたイジワルな考えを思いついた僕は、傘を片手に一人車の外に出る。

“ボタンッ、ボタンッ、チャポチャポ、チャポチャポ”

傘を差し中の彼女の様子を見ながら歩いて車から離れていく。車から僕が出たときにドアを閉める大きな音を鳴らしているにもかかわ

らず、やはり気がつかない。

そこで僕は助手席の窓に向かって大きく手を振ってみた。そのとき彼女は何を思ったのか僕のいるほうではなく、反対側の運転席をちらつと見た。すると僕がいないことに気がつき、右左を向いて探し始める。

「あははははっ」

僕はその様子に思わず吹き出して笑ってしまった。すぐに笑っている僕を発見した彼女は、急いでDSの電源を切り、慌てて車から出ると傘を差して僕のもとに走ってくる。

“バタンツ、バタンツ、バチャンバチャン、バチャンバチャン”

「もう、いつから止まったの？」

彼女は少し怒っているようなフリをしている。

「いつからだと思う？」

「えつと、3分前ぐらいからかな」

「あははははっ」

僕は彼女の全くもつて的外れな回答に、また思わず笑ってしまった。

「ちよつとー、なんで笑うのよ」

「えつ、だって本当は10分以上前だからね」

「えつ、ウソー」

「うん。ミカ、DSに夢中になりすぎだよ」

「そうだったんだ……。ご、ごめん」

彼女は本当に悪いと思ったのか、珍しく謝って肩を落とした。

「いいよ、気にしてないから」

僕はそう言っただけで彼女を気遣う。

「ホント？」

「うん」

「ありがとう」

彼女はそう言っただけで顔を僕に満面の笑顔を見せてくれた。

98、ドライブデート6

98、ドライブデート6

“ポツポツ、ポツポツ”

降りしきる雨の中、傘を差した二人は駐車場で向かい合って立っている。

「誰もいないね」

彼女の言うとおり他に車は止まっていない。まさに二人っきりの状態である。

「そうだね」

「ねえ、ここどこなの？」

「大江市海岸公園だよ」

「公園かー、どうしてここに止まったの？」

「うーん、どうしてだろう？ 目の前にあったからかな」

「えー、そんな……」

「いや本当はね、きれいな水平線が見えるっていう名所なんだけど……」

「へえー、そうなんだ」

「うん。でも今日は雨が降っている上に、空が厚い雲に覆われているからな」

「あつ、そっかー。でもとりあえず海岸に出てみたら？」

「そうだな、そうするか」

二人は駐車場を離れて、歩いて海岸に出る。海のほうを並んで眺めると、そこはもやがかかったように暗い。

「なんか暗いね」

「だな」

水平線らしきものは先に全くといっていいほど見えない。それでも二人はしばらく黙ったまま、海の方こうをただただ眺めていた。

“ポツポツ、ポツポツ”

海岸には誰もいない。そこには絶え間なく傘を叩く雨の音だけが響いている。

10分ほど経って僕はふと雨を落とす厚い雲の空を仰いだ。

「はあっ」

ため息が出る。

「戻ろう、車に」

その様子から察して彼女が呟いた。

「そうだな」

二人は海岸をあとにして車に戻っていく。

「悪かったな、こんなところに止まって」

車に戻って僕はすぐにそう口にした。

「うんうん。仕方ないよ、今日は雨だし。元氣出して、お昼ご飯にしよう」

「そうだな、お腹空いたし」

「はい」

彼女はそう言ってかばんからカツサンド渡してくれた。

「ありがとう。へえー、カツサンドか、豪華だね」

僕が朝彼女からもらったのはタマゴサンドとハムサンドだけだったので、まさかカツサンドのような贅沢なものを作って来てくれるとは思わなかった。

(うまそう)

僕は受け取ったカツサンドさっそく一口口にする。

「どうかな？」

「おいしい、最高だね」

このカツサンドは分厚いカツ1枚と、レタスが1枚挟まったもので、カツにはトンカツソースがほどよくかかっていてとてもおいしかった。

「ふふふっ、元氣になってくれたみたい」

「うん」

彼女のおかげで僕の落ち込んだ気持ちはどこかに吹っ飛んでしまった。

「アーン」

彼女はプチトマトのヘタを持って僕の口の前に差し出してくる。

「いただきまーす」

“あむっ”

「おいしい?」

「おいしいよ」

「あっ、ソース口の周りについてるよ。取ってあげるね」

(ん、ティッシュでもくれるのかな?)

そう思っている彼女が意外な行動に出た。彼女は少し席から立ち、僕の顔に近づいてきた。二人の顔は今、すぐ近くの距離にある。

“ペロツ、ペロペロ”

「わあっ」

なんと彼女は舐め取ってくれた。僕はその思わぬ行為に声を出して驚く。

「ふふっ、ソースの味だね、ユウタ君のほっぺ」

僕がポカンとしている中、彼女は笑顔で見つめている。

二人はそんなやり取りをしながら昼ご飯を食べていった。

99、ドライブデート7

99、ドライブデート7

車の中できつと二人はいつもと違う空気を感じているに違いない。隣同士に座っている距離は近い、車は密閉された空間……。二人は同じ空気を吸い続けることで、たとえ語り合わなくてもずっと同じ思いを共有していた。

空が少しずつ染まり始める夕方5時過ぎ、僕は家に向かって車を走らせている。

“ポツポツ、ポツポツ”

雨は相変わらずフロントガラスを濡らしてくる。ただ海の向こうを見ると、ところどころ光が差し込みつつある。もうすぐ止む頃だろうか。僕は運転しながらそんなことを考えていた。

ずっと話さなかった二人だが、ここで彼女が話しかけてきた。

「雨……、止まないね」

「そうだな」

午前中はゲームに夢中になっていた彼女も、今は外を眺めている。行きとは違い帰りは彼女の座っている助手席は海側に面している。それが彼女の興味を海へと向けさせていた。

「おかしいなー、夕方には止むって言うっていたのに」

「はあっ」

彼女は外をずっと眺めていて僕に背を向けていたが、ため息を吐いたことで落ち込んでいるのがはっきりと分かった。

しばらく二人はまた何も話さなかった。もうすぐ車は東森崎海水浴場に到着する。僕は心配していた、天気の方方を。

「あっ、日が差してきた」

彼女が突然声を上げた。

“ポツポツ、ポツポツ”

ただ雨がフロントガラスを叩くのはさつきと変わらない。

「えっ」

それでも僕は危ないと分かっているながら、かすかな期待につられて横をちらつと見てしまう。

するとその目にはつきりと雲が晴れて、赤い空が顔を出しつつあるのが映った。

「もうっ、危ないユウタ君！ 前見て、前！」

そこで彼女は何を感じたのか突然振り返ると、僕に注意を喚起した。

「えっ……、あー……ごめん」

「ふうっ、もうドキッつとするからやめてね、声を出した私も悪かったけど」

「うん、気をつけるよ」

これが狭い中で共有している空気と思いの力なのだろうか。彼女は僕に背を向けていたのにもかかわず、その行動をしっかりと感知していた。

“ポツポツ、ポツポツ、ポツ、ポツ、ポツ……、……”

彼女が声をかけてきてから2分後、雨は止んだようだ。

「止んだね」

「うん」

「よかったー、あつ、雲もはれてきたよ」

「よし、じゃあきれいな夕日が見えるかもな」

「うん、楽しみ」

彼女は僕のほうを見て、笑顔で頷いてくれた。

それから15分後、車は東森崎海水浴場の駐車場に止まる。雨はすっかり止み、西の空は雲もだいぶ晴れて日は水平線に近づき、空の赤はよりいっそう深くなりつつあった。

「さあ、着いたよ。降りようか」

「うん」

“ バタンッ、バタンッ ”

二人は車から降りると並んで手をつなぐ。

「見えるかな、きれいな夕日」

「見えるよ、きつと。行こうか」

「うん」

彼女が頷くと、二人は駐車場を離れ砂浜へ向かって歩いていった。

100、ドライブデート8（前書き）

遂にこの小説も100話に到達しました。

記念すべき100話はもちろんあのシーンです。

ここまで読んでくれたみなさん本当にありがとうございます。

そしてこれからもよろしくお願いします。

100、ドライブデート8

100、ドライブデート8

二人は赤く染まった砂浜を波打ち際まで歩いていく。目の前には赤い空、赤い海が広がっている。空にはまだところどころ小さな雲が取り残されていたが、沈み行く夕日の燃え上がるような赤を受け入れるには十分だった。

“ザザーン、ザザーン”

海はさざ波が立つたびにゆれ、白い光が反射してキラキラ光っている。

波打ち際にたどり着いた二人は、その光景に吸い込まれたように目を奪われ立ち尽くす。僕はつないでいた手を離し彼女の腰に回すと、ゆっくりとその身体を引き寄せた。釣られて彼女も僕に寄りかかってくる。横からなので互いに触れ合っている面積はそんなには大きくない。しかしながらその温かさはしっかりと僕の胸に伝わってきた。

「きれいだね」

僕はそう呟く。

「うん」

彼女はそつと頷いてくれた。

何も語らなくてもいい。それだけで十分だった、思いを感じ取りあっている二人には。

しばらくそうやって立っていた二人の前で夕日がいよいよ水平線の下に隠れていく。

「はあっ」

彼女が突然息を吐く。

「ん」

「うん、何でもない」

そう言っていたが僕には感じられた、彼女の呼吸から沈んでいくとする夕日に対する思いを。二人の感情は今きつと最高潮を迎えている。それは二人を自然に近づけた。

「ミカ」

僕はそう声をかけると向き合うように彼女をさらに自分に引き寄せ
る。

「ユウタ君、好き……」

「僕も好きだよ」

向き合った二人は吸い寄せられるように唇を近づけていく。そして
触れ合うと互いの欲情を頼りに一心に求め合っていく。

「はあっ、ふうっ……………ああん、んあ…、うん……………ん……………
はあっ」

彼女の口からはいやらしい声が漏れ聞こえてくる。僕はもっと乱れ
た声が聞きたくて、さらに激しく舌を絡ませていった

「はあ〜んっ、はあっ。ふうあ〜ん……………ふうっ、ひいっ、
はふう……………。はあ〜ん……………、ふうっ」

夕日はそのやり取りをずっと、ずっと、見つめ続けていた。

二人は唇を離す。

「ありがとう」

「声、すごかったね」

「うん。私、ユウタ君のキスでいっぱい思い感じ取れたから」

「そうか。じゃあ、戻ろうか」

「うん、行こう」

二人は手をつなぎ歩いて車のところへと戻っていく。彼女の頬は少
し赤く染まり恥ずかしさをにじませてはいたものの、それを口には
しなかった。おそらくさっきの聲が自然なものだと認識できたから
だろう。

二人を乗せた車は夕日が沈み、空が赤から急激に暗くなりゆく中を走り抜けていく。彼女はまた窓から海をずっと眺めていた。

海水浴場を出て1時間後の午後7時前、車は彼女のアパートの前に到着する。

「着いたよ」

「お疲れ様。今日はありがとう、とても楽しかったよ」

「僕も。お疲れ様。じゃあねー」

「うん、じゃあね」

“チュッ”

彼女はそう言って僕の唇に優しくキスしてくれるとドアを開け、傘とかばんを持って外に出る。

“ボタンッ”

ドアが閉まると僕は車を再び走らせる。彼女はそれを手を振って見送ってくれた。

夕日の下で互いに感じ取った思い、二人の愛がよりいっそう深まった一日だった。

101、平日31

101、平日31

月曜日の朝7時半、カーテンの隙間から太陽の光が差し込んでい
る。

「うーん、はあーあ」

僕はその光の眩しさで目を覚ました。

（おっ、今日は久々に晴れてるかな）

起き上がった僕はそう思いながらカーテンを勢い良く開ける。

“バサー”

すると雲一つないきれいな青空が目の前に広がり、明るい太陽がサ
ンサンと輝いている。

「ううーん、ん〜」

僕はその光景に何か新鮮な感じを覚えつつ、背伸びをした。

先々週から曇りがちで雨の降ることが多く、晴れたことはほとんど
なかった。こんなにもきれいに晴れたのは久しぶりである。

身支度を済ませた僕はいつもどおり8時15分に家を出る。

しかし下に降りて道路に出ると、そこはいつもの晴れと少し違って
いた。

「はあー、はあー」

吐く息が少し白く変わる。

（わあっ、白くなった。はあー、ちょっと肌寒いなー）

きれいに晴れて太陽の日は路面をしっかりと照らしてはいたものの、
放射冷却のせいかな少し肌寒く感じられた。冷える手に白い息を吹き
かけ温めつつ、彼女のアパートまで歩いていく。

2分後、彼女のアパートの前に着いた。ほぼ同時に階段から彼女が
降りてくる。

「おっはようー」

「おはよう」

その声はいつもより明るかった。

二人は並んで道を歩いていく。

「うーん、気持ちいいね」

彼女は背伸びをしながら僕に話しかけてくる。

「そうだな。久しぶりにきれいに晴れたよね」

「うん。だから私、とってもうれい」

「僕もうれしいよ」

ここで彼女は表情を変え、心配そうに僕の格好を見ている。

「ん、どうしたの？」

「ねえ、ユウタ君、少し寒いんじゃない？」

「うーん、ちよっとね」

「はい、じゃあこれ」

そう言うと彼女は青いマフラーを取り出し、僕に渡してくれた。先ほどから気がついてはいたが、彼女は首に赤いマフラーを巻いている。

「えっ、いいの？」

「うん。巻いてあげるね」

二人は一度立ち止まると、僕の首に彼女が青いマフラーを巻いてくれた。

「苦しくない？」

「大丈夫だよ、ありがとう」

「どういたしまして」

二人は再び道を歩き始める。ところが彼女の表情は先ほどとは違い、何かを考え込んでいる様子だった。

（はあっ、こんなに今朝寒くなるんだったら、編んでいるマフラー完成させておくんだっただなあー。一応今日は私がしているのとおそろいの青いマフラーを貸してあげたけど……）

しばらくの会話がなかった二人だが、駅に近づいて僕が彼女の様子に少し心配になり話しかける。

「ミカ、どうしたの？」

「えっ、いや、うん。何でもないよ、ちょっと考えていただけ」

「そう。ならいいけど……」

僕はその動揺した反応に少し不安を覚えたものの、ここでは気遣って深くは聞かないことにした。

「マフラー、どうかな？」

「とても温かいよ」

「そう、なら良かった。来週にはもっ……」

「えっ」

「あっ、いや何でもない」

（危ないー、内緒にするはずだったのに思わず言いそうになっちゃった）

「そう。なんか変だよミカ、さっきから」

「うんうん、大丈夫。ホント何でもないから」

「ホント？」

「うん。ほら、駅に着いたよ、行こう」

彼女は僕の心配を振り切るように腕をつかむと小走りで引っぱって行き、駅から二人は電車に乗り込んだ。

102、平日32

102、平日32

月曜日の夕方4時ごろ、営業の外回りの途中だった僕は公園に寄りベンチで一休みをしている。日も傾き始め肌寒い風が吹く中、僕はホットの缶コーヒーを口にしていた。

(あー、寒いな)

「はあー、はあー」

手に息を吹きかけて温める。見上げると空は相変わらず雲一つなく晴れ渡っていた。

“ジュールー、ジュール、ゴクンッ”

(はあー、温かいー)

今身体を温めてくれるのは彼女が今朝貸してくれたマフラーと、手に吹きかける息、そしてホットコーヒーだけである。次の営業先はここから15分ほど歩いたところ、会う時間は4時40分のため、まだ10分ほど時間があつた。

5分ほど経つたところで下を向いていると、ふと僕の冷たい手を誰かが握り締めた。

「ん」

顔を上げて相手を確認する。それは友人の西原君だった。

「おつすー」

「なんだ、お前か。」

僕は残念そうにそっけない言葉をかける。別に彼が嫌だった訳ではない、むしろ1人では暇だったので声をかけてくれたのは少しありがたかった。ただこの言葉にはミカだったらもっとよかったのになあという思いがこもっている。

「なんだはないだろ、なんだは」

「あー、ごめん、ごめん」

「まあ、いいよ。いいか、ここ座って？」
「うん」

彼は僕の横に腰掛ける。

「次の営業先は何時からなんだ？」

「4時40分からだよ、だからちよつとここで一休みしてたんだ。」

お前は？」

「仕事がちよつと一段落ついたから散歩してたんだ。そしたら偶然見かけてさ、声かけたんだよ」

「散歩中か。この公園会社から5分くらいだもんな」

「そうそう、だからちよつといいんだ。あつ、そういえばそのマフラーどうしたんだ？」

「ああ、これか。今朝貸して貰ったんだよ、彼女にね」

「そうか、それはよかったな」

「うん。まあ、お前には敵わないけど」

「敵わない……、おい、それどういう意味だよ」

「えっ、だってそつちのは彼女の手編みだろ。思いがこもっていてより温かそうじゃん」

「あはははっ、それは確かにそうかもな」

（なんだ、まだ貰ってないのか。まあ、今日の昼休みもミカ、編んでたしな。だとすると来週ぐらいに上げるのかな、ミカは）

「あつ、今の失礼だったかな、彼女に」

「そんなことないんじゃないか。彼女も気にして頑張ってたみたいだし」

「えっ、気にして頑張ってた？」

「はっ、いや何でもないよ、何でも」

「そうなのか？」

「うん、うん……」

「なら……、いいや」

（なんか変だな、今日は彼女といい、西原君といい、何を隠してるんだろう……）

(はっ、あつぶねー。また言いそうだったよ。ふうー)
(でも、まあいいか。気にしなくてもそのうち明らかになるだろうし)

こんなことを思いながらふと僕は腕時計の時間を確認する。見るとその時計の針はすでに20分を回っている。

“ゴクゴク、ゴクゴク、ゴックン”

コーヒーを飲み干し、ベンチから立ち上がる。

「いっけねー、もう20分過ぎてる。じゃあ、僕行ってくるよ」

「おう、じゃあな」

「じゃあ」

僕は西原君に手を振り公園をあとにすると、次の営業先に向かって歩いていった。

103、平日33

103、平日33

水曜日の昼休み、急いで昼ご飯を済ませた二人はひとみと一緒に屋上にいた。今日は以前から約束していたポケモン対戦をする日である。ルールはレベル50フラット見せ合い有り6 3でやることが話し合いで決まった。入れ替えれるポケモンは3体まで。対戦形式は総当たり戦である。

現在の最初の1戦であるミカとひとみの戦いが終わり、ひとみが勝ったところである。これから僕とミカの戦いが始まる。まずは互いにエントリーさせた6体をメモで見せ合う。

僕のエントリーポケモン

レントラー ランターン サンドパン ブースター ムウマージ
リーフィア

ミカのエントリーポケモン

マリルリ ミミロップ ピクシー フライゴン ランターン メガニウム

彼女からメモを渡された僕は選出する3体を考える。

(さてとどうするか。うーん……、まず間違はなくフライゴンはくるだろうなこっちは地面弱点3体だし、……てかこれ相手先発フライゴン大安定じゃん、やばいな。となるとこっちの先発はフライゴン読みでスカーフムウマージかシュカ持ちのランターン。本当は地面無効のムウマージにしたいけどめざパ氷がないから有効打がシヤドボだけ。しかも後ろにはミミロップかピクシーがいるから安易にゴースト技は打てない。となると先発はランターンだな。残り2体はピクシーとミミロップがいるから馬鹿力持ちのレントラーかブースターは必須と。まあ、ここはミミロップが火炎玉すり替えだった時も考えてブースターと、メガニウムにも刺さるしな。あと1体はマリルリとランターンを落とせるリーフィアでいいか。よし、決

まった)

「よし！ 決まったよ。ミカは？」

「うーん、もうちょっと待って」

「分かった」

僕は選んだ3体を先に手持ちに入れて、通信の準備をする。ひとみはその様子を真ん中で静かに観察している。

「よし！ 私も決まった」

「じゃあ、始めるか」

「二人とも頑張ってー」

そしていよいよ二人の対戦が始まる。いつもは恋人同士で仲のいい二人だが、今日は真剣勝負だ。

先発は

ミカ：フライゴン 僕：ランターン

(まずは読みどおりフライゴンできたか。ここはこっちのシユカ持ちは読めないだろうから、素直に冷凍ビームと)

ミカ：地震 僕：シユカで耐えて冷凍ビーム ミカ：襷で耐える

(あっちゃー、襷かー。しゃあない、ランターンは残してもしようがないし、捨てるか)

ミカ：地震 僕：ランターンが落ちる

(ここは石火持ちのブースターと。読まれるかもしれないけど素直に石火だな、地震されるわけにもいかないし)

僕：ブースターを出して電光石火 ミカ：フライゴンからランターンに換えて石火を受ける

(やっぱり換えてきたか。ここはドロポンがくるからリーフィアとあつ、でも読まれて冷ビがきたら……、いやないだろ、リーフィアに交代)

僕：リーフィアに交代 ミカ：ハイドロポンプが当たる

(ドロポンと、よし。冷ビはあるだろうけどここはヤチェで耐えるから剣の舞だ)

僕：剣の舞 ミカ：冷凍ビーム 僕：ヤチエで耐える

（決まったな。よし、リーフブレードだ）

僕：リーフブレード ミカ：ランターンが落ちてフライゴンが出てくる

（フライゴンか、石火はないんだよな、石火は。せつかく積んだけどリーファイアは捨てるか）

ミカ：大文字 僕：リーファイアが落ちてブースターを出す

（後ろに誰がいるかだけど……、マリルリだとまずいな。でも……ないか、ランターンがいたし。まあ、どちらにせよここは石火と）

僕：電光石火 ミカ：フライゴンが落ちてピクシーが出てくる

（最後はピクシーか。これは勝ったな、馬鹿力と）

僕：馬鹿力 ミカ：耐えて破壊光線

（耐えたかー、まあ不一致だからしょうがないな。って破壊光線で……、それは予想外だな。でも特防は高いから耐えると思うけど……）

僕：破壊光線を耐えて馬鹿力 ミカ：ピクシーが落ちる

（よし、勝ったー）

「やったー、僕の勝ちと」

「あーあ、負けちゃった」

「ユウタ君、おめでとー」

「ありがとう」

こうして僕とミカの1戦は僕の勝利に終わった。

104、平日34

104、平日34

これから僕とひとみの対戦が始まる。互いに1勝している同士、勝ったほうが優勝である。

まずはメモでエントリーさせたメンバーを見せ合う。

僕のエントリーポケモン

レントラー ランターン トリトドン ブースター サーナイト

ノクタス

ひとみのエントリーポケモン

ピカチュウ プクリン ニョロトノ グレイシア キレイハナ キ
ユウコン

3体までならメンバーは替えることができる。僕はさっき出せなかった3体をそっくりそのまま入れ替えた。

ミカは僕の後ろでメモ書きを覗き見ている。

「あれ？ ユウタ君、ノクタスとトリトドンなんて持ってたけ？」

「あー、最近育てたんだよ、最近」

「へえー、そうなんだ。2体とも個性的で面白いよね」

「うん、だから使ってみたかったんだ」

「あつ、ひとみのメンバー、変わってる」

「ちょっと、ミカ、アドバイスするのはなしだよ」

「はい、ごめんなさい」

ひとみはかなりこの勝負に本気になっているようだ。受付で見せる笑顔とは違って、とても真剣な眼差しをしている。

（さてとこれを勝てば優勝だけど……どうしようかな。てかこれでミカに勝ったのか。なかなか上手そうだな、ひとみは。まずピカチュウはくるだろうな、こっちは素で抜ける子がいないし。となると唯一先制できるスカーフサナは必須と。でも他に刺さる相手がニョロトノしかないな。しかもニョロトノはこっちにレントラー、

ランタン、ノクタスがいる以上出てこれないだろうし。次にきそうなのはクレイハナかな、ランタンとトリトドンを落とせる。あつ、でもそうなるとブースターを倒せるニョロトノがいるから出せないんじゃないか。そう考えるとキュウコンがきそうだな、おそらくエナボ持ちだろうし。あと1体はグレイシアかプクリンのどちらかな、いやでもどっちもこちらへの有効打がないような……。うーん、難しいな。」

「よし、決まったー」

「えっ」

「ユウタさん、まだですか？」

「ごめん、もうちょっと待って」

（早いなー、もう決まったのか。じゃあこっちも急ぐか。とりあえず先発はブースターと。ニョロトノ以外は誰がきても大丈夫だし。あとはサーナイトと……もう1体はノクタスでいこうと、使ってみたいし）

「僕も決まったよー」

「じゃあ始めましょうか」

「ユウタ君、頑張ってるね」

「おうっ」

ミカが応援してくれる中、対戦が始まる。

先発は

僕：ブースター　ひとみ：ニョロトノ

（えっ、マジかよ。相性最悪だな。てかなぜ読まれたし。これは替えるしかないよな、有効打ない上にドロポンが間違いなくくるし……。ここはそれ読みでサーナイトと、貯水トレースできるし）

僕：サーナイトに交代　ひとみ：なげつける電気玉

（電気玉だと!?　麻痺は痛い。これピカチュウいたら終わりじゃん。ここは10万したいけどクレイハナがいたらきついな、とりあえずサイキネか、いや待てよどうせならトリックするか、どうせこ

のスカートもう意味ないし。じゃあ、トリック)

ひとみ：冷凍ビーム 僕：トリック

(さてここだ。素直に行けば冷ビ読みで一度ブースターに戻したいけど、読まれてドロポンがきたら終わり。まあでもここは居座り安定か、冷ビなら次に戻せばいいし、ドロポンなら相手が替えないといけなくなるしな)

ひとみ：ドロポン 僕：10万ボルト

(よし、読みどおり。ここは間違いなく引いてくるからサイキネだな)

僕：サイキネ ひとみ：キュウコンに交代

(キュウコンか、ダメージは半分弱。硬いな。ここはブースター替えるか、貰い火で受けられるし)

ひとみ：悪巧み 僕：ブースターに交代

(悪巧みか、積んできたな。多分サブはエナボだから引くと思うんだけど。ニヨロトノ読みで馬鹿力だな)

ひとみ：めざパ 僕：めざパが効果抜群で耐えて馬鹿力

(めざパで抜群!? 地面か。やばいな、次で落ちる。しかも馬鹿力ギリ耐えたし。まあでもここは石火と)

僕：電光石火 ひとみ：キュウコンが落ちてニヨロトノに交代

(さあ、ここも重要。ドロポン読みでサーナイト出してもいいけど、麻痺があるんだよな、麻痺が。でも安定か、サーナイト交代が)

僕：サーナイトに交代 ひとみ：冷ビ

(冷ビか。でも引くだろ、こっちにブースターがいる以上捨てるわけにいかないし。ここはサイキネ)

僕：痺れて動けない ひとみ：ピカチュウに交代

(麻痺ったー。でも1発では落ちないだろう。替えられないし、もう一度サイキネと)

ひとみ：10万ボルト 僕：耐えて痺れて動けない

(また麻痺ったー。あーあ、サーナイト終わった。捨てまーす)

ひとみ：10万ボルト 僕：サーナイトが落ちてブースター

(とりあえず石火と)

僕：電光石火　ひとみ：10万ボルト　僕：ブースターが落ちてノクタスト

(不意打ちしたいけど、アンコあるだろ、アンコ。ここは一か八かそれ読みでエナボと)

ひとみ：アンコール　僕：エナジーボール　ひとみ：ピカチュウが落ちてニヨロトノ

(よし、決まったー。これは勝ったな。襷で耐えてエナボで乙と)

ひとみ：冷凍ビーム　僕：襷で耐えてエナジーボール　ひとみ：ニヨロトノが落ちる

「ふうっ、勝ったー」

「あーあ、電気玉投げつける上手くいったのに、負けちゃった」

「いやー、強かったよ。めざ地面は読めなかったし、あのあとニヨロトノ出されてたら負けてたかも」

「優勝おめでとう、ユウタ君」

「ありがとう、ミカ」

こうしてポケモン対戦は僕の優勝に終わった。

105、平日35

105、平日35

金曜日の駅からの帰り道、二人は話しながら歩いていく。

「どうだった？ 今週は」

「仕事はいつもどおり大変だったけど、楽しくて気持ちのいい1週間だったね。ずっと晴れだったし」

「そうだね。久々に一度も雨、降らなかったし。あと水曜日にしたポケモン対戦は楽しかったなー」

「ポケモンかー、ひとみさん、強かったなー」

「えっ、でもユウタ君勝ったじゃん」

「いや、あれは相性がよかったただだよ。それにメンバー的にもこっちが勝ってたし」

「うーん、なんかそう言われると負けた私の立場がないよー」

「あはははっ、そういうえばミカは2敗したんだっただね」

僕はちよつとここでわざと笑って嫌みがあるかのような言い方をする。

「あー、笑うなんて。酷いよー、ユウタ君」

「ごめん、ごめん。でも思ってたんだけど、あの子のミカ、前と違ってあまり上手くなかったな」

「いや、だって初めて使うポケモンばかりで慣れてなかったんだもん」

「へえー、そうだったんだ」

「うん。ランターン以外はみんな新しく育成したばかりの子だったし」

「なるほど。じゃあ、仕方ないか」

「うん、今回はね。だからまた明日やろうよ、次は私がきつと勝ってみせるから」

「えっ、明日？」

「うん、明日。私の家で1日一緒に過ごすことにしてさ」

「1日一緒にか、いいね。確かミカの家に行くには1ヶ月半振りぐらいだっけ？」

「そうだね。私が夕飯をユウタ君にご馳走して上げたとき以来だもんね」

「あー、思い出したよ。あのときの晩御飯は、ホントにおいしかったな」

「ふふふつ、じゃあまた作ってあげるね」

「うん、じゃあ楽しみしてるよ。それで何時に行ったらいいかな」

「えつとね、11時ぐらいでどう？」

「11時か、分かった」

ここで一度話は一段落するが、ミカのアパートに着くまでもう少し時間がある。話題を持ちかけてくれたのは彼女のほうだった。

「あつ、そついえばさ、うわさで聞いたんだけど、ユウタ君、今度課長に昇進するって本当？」

「もう知ってたんだ。うん、本当だよ」

「すごいね。いつからのの？」

「27日からかな」

「えつ、それって来週じゃない？」

「ははっ、そういうことになるかな」

（来週の月曜日から課長になるんだー。じゃあ今編んでるマフラーは頑張って月曜日に渡そう、お祝いつてことにして）

「おめでとつ」

「ありがとつ」

（課長になったってことは給料も上がるのかな？ そしたらそろそろ私にプロポーズしてほしいな）

（来週からは課長か。給料も上がるし、近いうちにプロポーズしたいな。ミカも待ってるだろうし）

ここで二人は彼女のアパートの前に着いた。

「じゃあ、お疲れ様。明日、待ってるからね」

“ チュッ ”

そう言って彼女は僕にキスをしてくれた。

「 うん。お疲れ様、じゃあねー」

「 じゃあねー」

こうして二人は別れ、僕は彼女に見送られながら家に帰っていった。

106、僕と彼女の二人の空間1

106、僕と彼女の二人の空間1

土曜日の朝、10時55分に家を出た僕は道を彼女の家に向かって歩いていく。右腕には手さげかばん、両手で大きな白い箱を持っている。この中には彼女を喜ばせるとっておきのものが入っている。

2分後、彼女の家に着いた僕は両手がふさがっていたため、インターホンを鳴らすことができないことに気がついた。

(あちゃー、どうしよう……)

本当は下に置きたいのだが、せつかくの白いきれいな箱、できれば汚したくない。でも状況なら背に腹は変えられない。そう思って箱を下に置こうとしたそのとき、

“カチャ”

ドアが開いて彼女が顔を出してくれた。

「おはよう。わあっ！ 何それ？」

大きな白い箱を見て驚いてくれたようだ。

「おはよう。インターホン押せなくて困ってたんだ。とりあえず中入っていいかな？」

「う、うん。いいよ」

彼女は少し戸惑っているようだ。

「おじやましまーす」

その様子に構わず、中に入った僕はキッチンの冷蔵庫の前に立つ。

「冷蔵庫、開けてくれる？」

「あっ、分かった！ その箱の中身、ケーキでしょ」

「ピンポーン」

「やったー！ うれしいな。今開けるね」

中身に気がついた彼女は喜んで、冷蔵庫のドアを開ける。

「はい」

「ありがとう。じゃあ、真ん中の段にと……」

ケーキを冷蔵庫の中に置いた僕はリビングのテーブルに座る。

「何か飲む？」

キッチンにいた彼女が尋ねてくる。

「うん」

「コーヒーでいい？」

「いいよ」

すると彼女はカップにインスタントコーヒーを入れ、ポットのお湯を注いでくれる。

「砂糖とミルクはどうする？」

「両方とも入れて」

「分かったー」

そして彼女はテーブルに二つのカップを持ってくると、僕の前にその一つを置いてくれた。

「どうぞ」

「ありがとう。いただきまーす」

“ジュルルー、ジュル、ゴクンッ”

「はあっ、温かいー」

外の寒さで少し冷えた身体をコーヒーが温めてくれた。

「ケーキ、ありがとうね」

「どういたしまして」

「ねえ、どうして作ってくれたの？」

「いやー、ホントはさ、今度ミカが来るときに合わせて作るうと思っただけど、もっと早く喜ばせたくなってね、それで今日の朝作ってきたんだ」

「それで、どんなケーキなの？」

「それは食べる時のお楽しみだよ」

「えー、じゃあ、昼ご飯作るうと」

「えっ、どうして？」

「だって、そしたらデザートとしてケーキ、食べさせてくれるでし

よ
」

「はははっ、そういうことか」

「楽しみだなー、早く食べたいなー」

僕が笑って答えると、彼女はそう言いながらキッチンに向かった。

107、僕と彼女の二人の空間2

107、僕と彼女の二人の空間2

“ ジュルル、ジュル、ゴクンッ ”

僕は椅子に座ってコーヒを飲みながら、キッチンの彼女の様子を見つめている。その彼女はエプロン姿に変身すると、僕にこう尋ねてきた。

「親子丼でいい？」

「いいよ」

「じゃあ、今作るから待っててね」

「うん」

彼女はフライパンを二つガスコンロに並べると、野菜と鶏肉を冷蔵庫から取り出して切り、卵を割って溶くと、手際よく二つ同時に作っていく。

そして10分も経たないうちに僕の目の前に親子丼が並んだ。

「はい、どうぞ」

「わあー、美味そう」

「今、お茶入れてくるね」

彼女はもう一度キッチンに戻ると、コップに麦茶を入れ持ってきてくれた。

「ありがとう」

「じゃあ、いただきます」

「いただきます」

彼女はいつものように箸は手にするものの、僕が食べる最初の一口に視線を向けている。

“ あーむ、モグモグ、モグモグ、ゴックン ”

「うまいー！」

「ホント？」

「うん」

「よかったー」

僕が最高の評価を出すと彼女は笑顔を返してくれた。

「ねえ、これちよつと味濃いめ？」

「あれ？もしかしてちよつと濃すぎたかな」

「いや、ちよつどいいよ。僕はちよつと濃いほうが好きだから」

彼女が作った親子丼は醤油、砂糖、ダシの味がよく効いていて、味がしっかりしている。

「そうだと思ったんだよね」

「どうして分かったの？」

「前にさ、食堂で私がおごってあげた時のこと、覚えてる？」

「えっと……、あー、それって確か僕が親子丼食べた時だよ」

「そうそれ。あのとき私に一口食べさせてくれたよね」

「うん」

「その親子丼おいしかったんだけど、ちよつと味が濃いめだったから、それに近づけてみたんだ」

「なるほど、そういうことだったのか。でもこれはそれよりももっとおいしいよ」

「ふふつ、ありがとう」

こんな楽しい話をしながら、二人は昼ごはんを食べていった。

20分後、二人は昼ごはんを食べ終わった。

「ごちそうさまでした」

「ごちそうさまでした。それじゃあ、デザートのケーキと」

彼女は待ちわびていたかのように二つの空のお椀を流しに置くと、冷蔵庫から大きな白い箱を持ってくる。

「開けていい？」

「どうぞ」

彼女がゆっくりと箱を開けると、中からイチゴの乗ったデコレーションケーキが顔を出した。

「うわぁー、おいしそう。ナイフとお皿とフォークを持ってくるね」
そう言つて彼女はキッチンからケーキナイフとお皿とフォークを持
つてくる。

「何等分にする？」

「そうだなー、6等分ぐらいでいいんじゃない？」

「分かったー」

そう答えるとまずは半分に取り、それぞれを3つに切り分けていく。
そしてその1つずつを皿に置いてくれた。

「ん、なんかミカの大きくない？」

見ると僕のは60度分くらいの扇の大きさだが、彼女のは明らかに
90度はある。

「えっ、だっていっぱい食べたいんだもん」

「どうやら少し欲張ったようだ。」

「あっ、コーヒー足す？」

「うん」

彼女がカップにコーヒーをそれぞれ足すと、二人はフォークを持っ
て一口ケーキを口にする。

「どうかな？」

「おいしー。スポンジがふわふわで、生クリームもちょうどいい甘
さで、もう、サイコー」

そう言つて彼女は満面の笑みを僕に見せてくれた。

「これケーキ屋さんのよりおいしいね」

「あはははっ、それは言いすぎだよ」

「うんうん。だって本当においしんだもん」

「ありがとう、ほめてくれて」

このあとも二人は笑顔でケーキを食べていった。

108、僕と彼女の二人の空間3

108、僕と彼女の二人の空間3

ケーキを食べ終わり、テーブルの上の片づけと洗い物をミカがしている。その間僕はDSでこのあとにするであろうポケモンの準備をしていた。

「ねえ、ユウタ君」

「どうやら洗い物が終わったようだ。」

「ん」

「せっかくだからこれでポケモンやろう」

ミカはゲームソフトを見せながら僕に言った。

「あつ、バトレボ。へえー、ミカ持ってたんだ」

「うん、最近買ったんだ」

「いいね。やろうか」

「じゃあ、準備するね」

すると彼女はリビングのテレビにWiiをセットし、バトレボのソフトを入れる。電源を付けると彼女がルールについて聞いてきた。

「えっと、この前と同じルールでいいよね」

「うん」

彼女がルールなど全ての設定を終えると、いよいよ画面にそれぞれの6体が表示された。

ミカ

ジラーチ ハピナス シャワーズ カイリユウ キノガッサ サン

ダース

僕

レントラー メガニウム オコリザル エンペルト リザードン
トリトドン

「ミカ、本気？」

「うん、本気だよ」

この前の負けが相当悔しかったのだろうか、明らかに彼女は本気で勝ちにきている。

（や、やべー。これはちゃんと考えないとボロ負けするぞ。まず先発は……サンダースかな？ めざ草ならトリトドンにも刺さるし。いや、待てガツサがスカーフ持って胞子しにくるかも。となるとりあえずはやる気で胞子が効かず、スカーフでおそらく全員に先手をとれるオコリザルが先発と。あとはジラーチどうしよう……リザードンで文字してもいいけど先手で雷がくるとまずいし、仕方ないガツサが怖いけどトリトドンいくか。あとこれで落とせないのは……シャワーズか。じゃあ、メガニウムで決まりだな。よし、決まったー）

「よし！ これでいいな」

「私は……、これでいこうっと」

こうしてお互いに3体が決まり、戦闘が始まる。先発は……

僕：オコリザル ミカ：ジラーチ

「ジ、ジラーチ！」

「えへっ、かわいいでしょ」

「かわいいけど……まさか先発で来るとは……」

（予想外だな。まさかジラーチとは。とりあえず有効打もないしとんぼ返りでトリトドンに交代かな）

ミカ：サイキネ 僕：オコリザルが落ちる

「えっ、抜かれた。ス、スカーフか」

「アッター」

「おいおい、それはないぜ。こっちもスカーフだったのに……」

「さあ、どうするのかな？ ユウタ君」

「そんなこと言われてもなー……、はあっ」

（まさかスカーフとは。まあでもトリトドン出したら引いてくるかな）

僕……トリトドンを出す

「トリトドンか。どうしようかなー、交代しようかなー」
完全に彼女のペースだ、僕をからかっている。

（ガツサかカイリユーがいたらくるよな。冷ビしたいけど…交代してこなかったら非常にまずい。じゃあ、いつそ地割れは……ないか
いや、あえていこう地割れで）

ミカ：キノガツサに交代 僕：地割れが当たる

「きたー！」

「えっ、うそー。それはないよ。ど、どうしよう……」
立場が逆転した。今度は彼女が困る番だ。

ミカ：シャワーズを出す

（シャワーズか。大地の力で攻めてもいいけど、まあ不利だよな。
願い事とかありそうだし。ここはメガニウムに交代。）

僕：メガニウムに交代 ミカ：ハイドロポンプ

（ここは素直にリフストしたいけど……、あー、ジラーチきそう。
仕方ない、宿木で）

僕：宿木の種 ミカ：冷凍ビーム 僕：急所に当たるが耐える

「やったー、急所きたー！」

「きゅ、急所！？ そりゃないよ」

（これ……次耐えないよな。捨てるか、リフストと）

僕：リフスト ミカ：ジラーチに交代

「あっ、そっかー。ミスった。ここはトリトドンに交代でいいのか」

「えへへっ、決まったね」

あとはジラーチのサイキネと、シャワーズのドロポンで終わりである。

以下省略

「やったー！ 私の勝ち」

「あーあ」

こうして1回目は彼女の勝利に終わった。

109、僕と彼女の二人の空間4

109、僕と彼女の二人の空間4

「もう1回やるう、もう1回」

「いいけど……、またこんなパーティーじゃないよね」
勝つてすっかり気分をよくしている彼女に聞いてみる。

「あはははっ、私そんなに酷いことはしないよ」

「ホント？」

「うん」

「じゃあ、やるか」

ポケモンを替えて2回戦目が始まる。

5分後、お互いにメンバーが決まり、対戦の準備が整う。彼女がルールの設定などをすると、再び6体が画面に表示された。

ミカ

マリルリ フライゴン モジャンボ エーフィ ミミロップ トゲ

キッサ

僕

レントラー リーフィア ノクタス バシャーモ サンドパン ジ
ユゴン

「ほうほう。まあ普通の……ってキッサかー、怖いなー」

「エアスラ、いや？」

「聞くなよー、いやに決まってるだろ」

「ふーん、そうなんだ……」

（でも実はこれはりきリッスなんだよね。どうしようかな？ 出そ
うかな）

「さてと、選ぶか」

（キッサ怖いな。こっちは飛行弱点3体、絶対くるよな。てか先発
キッサか。それ読みでレントラーか、うーんでも怯んだら元も子も

ないからなー。いや、待てよはりきりツスだったりして……。まあ、でもどちらにせよ先発はレントラーしかないな。よし、まずはレントラーと。あとは……。モジャンボきそう、こっちは草弱点2体に草タイプ2体だからな。となるとバシャーモはいる。これで怖いのは……。フライゴンか。じゃあ最後はジュゴンでいくか、決まったー」

「よし、決まったよ」

「私も……。決まりと」

こうしてお互いに3体が決まり、戦闘が始まる。先発は……

僕：レントラー ミカ：フライゴン 威嚇で攻撃が下がる

「あちゃー、読まれたー」

「キツス来ると思ったでしょ。えへっ、作戦成功と」

「あーあ」

（どうしよう……。威嚇が入ってるから1発は耐えそうだけど氷の牙はないんだよな。仕方ない素直に替えるか、ジュゴンに交代）

僕：ジュゴンに交代 ミカ：モジャンボに交代

「えっ」

「やっぱりー、ジュゴンが来ると思ったんだよね」

「ミカ、今日は冴えてるね」

「でしょー」

（交代読み交代か。最悪だな。リフストくるなー、ここはそれ読みでバシャーモに替えたいけど……地震がきたら終わる。さあ、どうしよう、うーん……）

ここは間違いなく勝負所、しばらく考えてみる。

（えーと、交代かな、いや待て……）

「ねえ、ユウタ君。まだ？」

「えっ、あっ、ごめん、ごめん」

（そろそろ決めるか。よし、ここは地震読みで居座って冷凍ビームだ）

ミカ：地震 僕：地震を耐えて冷凍ビーム ミカ：モジャンボが落ちる

「えー、なんで替えないのよ」

「ふうっ、助かったー」

「もうっ」

ミカ：エーフィを出す

（エーフィか。持ち物何かな？ メガネか、珠かそこらだと思っただけど、とりあえずジュゴンは残してもしょうがないから氷の礫で捨てるか）

僕：氷の礫 ミカ：礫を耐えてサイコキネシス 僕：ジュゴンが落ちる

（ここは噛み砕くのできるレントラーと）

僕：レントラーを出す

（フライゴンだよな。あー、でも有効打がない。馬鹿力してもいいけど居座られると痛んだよな。仕方ないから噛み砕くか）

ミカ：サイコキネシス 僕：耐えて噛み砕く ミカ：エーフィが落ちてフライゴンがくる

（やべ、これ負けたんじゃないやね。地震連打で終わりだよな。あーあ、ジュゴン捨てるんじゃないかった）

ミカ：地震 僕：レントラーが落ちてバシャーモを出す

（急所来ないかなー、急所。あつ、でも禪だったけ？ このフライゴン。じゃあ、負け確定だな）

僕：馬鹿力 ミカ：馬鹿力が急所に当たるが禪で耐えて地震 僕：バシャーモが落ちる

「ですよねー」

「やったー！ また私の勝ち」

「あーあ、また負けた」

これでポケモン対戦は彼女の2勝になった。

110、僕と彼女の二人の空間5

110、僕と彼女の二人の空間5

このあとの彼女と4戦やったが、結果は2勝2敗、合わせて2勝4敗と負け越している。ここで彼女が一つの提案をしてきた。

「あつ、そうだ、二人でやるのもいいけどちょっとランダムに潜ってみない？」

「ランダムか、いいね。でもパスはどうするの？」

「うーんじゃあ、二人でポケモンを出し合って作る？」

「そうだな、そうするか」

「どうやって決める？ 6体」

「3体ずつ出し合うとして……、あつ、でも持ち物が被ったらまずいよな」

「そうか。じゃあ、受け3体と攻め3体に分かれてそれぞれ出し合うってのはどうかな？」

「なるほどいいかもね」

「でしょー、私最初、攻めを出したいんだけどいいかな？」

「いいよ。」

「どの子にしようかなー」

彼女が考え始める横で、僕も考える。

（受けかー。僕あまり持ってないんだよなー。まず相棒のレントラーは必須だろ、威嚇で生意気HD振りの両受け（笑）のこの子は決まり。次に電気無効の地面はほしいな、となるとサンドパン……あつ、でもこのスピン邪魔だよな、今まで自分で使っただけだったから気にしてなかったけど。じゃあトリトドンでいこうつと、再生も使えて便利だし。最後はムウマージかな。地面無効で鬼火を撒けて痛み分けも使える、活躍間違い無しだな。あつ、持ち物どうしよう、みんな食べ残しほしいなー、とりあえずレントラーはオボンでもいいか、食べ残しは……ムウマージで、トリトドンはリンドにしよう

と。よし、決まったー。」

「よし、決まったよ」

「ごめん、もうちょっと待ってー」

「オツケー」

攻め担当の彼女はまだ悩んでいるようだ。その間に僕は先に3体をパスに入れて準備しておく。

「ねえ、パス名どうする？」

「そうだな、ユウタ君はいつも何で潜ってるの？」

「@れんタンかな」

「私は@ななほしだから、合わせて@ななタンでいいんじゃない？」

「分かったー。@ななタンと」

「はあっ、私も決まったー、入れようっ」と

お互いに3体が決まって画面に@ななタンのパスが映し出される。ポケモンは以下の通り。

@ななタン

レントラー トリトドン ムウマージ マリルリ ポリゴンZ リ

ーファイア

「おお、別々に選んだけど結構バランスよくなったね」

「そうだね。じゃあ、潜るね」

「うん」

リモコンを握っているのは彼女である。二人は画面を見つめて相手が現れるのを待つ。

1分後、相手が見つかった。

ライズ@

ボーマンダ スターミー ゴウカザル ハッサム メタグロス ミ

ロカロス

「げっ」

「あーあ」

いきなり厨ポケだらけのパーティーに当たってしまった。これは前途多難な戦いになりそうだ。

111、僕と彼女の二人の空間6

111、僕と彼女の二人の空間6

@ななタン

レントラー トリトドン ムウマージ マリルリ ポリゴンズ

ーファイア

ライズ@

ポーマンダ スターミー ゴウカザル ハッサム メタグロス ミ

ロカロス

「ねえ、先発誰かな？」

「うーん、ハッサムじゃない。ほら、こっち炎技持ちいないし」

「えっ、いない。あっ、ホントだ、気づかなかったな」

「とりあえずトリトドン先発はどうか？ 誰がきても大丈夫だし」

「そうね。じゃあ、トリトドン先発で、次はポリゴンズ入れていいかな？」

「持ち物何？」

「スカーフだよ」

「スカーフか。ならいいんじゃない」

「よし、ポリゴンズと。となると最後は……」

「これハッサム鬼門だな。受けても羽休めあつたら突破できないんじゃない」

「マリルリでごり押してみる？」

「マリルリかー。それなら回復が追いつかないと思うけど……、威嚇のレントラーの方がいいんじゃない、いやガブがいるからきついか。」

うーん、マリルリでいいんじゃない」

「じゃあ、最後はマリルリね。3体決まりと」

僕らが3体決まると相手はすでに決めていたみたいで、すぐに対戦が始まった。先発は

@ななタン：トリトドン ライズ@：ゴウカザル

「あれ？ ゴウカザルだったね。草結びあるかな？」

「あつてもリンドだから大丈夫だよ。素直に波乗りでいこう」

「そうね、波乗りと」

ライズ@：草結び @ななタン：リンドで耐えて波乗り ライズ@
ゴウカザルが落ちる

「お、落ちたー。襷じゃなくてよかったね」

「うん。次はスターミーかミロかな」

「うーん、ミロカロスきそう……」

ライズ@：ミロカロス

「やっぱりー。これドロポン耐えないよね」

「流石に無理だな。捨てよう」

「そうね」

ライズ@：ハイドロポンプ @ななタン：ドロポンでトリトドンが
落ちる

「次は、ポリゴンZでいいよね」

「うん。あつ、でも10万で落ちるかな？」

「うーん、無理じゃない。相手特防あるし。でもマリルリだと有効
打ないよ」

「マリルリさ、捨て身タツクルないの？」

「捨て身？ あるけど……」

「ならそっちのほうが……、いや待てよ、やっぱり乙でいいや」

「じゃあ、ポリゴンZでいくね」

「うん」

@ななタン：ポリゴンZを出して10万ボルト ライズ@：10万
を耐えてハイドロポンプ

「耐えるかー、だよなー」

「ドロポン耐えて、お願い」

@ななタン：ドロポンを耐える

「ふっつ、耐えたー。よかった」

「そこまで紙じゃないもんな、ポリ乙は」

「そのまま押していいよね」

「うん」

@ななタン：10万ボルト ライズ@：ミロカロスが落ちてハッサムが出てくる

「やっぱり来たか、ハッサム」

「来たね。バレパンでポリゴンZは終わりかな」

「だな」

ライズ@：バレットパンチ @ななタン：バレパンでポリゴンZが落ちてマリルリを出す

「とりあえず滝登りでいいよね」

「うん」

ライズ@：剣の舞 @ななタン：滝登り ライズ@：滝登りを耐える

「げっ、舞ってきた」

「ねえ、でもこれって何してくるのかな、舞って？」

「馬鹿力じゃね。ギリ耐えるかな、不一致だし」

「頑張つて、マリルリちゃん」

ライズ@：馬鹿力 @ななタン：馬鹿力を耐える

「おお、耐えたー」

「やったー！」

「勝ったね」

「うん」

@ななタン：滝登り ライズ@：滝登りでハッサムが落ちる

「いやー、よく勝てたね」

「うん。私、すごくうれしい」

「僕もうれしいよ、あんなパーティーに勝てて」

「で、どうする？ 次は、もう一回いく」

「行こう」

「うん」

こうして1回目は見事に勝利を収めた二人であった。

112、僕と彼女の二人の空間7

112、僕と彼女の二人の空間7

二人はこのあともしばらくはこのパスで潜ってみたところ、4回やつて3勝1敗、上々の成績である。

「ねえ、そろそろパス替えない？」

4回目が終わったところで、彼女がこう提案してきた。

「そうだな」

「じゃあ今度はさっきの逆でいい？」

「分かった。じゃあ僕がアタッカーだな」

「うん。私が受けね」

二人はそれぞれパスに入れる3体を考える。

（よし、アタッカーだな。それならたくさんいるぞ。まずさっき炎技持ちがいなかったから炎タイプがほしいな。誰にしようかな……スカーフバシャーモとか、いやでも範囲と威力はあっても終盤に残つて相手に2体以上いたらどうしようもないか。でもとりあえずスカーフ持ちはほしいよな。じゃあこのドンカラスにしようつと、熱風があつて馬鹿力もあつてブレバもある、うん文句無しで優秀だな。でもこの熱風はスカーフだから交代読み前提、となるとやっぱり炎タイプいるなあ……、うん、ならウインディでいくか。最近育成し直したこの子ならSにもある程度振つてあつてパワフルソラビできて神速使えてフレドラがある、うんいいんじゃないかな。あつ、でも貰い火なんだよね、威嚇じゃなくて、まあいいか、炎技読みで無償降臨できるし）

「私、決まったー。ユウタ君まだ？」

「ごめん、もう少し待って」

「分かった。じゃあ先に入れとくね」

「うん」

彼女は先に3体決まったようだ。

リザードン ブラッキー エーフィ オーダイル フシギバナ
シヤワーズ

「ふむふむ、ブイズ3体と御三家3体か」

「同じくらい強さかな」

「そう、だな」

「じゃあこれは返って負けられないね」

「うん、勝つぞ」

「うん」

そう二人は決意してポケモンを選び始めた。

113、僕と彼女の二人の空間8

113、僕と彼女の二人の空間8

ポケモンの63戦では3体を選ぶに当たって先発に誰がくるのか、それを読むのが最も重要である。この先発読みで有利不利の半分が決まるといっても過言ではない。

「ねえ、先発誰がくるかな？」

「うーん、リザードンじゃない？ シャワーズ意外なら安定して出せると思っし」

「リザードンかー、ならこっちの先発はシャワーズでいいよね」

「えっと、次は……、これ結構きついね」

「うん。ブラッキーどうする？」

「そう、それ。ブラッキー鬼門だな。ドンカラスの馬鹿力でいけなくはないけど……2発かかるんだよな、2発」

「じゃあブースターにする？」

「鬼火ある？」

「あるよ。じゃあ入れるね」

「うん。あつ、やべ！ あと5秒しかない」

「ホントだ。じゃあとりあえずメガニウムにしようかな……、うん」

「メガニウムか、まあフシギバナ怖いけど出てこないだろう、こっちから弱点つきまくりだし」

「そうね。あつ、始まったよ」

いよいよお互いに3体が決まり、対戦が始まった。先発は……

@レイ：フシギバナ @ななタン：シャワーズ

「げっ、読まれた……」

「どうしよ……」

「まいったなー、とりあえずブースターに変えたら？」

「うん」

@ななタン：ブースターに交代 @レイ：宿木の種が外れる
「おっ、外れた、ラッキー」
「よかったー、これ引いてくるかな？」
「きそうだけど……、地震あつたら押してくるかもね」
「地震かー、じゃあ鬼火じゃなくて噴煙でいいかな？」
「噴煙……でいいんじゃない」
「よし、じゃあ噴煙で」
@レイ：オーダイルに交代 @ななタン：噴煙
「替えてきたかー」
「火傷してほしかったなー」
「そう上手くはいかないよ。さてここは……舞ってくるかな」
「鬼火入れる？」
「いや、多分ラムだよ」
「そっかー、とすると……、あつ、やることない……」
「もう詰んでるな。まあ、でも賭けで鬼火にしたら？」
「うん」
@レイ：滝登り
「押してきた!？」
「耐えて、お願い」
@ななタン：滝登りを耐えて鬼火 @レイ：火傷するがラムで回復
「ですよー、でもよく耐えたな」
「うん、私もビックリ!」
「ここは……することもないから捨てだな」
「じゃあ噴煙で捨てと」
@レイ：滝登り @ななタン：滝登りでブースターが落ちる
「メガニウムでいいよね」
「うん」
@ななタン：メガニウムに交代
「どうしよっか？」
「フシギバナ来て終わりだね。でもとりあえずリフトしたら?」

「それしかないか、リフストと」

@レイ：フシギバナに交代 @ななタン：リーフストーム

「やっぱり戻ってきたか。あー、詰んでるなー」

「うん、降参する？」

「そうだな。やることないし」

「じゃあ、降参と」

@ななタン：降参を選択

「あーあ、負けちゃったね」

「こんなこともあるよ、次頑張ろう、次」

「うん。じゃあ、次行こうか」

こうして新しいパスでの1戦目は完敗に終わった。

114、僕と彼女の二人の空間9

114、僕と彼女の二人の空間9

このあとこのパスで5回ほど潜ってみたものの1勝4敗、先ほどのパスに比べてかなり酷い戦績である。

「あーあ、また負けた」

「うーん、ダメだなあー」

「どうしてかな？」

「炎タイプが2体いるからじゃないかな、さつきから相手の水タイプにずつと振り回されてるし」

「炎タイプか……じゃあブースター替えようかな……ってあれ？
今何時？」

彼女はここで少しベランダの外が赤くなってきたに気がついたようだ。

「えっと……5時過ぎだよ」

「いけない！ 晩御飯作らなきゃ」

そう言っただけ彼女はゲームコントローラを置くと、キッチンに行きエプロンに着替えて晩御飯の準備を始める。

一方残された僕はゲームとテレビの電源を切り、ゲームを片付けた。そしてキッチンにいる彼女の様子を確認しに行く。すると彼女はポールに手を入れてひき肉のかたまりをこねているところだった。どうやら今日の晩御飯はハンバーグのようだ。

「ごめんね、ゲーム途中で投げ出しちゃって」

「いいよ、ちよつと僕も疲れてきたところだったから。ところで今日の晩御飯はハンバーグ？」

「そうだよ。おいしいの頑張っただけ作るから楽しみにしててね」

「うん」

彼女はハンバーグ作りに集中している。少しぐらいなら話しかけてもよさそうだが、邪魔になりそうな気がする。

(さてと……どうしようかな。……そっだ、ちょっと散歩でもしてくるか)

「僕、少し散歩してくるね」

「分かった。いってらっしゃい」

「いってきまーす」

そう言っただ僕はキッチンを後にすると、靴を履いてアパートの前の道路に出た。僕の家の方に目を向けると赤い夕日と向き合った。その赤い光はちょうど道路を結んで一直線になり、果てしなく向こうまで赤く照らしている。

しばらくずっと夕日を見つめていると、道に沿って引き込まれていくような感触に襲われた。僕は歩き出す、光が導く方向へ。ゆっくりと、ゆっくりと歩いていった。

10分ほど歩くと自分のアパートの前に着いてしまった。

「あっ」

(いっけねー、ついここまで来ちゃった。戻らなきゃ)

僕は振り返って戻って行く。

知らないうちになんか時間が経ったのだろう、アパートの下で彼女が手を振っている。

「ユウタくん」

「ミカ」

「もつどこに行ってたの？心配したんだから」

「ごめん、つい……」

僕は少し怒っているように見せているミカに、頭をかいて謝った。すると彼女は笑顔に表情を変えてこう言ってくれた。

「一緒に見よっか」

「えっ」

「ほら、もう沈んじゃうよ」

そう促されて僕は後ろを振り向いた。彼女は触れ合うようにその横に並ぶ。見るとさっきまで道を真っ直ぐ照らしていた夕日はずれて、

半分も沈んでいた。それは空にこれが最後の灯りだといわんばかりに、深い赤を思いつきり解き放っている。

“ゴクンッ”

二人は息を呑んだ。僕は彼女の腰に手を回し、自分と向き合うように振り向かせた。彼女はためらうことなく、その要求に応じてくれた。互いに近づき唇を触れさせ合う。

「はあっ……、ちゅぱ……はあっ……ふうっ……、はあっ……」

激しく求め合うキス、彼女は甘い声を漏らしている。僕はもっとその声が聞きたくて、彼女の頭に手を回し、抱えるとより唇を近く密着させた。舌を絡ませ唾液を送り込んでいく。

「ひいっ……はあっ……、ちゅう……ジュルル……ゴクンッ、ひっく……はあっ……ふうっ……」

しばらくして息が苦しくなってきた二人は、ためらうように惜しみながら唇を離れた。

「はあっ、ちよつと苦しかった……」

「ごめん、夢中になり過ぎてつい……」

「いいよ。ユウタ君の気持ちいっぱい感じられたから」

「そうか。僕もミカの気持ち感じられたよ」

「ふふっ、ありがとう。じゃあ、そろそろ戻ろう」

「そうだな」

二人は夢中になっているうちに沈んでしまった夕日に別れを告げ、家に戻っていった。

115、僕と彼女の二人の空間10

115、僕と彼女の二人の空間10

家に帰ると時計の針はすでに6時20分をさしている。テーブルの上にはおいしそうなハンバーグと野菜サラダと麦茶が置かれていた。

「うわー、美味そう」

「今ご飯と味噌汁よそってくるね」

「うん」

僕は席に先に着いた。彼女は大盛りのご飯と味噌汁が2つつ乗ったおぼんを持ってきた。

「はい、どうぞ」

「ありがとうございます」

彼女も席に着いて手を合わせる。

「いただきます」

「いただきます」

「じゃあまずはハンバーグから」

僕は箸でハンバーグを一口大に切ると、口に入れる。デミグラスソースの濃厚な甘みと肉の柔らかな食感、そしてその中からはジューシーな肉汁が口いっぱいに広がった。

「うまい!!!」

いろいろな表現したい言い方はたくさんある、でもこの一言で十分だ、そう思った。

「よかったー」

彼女は僕の評価にほっとしたのか笑顔を浮かべている。

「ねえ、お店のハンバーグとどっちがおいしい？」

「お店？ それってもしかして初めてのデートで行ったところのこと？」

「うん、そこ」

確かにあそこ（『ハンバーグステーキ・よしだ』）のハンバーグは
かなりおいしい。なんせあの店はご主人が20年間も作り続けてい
るのだ。しかし彼女もハンバーグもそれに負けず劣らず、美味しいも
のだった。

「ミカのほろがおいしいよ」

僕は半ば過大評価かも知れないが、こう答えた。

「ホント？ お世辞じゃないよね」

「お世辞か、僕がそんなこと言うような人に見える？」

「見えないけど……、信じる。ありがとう、褒めてくれて」

「あはははっ、どういたしまして」

二人の目の前の皿とお椀からは、あっという間に中身が消えていっ
た。

20分後、食べ終わった二人は再び手を合わせる。

「ごちそうさまでした」

「ごちそうさまでした」

「さてと、そろそろ帰ろうかな……」

「えー、もう帰っちゃうの？」

「まだいてほしい？」

「うん、ちょっとこっち来て」

そう言っただけで彼女は僕を自分の部屋に案内した。ベッドに座ると横を
叩いてこう呟く。

「ねえ、ここに座って」

「えっ!？」

僕はその雰囲気と様子から彼女が望んでいることを感じとった。け
して自分には欲望がないわけではない。いやそう言ったら嘘になる
だろう。僕も一人の男だ、むしろ抑えきれないような気持ちを持っ
ているのは確かだった。しかしながらそれをまだ曝け出すのはため
らっている。

「ん、どうしたの？」

彼女は首を傾げて僕の顔を見つめている。少し怖かった……。ここ
でまっすぐにこの先に進めば互いに感じ合い、より深い関係になれ
るかもしれない。でも一歩間違えれば行き過ぎた何かによって、優し
く握り締めていたガラスが強く握り締めるとパーンツと割れてしま
うように壊れてしまいかもしれない、二人の関係が。

だからこそ大事にしたかった、彼女を。たとえこの一瞬が彼女の期
待に答えられないとしても、今ここまで築かれてきた関係を無駄に
しないために……。僕は言った。

「ごめん」

「そう……」

彼女の目は少し潤んでいるような気がした。裏切った、僕は彼女の
期待を。それでもいいと思った、その気持ちを伝えるために、思い
を信じさせるために、僕は彼女の目を見つめ続けた。ただただずっ
と……。

しばらくして彼女はちよつと下を向いて視線をそらし、再び顔を上
げると笑顔で告げた。

「いいよ、ありがとう」

「ありがとう」

僕もそう返した。二人は一緒に玄関に向かう。そして軽くキスを交
わした。

“チュツ”

「じゃあね」

「ねえ、もしかして明日、仕事なの？」

「えっ、なんで分かったの？」

「こんなに早く帰るなんて変だなんて思って」

「そういうことか。最後に残っているんだ、課長になる前の仕事が」

「そうなんだ。じゃあ、頑張ってるね」

「うん。じゃあね」

「じゃあね」

こうして僕は彼女に別れを告げると、家に帰っていった。

116、平日36

116、平日36

月曜日の朝、外ではいつもにまして冷たい風が吹いている。空の雲から白いふわふわしたものが落ちてきている。それは道路に落ちるとすっと消えてになってどこかにいってしまふ。まだ氷点下まで気温は下がっていないようだ。

いつもどおり8時15分に家を出た傘を差し僕に彼女が待っているアパートの下に向かう。彼女は僕の姿を見つけると大きく手を振って声をかけてくれた。

「おはよう、ユウタくん」

“タツタツタツ”

僕は走って彼女のところに駆け寄り、挨拶を返す。

「おはよう。待った？」

「うんうん、さっき降りてきたところだから」

「そうか、よかった。行こうか」

「うん」

二人は駅に向かって道を歩き始める。手をつないで歩く二人の間では、冷たい風が流れて、傘には白い雪が積もっていく。

「はあ はあ、寒いな、今日は」

白くなる息を口の前に合わせた手に吹きかけ、暖める。

「はい、じゃあこれ」

「えっ」

彼女はそう言う僕に青いマフラーを差し出す。それはこの前、貸してくれた布製のマフラーではなく、毛糸のマフラーである。

「これは？」

「私が編んだんだ、受け取ってくれるよね」

「ホント！？ ありがとう」

「巻いて上げるね」

僕は少しかがんで高さを合わせると、その首に優しく彼女がマフラーを巻いてくれた。温もりがゆっくりと身体に伝わってくる。

「温かいー」

「でしょ。そういえば今日からユウタ君、課長なんだよね」

「そうだけど……」

「おめでとー」

「ありがとう」

「でもずいぶん早い昇進だね、どうして？」

「評価されたのかな、仕事ぶりが」

「へえー、ユウタ君ってそんなに成績いいの？」

「どうだろう？ 一応ここ2ヶ月は1、2位の成績だったけど」

「すごいー！！」

「あはははっ、そうかな」

「うん。あれ？ でもここ2ヶ月って私とつき合い始めてからってこと？」

「まあ、そういうことになるかな」

「何か変わった？ 私とつき合い始めて？」

「変わったよ。気持ちが充実して何だろう、仕事に集中できるようになったかな」

「ふーん、それじゃあ私も貢献できてるのかな？」

「もちろん。ミカにはいつも感謝してるよ、ありがとう」

「どういたしまして。これからもお仕事、頑張ってるね」

「うん、頑張るよ」

ここで彼女は上を見上げるところ言った。

「ねえ、今日ってもしかして初雪かな」

「たぶん、そうじゃないかな」

「そうなんだ。なんかうれしいな」

彼女は僕の手を離すとくるつと、傘を持ってくるつと回り、とてもうれしそうな表情を浮かべる。実を言うと今日は初雪ではない。なぜなら日曜日の早朝、僕が出勤する時に少し降ったからだ。でもそ

のことを言ってしまうと、彼女が落ち込むのかなっと思った僕はあえて本当のことは言わなかった。

「雪は好きなの？」

「うん、大好き。いっぱい積もったら一緒に雪遊びしようね」

「はははっ、いいよ」

まるで子供のような彼女に僕はちよつと笑ってこつ返した。ここで二人は駅に到着する、切符を買って改札口をくぐるといつものように電車に乗り込んだ。

117、平日37

117、平日37

月曜日の昼間、僕は営業の外回りの途中である。課長になったからといって特に仕事内容が変わったわけでもない。変わったのは席と多少上がった給料、それと数人の部下ができたことである。しかしながら相変わらず自分の上には部長の存在がある。仕事内容に関してはそこから指示を受けることになったが、代わりに今までつき合わされていた憂鬱な休日出勤はなくなりそうである。ただ1つだけ気になる点があった。部長にこう言われたことである。

「昇進おめでとう。君には普段以外も含めて期待してるよ、頑張つて」

「はい」

普段以外も含めて……。明らかに不自然な一言である。おそらくまた休日にこれまでと同様に仕事を頼まれるのだろうか。いい加減にしてほしいような思いはある。今度労働基準法違反の疑いで訴えてやるつか、あの二人を。もちろんそんなことをする気はさらさらない。単なる冗談なのだが……。

12時を過ぎて空には少し晴れ間ものぞき、さっきまで降り続いていた雪も今はすっかり上がっている。ここで僕は昼食をとるためにいつもよく行っているラーメン屋さんに入る。

「へいつ、いらっしやーい」

カウンター席に着いた僕は何を注文するか考える。

（いつもどおり単なるラーメンでいいかな……。いやせっかく課長に昇進したんだから贅沢にチャーシューメンにするとか、それとも大盛りにしてみるとか。……でもまあ、いいやあんまり食べ過ぎるとこれからの仕事に影響しそうだし、普通のにしよつと）

「すみませーん」

「はい」

「ラーメン1つ」

「はい、ラーメンね」

僕は水を少し飲みながらラーメンができるのを待つ。

「はい、お待ちー」

3分後、僕の目の前に1杯の熱々のラーメンが置かれる。スープの上から立ち込める香りは、食欲をそそる。さっそく割り箸を手にとつて食べようとしたときである。

「おつす、ユウタ、ここいいか」

聞きなれた声がして、ちよつと横を確認する。相手は西原君だった。

彼も僕と同様に昼ご飯を食べに来たようである。

「おつ」

「すみませーん」

「はい」

「ラーメン1つ」

「はい、ラーメンね」

そして同じものを注文すると、僕の右隣の席に座る。

「あつ、聞いたぞ。お前、課長に昇進したんだってな」

「うん、今日からだよ」

「ずいぶん早いな、まだ2年目だろ。どうしてなれたんだよ？」

「そんな僕に聞かれてもなー。よく分からないけど仕事ぶりが評価されたのは確かだと思っただけ……」

「そうか。まあ、お前営業成績はかなり良かったもんな」

「うん」

「でも相変わらず、飯は普通のラーメンと……」

「ん」

「せつかくだからもつといいもの食べればいいのに。給料も上がったんだろ」

「そうなんだけど……。なんだろうあんまり食べ過ぎるとこれからの仕事に影響出そうだし、良くないかなと思って」

「なるほど。お前、真面目だな。だからそんなに早く昇進できたのかもな」

「そうなのかな……」

「はい、お待ち」

ここで彼のラーメンができる。

「あつ、そういえばそのマフラー、どうしたんだよ？」

彼は僕が外して横に置いていたマフラーを見て言う。

「今日の朝もらったんだよ、ミカに」

「ほう、やっとか」

「えつ、やっとか？」

「いやな実を言うと2週間ぐらい前から知ってたんだ、ミカが会社で空いた時間に編んでたから」

「なるほど。……そういうことだったのか」

「なんだよ、その変な間は？」

「いやただなんとなく、心当たりがあったから……」

「心当たり……、そういえば先週なんか言いそうになった気がするなあー」

「そう、それ。ミカも少し変だったけど」

「うんうん。つまり要はミカがそれだけ頑張つて編んでくれたことだよ。大事にしてやれよ」

「うん、分かってるよ」

二人はこんな話をしながらラーメンを食べていった。

118、平日38

水曜日の昼ごろ、僕らはいつものように外回りの営業の途中である。

“サクサク、サクサク”

歩道には薄っすらと雪が降り積もり、そこに足を下ろすたびに跡がかたどられていく。前にも後ろにも無数の足跡が広がっていた。

「ユウタ、そろそろ昼飯にしないか？」

西原君がそう言って話しかけてきた。時計を見て時間を確認するとすでに1時になるうとしているところである。

「そうだな。じゃあ、どっか近くの店に……」

「いいや。今日はこれがあるからさ」

「えっ」

すると彼は少し膨らんだかばんから、薄い水色の布に包まれた箱のようなものを取り出した。

「弁当か、それ？」

「ああ。今朝ユウコが作ってくれたんだよ」

「いいな、羨ましい」

「だろ。いわゆる愛妻弁当っていうやつさ」

「ラブラブだな、相変わらず」

「まあな。でも弁当作ってもらったのは今日が初めてだけど……」

「そっかー。さてとじゃあどこで昼飯に……」

「あそこの公園のベンチでどうだ？」

彼は道路の反対側にある公園のベンチを指差した。見るとベンチの上に屋根もあり、雪も避けることができそうだ。

「よさそうだな。僕はちよっとそこのコンビニで飯買うから先に رفتてくれよ」

「分かった」

二人は別れて僕は近くのコンビニへ、彼は先に公園のベンチに向かう。

5分後、僕も公園のベンチに向かい合流した。彼は膝の上に布をとった青い弁当箱を置いている。どうやら開けずに僕が来るのを待っていてくれたようだ。

「悪いな、待たせて」

「いいよ。さあ飯にしようぜ」

「おうっ」

彼はいいよ弁当箱のふたを開ける。するとまずご飯の上に載っているハート型の海苔が真っ先に目に入った。

「ほお、愛情たっぷりだな」

「よかった。会社で開けなくて」

「えっ」

「こんなの見られたら1日中ちやほやされて、仕事にならないところだったぜ」

「あはははっ、確かにそうだな」

「お前は何にしたんだ？」

「おにぎり2つとサンドイッチだよ」

「あれ？ 弁当は？」

「いや、あまりいいのがなかったからさ」

「そうか」

「あつ、そういえばずっと聞いてなかったけど、どうするんだよ結婚式？」

「結婚式か。そんな話もあったな」

「拳げるのか？」

「いや、多分しないかな」

「そうか、残念だな」

「うん。なんだろ、俺さお前と違って金がないんだよ、本当は彼女のためにもしたいんだけどさ」

「そんな少なかったけ？ お前の給料」

「少なくともないけど……、ほら子供が生まれたらかかるだろ、金が」
「なるほど。確かにそうだな」

「お前も考えたほうがいいぜ、子作りは。俺さできちゃった婚である意味それで結婚できたようなもんだけど、今になってちよつと後悔してるんだよ」

「後悔か。なら離婚したら？」

「バカ！ そう意味じゃねーよ」

「はははっ、冗談だよ、冗談」

「お前そんなこと言えるようになったのか、変わったな」

「そうかもな。彼女が結構好きでさ、冗談ってどうかイタズラ……、
うん」

「なるほど。ミカは明るくていい女の子だよな。いつもうちのムードメーカーだよ」

「そうなのか。あつ、今度送るよ、結婚祝い」

「ホントか？」

「うん。課長に昇進してお金にも大分余裕ができたし」

「そうか。有り難くもらっておくよ」

ここで二人の話は一段落する。

そしてしばらくしてご飯が食べ終わった二人は、立ち上がり降り積もる雪の中、新しい足跡をつけつつ歩いて行った。

119、平日39

時計の針は8時をすでに回っている。残業で帰りの遅くなった僕は今、電車に乗っているところだ。窓の外を見るとすっかり暗くなっているものの、明かりのついた家が多く、それは電車が進むにつれて後ろに飛んでいく。

“ガタンゴトン、ガタンゴトン、ガタンゴトン……、キキ
イイイ”

“東三橋、東三橋、降り口は右側です”

ブレイキ音が車内にまで鳴り響き、アナウンスが聞こえてくる。電車は東三橋駅に到着した。僕は他の客に混ざって電車を降りる。改札口を出て構内から外の様子をうかがう。空からは白いふわふわの雪が降りそそぎ、道路一面は白く埋まっている。

(大分積もったな、うん)

“バタンツ、サクツ、サクサク、サクサク……”

傘を開き駅から出ると、僕は足跡を残しながら帰り道を歩いてく。

“はあっ、はあ　　っ”

空から降り続く雪、足元を埋めている雪、吐く息、それらは白く辺りの家から漏れる明かりに照らされて幻想的な雰囲気演出していた。

しばらく歩き僕はミカのアパートの前に着いた。立ち止まりベランダの明かりに目を向ける。この時間だとご飯も食べ終わり、お風呂も済ませたのんびりテレビでも見ているところだろうか。

(会いたい……)

そう思うとなぜか緊張が高まり、不意に心臓の鼓動が速く大きくなっていく。

“ドクンツドクンツ、ドクンツドクンツ”

でも僕はそこでぐつと気持ちを抑え、前を向かって自分に一步を踏み出そうとする。その時だった。

「わあっ！」

“バタンツ”

誰かの声が出たかと思うと背中を急に押され、ちょうど片足を上げたところだった僕はバランスを崩し、そのまま白い中に倒れこんだ。「あっ、ごめん」

その声の主はそう言うとき手をつかみ、僕に起きるよう促す。応じて起き上がるとその手の先には見慣れた顔があった。

「ミカ」

「ごめんね、倒れるなんて思ってなかったから」

彼女は満面の笑みを浮かべてそこに立っている。

「……」

ただずつとその目を見つめ続ける。互いの心臓の鼓動の高鳴りと思いに引き寄せられ、緊張感が高まっていく。

「わあっ」

今度は彼女が驚く番だ。僕はその身体をめいっばい抱きしめた。

「ミカ、会いたかった……」

「私も……」

二人はそう呟くと少し身体を離し、顔をすり寄せる。

「ユウタ君、ほっぺた冷たい」

「さっきミカに倒されたからだよ」

「本当にごめんね」

「いいよ」

そう言うときミカを許すと、二人は向き合い、そのまま僕はミカの唇を奪った。

「はあ ふつつ、ちゅぱ……、はあっ。ひっく、はあ ちゅぱ

ちゅぱ、はあっ、ふつつ」

深いキスを交わす二人。空から降る雪は頭に少しずつ積もっていく。時々肌に触れる雪は冷たい。しかしそれを溶かしてしまっほどに、

二人の愛は熱く燃え盛った。

120、平日40

120、平日40

金曜日の帰り道、久々に会社からずつと一緒だった二人は、電車を降りて東三橋駅まで来ている。構内から外を眺めるとさつきまで降っていた雪は止み、雲の隙間から少し晴れ間も覗いている。

「止んだね」

ミカが話しかけてきた。

「そうだな。行こうか」

「うん」

“ サックサク、サクサク……”

二人は手をつなぐと雪の中に一步を踏み出した。後ろに仲良く並んだ足跡を残していく。

「たくさん積もったね」

彼女は嬉しそうな笑顔をしている。見ると雪は30センチ以上は積もっており、車が通るタイヤ跡だけでは路面が見えないほどである。

「だな。休日はどうしよつか？ って、あれ？」

知らないうちにながれていたはずの手は解放され、彼女が横から消えている。

（あれ？ どこに行った？）

そう思っ僕は首を傾げ立ち止まると辺りを見渡す。やはりいない……。

再び歩き始めてみる。するとすぐに後ろから声が聞こえてきた。

「ユウタ君」

「……」

その声に安心して後ろを振り向こうとしたその時だった。

「わあっ、冷たい！ 何するんだよ」

どうやら彼女がイタズラで背中に雪を入れたようだ。僕は後ろ振り向いて彼女と目を合わせる。

「あはははっ、どう？ ビックリした？」

彼女は笑いながら聞いている。このまま素直に対応してもよかったが、あえて僕はその彼女のイタズラに便乗することにした。雪をつかみ素早く彼女の後ろに回りこむと、背中に入れる。

「わあっ、ちよっとユウタ君、やめてよ、冷たい！」

「ミカが先にやったんだろ」

僕は彼女の横に戻るとそう言った。

「ごめん」

彼女はあまりの冷たさに自分がやったことを後悔してるようだった。

「いいよ、これでおあいこだから。それで改めて聞くけど今週の休日はどうしようか？」

「ユウタ君は両方とも空いてるの？」

「いや、土曜日だけかな。日曜日はちよっと用事が入ってるから」

「仕事？」

「仕事……じゃないかな」

「そう。じゃあ何なの？」

「昇進祝いっていうのかな、同じ部署の人と一緒に遊びに行くことになったんだよ」

「へえー、よかったね」

「うん。楽しみだよ。それで土曜日でいいかな？」

「いいよ。雪遊びしよ」

「分かった。何時から遊ぼうか？」

「えっと、あまり遅いと雪溶けてるかもしれないよね」

「そうだな」

「だから8時くらいでいいかな」

「分かった。じゃあその時間にミカの家に行くよ」

「うん、待ってる」

明日の約束を済ませ、そのあともしばらく話しながら歩くと彼女のアパートの前に着いた。

「お疲れ様、じゃあね」

“チュッ”

そう言っで彼女は僕に軽くキスしてくれた。

「じゃあね、また明日」

「うん」

こうして二人は別れ、僕は家に向かって歩いていった。

121、真つ白な雪の中で1

121、真つ白な雪の中で1

“リリリン、リリリン”

目覚まし時計の音が耳元で鳴り響く。ベランダのカーテンの隙間からは薄く突き刺すような朝日が差し込んでいる。

「ふあああ〜あ」

大きなあくびをひとつ、潜り込んでいた布団から顔を出す。ベルを止め、時計の針を確認すると7時を少し過ぎたところである。どうやら予定通り1回目の目覚ましで起きることができたようである。

“ササ、サ”

立ち上がってベランダのカーテンの前に立つと、両手を真ん中に合わせ勢いよく一気に開いた。めいっぱいの日差しを身体全体で受け止める。放射冷却のせいかなかなり気温は低い、それでも光は僕に温かさをもたらしてくれた。

8時になる少し前、身支度を済ませた僕はふかふかのダウンと厚手のズボンに身を包み、両手には手袋、靴は長靴、首にはミカが編んでくれたマフラーをして下に降りる。

“サクツ、サク”

一步を踏み出した時の足の感触、昨日とは一切変わっていない。空は青いが気温は低く、今日はまさに雪遊びには最高の日だった。

「はあ、はあ」

口から吐いた息は白く変わる。

“サククサク、サククサク”

足元に降り積もった雪をていねいにていねいに踏みしめる。後ろにははつきりとした足跡が残っていく。

少し歩くと目の前に大きく手を振っている彼女の姿を発見する。

「おはよう!!」

同時に大きな声も聞こえてきた。

「おはよう!!」

僕も大きく手を振って声を返すと、積もっている雪に足をとられながら彼女の元に走って駆け寄った。

「早いね」

その声をかける。

「遅いー、もうっ、20分も前から外に出てたんだよ」

「えっ、そんなに!」

僕は驚きの表情を浮かべる。

「うん、だって早く遊びたかったんだもん、行こう」

「うん。でもどこで遊ぶ?」

「あっ、そっかー。確かにここじゃ危ないよね、車来るし」

「そうだな。じゃあ、この前行った公園でも行こうか」

「いいね。行こう、行こう」

こうして二人は手をつなぐと、降り積もった雪の中を公園まで歩き始めた。

122、真っ白な雪の中で2

122、真っ白な雪の中で2

二人は手をつないで仲良く公園まで歩いていく。

“ サックサク、サックサク ”

雪を踏みしめる感触は昨日駅から帰るときと全く変わっていない。
ふわふわした柔らかい最高の雪質である。

「同じ音がするね」

彼女が踏みしめる足を見つめながら話しかけてきた。

「同じ音？」

「うん。昨日の帰り道と。これって雪質が変わってないってことだよね」

「ああ、なるほど。確かにそうだね」

「天気は……大丈夫かな？」

今度は上を向いて空の様子を確認する。今日は所々に小さな雲はあるものの、全体的にきれいに晴れ渡っている。

「どうだろう？ 天気予報では晴れって言ってたけど」

「気温大丈夫かな？」

「気温か……」

これに関しては僕も多少の不安があった。放射冷却のせいで今日の最低気温はマイナス3度、かなり低い。しかし昼間の最高気温は5度、もしかしたらかなり溶けてしまうかもしれない。

「うん。5度まで上がるって言ってたんだよ、ねえ、溶けちゃうよね？」

彼女は本気が冗談か分からないが、まるで泣きそうな表情で少し目を潤ませながら聞いてきた。

「それは……溶けちゃうだろうな」

僕は慎重にそう答えた。

「はあっ、残念。来週までずっと残っていてほしかったな」

「そうか。ミカは本当に雪が好きなんだね」

「うん。だって雪は私の友達だから」

これもまた子供が言うような一言である。僕は時々見せる彼女のこ
ういった少し子供っぽくはしゃぐ姿はかわいく、強くひかれている
部分の1つであった。

ちなみにここでは直接関係はないが、僕にとってはこの雪は明日ま
でに溶けてくれたほうが有り難い。なぜなら明日同じ部署の人と一
緒に遠出する予定で、僕も車を出すことになっている。普段あまり
車に乗らない僕はここ1週間の大雪に対応しきれず、タイヤ
を替えるには至っていなかった。

彼女の家から5分ほど歩くと二人は公園に到着した。見ると道路と
同じようにここにもたくさんの雪が積もっている。ただ車などが通
らないせいか、一旦溶けかけた雪が固まって所々硬くなっているよ
うな感じはほとんどなく、全体的に雪質が良さそうである。

「あれ？ 誰もいないね」

「そうだな」

時間はまだ8時を少し過ぎたところ、近所の子供たちもまだ遊びに
は来ていないようだ。

「何しよつか？」

「雪合戦って……思ったけど二人じゃ楽しくないよね」

「さすがにね。もっと子供が一緒にいたらいいけど」

「じゃあ、雪だるま作ろう」

「雪だるまか、懐かしいな」

「私が頭作るから、ユウタ君は身体を作ってね」

「分かった」

こうして二人はそれぞれ雪だまを作り始めた。

123、真っ白な雪の中で3

123、真っ白な雪の中で3

公園に積もった雪は大体30センチ前後だろうか。二人はそれぞれゴロゴロ雪だまをころがしながら、その雪をはぎとっていく。日が昇るにつれて少しずつ気温が上がり、額から汗がにじみ出てくる。

しばらくして近所の子供たちも遊びに来た。小学1、2生ぐらいだろうか。中には母親が一緒の子もいるようだが、みなその下を離れ、二人が雪だまをころがしている横に駆け寄ってくる。

「おにいちゃん、一緒にやっついていい？」

「いいよ。じゃあ、ころがすの手伝って」

「うん、分かった」

ここで二人には強力な助っ人が二人ずつ加わった。さらに雪だまをころがし大きくしていく。先ほどまでに直径1メートル近くになっていたため、一人ではかなり重たかったが、子供たちが手伝ってくれたおかげでさらに大きくすることができた。

「さてと、もういいんじゃないかな」

雪だまが直径1.3メートルほどの大きさになったところで僕は足を止めた。少し大きくしすぎただろうか、これだと上に乗せるときにかなり苦勞することになりそうだ。しかしこの心配は次の瞬間ある意味ひっくり返ってしまった。

「ねえ、おにいちゃん」

「何？」

「あっちの雪だま、こっちよりもっと大きいよ」

「えっ」

僕はミカの方を見て雪だまの大きさを確認する。見るそれは彼女の身長にかなり迫りつつある。パッと見だけでも1.5メートルを越える大きさがありそうだ。

「ミカー！」

とりあえず大きな声を上げて、彼女を呼ぶ。彼女は他の二人の子供と一緒に雪だまころがしながら、こっちに来た。

「おつかれー。ってあれ？　なんかそつちのほう小さいね」

「やったー！　こつちの勝ちだね、おねえちゃん」

知らないうちに勝負に変わっていたのだろうか、彼女と一緒にころがしていた子供たちが声を上げて喜ぶ。

「なあ、ミカ」

「何？」

「いくらなんでも大きすぎだよ」

「ごめん。冗談で勝負だつていつたら二人がはりきつちゃって」

「わたしたち、おねえちゃんのために頑張ったんだよ、ね」

「うん」

「そうか。それはいいけど……、どうやって乗せようか……」

「手伝ってもらおう？　この子たちのお母さんに」

「そうだな。すみませーん！」

僕は大きな声を出してベンチの座って話しているお母さんと呼ぶ。

するとすぐに立ち上がって駆け寄ってきてくれた。

「何かありました？」

「ちよつと手伝ってもらえますか？　この雪だまをこっちに乗せる

のを」

「ああ、はい、いいですよ」

「ありがとうございます」

二人はそろって頭を下げる。

「いや、そんな。私たちも子供たちと一緒に遊んでもらってるから

ありがとう」

「いえいえ、そんな」

「ねえ、ユウタ君。どうするの？」

「そうだな。じゃあ、持ち上げる役と向こう側で押さえる役に分かれるか」

「私、押さえるほうに回っていいですか？」

「はい、じゃあお願いします。ミカもそっちやってくれる？」

「分かった」

「私は持ち上げる役ね」

「はい。じゃあこっちに並んでもらって……。君たちは危ないから少し離れていてね」

「え」

「あっち行ってなさい、危ないから」

「はい」

少し不満げな表情を浮かべながらも子供たちは離れる。それぞれ所定の位置につくと僕がかけ声を出す。

「よし、それじゃあ、せーの」

「はい」

そしてかなり大きくて重い雪だまだったが、なんとか持ち上がり上に乗せることができた。

124、真つ白な雪の中で4

124、真つ白な雪の中で4

8人は前から2段になつた雪だるまを見ている。

「いやー、こうしてみるとずいぶん大きいなあー」

単純にそれぞれの直径から考えても3メートル近くの大きさはあるかもしれない。まさに迫りくるような圧倒的な大きさである。

「すごい、大きくしてよかつたね」

“ やつたー！ やつたー！ 大きい大きい雪だるま〜 ”

ミカと4人の子供たちは声を上げて喜んでいる。

「おかげで乗せるときに危ない思いをしたけどな」

僕は少し小さな声で呟く。実はあまりにも大きすぎたせいで持ち上げる時に勢いがつき、乗つた瞬間押さえきれず反対側に落とすようになったのだ。なんとか僕がとつさの機転で回りこんで押さえることができたのだが。

「えっ」

「まあ、いいか。で、顔とか手どうしようか？」

「その辺にある葉っぱや木の枝でいいんじゃない？」

「はい、はい。わたし拾ってくるね」

そう言つて子供たち4人が葉っぱと木の枝を拾いに行った。その間に僕は二人のお母さんに子供たちのことを聞いてみる。

「あの？ すみません」

「何？」

二人のお母さんのうち、一人は長い髪で温かそうなベージュのコートに赤いマフラーを巻いている。もう一人は短い髪でセーターを着ているだけで上に何もはおつておらずちょっと寒そうに見える格好をしている。

「まだ名前とか聞いてなかつたですよね」

「ああ、そうね」

「じゃあ、僕たちから。僕は井上勇太って言います」

「私は彼女の藤井美香です」

すると先に長い髪のお母さんが名前を言ってくれた。

「恋人同士。いいわね、微笑ましくて。私は内田雪子。子供たちはあの長い髪が姉の咲、そしてその横にいる男の子が弟の拓斗よ」

横にいるもう一人のお母さんも続けて言う。

「私は南絵里子。子供たちは今あの木の下にいる男の子が兄の悟、その横にいるのが妹の秋ね」

「かわいいー、はあっ、私も早く子供ほしいな」

「えっ、結婚してるんですか？」

「いえ、まだ。ミカ、ちよっと」

「ごめん」

「でも二人ともすごくお似合いよ、ねえ」

「うん」

「そうですか。ありがとうございます」

「じゃあ、早くプロポーズしてね」

「あー、はいはい」

「なに、その適当な返事。もうっ」

「分かってるって」

「ホントに？」

「うん」

「じゃあ、信じる」

「ふふふっ、仲がいいんですね」

「おかあさーん、木の枝と葉っぱ持って来たよ」

そのとき子供たちが戻ってきた。しかしここで僕は1つ大きな問題に気がつく。

「あっ、これ顔どうしようか？」

あまりにも雪だるまが大きすぎて顔がつけられないのだ。

「ユウタ君、私を肩車して」

「えっ」

「だってそうしたら届くでしょ」

「なるほど、分かった」

彼女は子供たちから葉っぱと木の枝を受け取り、僕が肩車をする。彼女を持ち上げるのは初めてだったが、スタイルがいいせいかわくはなく、案外簡単に持ち上がった。彼女は子供たちの指示通りに顔を完成させていく。

15分後、最後に背伸びを子供二人が腕をつけると巨大な雪だるまは完成した。

「私、カメラ取って来るね」

「分かった」

彼女は走って自分の家にカメラを取りに行く。

5分後彼女が三脚とデジカメを持って戻ってきた。

「おつかれー」

「おつかれさま」

「じゃあ、みんな並んで」

彼女はみんなが雪だるまの前に並ぶとデジカメの位置と設定を合わせる。

「これでよしと」

子供たちが真ん中に4人、お母さんはカメラから向かって右側に、僕らは左側に立つ。

“カシャッ”

「顔、確認してくるー」

彼女は一人離れていい写真が撮れてるか確認する。

「みんないい笑顔してる」

「見せて、見せて」

みんなで集まって写真を確認する。

「おお、いいね」

「咲、かわいい」

「秋もかわいい」

「うふふっ」

「あはははっ
」

……

それぞれみんな自分の表情に納得したようだ。こうして思い出の
ページは切りとられた。

125、真つ白な雪の中で5

125、真つ白な雪の中で5

雪だるまを前に写真を撮り終わって、僕らの遊びは一段落を迎える。デジカメを片付けた彼女が一息ついて、僕に話しかけてきた。

「はあっ。ちよっと暑くなってきたね」

「うん。これからどうしようか？」

日は昇り少しづつ上がってきた気温は、動き疲れた僕らに汗をにじませる。時計を見るともうすぐ12時、そろそろお昼ご飯の時間である。

「あっ、もう12時」

「えっ、もうそんな時間か」

「昼ご飯にしたいな」

「あっ、それなら今から私の家で一緒にどう？」

「えっ」

秋ちゃんのお母さんが僕らを気遣ってか、昼ご飯に誘ってくれた。

「どうする？ ミカ」

「せっかくだし、ご馳走になろうかな」

「いいんですか？」

「遠慮しないで。家の子と一緒に遊んでもらったから」

「じゃあ、お言葉に甘えさせてもらいます」

「みんな、お母さんについて来て」

「はい」

するとそう言っただけで秋ちゃんのお母さんがみんなを呼び寄せる。どうやら8人でにぎやかに食卓を囲むことになるようだ。

3分後、公園のすぐそばにある大きな一軒家に到着した。ドアが開き、靴を脱いで一人一人家の中へ上がっていく。

「おじゃましまーす」

まず全員がリビングの大きなテーブルに案内される。しかし椅子は全部で6個しかなく、座りきることができない。

「あつ、足りないわね。じゃあ、こっち来て」

「はい」

今度は大きなコタツ机がある8畳ほどの和室に案内された。

「ここに座つて。今飲み物を持ってくるから」

「はい」

子供たちは仲良く4人並んで座る。僕ら二人も同じように並んで座つた。

「二人は温かいお茶でいいかしら？」

「はい」

「はい」

お母さん二人はキッチンに飲み物を入れに行く。

5分後、二人がオレンジジュースが4つのおぼんと、緑茶が4つのおぼんをそれぞれ持って戻ってきた。

「はい。みんなオレンジジュースよ」

「ありがとうございます」

子供たちはみんなちゃんとお礼を言っている。

「はい。緑茶でよかったです」

「はい、ありがとうございます」

「ありがとうございます」

こうして全員に飲み物が行き渡ると、みんなそれぞれ飲み始めた。

126、真つ白な雪の中で6

126、真つ白な雪の中で6

「あつ、ちよつとお菓子持ってくるね」

そう言つて秋ちゃんのお母さんは再びキッチンに行く。子供たちは子供だけでそれぞれ話し始め、僕ら二人はお菓子が来るのを静かに待っている。

しばらくしてお母さんが山盛りのクッキーがのつたお皿を持って戻ってきた。どうやら手作りのクッキーのようだ。

「はい、いっぱい食べてね」

「いただきます」

まずは子供たちが先に口にする。

「うまい」

「おいしい」

みんな笑顔を浮かべておいしそうに食べている。

「二人も食べて」

「じゃあ、いただきます」

「いただきます」

二人は数あるクッキーの中から一つずつ手にとると、口に放り込む。

「これ、おいしー」

「うん、美味い」

「ふふつ、よかった。そう言つてもらえて」

ここで咲ちゃんのお母さんが僕ら二人にこんなことを聞いてきた。

「二人はつき合つてどのくらいになるの？」

「まだ2ヶ月ちよつとです」

「短いわね。でももう結婚を考えてるみたいね」

「ええ、まあ」

「私たち、出会つてからだともう8ヶ月は経つてるんです。だから早く一緒になりたくて……」

「ミカ、ちょっと」

「積極的ね、あなた」

「はい」

「ならいいんじゃない？ 結婚すれば」

「えっ」

「男はね。女の子の気持ちを察してあげるものよ」

「だって、ユウタ君」

「分かってるよ。ちゃんとそのうちプロポーズするから」

「約束だよ、待ってるから」

「うん」

最近ミカはしきりに僕にプロポーズを求めてくる。ただ僕にはその気がないわけじゃない。しかしせっかくするならもつとそれらしい時期になつていたいと思つていた。

「出会つてから半年間はどうしてつき合わなかつたの？」

「あつ、それ気になる。どうして？」

「彼がなかなか告白してくれなくて」

「そう。つてことはあなたが告白したの？」

「はい。じれつたくて私からしました」

「だめね。告白で先越されるなんて男らしくないわ」

「だって、ユウタ君」

「ごめん」

（つてなんで謝つたんだろう？ 僕）

「あはははっ、でも私ユウタ君のそういうところ好きだよ、落ち着きがあつて。それにいざという時は私のことリードしてくれるもんね」

「そうかな、ありがとう」

「ホント、仲がいいのね、二人は」

「はい」

そしてここで秋ちゃんのお母さんが思いがけない質問を持ちかけてきた。

127、真つ白な雪の中で7

127、真つ白な雪の中で7

「ねえ、二人はキスとかするの?」

「えっ」

その質問に一瞬場の空気が静まり返る。二人は互いに見つめ合い、目をぱくりさせる。子供たちも会話をやめてこちらの話に耳を傾けようとする。

「あっち行ってなさい。ジュースとお菓子持って行っていいから」
咲ちゃんのお母さんが子供たちにそう促す。

「はい」

場の雰囲気を観察したのか4人とも案外素直だった。ジュースとお菓子を手に、この部屋から出て行く。

「ごめんね。続けて」

「は、はい」

二人はもう一度目を合わせて、互いの気持ちを確認する。答えたのは彼女のほうだった。

「キスはよくするよね、ユウタ君」

「うん、まあ、そうだね」

「どんなときにするの?」

「デートが終わって最後別れるときとか、きれいな風景を見ているときとか……、うーん……」

「雰囲気に乗まれてって感じだよね」

「そうそう。そんな感じです」

「いいな。私もそのころに戻りたいな」

「うん。結婚してしばらくすると、キスとかあまりしなくなっちゃうもんね」

「そうなんですか。ユウタ君はちゃんと愛してくれるよね、結婚しても」

「あ、当たり前だろ」

「どうしたの？ 今のちょっと変だったよ」

「なんでもないよ。ただちょっと恥ずかしかった……だけかな」

「うふふっ」

彼女は僕の反応が面白かったのか、少し笑っている。ここでさらに切り込んだ質問が飛んでくる。

「もう抱いてあげた？」

「えっ」

さすがにこの質問は考えてなかった。ただ彼女は一瞬動揺しただけで僕に目を合わせて、何かを訴えかけようとしている。今度は僕が答える番だった。

「まだ、ちょっと……」

「そうなんだ。いい人じゃない、真面目そうで」

「うんうん。ちゃんと彼女のこと考えてあげてるんでしょ」

「そうなのかな？」

「私、信じてるよ、ユウタ君のこと」

「ありがとう、ミカ」

「男って好きになったらすぐに身体ばかり求めてくるから」

「そうそう。だからちゃんとそういうことを真剣に考えてくれる人を選ばないとね」

「はい。よかったね、ユウタ君」

「えっ、僕ほめられてるのかな？」

「そうよ。これから彼女のこと大事にしてあげてね」

「うん。そして幸せになってね」

「ありがとうございます」

二人はその温かい言葉に感謝して頭を下げた。

128、真つ白な雪の中で8

128、真つ白な雪の中で8

二人は一通り話が終わってそれから昼ご飯をご馳走になった。子供たちと一緒に囲んだ食卓、その和やかで楽しく温かい雰囲気は、結婚への決意をいっそう強くさせるものとなった。

時計の針は午後5時半を少し回っている。ベランダのカーテンの間から差し込む光はもうさほど強くない。カーテンに映った外の色は赤く濃く染まり始めている。咲ちゃんのお母さんは先ほど子供たち二人と一緒に家に帰っていった。

僕ら二人もこれから帰るところだ。玄関で靴に履き替えて秋ちゃんのお母さんと子供たちの見送りを受ける。

「今日は本当に子供たちと一緒に遊んでもらって、ありがとうございました」

まずお母さんが深々と頭を下げる。

「いや、そんな」

「私たちも楽しかったです。ね、ユウタ君」

「そうだね。こちらこそ、ありがとうございました」

「ありがとうございます」

次は僕ら二人が頭を下げてお礼を言う。

「ほら、二人もちゃんとお礼を言いなさい」

「お兄ちゃん、お姉ちゃん、ありがとうございます」

「楽しかった。ありがとうございます」

最後に二人の子供の元気な声が飛んでくる。最初から思っていたのだが、秋ちゃんの子供たちも含めて4人はとてもよくしつけされていて、礼儀がいい。それもただガツガチの硬い感じではなく、遊ぶ時はのびのびしている。これらは二人にとって理想の子供のよう映った。僕も彼女も今こんなふうに子供育てたいな、そう思って

いるだろう。

「じゃあね。また一緒に遊ぼうな」

「じゃあね」

二人は少し目線を下げて子供たち二人に手を振る。

「うん、じゃあねー」

「じゃあねー」

するとまた元気な返事が二人から返ってきた。

「おじゃましました」

「おじゃましました」

「おつかれさまー」

「じゃあねー」

僕ら二人はお母さんと二人の子供に見送られて外に出る。

道路に出るとそこにはまだ10センチほどの雪が残っている。

“グシャ、グシャ　グシャ、グシャ”

昼間の気温の高さでかなり雪が溶けたのだろう。一步一步踏みしめる雪の音は朝とは大きく変わっている。真っ赤な夕日は二人の背中をしつかりと見つめている。

横で手をつないでいた彼女はなぜかさびしそうな表情を浮かべていた。溶けていく雪、そのことをかなり残念に感じているのかもしれない。しかし僕はあえて彼女が話しかけてくるまで、声を出さなかった。それは朝とは違って少し強めに握られている手からの温かさを感じていたからだ。「雪は友達だから」彼女は今日の朝、こんなセリフを口にしていた。友達が消えて行く、その辛さを今身体全体で噛み締めている。僕に今できること、それはその辛さを手を強く握り返すところで思いを共有し、悲しみを減らすことだった。

しばらくして二人は僕の家に着いた。結局帰り着くまで何一つとして彼女は口にしなかった。けれども最後の最後、僕が彼女の手をそっと話したとき……

「あつ、待って」

そう言つて彼女は僕を呼び止めた。

「ん」

「わたし、ユウタ君に聞いておきたいことがあるの？」

「何？」

「実はまだ不安なことがあるの」

「えっ」

「わたし、もしかしたらこれからユウタ君のことを信じてあげられなくなるかもしれない。裏切ってしまうかもしれない。そのときわたし、どうしたら……」

彼女は最後までセリフを言い切れず目に涙を浮かべていた。溶けていく雪、その別れが彼女の心を少し感傷的にしたのだろうか。でもその眼差しから真剣なことは理解できた。

僕は少し下を向いてうつむき、ちよつとして顔を上げるところ答えた。

「無理に信じなくていい」

それが僕の見つけた最高の答えだった。

「えっ」

彼女は心無い言葉に、一瞬戸惑いの表情を浮かべている。ただ次の僕の一言でその曇つた何かは、晴れやかなものへと変貌を遂げた。

「僕がきつと信じさせるから」

「……分かった。ありがとう」

その顔に不安の色はない。目は真っ直ぐに僕を見つめている。

「じゃあね」

「じゃあね」

別れるとき、彼女は僕に近づいて優しくキスをしてくれた。

このやり取りはこれから起こる二人にとっての試練を暗に予測していたのかもしれない。しかしユウタとミカの絆はそれを乗り越える強さをしっかりと身につけていた。

129、平日41

129、平日41

月曜日の朝、僕は7時半に目を覚ました。ベランダのカーテンを開けて外を見ている。その景色は昨日までとは打って変わって別物になっていた。

(あれ?)

頭の中に疑問が浮かんでくる。昨日寝るときまで雪は残っていたはずだ。しかしなぜかどこを見渡しても白い雪は見つかからない。あるのはいくつかの水たまりだけである。あれだけの量が一晩で全て溶けてしまったのだろうか。

(雨でも降ったのかな?)

ただいつもまで経ってもずっと外を見ているわけにもいかない。とりあえずベランダを離れて身支度を済ませた僕はいつもどおり8時15分に家を出た。

見上げた空は分厚い雲に覆われていて、すぐにでも雨が降ってきてきそうな様子である。

(傘とつてくるか)

僕は一旦傘を取りに家に戻り、もう一度改めて外に出る。歩き出すとしたそのとき……

“ポツ………、ポツポツ………、ポツポツ、ポツポツ”

道路の水たまりを雨粒が叩く。

“バタンツ”

傘を差した僕は、駅のほうに向かって歩き始める。今日の最低気温は4度、降りしきる雨はさほど冷たくなく、先週とは違ってコートを着ていなくても少し暖かく感じられた。

2分後、彼女のアパートの前に到着した。珍しく彼女はまだ降りて

来ていなかった。

「おはよう、ユウタくん」

いつもと違うところから声が聞こえてきた。見るとスーツ姿でベランダから彼女が手を振っている。

「おはよう」

「今降りるから待っててー」

そう言っただけで彼女はベランダから姿を消す。2分後、赤色の傘を差した彼女が僕の横に立つ。

「おはよう」

「おはよう。じゃあ、行こうか」

「うん」

二人は手をつないで駅までの道を歩き始める。

「雪、いなくなっちゃったね」

「そうだな。あれだけ残ってたのに」

「わたし、夜寝る前にベランダから外を見てたんだ。そしたら大雨が降ってきて、それで全部どこかに行っちゃった」

「そうだったのか。ねえ、ミカ、それって何時ぐらい？」

「えっとねー、布団に入って時計を見た時が3時だったから、2時前くらいじゃないかなー」

「えっ、そんなに遅くまで起きてたの？」

「うん。どうしても外の雪のことが心配で」

「そうか。一人でとてもさみしい思いをしてたんだね」

「ふああ〜あ、うん」

彼女は眠そうなくびを1つして頷いた。

「ねえ、ユウタ君、おとといは変なこと聞いてごめんね」

「いいよ、別に」

「そう？ でもわたし、ユウタ君に変な心配かけちゃったよね」

「うんうん。ミカな素直な気持ちがかかって嬉しかった」

「えっ、それホント？」

「うん」

「じゃあ、もう一つだけ確認してもいい？」

「いいよ、何？」

「ユウタ君はさ、雪みたいに、突然わたしの前から消えたりしないよね」

「あはははっ、しないよ。ずっとずっとミカのそばにいるよ」

「ホント？」

「うん、信じて」

「分かった。ねえ、もっとくっついてもいい？」

僕はこの質問には言葉で答えず、左手を彼女の腰に回してぐっと自分のほうに近づけた。

「ふふっ、ありがと」

すると彼女は僕の肩に頭をくっつけてくれた。二人の上では傘が触れ合い、その顔には満面の笑みが溢れていた。

130、平日42

130、平日42

水曜日の夕方、同僚の西原君と一緒に営業の外回りの途中だ。二人はこれから最後の1件に向かうところだ。

「なあ、ちよつと一休みしようぜ」

歩いている途中で彼がこう提案してきた。僕は時計を見て時間を確認する、5時40分、次の待ち合わせ時刻は6時で、ここから10分ほどかかることを考えると5分ぐらいは休む時間がありそうだ。

「分かった」

近くに座るところがなかったので、二人はすぐそばのビルの壁にもたれかかって、持っていたペットボトルのジュースを一口飲む。

「次は何時からだっけ？」

「6時からだよ」

「6時かー、じゃあ5分ぐらいだな」

「うん」

「はあつ、これからまだ1時間あるのか。帰りが遅くなるなあー」

彼はため息を吐いて、そう口にした。

「そうだな。遅くなると怒られたりするの、彼女に」

「いや、それはないかな。代わりに一度泣きつかれたことがあるけど」

「泣きつかれた？」

「ああ。ちよつどその時さ朝、「今日は早く帰るね」って言って出て行ったんだよ。そしたら急に残業が入って帰りが9時になっちゃってさ。怒られるかなって思って恐る恐る帰ってドアを開けたら、涙を溢れさせたユウコに抱きつかれたよ」

「あはははっ、それはすごいな。でも遅くなるって電話とかできなかったのか？」

「いやー、ちよつど携帯の充電が夕方切れてね、したくてもでき

なかつたんだよ」

「なるほど。で、今日は大丈夫なのか？ 遅くなること」

「おう。朝出る時に言っておいたよ」

「なんだ。じゃあ抱きついてもらえなくて残念だな」

「えっ、何てこと言うんだよ。ユウコは妊娠中であるべく不安な気持ちにさせたらよくないんだよ。まあ、冗談で言ってるのは分かっているけど」

彼の目は冗談を軽く流す感じではなく、真剣だった。僕の発言は少し失礼だったかもしれない。

「ごめん。ちよつと酷かつたな」

「いいよ、気にしてないから。でも言葉には気をつけたほうがいいかもな、トラブルの原因になったりするから」

「それはそうだな。あつ、そういえばさ、お前ミカのことでは何か知ってることないか？」

「なんだ？ その質問」

「いや最近さ、話してるときにちよつと不安に思ってるようなセリフを聞かされて」

「二人の関係についてか？」

「うん」

「なるほど。ちよつと1つ言うなら、子供っぽいところだろうな」

「そうか。僕もそれは時々感じてたんだよな」

「なんだ、分かってたのか。でも今がちよつと危ない時期に来てるかもな」

「どういうことだ？」

「彼女が不安を抱く。それは多分期待の裏返しなんだ。だからお前がそれを裏切るようなことをしたら、一気に壊れるかもしれないな」

「えっ、壊れる!？」

「そうだ。でもそんな心配する必要はないぜ。壊れても修復することは可能なんだ。そしてそれが二人の関係をより強くすることにつながるのさ」

「へえー、なんかずいぶんかつこいいこと言うな」

「あはははっ、お前のおかげだよ」

「僕のおかげ？」

「覚えてないか？ 俺に彼女の家に行ってみたらってアドバイスしたときのこと？」

「ああ、あれか。そういえばそれがきっかけて結婚したんだっただな」

「俺、お前にはホント感謝してるんだ。だから今度何かあったら、力になるよ」

「分かった。頼りにしてるよ」

ここで彼は時計を見て時間を確認する。

「あっ、もう5時47分だ。行こうぜ」

「おうっ」

二人はビルのそばを離れると、次の営業先へ足早に向かっていった。

131、平日43

131、平日43

木曜日の夜、パソコン画面の右下に表示されている時計の時刻はすでに20時50分を回っている。このオフィスに残っているのは僕ただ一人。

(はあっ、やっと全部終わったー)

今仕事が全て終わったところだ。パソコンの電源を切り、荷物を持つと席を立ち上がり、電気を消して鍵を閉めてオフィスをあとにする。

ミカは当然のことながら、かなり前に帰っている。誰もすれ違ふことのない暗い廊下、エレベーターに乗り込むと、1階へ一人で降りていく。

1階でエレベーターを降りると、入り口へ向かって真っ直ぐに歩いていく。

「おつかれさまでーす」

突然横から声が聞こえてきた。

「えっ」

振り向いて相手を確認する。それは受付のひとみさんだった。僕は近づいて話しかけてみる。

「ひとみさん、今日はすいぶん遅いね」

「はい、遅番だったんで。でももうすぐ帰ります、9時になりますから」

「そうなんだ。じゃあ、おつかれさま」

「あっ、待って」

そう言っただけで帰ろうとした僕を彼女が呼び止める。

「はい？」

「ユウタさんってここ知ってます？」

彼女はそう言うと一枚の紙切れを僕に見せる。そこには「deli

「gite」と記されている。

「デイトライト？」

「はい、今日彼氏にここで待ってるって言われたんですけど、9時過ぎに。でも私知らなくて」

「彼氏……、恋人できたんですか？」

「ええ、まあ。2日前に……」

「おめでとう、よかったね」

「はい。……で、ここは？」

「知ってますよ、このホテルなら」

「ホントですか？」

「はい。もしよかったら案内しようか？」

「お願いします。今帰る準備するんでちょっと待っててください」

「はい」

2分後、荷物を持った彼女が出て来た。

「お待たせー。行きましょう」

「はい」

二人は会社を出ると並んで街中を歩いていく。

「何分ぐらいかかるの？」

「すぐだよ、5分くらいかな」

「そんなに近いんだ。どんなホテルなんですか？」

「いいところだよ、ロマンチックで。レストランの食事も最高だし。

僕も一度ミカと一緒に泊まってみたいな」

「わあー、すごい楽しみー。あつ、そういえばミカさんとは上手く

いってます？」

「上手くいってるよ。最近早く結婚してって言われてちょっと大

変だけど」

「ふふっ、ミカ相変わらずなんだ」

「えっ」

「すぐ焼きもち妬くからミカ。もう抱いてあげました？」

「まだ。あまり先を急ぎたくなくて……」

「……苦労するかもね、これから。ミカ、ちょっとわがままだから」「そうなんですか?」

「自分が愛されているのか、ミカはその証明がほしい。だから結婚してほしい、抱いてほしいと相手にせまる」

「僕、間違ってるのかな?」

「大丈夫よ。ここまではむしろ正解かな。あまり先を急いで乱暴に扱うと、逆にミカ怒るから」

「ふっつ、よかった」

「ミカのどこが好きになったんですか?」

「それは……優しくて明るくて元気がよくて、きれいでかわいところかな」

「……ミカ、いい人選んだなー、羨ましい。私もユウタさんとつき合ってみたかったな」

「そんなこと言われても……」

「ふっつ、冗談よ、冗談」

「なんだ」

「それにこれから彼氏に会えるしね。今日は一緒にご飯食べて、そのあと泊まって……、ああ、楽しみー、でもちよつと恥ずかしい」

「あはははっ。あつ、着きましたよ」

「ここか。ありがとう」

「どういたしまして。じゃあ僕はこれで」

「あつ、待って」

「えっ」

すると彼女は突然僕を抱きしめた。耳元で小さく呟く。

「さっきの言葉、嘘じゃないんですよ。私もユウタさんのこと好きだったから」

僕は少し考えると彼女こう告げた。

「ありがとう。じゃあ、きつとミカを幸せにしてみせます」

「ふっつ、模範解答ね。じゃあ、私はこれで。おつかれさま」

「おつかれさまです」

二人は身体を離し、手を振ってホテルの前で別れた。

1分後、僕がホテルを離れようとしたとき……

「ユウタ君」

後で聞きなれた声がした。きっとミカだ。振り向いて相手を確認する。

「ミカ。どうしたの？ こんな遅くに」

「バカ！！ この浮気者！！」

“バチッ！！”

そう言っつて突然ほっぺたを思いつきり叩かれた。そのまま彼女は振り返って走り去っていく。

（見られてたのか……）

僕はその背中を見つめ、後悔の思いを噛み締めていた。

132、平日44

132、平日44

「はあっ」

ため息を吐いた。赤く染まっっていく空、沈み行く夕日、僕は今会社の屋上で一休みをしている。あれから結局ミカとは一度も話していない。このまま沈んで行く夕日のように僕らの関係も終わりを迎えてしまうのだろうか。

改めて思うと昨日の夜の行動は確かに安易だったかもしれない。ひとみさんに抱きつかれたとき、すぐに身体を離せばたとえミカが見ていてもあんな誤解はされなかっただろう。でもそんなことはきつと僕にはできなかつた。

(このまま別れる……。それは……。いやだ……。)
正直な気持ちだ。24年間生きてきて初めてできた恋人、できるだけ丁寧に慎重に扱って愛を深めてきた、そういうつもりだった。でも僕には意識……。いや、覚悟が足りなかつた。彼女を幸せにしてみせる、そう心に誓ったのに……。

感慨に浸りつつしばらく夕日を眺めていると、後ろから誰かが僕を呼んだ。

「おい、ユウター」

「ん」

振り返って相手を確認する。西原君だった。

「休憩中か」

「うん。仕事が進まなくて……」

「そうか。なんかお前元氣ないな、何かあったのか？」

「まあ。ちよつとミカのこと……」

「聞くよ。話してみな」

「分かった」

僕は彼に昨日の夜にあったことの一部始終を話してみた。

「そういうことか。そういえばミカも今日様子が変だったな」

「そうなのか？」

「うん。ちよっとした書類なのに誤字・脱字だらけだったらしいし、昼の会議ではずっとぼーっとしていて、いつも上手いプレゼンもしやべれてなく全然良くなかったよ」

「……はあっ、悪いことしたな」

「何言ってるんだよ。ミカの完全な誤解なんだから」

「それはそうだけど……」

「まあ、あまり落ち込むなよ。それくらいならすぐに修復できるから」

「そうかな？」

「おう。それでもうひとみさんには話したのか？」

「いや。なんか彼女に話すのは申し訳ない気がする……」

「申し訳ないか。お前ちよっと優し過ぎだな。そういうことはちゃんと言ったほうがいいぜ」

「でも……」

「できないか……。よし、じゃあここは俺が引き受けてやるよ」

「えっ。なら、自分で……」

「遠慮するなよ。言ったじゃないか、お前には感謝してるって。だから今度は俺が力になるよ」

「……分かった」

「さあ、話もついたしそろそろ戻ろうぜ、仕事に」

「そうだな」

二人は屋上をあとにすると、それぞれのオフィスに戻って行った。

133、平日45

133、平日45

午後6時過ぎ、僕はいつもより仕事を早く切り上げて帰ることにした。オフィスを出るときひとみさんに声をかけられる。

「おつかれさまでーす」

「おつかれさまー」

彼女の笑顔はいつもと変わらなかった。関係ない話だが彼女はこの会社の受付としてとても評判がいいらしい。僕も取引先に行く先々で彼女のことについて話題にあげる人に会うことがあった。しかも男性だけではなく女性からもほめられることがある、どうやら万人に受け入れてもらえる笑顔のようだ。僕もそんな魔法のような魅力の彼女に一瞬心を許してしまったのだろうか。

（あー、あのととき……、抱きしめなければよかった……）
でも今さら後悔しても遅い。事はもう済んでしまったのだから。ただ夕方西原君が出してくれた助け舟、それに微かな期待を寄せつつ帰り道を歩いて行った。

（西原君視点）

午後6時半過ぎ、仕事を終えた僕は受付のひとみさんに声をかける。

「おつかれさまです」

「おつかれさま。あの、これからちよつと時間ある？」

「ありますよ。私半で今日は終わりなんで」

「そうか。じゃあ、話したいことがあるんだ。いいかな？」

「はい。でもちよつと待ってください、今荷物持ってくるんで」

「分かった。ここで待ってるよ」

2分後、彼女が荷物を持って出てきた。

「待たせてすみませんね」

「いいですよ。行きましよう」

「はい」

二人は並んで最寄の駅までの道を歩いていく。

「なんですか？ さっき言っていた話したいことって？」

「ユウタのことでちよっと……」

「えっ、何かあったの？」

「はい」

僕は詳しい内容を彼女に説明した。

「ミカに見られてたんだ。私、悪いことしちゃったわね。ユウタさん、怒ってた？」

「いや。その代わりとても落ちこんでいたよ」

「そうなんだ。でもそんなことがあったら、私に直接言ってくれればよかったのに」

「優しいから、ユウタの奴」

「えっ、もしかして私を気遣ってくれてたの？」

「はい、どうもそうみたいです」

「なら心配ね。きっと自分のせいにしてるんだろうな。本当は私のせいなのに」

「そういえば、かなり思いつめている感じだったな」

「うーん、私どうすればいいかしら？」

「僕に提案があるんだけど、いいですか？」

「ホント？ 何？」

「今週の休日にひとみさんがミカの家にも、僕がユウタの家に行くっていうのはどうですかね」

「あっ、それいいですね。私、久しぶりにミカと遊びに行きたいと思ってたし」

「じゃあ、大丈夫ですか？」

「ええ。ミカに本当のことちゃんと説明するわ。西原君もユウタさんのこと元気にしてあげてね」

「はい。それで話変わりますけど、ひとみさん恋人ができたんですよ」

「ふふっ、ユウタさんから聞いたんですね。できましたよ」

「おめでとー」

「ありがとう。そういえば西原君はもう結婚したんだっけ？」

「はい、10月に」

「ならこれで二人が仲直りして、みんなが幸せになるといいわね」
「そうですね」

ここで二人は駅に到着した。ここから彼女は逆方向の電車だ。

「じゃあ、私はここで。おつかれさまです」

「おつかれさまー」

二人は別れると、それぞれ電車の中で休日のことを考えていた。

134、それぞれの休日1

134、それぞれの休日1

(ミカ視点)

土曜日の朝、目覚めた私は着替えて朝ご飯を食べてそのままテーブルの上でぼーっとしている。

「はあっ」

何もやる気が起こらない。出るのはため息ばかり。

「ユウタ君」

名前を呼んでみる。当然だが返事は返ってこない。今私はあのときの安易な行動を酷く後悔している。抱き合っている二人を目撃してつい頭に血が上ってしまい彼を思いつきりひっぱたいてしまった。しかし今になって考えてみると彼が浮気をしたなんて証拠はどこにもない。それどころか「僕がきつと信じさせるから」そう言った彼がそんな行為をするだろうか。私ももう少し彼のことを信じてあげればよかったのかな……。

(ヒトミ視点)

土曜日の昼前、私は久々にミカの家に来てきた。あのときの誤解を解く、それが最も大きな目的だが、彼女と一緒に遊びに行くのも楽しみだ。

(ミカ、いるかな?)

“ピンポーン”

インターホンを鳴らす。1分ほど待ってみたが返事が返ってこない。(あれ? いないのかな? もう一度鳴らしてみようっ)

“ピンポーン”

もう一度インターホンを鳴らす。

“タッタッタッタ”

すると中から足音が聞こえてきた。どうやら気付いてくれたようだ。

今はおそらくドアの覗き窓から相手を確認しているはずだ。

「ヒトミ」

そんな私を呼ぶ声がした。

「開けて、ミカ」

そう言うのと彼女は鍵を開けてすぐに私を出迎えてくれた。

「こんにちは、ミカ」

「ヒ、ヒトミ……。う、ごめんなさい。うぁーん、うえーん……」

突然彼女は泣き始めて私に抱きついてきた。

「どうしたの？」

「うえーん……。ヒック、ヒック……。ねえ、違っただよね？ ヒック」

泣きながら私に問いかけてきた。

「違っよ、ミカ」

私はそう答えると、彼女が落ち着くまで背中を優しくなでる。しばらくして落ち着きを取り戻した彼女が私から離れる。

「ヒトミ、上がって」

「ありがとう」

彼女は私をリビングのテーブルに案内してくれた。

「座って。コーヒーでいいよね」

「うん」

彼女はキッチンでコーヒーを二人分用意して持ってくる。私と自分の前にそれぞれ置いて席に着いた。

「ヒトミ、説明してくれる？」

「分かったわ」

私は彼女に木曜日の真相を詳しく説明した。

「そ、そんな……。わ、わたし、今すぐ謝りに行かないと」

彼女は動揺して席を立ち上がるうとする。

「ミカ、今日はいいんじゃない？ 別に謝りに行かなくても」

私はそう言って彼女を引き止める。

「えっ、どうして？」

「彼には西原君が会いに行ってくれてるのよ」

「西原君が……」

「そう、だから今日は久しぶりに私と一緒に遊ぼう」

「……うん、分かった」

少し考えると彼女は私に笑顔で答えてくれた。

135、それぞれの休日2

135、それぞれの休日2

土曜日の朝、起きた僕は着替えて朝ご飯を済ませる。今日はいつもと違う、毎週ミカとデートに行っているせいかドキドキ、ワクワクして心臓の鼓動が高鳴ってくるのが常だったが、それが全くない。それどころかまるで心にポツカリ穴が開いたような虚無感にかられ、何もする気が起きずテーブルの上でぼーっとしていた。

3時間ほど経っただろうか、僕はずっと同じ体勢だった。なんとなくお腹が減ってきてとりあえず時計を確認する。

(もう12時過ぎか、昼ご飯食べないと……)

そう思つて立ち上がりキッチンに向かおうとしたところ……

“ピンポーン、ピンポーン”

玄関からインターホンのなる音が聞こえてきた。

(ん、誰だろう？ こんな時間に。もしかして……、ミカ？ いや

確か彼女は2回続けて鳴らさないはずだから……)

そんなことを考えながら玄関に行き、ドアの覗き窓から相手を確認する。

(なんだ、西原君か)

「おい、ユウタ、開けてくれ」

どうやら西原君も僕が玄関にいることに気がついたようだ。

「分かった」

僕はドアを開けて彼を迎え入れる。

「おはよう」

「おはようつす。いいか？ 入って？」

「大丈夫だよ、上がって」

彼をリビングのテーブルに案内する。

「お茶でいい？」

「おう」

僕はキッチンに向かうと冷蔵庫からお茶を取り出し、2つのコップに注ぎ、持って行くとテーブルの上に置く。

「ありがとな」

「それで今日は何の用だ？」

「いや、どうしてるかなって、お前が」

「もしかして心配して来てくれたのか？」

「ああ、まあそんなところだよ」

「悪いな、彼女のこともあるのに」

「気にすんなよ。それにユウコは今日女友達と遊びに行ってるからさ」

「そうなんだ。あつ、そういえばヒトミさんには……」

「それなら大丈夫だよ。今日ミカの家に行くって言ってたから」

「ホントか。それは助かったよ、ありがとう」

「あのときのお返しだよ。さてと、腹減ったし、一緒に飯食いに行かないか？」

「そうだな、行くか」

すると二人は家を出て、昼ご飯を食べに向かった。

136、それぞれの休日3

136、それぞれの休日3

12時半過ぎ、私はヒトミと一緒にレストランでランチを食べていた。このところ休日はずっとユウタ君とデートしていたせいか、彼女といるのは新鮮でとても楽しい。

「このスパゲティ、おいしいね」

「うん」

「そういえばミカ、1つ聞いてもいい？」

「いいよ、何？」

「どうして木曜日、あんなところにいたの？」

「そ、それは……」

「どうしたの？もしかして言えないような理由があるの？」

「言えない……わけじゃないけど……、ちょっと悪いことしたな
て」

「悪いこと？」

「実は彼のことか心配でつけちゃったんだよね」

「えっ、それ、ホント？」

「うん……」

「でもミカもたまたま遅くなったからでしょ？」

「うんうん、仕事が終わってずっと入り口を出たところで待ってた」

「そうだったんだ」

「うん。ねえ、ヒトミ、私の気持ち聞いてくれる？」

「もちろん」

「彼、私とつき合い始めた10月から急に仕事が忙しくなってきたみたいで、残業ばかりしてるからあまり一緒に帰ってくれなくて……」

「さみしかったんだ」

「うん。それに不安だった。帰りが遅くなったとき、いつも何してるのかなって。それでつい……」

「いいんじゃない？ 別に」

「えっ」

「誰でもそんな気持ちを持つことはあると思うよ。それにどうしても心配なら相談してみたら？」

「彼に……相談？」

「うん。ちゃんと考えてくれると思うよ、ミカのこと」

「……分かった。私言ってみる」

「ここで一度、話は一段落する。今度はしばらくしてヒトミが、再び話しかけてきた。

「ミカ、いい人選んだよね」

「そうかな？」

「うん。私感動しちゃった、ぎゅっと抱きしめたとき」

「もう、ヒトミ……」

「ごめんね。けどさあんな優しい人、なかなかいないよ。ミカは最高の人に会えたと思うよ」

「最高の人が……。ホントのこと言うと、もっと私だけを愛してほしいな」

「あはははっ、ミカって子供みたいに焼きもち妬くよね」

「笑わないでよ」

「ごめん、ごめん。でもこれからもっと愛してくれるよ、きっと」

「もっと愛してか……」

「幸せになっただけ」

「うん」

不安、それは相手を強く思うがあまり、誰もが抱いてしまう正直な気持ちなのかもしれない。でもそれを乗り越えたとき、二人はもっと愛し合える。彼をもう一度信じる、私は心の中でそう強く誓った。

137、それぞれの休日4

137、それぞれの休日4

1 時前、僕は西原君と一緒にファミレスで昼ご飯を食べている。

「あのさ、1つ気になることがあるんだけど……」

「何だ？」

「ミカ、どうしてあんなところにあの時間にいたのかな？」

「それもそうだな。あつ、その日メールは来てないのか？」

「来たよ、6時半に。先に帰るって」

「そうか。じゃあ、もしかしたら……」

「何かあるのか？」

「うん。ちよつと心当りがあるんだ」

「心当たり？」

「ミカさ、お前と出会う前にも恋人がいたんだよ」

「へえー、知らなかった」

「聞いてなかったのか。それでさ、その恋人にはふられたんだけど、

原因がストーカーだったんだよ」

「ストーカー！？ ミカが」

彼の思わぬ言葉に僕は驚きを隠せない。

「いや、そんな露骨ものでもないんだけど……、最近会ってくれな

いから不安になって彼の帰りのあとをつけたんだよ」

「それでどうしてふられるんだ？」

「それが見つかってね、それで怒った彼がミカに別れを告げたんだ」

「そんなことが。でもずいぶん心の狭い奴だな、そいつ」

「まあな。でも実はこの話には続きあるんだ」

「続き？」

「そいつ、浮気してたんだよ」

「ホントか。それは酷いなー。……ん？ でもってことは見つかるのが怖くなっただってことか？」

「そういうことだな」

「でもさ、ミカがもしも僕をつけたなら、それはよく考えないといけないな」

「どういうことだ？」

「要するに不安な気持ちにさせてしまったってことだろ。悪いことしたなって」

「お前、本当に優しいな」

「そうかな？」

「うん。それならきつと上手くいくよ、仲直り」

「仲直りか。でもそれから先のほうが大切だよな」

「まあな」

「なあ、何かしたほうがいいことってあるかな？」

「うーん、残業を少なくしてもっと一緒に帰ってあげるとか。あっ、そつえば、10月から急に忙しくなつたよな、お前」

「確かに。ちよつとやり過ぎだったな。考えてみるよ」

「減らせるのか？」

「たぶんね。実はしなくてもいい仕事まで引き受けてたから」

「へえー、そんなことまでやってたのか。ん、でも逆に言えばそれで出世できたってことだよな」

「まあ、そうなんだけどね。でももうできたから、これからは少し元のペースに戻してみるよ」

「それがいいな」

ミカには少し子供っぽいところがある。さみしがりでよく不安な気持ちになる。でも僕は一方で元気で明るくていつも笑顔な彼女が大好きだ。だからその笑顔を絶やしたくない、僕は心にそう強く誓った。

138、それぞれの休日5

138、それぞれの休日5

昼ご飯を食べ終わって店を出た後、二人で街をブラブラ歩いていった。

「私、ちょっと行きたいところがあるんだけど、いいかな？」

「いいよ。どこ？」

「それは行ってからの楽しみかな？」

「何それ？ そんなにすごいところなの？」

「うんうん。でも思い出の場所なんだ」

「思い出の場所か。分かった、行こう」

「うん」

10分後、二人は市内の中心部にあるベンチの前に着いた。

「ここ？」

「そう、ここ」

「ねえ、どうしてここが思い出の場所なの？」

「私が彼と初めて会った場所だから」

「へえー、ここだったんだ」

「彼、ここから見える夕日が好きでね、つき合い始める前はよく一緒に見たんだ」

「あれ？ じゃあ今は見ないの？」

「うん。さつきも言ったようにあまり一緒に帰ってないし、それに最近是一緒に帰れるときでもここで待ち合わせなくなったから……」

「そうなんだ。なんかさみしいね」

「うん。彼、忘れちゃったのかな？ 二人の原点だと思ってたのに」

「そうかもしれないね。忙しそうだったし」

「はあっ」

私はため息を1つ吐いて肩を落とし、ベンチにそっと腰掛けた。ヒ

トミはその横に座る。

「ここがいいかもね」

「えっ」

「二人がもう一度スタートを切る場所」

「どういうこと？」

「だって二人の原点なんですよ」

「うん」

「月曜日の帰りに待ち合わせして、一緒に夕日を見て、もう一度告白したら？」

「もう一度告白？」

「そう。そしたらきつとそのころに戻れると思うよ」

「分かった。やってみる。でも……」

「どうしたの？」

「来てくれるかな？ そんなに早い時間に」

「……ん、あつ、そっかー、5時半前には沈んじゃうもんね、夕日」

「うん」

「でも……大丈夫じゃないかな。彼もきつと覚えてるよ、この場所」

「そうだよ。私、信じてみる」

午後2時半、今日は晴れていて空からはサンサンと太陽の光が降り注いでいる。しかしあと3時間も経てば日は傾き、空は赤く染まる。今までいろんな場所からたくさん夕日を彼と一緒に眺めてきた。

どれもきれいだっただ、どれも素敵なひとときだった。でも私が一番好きなのはここから見える夕日だ。彼ともう一度この思いを共有したい、私はそう強く思った。

139、それぞれの休日6

139、それぞれの休日6

午後4時、少し日も傾き始め僕らの前を冷たい風が吹き抜けていく。二人は1時間半前ミカとヒトミが訪れていたのと同じ場所、市内に中心部にあるベンチの前にきていた。

「ここだ、久しぶりだな」

「どういうところなんだ？」

「実はここ、ミカと最初に会った場所なんだ」

「なるほど。思い出の場所ってことか」

「うん」

僕はベンチにゆっくりと腰を下ろす。

「ちよつと寒いな、コーヒーでも買ってこようか？」

「いいな。お願いするよ」

一方彼は気を利かせて、近くの自動販売機にホットコーヒーを買いに行ってくれた。

3分後、ホットの缶コーヒーを2本持った彼が戻ってきた。

「ほらよ」

「ありがとう」

僕がコーヒーを受け取ると、彼も横に座る。二人はそれぞれ缶のふたを開け、少しずつ飲みながら話し始めた。

「さつきさ、久しぶりって言ったよな」

「ああ、最近忙しくてね、ほとんど来てないんだ」

「最後に来たのはいつなんだ？」

「確か10月の終わりだったかな、もう1ヶ月以上も前の話だよ」

「そうなのか。じゃあ、ミカさみしがってるかもな」

「さみしがってる？ どういう意味だ」

「そうか。お前にはまだ分からないかもな、女の人ってのは記念っ

ていうのを男よりも大切にするんだよ」

「記念を大切にする？」

「記念、もっと分かりやすく言えば思い出ってことになるかな。俺最近さ1つ驚いたことがあつたんだよ」

「なんだ？ 驚いたことって」

「うん。先週の金曜日だったかな、家に帰ったらえらい豪華な晩御飯が出てきて、あれ？ 今日何かあつたか？ って思ったんだけど分からなくてユウコに聞いてみたんだ」

「へえー、そしたら？」

「二人が初めてキスした日だったさ。驚いたよ、俺すっかり忘れてたからさ」

「なるほど。それで忘れてて怒られたのか？」

「いや、でも言われたよ「男の人ってこういうの覚えてないもんね」ってさ」

「そうか。ってことは知らないうちにミカにさみしい思いをさせてたかもしれないな」

「そういうことだな。でさ、いつまでも恋人同士であり続けるために必要なことって分かるか？」

「いや、分からないよ」

「じゃあ、教えてやるよ。告白したとき、されたときの気持ちを忘れないことだ」

「なるほど」

「俺ちよつと恥ずかしいことなんだけど、結婚した今でもずっと続けていることあるんだ」

「なんだ？」

「毎日「愛してるよ、ユウコ」って必ず1回は言っつてことだよ」「いいな、それ」

「だろ。言っ度に二人の絆が深まっていく気がして、心が温かくなるんだ」

「絆か。じゃあ、僕もミカとあのころに戻ってみるか」

「どうするんだ？」

「帰りにここで待ち合わせて、夕日が沈んでいく前でミカに告白してみるよ」

「それだな。きつと戻れるよ、あのころに」

「うん」

二人の原点、互いに思うところは同じだった。初めて恋人同士になったあのときの気持ち、忘れてはいけない大切な宝物。そしてその先にある道を、明るく太陽が照らしていた。

140、それぞれの休日7

140、それぞれの休日7

電車に乗って東三橋まで戻ってきた二人、家までの道を並んで歩いている。午後5時半、目の前には沈み行く夕日、空は燃えるような赤に染まっていた。

「きれいー」

「そうね」

「あつ、そういえばさ、ヒトミにわたし、1つ聞きたいことがあるんだけどいい？」

「いいよ、何？」

「木曜日、どうしてホテルなんかに行ったの？」

私は彼女からユウタ君にホテルまでの道を案内してもらったところまでは聞いたが、それ以降の話はまだ聞いていなかった。

「えっ、分からない？ ホテルだよ、ホテル」

「ホテル……、えっ、じゃあもしかして……」

「ふふっ、言ってみて」

「恋人ができたの？」

「正解」

「ホント！？ おめでとう！」

「ありがとう。実はね、あのあとホテルのレストランで一緒にディナーを食べて、そのあと泊まってロマンチックな一夜を過ごしたんだ」

「いいなー、えっ、でも一緒に泊まったってことは……」

「ん、どうしたの？」

「……したってことだよな」

「もちろん」

「はあーあ、先越されちゃった」

「何言ってるのよ。彼は大切にしてくれてるんでしょ、ミカのこと」

「そうだけど……」
「したいの？ 彼と」
「うん。もっと近くで彼を感じたいから」
「そっか」
「それでどうだったの？ ヒトミは」
「よかったかな……。でもさ、それだけが全てじゃないよ」
「どういうこと？」
「男の人には2種類いるから」
「2種類？」
「そう。愛のためにしてくれる人と、自分の欲望を満たすためにする人。だからちゃんと愛のためにしてくれる人を選ばないといけない」
「い」
「そうか。でもそんなの分かるの？」
「分かるよ」
「でもそれはしたからでしょ」
「うんうん。する前に分かるよ」
「どうして？」
「耳を澄ませば聞こえる心臓の音、二人の間を行き交う空気、高まっつていく緊張感、そこから感じられるから」
「へえー、要するに雰囲気ってこと？」
「そんなところかな。ミカも知らないうちに感じてるんじゃない？ 彼といっぱいキスしてみたいだから」
「キス………、そうかも」
「じゃあいつかしてくれるよ、愛のある……、うふふふっ」
「じゃあ、待ってみる」
「うん」
「ここで二人は私のアパートの前に着いた。」
「今日、泊まってく？」
「いいの？」
「もちろん」

「ありがとう、ミカ」

二人は一緒に階段を上がって家に入る、そして楽しい夜を過ごした。

141、それぞれの休日8

141、それぞれの休日8

時計の針はすでに夜9時を少し回っている。夕食を居酒屋で済ませた二人は軽くほろ酔い気分で、東三橋駅から僕の家までの道を歩いている。

「今日はこんな遅くまでごめんな、彼女のこともあるのに」

「いいんだよ親友だから、俺たち。それにユウコにはさっき電話しておいたし」

「そうなのか。何て言ってた？」

「今日はとことんお前につき合っただけさ」

「そうか。なんか悪いな、そっちまでに気遣わせて」

「みんな幸せになってほしいんだよ、二人に」

「助かるよ。ホント、ありがとう」

「どういたしまして」

ここで一度二人の会話は途切れる、しばらくして僕は彼に結婚のことについて聞いてみた。

「なあ、お前さ、結婚して何が一番変わった？」

「一番変わったこと……、そうだなー、心が満たされるようになったことかな」

「心が満たされる？」

「そうだ。俺たちさ、元々一人暮らしだろ」

「うん」

「会社に行けば仕事仲間や友人、恋人のユウコに会える。でもさ、家に帰ればいつも一人なんだ。それって時々虚しさを感じないか？」

「なるほど。確かにそうだな」

「でもさ、結婚して変わったよ。どんなに辛いこと、大変なこと、落ち込むことがあってもユウコがいつも笑顔で俺を出迎えてくれる。その瞬間に心の消えていたロウソクに火が灯って、温かくなるんだ」

「それは、いいな」
「だろ。それでさ、結婚してからユウコに1つ気付かされたことがあるんだ」
「なんだ？」
「ちよつと恥ずかしいんだけど、俺って意外と不安な気持ちになりやすいんだなって」
「えっ、そうだったのか？」
「やっぱお前も気づいてなかったのか」
「うん。いつも調子のいい感じだから全然そんなふうには見えなかったよ」
「いや、それはたぶん裏返しなんだ、不安な気持ちの裏返しか……」
「でもさ、ユウコはさすがだよ、知らないうちに察してくれてたんだ、俺の気持ちを」
「へえー、そうなのか」
「分かるんだろうな。それでよく抱きしめてくれるよ、俺のことを」
「お前、すごく愛されてるんだな」
「うん。ホントは俺がもつとしっかりしてユウコを支えて上げないといけないのに、たまにそう思うよ」
「ん、でもいいんじゃないか、そんなこと思わなくても」
「どうしてだ？」
「それぞれの愛の形があるからさ、きつとそれが二人の最高の形なんだよ」
「なるほど。そういう考え方もあるな。ありがとう、ちよつと肩の荷が下りたよ」
「うん」
「気づかないうちにミカのアパートの前は通り過ぎ、僕の家に着いた。」
「今日泊まってく？」
「いいのか？」
「ああ。それに許可もらってんだろ、彼女に」

「まあな」

「それじゃもう少し二人で飲もうぜ」

「おうっ」

そして二人は僕の家で飲み明かし、楽しい夜を過ごした。

(西原君視点)

日曜日の昼過ぎ、ユウタの家をあとにした僕はミカのアパートの前でひとみさんに会う。

「こんにちは。あれ？ 泊まったの？」

「こんにちはつす。うん。そっちも？」

「はい。上手くいきました？」

「もちろん。そっちは？」

「こっちもバツチリです。これで二人も元に戻りますよね」

「そうだな」

季節は冬まったただなか、二人の前を冷たい風が勢いよく吹き抜けている。しかしそう言って笑顔で向き合った時、その風が一瞬の温かくなる、そんな気がした。

142、平日46

142、平日46

月曜日の朝8時、僕はいつもより早くミカのアパートの前に来ていた。扉にもたれかかって待っていると、10分になって彼女が降りてきた。

「おはよう」

「あつ、ユウタ君……、ごめん」

そう言つて彼女は僕に頭を下げた。

「いいんだ、ミカ。僕も悪かったよ、ずっとさみしい思いをさせていたから」

「そんな……、私……」

「いいよ。行こう」

「……うん」

彼女がうなずいたのを確認して、僕は駅への道を歩き始める。しばらく二人の間には重い空気が流れ、会話もない。冬の風が吹き抜けていく中、手袋をしていない僕の手は冷たい。いつも握りしめていた彼女の温かい手が恋しい。

「ミカ」

「何？」

「手、つないでもいい？」

「えっ!？」

一瞬彼女は立ち止まり、驚いたような表情を浮かべる。しかし下を向きながらも

「いいよ」

そうつぶやいてくれた。そつと彼女の右手を握りしめる。僕の冷たい手に彼女の温かさが一気に伝わってくる。

「私、ユウタ君に話さないといけなことがあるの?」

「何?」

「実は木曜日、ずっと会社の前で待ってて、出てきたユウタ君をつ
けちゃったの」

「そうだったのか」

「うん……、ごめんなさい。信じてあげられなくて」

「いや、悪いのは僕のほうだ。信じさせてみせるって言ったのに…

…」

「……」

また黙り込んでしまう二人。お互いに仲直りしたいそう思っているのに上手く会話が続かなかった。そうこうしているうちに駅は段々と近づいてくる。

(駅に着く前に今日の帰りの待ち合わせのことだけでも……)

「なあ、ミカ。今日さ帰りに久しぶりにあの場所で待ち合わせしな
いか?」

「あの場所?」

「うん。夕日が見えるベンチの前でさ、5時半に……」

「ユウタ君……、うん!」

彼女はこつちを向いて僕の名前を呼ぶと、表情が笑顔に変わりはつきりとうなずいた。その瞬間愛しくて、愛しくてたまらなくなった僕は思いつきり彼女を抱きしめた。

「きゃっ!」

「ミカ、愛してるよ」

「私も……」

一度は離れていた二人の心、しかし再び抱きしめ合い、お互いの温かさを感じた瞬間また一つになった気がした。

143、平日47

143、平日47

時計の針はすでに5時半を回っている。ここは街の中心部、一足早く5時20分には来ていた僕は彼女が来るのを待っていた。

(遅いなー)

この時期は1ヶ月前とは違い、日が沈む時間も早くなりなかなか来ない彼女に少し心配になってくる。しかししばらく待っていると、5時40分になる直前に姿を見せた。彼女も僕に気がついたのか手を挙げて走って駆け寄ってくる。

「はあー、はあー。ごめん、抜け出すタイミングが見つからなくて遅くなっちゃった」

「おつかれさま。いいよ、まだ沈んでないから」

「そう、よかった」

「一緒に見ようか」

「うん」

二人は並んで肩を抱き寄せると、静かに夕日を見る。今日は晴れていて空一面がきれいな深い赤に染まり、沈みゆくオレンジ色の太陽が二人の顔を照らしている。

少し時間が経って僕は彼女の名前をそっと呼ぶ。

「ミカ」

「何？」

「今までごめんな、気づいて上げられなくて」

「えっ」

「さみしかったんだよな。ずっと僕がこの場所を忘れていたから」

「……うん」

彼女が頷いたのを確認して、抱き寄せていた腕を離し、二人は夕日を前に向き合った。

「なあ、ミカ」

「ん」

「この場所って二人の原点だったんだな。だから、ミカ……」
「待って！」

僕が言おうとしたとたん、突然彼女が叫んだ。

「えっ」

「私に言わせて」

「分かった」

思い出せば2ヶ月半前、先に告白したのは彼女だった。だから二人は今……

「ユウタ君、好きだよ」

「ミカ、僕も好きだ」

再び時が動き出した。二人は近づきあい、強く抱きしめつた。

「好き、好きだ。愛してる、ミカ」

「わたしも、愛してる……」

そのまま長く、長く、抱きしめ合った二人、身体を離すと深いキスを交わした。

「はあっ……………ふうっ、くちゅ……………ちゅば……………はあっ……

……………ちゅば……………ふうっ」

激しく舌を絡ませ合うと、彼女はいやらしい声を漏らしている。空は燃えるように赤く染まり、太陽が沈み行くまで互いに強く求め合った。

144、平日48

144、平日48

火曜日の夜9時過ぎ、僕は誰もいないオフィスで仕事をしている。ずっとパソコン画面を見つめていたせいか、目が痛くしょぼしょぼする。

それから30分以上経って、やっと今日の分が終わった。パソコンの電源を切り、背もたれにもたれかかって大きな背伸びをする。

「うーんんんん……、はあ……あ」

（もう10時か。そろそろ帰らないと。はあっ、せつかく彼女と仲直りしたのに……、こんなので大丈夫なのかな？）

そんな疑問を抱きながらも、席を立ち電気を消して暗い廊下に出て歩いて行った。端にあるエレベーターのボタンを押す。見るとちよつと下で乗った人を降ろしたところのようだ。

（へえー、いるんだ。こんな遅くまで残っている人。誰だろう？）
僕も上がってきたエレベーターに乗り込んで、下に降りる。ドアが開くと目の前に誰かが立っていた。

「おっすー」

「えっ」

聞き慣れた声だ。暗い中だとよく相手が分からないがもしかして……

「俺だよ、俺」

「西原君？」

「正解。おつかれさま」

「おつかれさまー」

「残業か？」

「うん。お前も？」

「まあな。一緒に行くか？」

「おっす」

二人は並んで入り口を出ると、夜の街を歩いて行く。

「どうだ？ 仲直りできたか？」

「ああ、できたよ。昨日の帰りにあの場所で待ち合わせして」

「そうか、よかったな」

「うん、ありがとな」

「また困ったことがあったらいつでも言ってくれよ、力になるからさ」

「分かった。助かるよ」

「さてと、それはそうとお前、こんな遅くまで残業してて大丈夫なのか？」

「えっ、そうでもないけど……」

「まあでも仕方ないのか。昇進したばっかで忙しいんだろ」

「うん。ホントは早く仕事を終わらせて一緒に帰りたいんだけどね」

「だよな。俺も同じだよ。最近忙しくなってユウコとあまり長い時間過ごせてないから」

「そうか。年末って何かと大変になる時期だからな」

「そうそう。でももうすぐしたら冬休みだから、お互い頑張ろうぜ」

「そうだな、頑張るよ」

ここで一度二人の会話が途切れる。しばらくしてまた彼が話しかけてきた。

「お前さ、早く結婚した方がいいかもな」

「えっ」

「いや思うんだよ。ミカってさちょっと子供ぽくて、さみしがるところがあるだろ」

「うん、確かに。だからもっと長く一緒にいてあげたいんだけど……」

「それを一番早く解決できるのが結婚なんだ。一緒に住むようになるからさ」

「なるほどね。同じ場所に住めば少なくとも朝と夜は一緒だもんね」

「そういうことだ。いいぜ、そばに愛する人がいるってのは」

「じゃあ、するのか？ 妊娠しても夜は」

「えっ。まあ、一応な」

「なんだそれ、一応って」

「分かるだろ。察せよ」

「ごめん、ごめん。聞いてみただけだから」

「あつ、でも触れ合うことって大切だよ。それだけで思いを共有できるから」

「……やっぱり応じてあげたほうがよかったのかな……」

「えっ、まだしてなかったのか？」

「うん」

「そうだったのか。まあ、でもお前次第だよ」

「僕次第……、……分かった。じゃあ、クリスマスイブにプロポーズしようかな」

「いいんじゃないか。最高のプロポーズにしてやれよ」

「ああ」

そして二人は駅に到着し、同じ電車に乗ってそれぞれの家に帰っていった。

145、平日49

145、平日49

金曜日の夜、パソコンの右下に表示されている時計はすでに7時を少し回っている。やっと今週の仕事が終わった僕は電源を切り、荷物を持つと廊下をかけてエレベーターに乗り込み、急いで下まで降りる。

入口近くでは二人の女性が待っていた。ミカとヒトミさんだ。

「おつかれさま」

「おつかれさまです」

「ごめん、遅くなって。おつかれさま」

「いけませんよ、課長。こんなに遅くまでミカを待たせちゃ」

少しいじわるな笑顔を浮かべて、ヒトミさんが言う。

「もう。もつと一緒に帰ってくれてるって言ったでしょ」

ミカもそれに合わせて、ちょっときつい口調でこう言った。

「そうだけど……、本当にごめん。でも、忙しくて……」

「忙しい？ じゃあ、課長は仕事とミカ、どっちが大事なんですか？」

「そうよ。私と仕事、どっちが大事なの？」

もう一度謝るとさらに追い打ちをかけるように、より厳しい質問攻めにあう。

「それは……」

僕は突然の弱みをつく質問に、返す言葉が見つからない。仕方なくしばらく困った顔で静かにしていると……

「あははははっ、課長、本気で困ってる」

「あははははっ、ユウタ君、おかしいー」

二人は急に笑い出した。

「えっ」

「もっいいいよ。別に怒ってないから」

「ユウタさんて、ホント、真面目なんですね」

「どうやら二人で話し合って、僕を困らせることを予め決めていたようだ。事実月曜日以外は結局残業で忙しく、ほとんど一緒に過ごすことができなかった僕は後ろめたさがあり、見事に引っかけたしまった。」

「そうか、ならよかった」

「じゃあ、私は邪魔しちゃいけないから先に行くね」

「ありがとう、ひとみ。おつかれさま」

「おつかれさまー」

「おつかれさままでーす」

今日はデートなのだろうか、ヒトミさんは跳ねるように先に入り口を出て行った。

「ひとみ、今日は彼氏と一緒に夜を過ごすんだって」

「へえー、上手くいってるんだな」

「そうだね。じゃあ、私たちも行くこうか」

「うん」

そう言っ二人は手をつなぎ並んで、入り口を通り抜ける。しかしなぜか彼女は僕をいつもと逆の方向に引っ張る。

「えっ」

「どうしたの？」

「こっちは駅と逆方向だよ、ミカ」

「えー、もう気づいたの」

「当たり前だよ。いつも帰ってるんだから」

「はあっ」

なぜか肩を落とし、ため息を吐く彼女。なんとなく意味は分かっている。この方向はさっきヒトミさんがかけていって、その先には先週行ったホテル、「delight」がある。おそらくそこに僕を連れて行くこうとしているのだろう。

先週までの気持ちなら僕はここで躊躇して、駅の方に彼女を向き直させたかもしれない。でも今日は……

「行こうか、ミカ」

「えっ、いいの」

「いいよ。信じてるから」

そう言うことができた。

「ユウタ君、……ありがとう。私、嬉しい」

彼女は僕を引っ張るのをやめ、優しく横に寄り添ってきた。そこから伝わっていく温かさ、二人は互いにそれを感じながらゆっくりとホテルへ歩いて行った。

146、平日50

146、平日50

「ごめん」

僕はベッドの上でそう呟いた。今、自分の欲望を曝け出してしまったことを後悔している。

「どうしたの？」

ミカは謝る僕を心配そうな表情で見つめ、目をパチクリさせている。

「嫌いに……」

「えっ？」

「嫌いにならなかった？」

強い不安から僕はこう聞かずにはいられなかった。視線を落とすつと手のひらを見つめている。

「はあっ」

彼女が答える前に大きくため息を吐く。しかし二度目の息を吐こうとしたとき……

「ありがとう」

彼女はそう言っつて左手をそつと握り締めてくれた。優しい笑顔で僕の顔を覗き込んでくる。

「えっ!?!」

「そんなことないよ。わたし、ユウタ君のこと、もつと好きになつたから」

「……ホントに？」

「ホントだよ。だからこつちを向いて」

「分かつた」

僕は顔を上げて振り返り、彼女と目を合わせる。瞬間、心の底から愛しさが込み上げてきて、涙が1つ、目からこぼれ落ちる。

「あれ？ ユウタ君。泣いてる？」

「……うん。嬉しくて、嬉しくて……」

「わたしも、嬉しいよ」

「ミカ……」

もう止められなかった。堰を切ったように次から次へと、涙が溢れ出る。そしてたまらなく抑えられなくなった僕は、彼女を……

「きゃっ！」

思いつきり抱きしめた。

「ずっと、ずっと、僕のそばにいてくれる？」

「当たり前じゃない」

彼女の身体はとても柔らかく、温かかった。

「好きだ、ミカ。好きだ。愛してる」

「私も……好き。愛してるよ」

いつの間にか彼女も涙を流していた。二人の背中を、絶え間なく流れ落ちる互いの涙が濡らしていった。

147、最高の夕日へ1

147、最高の夕日へ1

日曜日の朝、二人を乗せた車は海岸沿いを走り抜けていく。ドライブデートは3週間前にも行ったが、今日はそのときと逆方向に車を走らせていた。

家を出てからあまり話していない二人、助手席に座っているミカは窓から見える海をずっと見つめている。

赤信号で車が止まって、僕はふと海のほうに目を向ける。空は所々雲がただよっているものの、晴れていて東にはまだ低い太陽がある。その光は海に届くと波の鏡に乱反射してキラキラと宝石のような白い輝きを放っている。

「きれいー」

彼女が呟いた。

「そうだな」

ここで信号機は青に変わり、僕はブレーキから足を離し、アクセルをゆっくりと踏み込む。すると車が緩やかに加速していく。

「ねえ、今日はどこに行くの？」

「うーん、……どこに行こうかな？」

「えっ、決めてないの？」

「はははっ、いや、決めてるよ」

「じゃあ、どこか教えて」

「ダメ」

「えー、どうして？」

彼女はさっきまで海を眺めていたが、僕が教えなかったのが不満だったのか、こつちを向いて少しほっぺたを膨らませている。

「もったいないから」

「もったいないって……、どういうこと？」

そう言う彼女はちよっときつい口調だった。

「知ったら楽しみが半減するよ」

「半減？」

「せつかくだからさ、二人に最高の思い出にしたいんだ」

「そんなにすごいところなの？」

「うん。僕の一生忘れたくない景色だから」

「そうなんだ。わかった。じゃあ、わたし、もう聞かない」

「ありがとう」

「絶対感動させてね」

「……わかった」

今車を走らせて向かっているところは、実は家からの直線距離だとそこまで遠くはない。ただ直接行ける道路がなく、大きく迂回していく必要があった。

着くのはおそらく5時過ぎ、僕は彼女と一緒に、最高の夕日を目に焼き付けるのを楽しみに車を走らせていった。

148、最高の夕日へ2

148、最高の夕日へ2

昼前になつて高く昇つた太陽は、エメラルドブルーの車をより強く照らしている。もうすぐきれいに光る海を離れ、僕らは街中に入る。さつきまで窓から海のほうばかり見つめていた彼女も、その先にある街を気にしているようだ。

「街が見えてきたね」

「うん」

「ん、あれ？ あの観覧車ってもしかして……」

「おっ、気づいた？」

「ミラクルスペースランド？」

「そっだよ」

「えっ、でもさ、この前はもつと早く着いたよね」

「ああね。あのときは高速で行ったからね」

「そっかー。結構遠いんだ」

「そっだな。といつても80キロちよつとだけど」

「80キロか。ねえ、どこか寄つていくの？」

「どうしよっか……、もう1回行く？」

「えっ……。いや、いいや。帰れなくなりそうだから」

「あはははっ、そうなのか。まあ、じゃあ、とりあえずは昼ご飯かな」

「ん、レストランにでも寄るの？」

「うん。おいしい店を知ってるから」

「やったー！！」

彼女は手を挙げて満面の笑みで喜んでいる。

「どんなお店？」

「それは行つてからの楽しみだよ」

「えー、また」

「知りたい？」

「うん」

そう聞くと彼女は目を輝かせて頷く。しかし今日の僕はそんなもので心が揺れるほど甘くはない。

「ダメ」

「…………どうして？」

「楽しみが…………」

「楽しみが半減するからでしょ」

お決まりのセリフを言う前に重ねられてしまった。

「そっだよ」

「もういいよ。今日はわたし、ユウタ君を信じる」

「そうか、ありがとな」

「うん」

再び笑顔を見せると彼女は前を向いている。そしていよいよ車は街中に入っていった。

149、最高の夕日へ3

149、最高の夕日へ3

二人を運んできた車はレストランの外の駐車場に止まっている。

僕は今、中で席に座りメニューを見ているところだ。

「ねえ、ユウタ君」

「ん？」

「これ、おいしいのかな？」

ミカが今月のオススメと書かれたメニューの1つ、カキフライ定食を指して聞いてくる。

「カキフライか。今が旬だからおいしいと思うよ」

「そっかー。じゃあ、わたし、これにしよう。ユウタ君はどうするの？」

「そうだな。僕もカキにしようかな、せっかくだから」

「えっ、じゃあ、わたしと同じの？」

「うんうん。すみませーん」

何を頼むかは彼女に教えず、先にウェイトレスを呼び寄せる。

「ご注文はお決まりでしょうか？」

「はい。カキフライ定食を1つ」

「はい」

「えっとね、それから……、あれある？ あれ？」

「ありますよ」

「じゃあ、それで」

「かしこまりました。ではご注文を繰り返します。カキフライ定食が1つ、あれが1つ、以上でよろしいですか？」

「はい」

「では、しばらくお待ちください」

注文が終わって彼女の方を向く。すると首傾げてポカーンとした表情をしている。

「ねえ、あれってなに？」

「気になる？」

「うん。教えて」

「裏メニユーだよ」

「裏メニユー！？ えっ、もしかしてユウタ君、ここの常連なの？」

「常連……。うーん、ちょっと違うかな」

「どういうこと？」

「正確に言うとな。ここには取引先の人とよく一緒に行くんだ」

実は僕にとって美郷市は遊園地のあるデートスポットというもよ
りも、大きな取引先の工場がある街という意味で関係が深い。当然、
工場の視察でここに出張することも多く、先月もその取引先の人と
ここに来て一緒に裏メニユーを食べたところだった。

「へえー、つまり、その取引先の人がここの常連ってこと？」

「そう。だから僕も裏メニユーを知ってるんだ」

「すごい！ ねえ、料理がきたらわたしにも食べてさせてね」

「もちろん」

「やったー！」

彼女は笑顔を浮かべ嬉しそうな顔をしている。その後も二人は楽し
い話をしながら、料理がくるのを待っていた。

150、最高の夕日へ4

150、最高の夕日へ4

20分後、料理が運ばれてきた。ミカの前にはカキフライ定食が、僕の前には網焼きされたカキの開いたものと、彼女の定食についているものと同じものが置かれている。

「美味そう!」

「おいしそう!」

二人は料理を前にそろって手を合わせる。

「いただきます!」

「ねえ、それなに?」

彼女がさつそく僕の前に置かれているカキ料理について聞いていた。「生ガキの網焼きだよ。新鮮なカキが手に入るここでしか食べられないんだ」

「へえー、すごい! おいしいの?」

「おいしいよ! さつそくこの左のを……」

カキを手を持ち、専用のナイフで殻から剥ぎ取ると、口の中に運ぶ。柔らかな食感と海のエキスたっぷりのミルクと口いっぱい広がる。「美味い!」

その一言で十分だった。彼女は自分の料理には全く口をつけず、僕の手の動きと顔の表情を見つめている。

「あれ? ミカ、食べないの?」

「えっ!? じゃあ、わたしも……」

彼女は少し戸惑った様子で、カキフライを1つ口にする。するとすぐに表情は満面の笑みに変わり……

「美味しい!」

そう口にした。しかしながら興味はすぐに僕の料理に戻る。

「ねえ、それ、わたしにも食べさせて」

「いいよ」

僕は真ん中のカキの身をナイフで剥ぎ取り、彼女の口に持っていく。

「はい、どうぞ」

「ありがとうございます」

彼女は大きく口を開けて、それを一口で食べる。

「どう?」

「これ、すごい! 美味しい!」

最高の感想を告げて、驚きの表情を浮かべている。

二人はこの後も美味しいカキ料理に舌つづみを打ちつつ、楽しい時間をレストランで過ごした。

151、最高の夕日へ5

151、最高の夕日へ5

昼ご飯を食べ終わった二人は、支払いを済ませレストランを出ると再び車のところに戻ってきた。空高く強い輝きを放っている太陽の光が、エメラルドブルーの車を照らし反射している。

「眩しいね」

ミカが助手席に乗り込む直前、こう呟いた。

「そうだね。今日はきれいな夕日が見えそうだな」

「えっ、夕日!?!」

「……あっ」

(あーあ、隠しておくつもりだったのに……。どうして言っちゃったんだろっ……)

本当は隠しておくつもりだったが、彼女の何気ない問いかけに感じて思わず言ってしまった。

「ねえ、今日ってもしかして夕日、見に行くの?」

(どうしようかな? 教えても……いや、ここは……)

とりあえずここは質問に答えず、僕は先に車に乗り込む。続いてそれに合わせて、彼女も助手席に乗り込んだ。

「ねえ……」

エンジンを掛けて車を発進させようとしている僕を、潤んだような目で見つめてくる。

「……まあ、いいか。いずれ分かることだし」

「教えてくれるの?」

「うん」

「やったー!」

結局彼女のおねだりをするときのようなかわいい表情に勝てず、教えることにした。僕はフロントガラスからのぞき込んだ先に見える小高い山を指差した。

「ほら、あそこに山があるの、分かる？」

「えっ、あれ？」

彼女も僕と同じようにのぞき込んで、指差している。

「そう」

「ちょっと待って。あっちってさ、わたしたちの家がある方向だよ
ね」

「そっだよ」

「えっ、じゃあもしかして遠回りしてきたの？」

「いや。こっちからしか行く道がないんだ」

「へえー、近いけど遠いところなんだね」

「まあ、そういうことだな」

「あとどれくらいかかる？」

「4時間ぐらいかな」

「そ、そんなに!？」

「うん。でもホントにきれいな夕日が見れるところだから。ミカにも一度見せてあげたいなって思ってたね」

「わかった。じゃあ、楽しみにしてる」

「さてと、そろそろ出発するか」

「うん」

会話も一段落つき、僕はゆっくりとアクセルを踏み込みこんだ。

152、最高の夕日へ6

152、最高の夕日へ6

2時間ほど経って、少し山の中に入ってきた。

「だいぶ昇ってきたね」

「うん」

「あとどれくらい？」

「2時間ぐらいかな」

「まだそんなにあるんだ。今日、帰り遅くなっちゃうね」

「……ごめんね」

「いいよ。わたし、長い時間ユウタ君と一緒にいられるのは嬉しいから」

「そうか。ならよかった」

「ねえ、この山、何て言うの？」

「美郷峠だよ」

「じゃあ、高さはどれくらい？」

「確か……700メートルぐらいだったかな」

「へえー、結構高いね」

「これから見る、夕日の魅力、分かる？」

「魅力？ なに？ 教えて」

「夕日との目線……」

「目線？」

「そう。普段さ、街の中心部にあるあのベンチから見える夕日は、目線でいうと見上げる感じだよね」

「……うん」

「じゃあ、この前ドライブで行った海岸から見える夕日はどうだった？」

「えっと……同じ目線だったかな」

「そうだね。一般的に見える夕日の目線って、普通このどちらかな

んだ」

「えっ、でも遊園地で見た夕日は上からだっただよ」

「あはははっ、あれは観覧車に乗ってただろ」

「あっ、そっかー」

「これからね、見る夕日は見下ろす夕日……」

「見下ろす？」

「そう。この山の頂上からは、海に沈んでいく夕日が見下ろす目線で見れるんだ」

「そんなにすごいの？」

「うん。一度見たら忘れない感動と感覚があるよ」

「感覚？」

「どんな感覚かは見たら分かるよ」

「気になるなー」

「さてと、ここから急カーブが続くからしっかり踏ん張っておいてね」

「わかった」

連続で続く急カーブを曲がりながら車は、確実に頂上までのぼっていった。

153、最高の夕日へ7

153、最高の夕日へ7

時計の針はもうすぐ5時に届こうとしている。僕らの車は頂上まであともう少しというところにきていた。空全体は少しずつオレンジ色に染まり、西の空には赤い夕日が見えている。

「だいぶ空が赤くなってきたね」

「うん。もう5時になるしな」

「ねえ、あとどれくらい？」

「もうすぐだよ」

「やったー！ 楽しみー」

ミカは窓の外から夕焼けの空を見つつ、嬉しそうな笑顔を浮かべている。それから少し会話のなかった二人だが、また彼女が話しかけてきた。

「ねえ」

「ん？」

「さっきから思ってたんだけど、全然すれ違わないね」

「そうだな」

「あまり知られてないところなの？」

「そうみたいだね」

「でもすごい景色が見えるところなんですよ」

「うん」

「どうしてかな？」

「やっぱり遠いからだろうな。美郷市の街中からでも4時間かかるからね。それにガイドブックとかにも乗ってなかったし」

「えっ、じゃあどうやって見つけたの？ ネットとか？」

「いや、ネットにも出てなかったよ」

「それじゃあ……、仕事仲間とか？」

「うん。実はそうなんだ」

「聞かせて？」

「いいよ。あれは今年の4月の下旬頃だったかな。美郷市の工場に視察に行ったときの帰りに、運転していた上司が言ったんだ。「なあ、あの山の上からだときれいな夕日が見えそうだな」ってね。それでさ、1カ月後、次に来たときに山の上に続いている道を見つけて行ってみたんだ」

「へえー、でも4時間でしょ。大変だったんじゃない？」

「まあね。けどさ、その分感動したよ。本当にきれいな景色だったからさ」

「私も早く見たいな」

「もう着くよ」

車は最後のカーブを曲がり、頂上に着くとそこで道は途切れている。僕は車を開けた草むらのところに止めた。

「降りようか」

「うん」

車を降りた二人は手をつないで歩いていく。最高の夕日はもう目の前だった。

154、最高の夕日へ8

154、最高の夕日へ8

山頂に並んで立つ二人、海の水平線の向こうに沈んでいく夕日を見つめている。

「すごい」

ミカが呟いたその一言、一度見たことがある僕も同じ感想を抱いていた。

「やっぱりすごいな、ここは」

しばらく黙っていた二人だったが、僕はふとこの夕日が秘めている感覚を思い出して、彼女の手を握る。するとなぜか次の瞬間彼女が一步前に踏み出した。

「危ない！ ミカ！」

「えっ!？」

彼女は後ろを振り向いて声を上げた。しかしこの先に実は踏み出せる足場なんてない。当然彼女は片足立ちになり、バランスを崩しそうになる。

「わあっ！」

「落ち着いて、ミカ。僕が手を握ってるから」

「……はあっ、ふうっ」

握られていた手を頼りに、彼女はなんとか体勢を立て直した。

「はあっ、よかった。握っておいて」

「助かったよ、ユウタ君。ありがとう」

「どういたしまして」

「でもどうしてわたしが一步踏み出すなんてわかったの？」

「それはね、この夕日の力だよ」

「力？ どういうこと？」

「じゃあ聞くけど、踏み出す前にどんな感覚があった？」

「えっと確か……吸い込まれるような……、あっ!」

「そう。海に沈んでいく夕日を見下ろす眺め、すごくきれいだけど、感覚はとても危ないんだ。僕も最初に見たときは先輩に助けられたよ、ミカと同じようにね」

「へえー、そうだったんだ」

「うん。じゃあ、もう少し見ようか」

二人は互いの手をぎゅっと握り締めると、もう一度視線を夕日に向けた。下に落ちたら700メートル真つ逆さま、すぐそこには死が待っている。危険が隣り合わせ、だからこそこの景色は、最高に人を魅了するものであった。

「ミカ」

しばらくして僕は握り締めていた手を引き寄せ、彼女と向き合った。「ユウタ君」

さっきまで夕日を見ていた彼女の視線も、今は僕だけに向けられている。

「好きだ」

「わたしも」

そう言って二人は、唇を密着させた。

「はあっ……………ふうっ……………くちゅ……………ちゅぱ……………はあっ、ふうっ……………ちゅっ……………はあっ……………」

そしてそのまま夕日が水平線の下に完全に沈むまで、二人は強く求め合った。

155、最高の夕日へ9

155、最高の夕日へ9

二人を乗せた車は山を降りて、街を抜けて、海岸沿いを通り抜け、再び街中に入る。時計の針が指す時間は、すでに12時を回っている。

助手席で深い眠りについていた彼女は、家まであと5分というところで目を覚ました。

「ふあゝあゝあつ」

「目覚めた？ もうすぐ着くよ」

「もう着くのか。なんかごめんね」

「えっ、どうして謝るの？」

「だってさ、ユウタ君、6時間以上も帰り頑張って運転してくれたんでしょ。それなのに横で眠ったら悪いなって」

「そんなことないよ。それに明日からまた仕事だろ、しっかり休まない」と

「それ言ったら、ユウタ君だって、そうじゃん。大丈夫なの？」

「大丈夫だよ。これから帰ってすぐに寝れば、まだ6時間以上は寝れるから」

「なら……いいのかな」

「うん」

「……………ねえ、わたし、お腹空いたー」

「あはははっ、気づいちゃったか。まあね、晩御飯何も食べてないからね」

「あれ？ そうだっけ？」

「そうだよ。今からどっか寄ってく？」

「うーん……、いいや。家帰ってから一人で適当に食べるから」

「そうか。じゃあ、僕もそうしようかな」

ここで車はちょうど駅前にある、クリスマスツリーのイルミネーシ

ヨンの横を過ぎる。

「きれいー。あつ、そういえばさ、来週の今日って、クリスマスイブだよ」

「そうだね」

「楽しみだなー」

「僕も楽しみだよ。ミカと一緒に過ごす初めてのクリスマスイブだから」

「初めてか。でもさ、この2カ月半、何もかもが初めてだったよね」

「そうだな。とても楽しかったよ、ミカと一緒に過ごせて」

「わたしも。ユウタ君の恋人になれて本当によかった」

そして車は、ミカの前に着いた。

「さあ、着いたよ。おつかれさま」

「おつかれさま」

そう言って彼女は僕のほっぺたに軽くキスしてくれた。

「ありがとう。じゃあねー」

「じゃあねー」

彼女は車から降りる。そのまま彼女は、家に帰っていく僕の車を手を振って見送ってくれた。

156、平日51

156、平日51

月曜日の朝8時過ぎ、身支度を済ませた僕はいつも通り家を出る。12月も下旬に近づき玄関前から見る外は雪こそ降ってはいるものの、強く冷たい風が吹いている。

(寒いな)

そう思いながら階段を降り、道路に一步出ると突然誰かが抱きついてきた。

「えっ!?!」

「おはようー!」

「ミカ、おはよう。もしかしてここで待ってたの?」

「えへへっ、先週のお返し」

彼女はそう言っ僕を笑顔で見上げる。

「なるほど。そういうことか」

「行こう!」

「うん」

彼女は抱きついていていた身体を離し、僕の右横にくと、左手を優しく握ってくれた。二人は並んで駅までの道を歩いていく。

「昨日は遅かったけど、ちゃんと眠れた?」

「大丈夫だよ。1時から6時間、ちゃんと眠れたから」

「そう。よかった」

「ミカは?」

「私も大丈夫。あのあと家でご飯食べて、それから5時間ちよつと寝たから」

「そうか。それじゃあ昨日はずいぶんたくさん寝たことになるね」

「えっ、そうだったけ?」

「あれ? 話さなかったけ? ミカ、車の中で6時間近く寝てたんだよ」

「そうだったんだ。じゃあ、ちよつと寝すぎちゃったな」
「まあね、車つて乗ってるだけでも結構疲れるから、仕方ないよ」
「それ言ったらユウタ君、昨日は12時間以上運転してたんでしょ、本当に大丈夫なの？」
「大丈夫だよ。忙しいのや、大変なものには慣れてるから」
「……そう」
なぜかここで彼女は、少し心配そうな表情を浮かべていた。そのせいかしばらく何も話さず、会話が途切れる。

ちよつと不安になってきた僕は彼女に聞いてみる。

「ねえ、ミカ」

「なに？」

「もしかして何か心配事でもあるの？」

「……ちよつとね」

「聞かせて」

「分かった。今週の土曜日、クリスマススイブでしょ」

「そうだね」

「ユウタ君さ、もしかして仕事入るんじゃない？」

「……そのことが」

「ねえ、どうなの？」

「まだ分からないよ。できれば入らないでほしいけどね」

「分からないんだ……」

「うん」

彼女は肩を落として、残念そうにしている。

「そんなに落ち込まないでよ、ミカ」

「えっ!？」

「たとえ仕事が入ってもちゃんと夕方には会えるようするし、きつと最高の1日にするから」

「ホントに？」

「約束するよ」

「分かった。私、信じてるから」

「うん」

そして二人は駅に到着し、改札をくぐると電車に乗り込んで会社に向かっていった。

157、平日52

157、平日52

水曜日の朝9時過ぎ、僕は会社近くの喫茶店でコーヒーを飲んでい
る。いつもならこんなのにのんびりしている時間はないのだが、今日
は最初の約束が9時半、20分頃までゆっくりするつもりだ。
少し経って、よく一緒に営業の外回りをしている西原君が入って
くる。

「おはよう」

「おはようつす。わるいな、遅くなって」

「いいよ、まだ10分になってないから」

「そうか。これは？」

彼は自分の目の前に置いてあるコーヒーを見て聞いてきた。

「そろそろ来るかなって思って、頼んどいたよ」

「そういうことか。ありがとう」

「もうすぐクリスマスだな」

「そうだな。お前、確かプロポーズする予定なんだっただけ？」

「うん、まあな」

「どうなんだ？ うまくいきそうなのか？」

「うーん、それ以前の問題だな」

「それ以前の問題！？ もしかして仕事が入りそうとか？」

「うん。まだ分からないけど……、頼まれそうだよ」

「大変だな、相変わらず」

「でも仕方ないんだよな、年末でどうしても忙しいから。お前は？」

「休みだよ、もちろん」

「いいな。予定は決まった？」

「いや、まだかな。これから決めるところだよ、ユウコと相談して」

「そうか。じゃあ、これ使えよ」

僕はそう言って背広の内ポケットから、白い封筒を出して彼の前に

置く。

「これは？」

「中を見たら分かるよ」

「えっ。……………10万!？」

「うん。言っただけ結婚祝いだよ、遅くなっただけ」

「いいのか？ こんなに貰って」

「うん。いつも助けてもらってるからさ。そのお返しだよ」

「そうか。ホント、ありがとう。せっかくだからちゃんと使わせてもらおうよ」

「いいクリスマスにしてやれよ」

「うん。お前もな」

「ああ。さてと、そろそろ行くか」

「おうっ」

ここで二人は立ち上がり、支払いを済ませると取引先に向かって歩き出した。

158、平日53

158、平日53

「おはようございます!」

「おはようございます!」

木曜日の朝10時、僕はいつもより1時間ほど遅れてオフィスに入った。昨日の夜は残業で遅くなったため、今日はそれに合わせてミカとは別々に出てきた。

席に着くとこれから営業の外回りに行く部下の一人が僕のところに来る。

「おはようございます! 井上課長」

「おはよう。どうした?」

「今日行くこの営業の関係で……」

「ん?」

「一緒に来てもらえますか?」

「いいけど……時間がどうかだな。何時だ?」

「ちよつと待ってください。確認するので」

彼は胸ポケットから手帳を開き、時間を確認する。

「えつと……11時です」

「1時間後か。なら大丈夫だ」

「お願いします。あとそれと……」

「なんだ?」

「部長から伝言が……」

「待て。言わなくていい。なんとなく分かるぞ」

「えっ!」

「24日に頼みたい仕事があるから部屋に来てと、そういうことじゃないか?」

「はい、その通りです」

「分かった。それは今から確認しに行く。他にないか?」

「以上です。ありがとうございました」
部下が離れると立ち上がって、僕は隣にある部長室に行く。

僕が出て行ったあと、オフィスでは部下たちの間でこんな会話が交わされていた。

「大変そうだな、課長」

「そうだな。残業多そうだし、休日に仕事を頼まれることもあるみたいだよな」

「俺、昇進してもあんなになるんだったら、いやだな」

「俺も。あれじゃいくら給料上がったって見合わないもんな」

「うん」

「お前らはそうはならないと思うぞ」

「えっ！」

「あの人は特別らしいよ。営業成績もいいし、期待が大きいんだとさ」

「なるほど。まあ、どちらにせよ僕らには無縁な話だな」

「まあな。でも俺、思うよ。あの人の下なら頑張ってもいいかなって」

「俺も。あんなやってんのに、俺らが頑張らないわけにいかないしな」

「うん」

「でもさ、あの部長はないよな」

「ないない。だってさ、人に仕事任せてばかり、いつも自分は部屋でサボってるのに」

「ホント、酷いよな。俺、井上課長に部長になってほしいよ」

「俺も一緒の気持ちだよ。なんとかならないかな」

「うん」

もちろんこの会話そのものはどちらの耳にも入っていない。ただその噂自体は回りまわって伝わっていくもの、これが3年後の昇進につながっていった。

159、平日54

159、平日54

(あー、やっぱり入っちゃったかー……)

オフィスを出ると肩を落とし廊下を歩いて部長室のドアを叩く。

“コンコンコン、コンコンコン”

「いいぞ、入って」

中から部長の声が聞こえてきて入室の許可が下りる。

「失礼します」

ドアを開けて中に入ると、部長の机の前に立った。

「伝言は聞いたか？」

「はい。24日の件についてですよね」

「そうだ。せつかくのクリスマスイブ、お前もデートの予定があったりするんだろうが、観念してくれ。引受けてくれるよな」

(まさにその通りだよ)

その言葉に思わずツツコミそうになったが……、

「はい、大丈夫です」

気持ちを抑え、はつきりと返事をして頷いた。

「よし！ 内容はこれに書いてある。確認しておいてくれ」

「分かりました」

そう言つて僕は部長からA4の紙、2枚を受け取った。

「以上だ！」

「あのー、一つ、聞いておきたいことがあるのですが……」

「なんだ？」

「これ、時間は何時までですか？」

「4時半だ」

(ふうっ、よかった)

「分かりました。では、失礼します」

「うむ」

僕はそう言って部長室をあとにし、自分のオフィスに戻った。

12時を過ぎて昼ご飯を済ませた僕は、これから会社に戻るところだ。今日は部下の営業に付き合った件もあって、ミカと一緒に過ごすことができず、さらに珍しく4つほど離れた駅の商店街に来ていた。

しばらく歩いているとふと隣に見覚えのあるお店が目に入った。

（『インテリアショップ 〈Mizuki〉』。あつ、ここって確かミカと初めてデートした時に一緒に行ったなー。この指輪をもらったんだっけ）

そう思っ左手の薬指にはめていた指輪を見る。すると頭の中について忘れていたことを思い出した。

（ん、ちよつと待てよ。プロポーズするときって何かプレゼントと一緒にあったほうがいいよな。例えば指輪とか……。せつかくだからミズキさんに聞いてみるか。ミカの好みとか知ってそうだし）
プロポーズの時彼女に渡す大切なプレゼント、僕はそれを見つけるために初めて一人でこのお店に入った。

160、平日55

扉を開けて店に入ってみたところ、2カ月半にミカと一緒に来たときとほとんど変わっていない。全体を見渡しても派手な装飾はされておらず、雰囲気は落ち着いている。ただ右奥のレジの近くを含めて、誰もいない。

(あれ？ ドアは開いていたけど休み？)

そう思ってもう一度ドアにかかっている札を確認する。

(……営業中って書いてあるよな。声でも出してみるか)

「こんにちは！」

すると奥から足音が聞こえて、レジの裏のカーテンから一人の女性が顔を出した。

「いらつしやいませ！」

さすがに2カ月半前に一度来たきり、お互いに誰だかよく分かっておらずぽかーんとしている。それでもこの女性がミズキさんだということは何となく認識できた。

「ミズキさん……ですよね」

そう言うと彼女は僕にゆっくりと近づいてきて笑顔をみせる。

「はい！もしかして……ユウタさんですか？」

「あつ、はい！」

「私嬉しいですよ。またお会いできて」

僕はそう言われて少し照れ笑いを浮かべると、しばらく彼女と向き合う。

「ふふつ、今日はミカさんのクリスマスプレゼントを買いに来たんですか？」

「いや、そういうわけでは……」

「えっ……」

そう答えると彼女の顔から一瞬笑顔が消える。

「今度ミカにプロポーズしようと思って」

「それ、本当ですか!？」

「は、はい!」

「ってことは、今日はもしかして結婚指輪を探しに来てくれたんですか?」

「まあ、そんなところです」

「でもなんで私のお店に?」

「ミズキさんならミカの好みとかよく知ってるかなって」

「ああ、そういうこと。それならちょうどいいものがありますよ」

「ホントですか!？」

「はい! ちょっと持ってきますね」

「はい」

彼女は一度僕のところを離れ、店の奥に戻る。

3分後、彼女は一つの小さなケースを持って来た。

「これなんかどうですか?」

そう言っただけはケースを開き、僕にきれいな指輪を見せてくれた。

「これは?」

「ミカさんがほしがっていた指輪です、ダイヤモンドの」

「へえー、いいデザインですね」

「でしょ。でもちょっと高いんです」

「いくらぐらい……」

「120万円です」

「確かにミカにはちょっと厳しいかもな」

「……ユウタさんも厳しいですよね」

ミズキさんは心配そうな表情で僕を見つめている。

「えっ、そんなことないですよ。それでも僕、結構もらってるんで」

「あっ、そういえばこの前課長になったってミカさんに聞きました」

「じゃあ、これにしようかな」

「ありがとうございます」

「支払いはカードでも大丈夫ですよね？」

「はい！ 90万円にしておきますね」

「いいんですか？ 30万円も」

「はい！ ユウタさんに買ってもらえるなら」

「そんな」

「幸せになってくださいね。きっとうまくいきますよプロポーズ」

「ありがとう、ミスキさん」

その後クレジットカードで支払いを済ませると、彼女から包装されてかわいい袋に入った指輪を受け取った。

「まだ仕事で、僕はこれで」

「はい！ ありがとうございます」

「ありがとう」

クリスマスイブに渡すプレゼント、僕は最高のものを手に入れてお店を後にした。

161、平日56

161、平日56

金曜日、僕は6時半過ぎに仕事を終え、1階で待っていたミカと一緒に帰り道を歩いてきた。明日はいよいよクリスマスイブ、大事なプロポーズをする日だが、残念なことに仕事が入ってしまった。今日はずっと話さないと、そう思っていたがなかなか切り出せず、結局ほとんど何も話さなまま東三橋駅を降り、今は家までの帰り道だ。

(いい加減、話さないと……)

もう残された時間は少ない、今言わないで……、

「ねえ、ユウタ君」

ところがここで彼女が僕に話しかけてきた。

「なに？」

「明日はクリスマスイブだね」

「そうだね」

「どうしようか？ どこか行きたいところとかある？」

「えっ……」

僕はとっさの質問にどう答えていいか分からなかった。すると彼女は……、

「ん、どうしたの？ 何かあったの？」

心配そうな表情で僕の顔を覗き込んできた。さすがにこれ以上は……

…、

「いや、実はさ……」

「待って！ 言わないで」

勇気を出して言いだそうとしたとき、彼女がそれを制止した。

「えっ！？」

「仕事が入っちゃったんでしょ、わたし、分かるよ」

どうやら彼女は今日の僕の雰囲気察してしまったようだ。

「ごめん、ミカ」

とりあえず真つ先に僕は謝った。

「いいよ。わたし、覚悟してたから」

そう言つて彼女はすぐに僕を許してくれた。

「ミカ……」

その優しさに感動して思わず名前を呟く。

「ねえ、明日は会えないの？」

「いや、5時には終わるから、それ以降なら大丈夫だよ」

「ホント!? よかったー」

会えることが分かつて彼女は笑顔を見せてくれた。

「それでさ、明日の待ち合わせのことなんだけど……」

「うん」

「5時10分にあのベンチでどうかな？」

「わかった。わたし、待つてるから」

「ありがとう」

そして二人は彼女のアパートの前に着いた。

「じゃあね、また明日」

「うん。じゃあ」

そうして軽くキスを交わすと明日のクリスマスイブを楽しみに、それぞれ家に帰っていった。

162、クリスマススイブ1

162、クリスマススイブ1

24日の朝8時過ぎ、家を出た僕は駅までの道を歩いていく。今日はクリスマススイブ、本来ならミカとデートで1日一緒に過ごし、いい雰囲気の中で最高のプロポーズをしたのだが、運悪く断れない仕事が入ってしまった。

そのせいかあまりやる気が起きず、肌寒いが吹く中、下を向いている。しかし途中左のほうから聞き慣れた声があった。

「おはようー！」

振り向いて相手を確認する。するとミカがエプロン姿で手を振っていた。

「ミカ……」

「ユウタくん。お仕事頑張ってるー」

「ありがとう」

僕も手を振ってそれに応えた。休日、しかも記念すべき日に入ったあいにくの仕事だったが、彼女が朝、声をかけてくれたおかげで俄然やる気が出てきた。

8時40分、僕は会社の入り口を通り抜ける。

「おはようございます」

「おはよう」

いつものように受付のヒトミさんに声をかけられて……、

(えっ!?! いや、今日は休日だろ! そんなバカな……)
そう思ってもう一度相手を確認する。

「おはようございます」

同じように挨拶が返ってくる。間違いなくヒトミさんだった。とりあえず受付のカウンターに近寄り、話しかけてみる。

「おはよう。どうしたの? 今日、休日だよ」

「そうですね」

「そうですねって……、普段休日は……誰も受付にいなかったよう
な……」

「私、今日仕事が入ってしまったって、それで……」

「そうなんだ」

「はい。ユウタさんは？」

「僕もだよ」

「せっかくのクリスマススイブなんですけどね」

「ホント、やってられないよな……。……ん？ 待てよ」

「どうしたんですか？」

「ちよつと確認したいことがあるんだけど、いいかな？」

「はい」

「今日の仕事、ヒトミさん、一人じゃないよね」

「はい。書類には営業の人と一緒に書いてありました」

「やっぱり。ってことは……この書類に書いてある女性を一人
連れてって」

「えっ」

「君のことが」

「よかったー、ユウタさんで」

「そっ？」

「はい。ユウタさんなら、信頼できますから」

「そうか。そういつてもらえると嬉しいよ」

「ふふっ。確か9時に相手の方と会う予定なんですよね」

「そうだな」

「さっそく行きます？」

「そうするか、もう45分だし。でもちよつとオフィスに寄って
くるから少し待ってて？」

「はい」

僕はカウンターから離れると、小走りでエレベーターに乗り込み、
自分のオフィスに向かった。

163、クリスマススイブ2

163、クリスマススイブ2

5分後、オフィスで準備を終えるとエレベーターで再び1回に降りる。するとヒトミさんは入り口の前で待っていてくれた。

「お待たせー」

「お疲れ様」

「行こうか」

「うん」

二人は外に出て並んで街を歩き始める。

「三日産業ですよ、これからいくの？」

「そうだよ」

「どういう関係なんですか？ うちの会社と」

「昔からのお得意様なんだって」

「へえー、でもなんで、こんなクリスマススイブの日なんかに会いにいかないといけないんですかね」

「なんでも毎年の習慣らしいよ。お互いの社長が選んだ男女一人を、会せることになってるんだってさ」

「迷惑な話ですね」

「ホントだよ。はあっ、ミカと一緒にデートに行きたかったなー」

「私も、恋人と一緒に過ごす予定だったのに」

お互い大事な恋人がいる者同士、思うことは当然同じである。

「ヒトミさん、今日の夜の予定はもう決まってるの？」

「決まってますよ。仕事が終わったら、会って一緒に映画を見て、ホテルでディナーを食べて、そのまま甘い夜を過ごすつもりです」

「いいねー、サイコーじゃん」

「はい。彼が計画してくれたんです。私、とても楽しみで。ユウタさんは？」

「実は今日、プロポーズしようかなって」

「えっ！ ホントですか!？」
「うん。きれいな夕日が見える思い出のあの場所で」
「いいですね。じゃあ、もう結婚指輪とかは？」
「買っておいたよ、昨日」
「ミカ、すごく喜ぶと思いますよ」
「そうかな？」
「頑張ってくださいね」
「ありがとう」
ミカと親友関係にある彼女の言葉は、非常に温かく励みになった。
「あっ、そういえばヒトミさんってどうやって彼と出会ったの？」
「ふふっ、聞きたいですか？」
「まあ、できれば……」
「実は彼、営業でよくうちに来てくれてた人なんです」
「へえー」
「いつも私の挨拶に笑顔で応じてくれて、感じのいい人だなんて」
「笑顔か。普通は真顔な人が多いもんね」
「はい。でも別に好きとかそういう気持ちはあまりなくて」
「えっ、じゃあ、どうして？」
「2週間前の月曜日だったかな、仕事が終わって帰る準備をして入り口を出たら……」
「出たら……」
「彼が目の前にいて、「もしよければ僕と一緒に駅まで行きませんか?」って」
「ついて行ったの?」
「はい。そしたら歩き始めて5分ぐらいでいきなり告白されました、「好きです、僕と付き合ってください」って」
「そうだったんだ。あっ、でもさ、あまり好きっていう気持ちはなかったんでしょ?」
「そうなんですけどね。でもこの人ならいいかなって、誠実で優しいから」

「なるほど。よかったですね」

「はい！ だから私、今とっても幸せなんです」

ここで二人は三日産業のオフィスビルの前に着いた。

「さあ、着いた、ここだよ」

「意外と近いんですね」

「うん。行こうか」

「はい」

そして並んで一緒に入り口から中に入っていった。

164、クリスマスイブ3

164、クリスマスイブ3

午後4時過ぎ、仕事を終えた二人は三日産業のビルを出て、会社までの道を歩いている。

「よかったね、二人とも明るい人で」

「うん。お蔭で意外と楽しく過ごせたよ」

「私も。それに料理もおいしかったし」

「そうだな。しかし意味あるのか、この習慣」

「だね。お互いの仕事場を見学して、今年1年間の実績について議論して、高級料亭で昼ご飯を食べる。別にクリスマスイブである必要もないしさ」

「その通りだよ。はあっ」

「あっ、そういえばユウタさん、気づきました？」

「気づいた？ 何を？」

「あの二人、多分、恋人同士だったこと」

「ああね。確かに同じデザインのハンカチ持ってたもんな」

「そう、それです。すごく仲良さそうだったし」

「羨ましいよ、仕事とはいえ一緒に過ごせてるから」

「ですね。でも、私もすごく嬉しかったですよ」

「えっ、どうして？」

「ユウタさんと1日、デートみたいだったから」

「あはははっ、やめてくれよ。また、ミカに怒られるから」

「ふふっ、分かっていますよ。今日怒られたらシャレになりませんもんね」

「ホントだよ。でも……」

「どうかしたんですか？」

「いや、なんでもないよ、別に」

(見られてるんだろうな、どこかで)

「そう」

(やっぱり分かるんだろうな、見られてるって。でも、大丈夫。こっさりちゃんとかミカには電話しておいたから)

ここでそれぞれ思うことがあり、一度会話が途切れた。ふと僕は空を見上げる。すると東の空に灰色の雨雲が漂っているのが見えた。

「少し曇ってきましたね」

「うん。今夜は雪が降るかもな」

「じゃあ、ホワイトクリスマスか」

「深々と降る雪がホテルの窓から見えるかもね」

「はあっ、ますます楽しみだな」

「僕も……」

それからしばらく歩いて二人は会社に戻ってきた。

「おつかれさまです」

「おつかれさま」

「今日は最高の日にしてあげてくださいね」

「ああ、もちろん。ヒトミさんも楽しい夜を過ごしてね」

「はい！」

このあとはそれぞれ愛の時間が待っている。少しずつ高まってくる気持ちを胸に感じつつ、僕とヒトミさんはその場所をあとにした。

165、クリスマススイブ4

165、クリスマススイブ4

午後5時過ぎ、今日の報告書を書き終えた僕はパソコンの電源を切り、電気を消し、鍵を閉めてオフィスをあとにした。

エレベーターで下に降り、受付の方を見るとそこにはもう誰もいない。ヒトミさんは30分ほど前に会社を出た後だ。おそらく今は恋人と一緒に映画でも見ているのだろう。

外に出て道に一步踏み出すと、北から冷たい風が吹いてくるのを顔に感じる。幸いこんなときも首に巻いている彼女からもらったマフラーが温かく、心地よい。

東の空はさつきよりもますます厚い雲が広がり、一層ホワイトクリスマススの予感を感じさせる。一方、西の空は雲一つなく、燃え上がる炎のように赤い夕焼けが広がっている。その色は離れた東の先の雲を薄っすら橙に染めるほどに強かった。

思えば二人をつないだのはこの空の美しさだった。空は1日、たった24時間だけでも様々な姿を私たちに見せてくれる。明け方太陽が昇る東の空は、透き通るように赤く、星の輝きを飲みこみ幻想的だ。昼間は突き抜けるような青空がどこまでも広がり、高く真上に昇る太陽は地上を光の世界へと解き放つ。夕方になると沈みゆく太陽は赤く燃え始め、空全体を橙から深い赤に染め上げていく。夜は真っ暗な中で無数に輝く星と、一際明るい月が印象的だ。

僕らはその中でも夕日の美しさに魅せられ、互いに強く共感を覚えた。そして僕が今から向かう場所、彼女が待っている場所、そこそが二人が初めて出会った場所であり、想いを確かめ合い、絆の強さを感じ、これからの新しいスタートが切れる最高の舞台だった。

しばらく歩くと、ベンチの前で立ち上がり手を振っている彼女の姿が見える。想いが、気持ちが高まる。心臓の鼓動がどんどん早くなる。僕の意味を伝え、彼女の願いに応えるそのとき……

「ミカ、待たせてごめん」

「うんうん。ユウタ君、仕事おつかれさま」

「ありがとう」

……

一瞬沈黙が二人の間を支配したが、引き寄せられるように向き合い、いよいよ新しい時計の針を動かすときがやってきた。

166、クリスマススイプ5（最終話）（前書き）

いよいよ最終話です。みなさん、最後までよろしくお願いします。

166、クリスマススイブ5（最終話）

166、クリスマススイブ5（最終話）

見つめ合う二人、先に口を開いたのはミカだった。

「ユウタ君」

「なに？」

「一つ聞きたいことがあるんだけどいい？」

「いいよ」

「覚えてる？ この場所での大切な思い出」

「えっ……」

「もしかして……、忘れちゃった？」

「……ちよつと待って、思い出すから」

プロポーズを持ちかける前、彼女に出された大事な質問。このとき僕は頭の中で西原君に言われたあることを思い出していた。

（女の人ってのは記念っていうのを男よりも大切にするんだよ）

記念、それはまた思い出と置き換えることもできる。彼女は優しい笑顔を浮かべて、待ってくれている。僕は目を閉じてみた。すると冷たい風がすつと吹き抜け、ある日の光景が頭に浮かんだ。

それは4月の下旬、もう5月になるというのに少し寒い日の話だった。

（回想シーン）

仕事帰り、いつもの場所に駆けつけると彼女が笑顔で迎えてくれた。

「おつかれさまー」

「おつかれさま。ごめん、待たせて」

「うんうん。会えて嬉しかった」

「ありがとう。僕も嬉しいよ」

「見よう、一緒に夕日」

「うん」

しばらく二人は西の空に向き合い、沈みゆく夕日を見つめる。辺りは若干雲がかかっている、今日は4月の終わり頃とは少し肌寒かった。

「はあつ、ちよつと寒いな」

「ふふつ、そう?」

「うん」

「じゃあ、わたしが温めてあげる」

すると彼女は僕のほうに向き直り、突然抱きついてきた。

「えっ!?!」

「あつたかい?」

「……えつと、……それは……」

あまりにいきなりで僕は動揺を隠しきれなかった。

それでも彼女が初めて僕を抱きしめてくれたときの温かさ、今でもはつきりと身体が覚えていた。

「あつ……」

「思い出した?」

「うん。確かミカが初めて僕を抱きしめてくれた日だよ」

「そう。よかった、覚えていてくれて」

「あれから8か月経ったんだね」

「そうだね」

ここで二人は自然と夕日から目を離し、また向き合った。手を取り合ってそのときが遂にやってきた。

「ミカ」

「なに?」

「今日は言わないといけないことがあるんだ」

そう言っ僕は上着の内ポケットからおとこい買った指輪を取り出し、ケースを開けて彼女に見せる。

「きれいー」

目を輝かせて彼女はそれを見つめている。余計な言葉は何もいらな

い、大切なのは……

「ミカ、結婚しよう！」

この一言だけだった。まさに運命のとき、さつきまで和やかだった空気が張り詰め、なぜか周りも二人の行方に注目していた。

そして流れるまた一瞬の沈黙の空気。でも彼女の想いも一つだった。

「ありがとう。わたし、ユウタ君のお嫁さんになってあげる」

すると彼女は受け取って、左手にしていた僕とおそろいの指輪を外してそっとつけてくれた。

「くすっ」

少し笑って、僕に最高の笑顔を見せる。言葉が見つからない。ただこみ上げてくる嬉しさに動かされて、思いつ切り彼女を抱きしめた。

「おめでとう」

近くにいた一人の女性が呟いて拍手をする。つられて周りのみんな、温かい笑顔と拍手で僕らを祝福してくれた。

こうして9か月近く前にここで出会った二人は、2か月半前に恋人同士となり、愛を育み、結婚することになった。

西に空に見える夕日は一層赤く燃えるように輝いている。これから先どんなことがあっても、ずっと夕日は見守り続けてくれるだろう、ふたりを。

〈END〉

166、クリスマススイプ5（最終話）（後書き）

これで本編は終わりです。

ここまで読んでくれたみなさん、本当にありがとうございました。

話はここで終わりですが、最後に長めのあとがきがあります。
もしよろしければそちらもよろしく願います。

また完結に際してブログにも記事を書きます。
そちらもよろしく願います。

167、あとがき(最終回)(前書き)

ここまで足を運んでいただきありがとうございます。どうか最後までお付き合いよろしくお願ひします。

167、あとがき（最終回）

167、あとがき（最終回）

みなさん、こんにちは、こんばんは、おはようございます。レインタンです。今日は初の長編小説完結に際して、少し長めのあとがきを書きます。もしよろしければ最後までお付き合いください。

それではまず、最終話まで読んでくれたみなさん、本当にありがとうございます。ありがとうございました。非常に未熟者の僕ですが、これだけたくさんの方々に読んでいただけて感謝の気持ちで一杯です。

この小説は僕が最初に考え、書き始めた作品です。いろいろ悩み、試行錯誤をしましたが、基本的に書きたいことをそのままに書いています。それゆえ、かなりマニヤクな場面があったり、独特の喩えや表現が入り込んだりもしました。しかしながら、書き易く、長くなりながらも完結までたどり着けたのは、非常に嬉しく、個人的にとっても満足しています。

ここで一度登場人物とシーンのおさらいをします。主な登場人物は4人です。主人公のユウタ、その彼女のミカ、主人公の親友の西原君、彼女の親友のヒトミさんです。せっかくなのでプロフィールも下に書いておきます。初公開の情報もあります。

井上勇太 9月30日生まれの24歳、血液型O型、身長181センチ、体重66キロ

言わずと知れた主人公。新日西産業株式会社の営業部の社員。入社2年目だが仕事ぶりは非常に優秀、周りの信頼も厚く、期待もあつて12月には見事課長に昇進した。残業、休日出勤が多く、出勤、帰宅時間はバラバラになることがほとんど。24年間、彼女ができ

なかったが、今年になってミカと出会った。夕日が見える街の中心部にあるベンチが二人の始まり、すれ違いもあったが、クリスマスイブにプロポーズし結婚することになった。真面目で落ち着いた性格。

藤井美香 8月11日生まれの23歳、血液型A型、身長155センチ、体重43キロ

主人公の恋人。同じ会社の商品開発部の社員。入社3年目でこれまでに様々なヒット商品の開発に携わってきた。特にプロゼンテーションの上手さはピカイチで、採用のきっかけになることが多かった。元気で明るいムードメーカー。ただ少し子どもっぽくわがままなのがたまにキズ。そのせいで今までつき合ってきた男性とは、いずれも上手くいかず、別れてしまった。しかし今年の4月にユウタ君に出会い、10月に告白してつき合い始める。自分の勘違いもあって途中、すれ違いになることもあったが、最終的にはプロポーズを受け結婚することになった。

西原功輝 11月7日生まれの24歳、血液型A型、身長180センチ、体重68キロ

主人公と同期で親友。ミカと同じ商品開発部の社員。入社2年目で仕事ぶりはそこそこ。商品開発部に勤めながら、珍しく他の部署との橋渡しの役割を任されてきた。同期のユウタとは親友で、一緒に営業に出ることも多く、ミカに関する相談にもたびたび応じていた。去年の誕生日に同じ会社の経理に勤めるユウコに告白され、つき合い始める。今年の8月のデートがきっかけで子どもができ、トラブルに見舞われたものの、結婚を果たした。明るく調子のいい性格。

田中瞳 4月29日生まれの23歳、血液型AB型、身長160センチ、体重45キロ

ミカの親友。同じ会社の受付係の社員。入社3年目で多くの人を今

合計ユニークアクセス数 14262

1日の最高PVアクセス数 698 (10.07.27)

1日の最高ユニークアクセス数 120 (10.10.15)

月間最高PVアクセス数 5990 (10.08)

月間最高ユニークアクセス数 1860 (10.08)

以上です。

167、あとがき（最終回）（後書き）

今まで本当にありがとうございました。

新作は11月スタートです。

これからもよろしく願います。

PDF小説ネット発足にあたって

PDF小説ネット（現、夕テ書き小説ネット）は2007年、ルビ対応の縦書き小説をインターネット上で配布するという目的の基、小説家になるうの子サイトとして誕生しました。ケータイ小説が流行し、最近では横書きの書籍も誕生しており、既存書籍の電子出版など一部を除きインターネット関連に横書きという考えが定着しようとしています。そんな中、誰もが簡単にPDF形式の小説を作成、公開できるようにしたのがこのPDF小説ネットです。インターネット発の縦書き小説を思う存分、堪能^{たんのう}してください。

この小説の詳細については以下のURLをご覧ください。
<http://ncode.syosetu.com/n4331i/>

夕日

2010年10月24日08時32分発行